
Tick's（ティックス） - 1982年、あなたはどこにいましたか？ -

蒔田 龍人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティックス
T i c k ' s - 1982年、あなたはどこにいましたか？ -

【Nコード】

N3799C

【作者名】

蒔田 龍人

【あらすじ】

1981年、札幌。中学時代から喧嘩に明け暮れていた17歳の不良少年「竜二」は、アメリカンフットーイズスタイルのブティックがキツカケで知り合った年上グループらの影響で「野球チーム」を結成するために同年代の不良たちに声をかけ、スタイルだけを重視した寄せ集めチーム「T i c k ' s」を結成する…。

- 第1章 - (前書き)

- はじめに -

- どんな『大人』、もっとカジュアルな言い方をすれば、いわゆる『クソババア』や『クソジジイ』にも、個々にそれまで生きてきた軌跡つてものを持っている。

産声を上げていきなり『大人』にはならないから当然なわけなのだが、産声を上げている時点では皆一緒なのに、チョットずつ、チョットずつ、個々の体験が枝分かれし、やがて百人百通りの人生を送っていくこととなる。

ところで、どこまでが『子供』で、どこから『大人』なのだろう。

世間では成人式の会場の帰りから『大人』の仲間入りのようなのだが、その世代、その世代なりの世界が成立しているものである。

現時点で『老人』と呼ばれている人たちにも『若者』時代はあったわけで、その頃も当時の『大人』達から「最近のワケー奴は…」と言われていたに違いない。

知性を持った人間が誕生してから、いつの時代でも『大人』は居る訳だし、その分、常にいつの時代にも、その『大人』の考えにどうしようもない不満をもち、反抗し、やがて爆発する『最近の若い奴』は存在する。

しかし、やがて時が経ち、『最近の若い奴』だった自分自身までも『大人』の世界にいつの間にか身を埋めると、知らず知らずのうちに『社会』という宗教団体に仲間入りし、次第に洗脳されはじめて、拳句に今度は『最近の若い奴』を批判し中傷する立場に変わっていくのだ。

若い頃は死ぬほど嫌だった『世間』に飲み込まれ、流され、催眠にでもかかったかのように、皆同じテンポで淡々と毎日を送っていくうち、どこかに置いてきてしまったギラギラとした想い出は、まるで湯煎でもされたかのようにアクが抜けてパサパサとなり、たまに脳みその隅っこからフラッシュバックされると、若かりし当時と、老いていく現在の自分とのあまりのギャップの大きさに戸惑いを持ちはじめ、やがてその『想い出』は『おとぎ話』のように、果たして自身が本当に体験したことなのかも分からなくなってしまうほど現実味が無くなっていき、そして終いには、その本当に起こった筈の『おとぎ話』は、誰に興味をもたれる事も言い伝える事も無く、やがてぼんやりとした『空想の世界』として風化していく…。

誰しもが『自分の若かった頃は…』『昔はよかった…』を持つてはいるが、果たして何処の誰がそんな曇りガラスで覆われた昔話を真剣に聞いてくれるのだろうか。

『時は、過ぎていく昨日を、物語に変える。』

こんな歌詞の曲が、その昔、女性たちの間で流行したことがあった。ただ個々の頭の中で物語が展開されているだけで、ほとんどが陽の目を浴びることなく消え去られていくのだ。

さて、これはまだ『チーマー』なるものが存在しなかった1980年代初頭、札幌に暮らす不良グループの、なんてことない日常のお

話です。

- 第1章 -

T i c k , s

…シャキシヤキ、シャキツ…。

1981年1月 札幌 伊藤理容室。

まだ正月気分の抜けきれていない札幌の中心街、ビジネスビル地下一階に、その床屋はある。

外は相変わらず吹雪いているが、窓を持たない店内は季節感というものを感じさせない。

ラジオのスピーカーから、四国競馬中継がまるでBGMのようにただ無機質に流れているだけである。

人気演歌歌手のように、アイパーで寸分の乱れも無い七三にキツチリと分けられ、ウナジは長めのヘヤースタイルでキメた二枚目中年の理容師が、ボサボサ頭にハサミを入れていた。

ボサボサ頭の前髪は、その長さで両目が隠れてしまっている。

「他の部分も、いつもの感じでいいんだろ？」

「はい、よろしくです。」

それ以上の余計な会話は無く、相変わらず「シャキシヤキ」と小気味良いテンポで髪が切られていく。

前髪はオカッパのままスパツと横一線に真っ直ぐ、しかし、よく見ると右端が一番長く、左端にかけて斜めに短い。右端と左端の前髪の長さは約一センチ強の差をつけてある。

真っ直ぐ垂れた横髪は、耳が完全に隠れてアゴのエラの部分にまで達するほど長いまま。

しかしその横髪は後頭部に向かうにつれて斜めに、これまた真っ直ぐ短くなっていき、しまいにはウナジが露出するほどに刈られている。

そして後頭部の真後ろは、ツムジの下あたりからウナジまでまたまた真っ直ぐ下に向かって幅2センチほどの帯状にいつそう短く刈られ、モミアゲもスッキリ落とされた。

そしてウナジは刈り上げ。

このままの状態を簡単にまとめると、まるで漫画『サザエさん』の『ワカメちゃん』のような、はたまた『ゲゲゲの鬼多郎』のような、とにかくヘルメットのような『変な髪形』である。

世の中は1980年に突入すると、もう70年代の名残を意識的に消滅させるかのように、まことに無機質で機械的な音楽や文化が広がり始め、アメリカから逆輸入という戦略で一世を風靡した『イエローマジックオーケストラ』が代表の『テクノ文化』が流行し、モミアゲを極端に落とした『テクノヘヤー』なるスタイルをした若者も大勢出没しはじめていた。

しかしその『変な髪形』は、『テクノヘヤー』と呼んでしまうと『テクノヘヤー』が激怒するであろうくらい変なのである。

…シャキシヤキ、シャキシヤキシヤキ…。

「あんた、いくつになる？」

「今度の7月で17です。ここにお世話になるようになってからも

う2年っすよ。」

まだ年が明けたばかりなのだが、少しでも大人に近づきたいのか、客は7月になってやっと訪れる年齢を、もはや語っている。

カットが終わって洗髪すると『7カ月後の17歳』の頭は、ボザボザにいつそう磨きがかかった。

ロングヘアの男性は、世間一般では時代遅れな見られ方をされ、なんとも気持ち悪いスタイルの代表選手にまで成り下がってしまった。

せいぜい、『西城秀樹』や『川崎麻世』新参者『たのきんトリオ』などのアイドル系か、ハードロック、はたまたフォークソング系スタイルが生き残っている程度である。もうオカマのようなロングヘアースタイルは、ただの笑いものなのだ。

そんなご時世で、こんな奇妙な刈り上げオカッパ頭は、どんなに無理をして百歩も二百歩も譲ったところで決してカッコよくはない。それどころか『ウケ狙いの漫才師よりヒドイ。』と誰もが思うスタイルである。

「あんたのでいいよな。」

そう二枚目理容師が言いながら、後ろの戸棚から手のひらより大きなブリキの缶を持ち出し、ポカントと蓋を開けると、理容室中にほんのり甘い柑橘系の香りが広がった。

ポマードである。

実は、不良少年の代表的ヘアースタイル『リーゼント』にする為の各部分の細かな長さバランスを熟知していることで、この理容店は『知る人ぞ知る』店なのであった。

そしてこの少年は、その『知る人ぞ知る』理容店に自分専用のポマードを預けていた。

『マイボトル』ならぬ『マイポマード』。

白と青、ツートーンカラーの大きなブリキ缶には、

『シボレーポマード、パリー好みの粹な香り』

と書いてある。

ポマードは、麝香やチョコレート、ペパーミントなど、女性ウケする甘ったるい香りのものが人気で、せいぜい甘み苦手派が『柳屋ポマード』や『競馬ポマード』『丹頂ポマード』、王道で『MG5』『オールドスパイス』を使用するぐらいが一般的なのだが、無名メーカーでほとんど一般には知られてはいない『シボレーポマード』が、この少年のお気に入りだった。

「あのお、この缶の横に書いてある『パリー好みのツブな香り』、ってイッタイどういう意味か知ってますか？」

「ツブじゃなくて、イキ（粹）って読むんだわ。イキな香りだべさ。」

16歳半少年の意表をついた問いかけに、非情なまでに淡々と答えながら、缶から右手でヌメエッと山盛りにとったポマードをヌチャヌチャと両手に広げた二枚目が、ボサボサ頭の右サイド、左サイド、そして前髪から後ろへかけて塗り伸ばしている。

それを3回繰り返すと、ベトベトになった手を洗い流して『後は任せた。』とばかりに、少年にブラシとドライヤーを渡し、競馬新聞を広げてヨッコラシヨと椅子に腰掛け、赤鉛筆を耳に指しながら読みだした。

一人だけ椅子に残された少年の、無造作に後ろに引つ張られたオールバックの髪型は、入門したて相撲部屋幕下のように見える。すると少年は、まるで当然のことのように自分でドライヤーとブラシを駆使してセットをしはじめた。

あくまでも二枚目理容師の怠慢ではなく、少年にとってはこれがひとつの『こだわり』なのだ。

実はこれから数分のセット時間が少年にとって、まさに『神聖』の時間なのである。

まず、後頭部から左右の髪を中心に集めるようにセットしていく。後頭部の真中幅2センチが一番短いのは、サイドの髪を後ろへ流し、両サイドを真中でランデブーさせる、その見た目から『ダックテイル』と呼ばれたスタイルのために、後頭部が嵩張らず綺麗に収まるようスプースを設けるための作戦だったのだ。

クシでサイドの髪を後ろまで撫でて、後頭部の中心まできたところで、最後に真下に一センチほど、キュツとクシを落とす。すると鮮やかな両サイドからの『アヒルのしっぽ』が出来上がった。

頭の後ろからセットして、今度は頭の上部をバックに流れるようにセットをし、最後に前髪にボリウムをもたす。

右方向に流された前髪は、前髪の左サイドよりも、こん盛りと高さをつけて標高差を強調する。

こうして完成に至った髪型は、一般に『サイドバック』や『サイドリーゼント』と呼ばれ、分け目をつけずにサイドに流し、フロント部分を、野球帽のヒサシのように突起させる、巷で一般に見られるサメの尾びれのようなオールバックリーゼントではない、少々の間がかかるスタイルであった。

1950年代にアメリカを風靡したテレビドラマ『77サンセットストリップ』の準主役『エド バーンズ』が演じる駐車場係『クーキー』のヘアースタイルがそれで、その時代のアメリカンティーン

エージャーで流行した、オーソドックスなリーゼントよりもチョット気取ったものである。

右サイドの前髪が左サイドよりも長かったのも、右から左に髪を流した際、左サイドが重くならずスッキリくるためだった。

最後の仕上げとして全体にクシを通すのだが、その前に一度クシを水で濡らす。そうすることにより、クシを通した髪がシットリと落ち着くわけである。

『ポマード』を使っているから出来るワザなのであった。

15分ほどかけてセットが終わると、すでに二枚目はその間に来たお客を相手にしている。

「終わったかい？しかしなんで学校の先生つてえのは、この髪型を許さないのかねえ、パンチとかニグロとかだったらわかるけど、こんなに清潔で美しい髪形、ほかに無いのになあ……。どうだい、あんた床屋になんないかい？あんたセットうまいし、センスあるから直ぐ独り立ちできるよ。」

そう言いながら二枚目がエプロンを外した。

確かにセットが終わった少年のヘアーは鏡のように光を反射し、一本の乱れも無くキラキラと『うねって』いる。その完璧なヘアスタイルが、少年のキリリと真っ直ぐ伸びる太い眉毛と厚い唇をもった濃いめの顔をより引き立たせ、二枚目理容師の目には、とても高校一年に映らなかった。

そして外されたエプロンの下から、きつちりとプレスされた、1950年代のアメリカで流行した『1枚着ていてもまるで2枚着ているかのように見える』淡いグリーンと濃いグリーンのツートーン切り返しレーヨンシャツ、『霞織り』の愛称で呼ばれる織り方ででき

た、糸と糸がクロスしたグレイ色の、折り目がキツチリ入った淡いクリーム色のカスリ柄ダブル裾のツータックパンツに、白いダブルコバの革靴という姿が現れた。

まさにそのスタイルは、古き良きアメリカンスタイルである。

ウールとレーヨンを合わせたギャバジン生地に着用した肩パットがキツチリ入った、通称『ハリウッドジャケット』と呼ばれる、1950年代に『エルビスプレスリー』や『ジーンビンセント』、『エディコクラ』らのロカビリースター達が愛用したことがきっかけとなり一時的に流行したギャバジンジャケットを羽織って服装を整えると、持ってきた袋から「これ、つまらないんですけど…」と、二枚目理容師に散髪代800円と細長い箱を渡した。

箱の中身は『サントリー角瓶』。

「いつも悪いねえ」と、急にニコニコ顔に変わって愛想を振っている二枚目の姿をやり過ごした少年は、店のドアを出るとすぐ1個35円の両切りタバコ『ゴールデンバット』に火をつけ、フウツとため息のように煙を吐きながら、ふと思った。

…そういえばサムクツクの曲にでてる、『チキンストラックス』って何なんだろう…。

1964年7月、辰年生まれの次男坊ということから『竜二』と名付けられたこの少年は、彼が産まれた翌年に父親が結核で他界すると、母親の女手一本で育てられた。

幼い頃から身体が大きかった竜二は、マセて皮肉な性格の子供とし

て育つていったが、大人に対して物怖じしない性格は、時に母親を助けた。

生まれて初めて電話で話した言葉は、

「いま、いません。」

竜二が生まれてはじめて電話で話した相手は、『借金取り』だったのだ。

「お母さんはいるかい？」という借金取り立ての電話を、いったい何のことかわからないまま、母親の隣で指示されるとおりに答えていたのである。

そして小学生時代、その大きな体格の竜二をからかい始めた悪ガキグループが、彼をイジメのターゲットにしようとしたことがあった。しかし、体格に似合わない運動神経が功を奏したのと、パワーの差が格段だったことがキツカケで、眠っていた潜在能力が頭角をあらわし、結局、逆に竜二がガキ大将として君臨したのである。

『…チカラさえあれば、人は向こうから仲間になりたがって寄ってくる…。』

やがて中学に入学すると、その翌日、小学生のころから竜二の目立った行動に妬んではいたが、実力の違いで手が出せなかった上級生達の体格が一気に成長していた事と、竜二のマセて皮肉な持ち前の性格から反抗的だった彼の短所も相まって、さっそく上級生不良グループに目を付けられ、呼び出されて袋叩きにあった。

いわゆる『ヤキを入れられた。』のである。

夢多き新入生達が、上級生からの各部活動勧誘に耳を傾け、そして

また新しい友達作り真つ最中の放課後、一方で竜二は、目立たない校舎裏でひたすら制裁を受けていた。

この時のために母親に買ってもらったコートはズタズタにされ、新品の革靴は奪われた。

夕焼けで赤くなった春の空、顔中ボコボコにアザをつくり、鼻や口から垂れた血を黒く固めたままにしながら、ただひとり裸足で下校したこの日は、けっして誰にも言ってはならない、竜二が一生忘れることのない屈辱的な日となった。

しかしその後、やがてその不良グループに仲間入りをすると、持ち前の体格と負けん気を存分に発揮し、しまいには最高学年になるのを待たずにして、彼に『ヤキを入れた』生徒達をも含む、全校生徒を仕切るまでになっていったのである。

キツカケは、一冊の本だった。

70年代前半に、わずか3年半で解散した伝説のバンド『キャロル』のファンだった竜二は、やがて『キャロル』解散後に自らもスライドする形で『キャロル』リーダーだった矢沢永吉のファンとなり、やがて彼の半生を描いた伝記『成り上がり』を、ライフスタイルの手本とした。

実は、竜二が生まれて初めて自ら購入し、数知れず読み返した本が『成り上がり』だったのである。

人に負けることが本当に嫌いだった竜二は、その『成り上がり』にある『オトシマエをつける』という言葉が自らのポリシーとなっていた。

当時14歳の竜二はヤンチャ真つ盛り、待ちに待った矢沢永吉のニユーアルバム『ゴールドラッシュ』を大音量で聞きながら、ピンピンと跳ねる短髪にコテを当て無理やりオールバックにするとドライ

ヤーの熱風で溶かした『丹頂チツク』を塗り、狭い額に『サシ（剃りこみ）』を入れる毎日を送っていた。
そんな彼の性格は、手のつけられない『瞬間湯沸かし器』の代表選手になっていたのである。

この時点で既に、身長175センチ、体重72キロとなった体格は、成長途中の同学年生との差が格段にあっただけでなく、たとえ上級生からヤキを入れられたとしても、血を流しながら逆に相手に向かっていくほど身体も神経も人一倍頑丈になっていた。

バスケット部に所属していた竜二は、全くと言っていいほど部活動に顔を出さなかったのだが、事がケンカとなると、一度でも負けようものなら、崩れた顔を誰にも見られないよう部屋に籠もり、なにが原因だったのかを食事もとらずに考え、最後は必ず勝つまで挑むほど熱心に取り組んだ。

だからへたに竜二に勝とうものなら、後が大変である。

一度、不意を付かれて左肩に角材をくらい、パツクリと肉が割れて血まみれになり、大けがを負ったことがある。しかしその半年後、竜二にけがを負わせた張本人の左肩には、もっと大きな傷跡がより深く残されていたという噂が広がった。

そこからこの頃ついたアダ名が、『スッポン』である。

本人の耳には『mamushiの竜二』になっていたのだが、実は皆、陰でそう呼んでいた。

なるべくであれば『スッポン』とは揉め事を起こしたくない。したがって相手が竜二と知った時点で、喧嘩になる前から勝負がつくのが殆どだった。

「おいコラ、邪魔だから、足どけろ。」

同級生が部活動に汗している頃、帰宅前にゲームセンターに寄って行こうと路面電車に乗った竜二の目に、紺色の学生服を着たパンチパーマのツツパリ学生が足を組んで座っている姿が入ってきた。

マスクをし、ペツタリと薄くつぶれた黒いカバンを脇に抱え、ポケットに両手をつ込みながら足を組み、これまた力カトがつぶれてペツタンコになった白いエナメル靴をつま先でブラブラと揺らして他の客からは迷惑に見えた。

竜二はその男を目に止めると、彼の前にすかさず立ち、見下ろしながらそう言つと、紺色学生服が、眉間にしわを寄せた鋭い目で見上げながら、

「なんだと？こら。」

と凄んでみせた。

すると竜二は、男の組んでいた足を蹴飛ばして、

「なんだよニイチャン、モメツか（喧嘩で勝負するのか）コラッ！教育指導だ、降りろ降りろ！」

そう突っかかっていると、足を蹴飛ばされた拍子で転がっていく自分の靴を目で追い、そして再び竜二を睨み返した男が、ツメエリの校章に視線を落とした途端、急に顔つきを変えた。

「なんだオメエ、伏見野（中学）のチュウボウ（中学生）じゃねえか！俺はザイケイ（北海道立経済高校）だぞ！こら。」

この高校、『柄の悪さ』では五本の指に入る男子校である。ザイケイ男がタンカを切った後すぐに、チュウボウの脇に抱えられ

た薄っぺらいカバンに視線が釘付けになった。

チュウボウ竜二のカバンは、『オオチョンバン』と呼ばれる、ある特定の人間にしか許されないもので、黒ではなく、薄い茶色革が特徴である。その色から、どんなに遠くにいても必ず普通のそれとは違いが一目でわかる。そして大抵、腕に自身がある者は、それを奪いに挑んでくる。

勝って奪い取れば自分の戦果の証となるのだ。

こうして『オオチョンバン』は、腕の立つ男達だけにまわりまわっていく。

だから、いつでもどこでも、そのカバンを持ち歩いているだけで、ケンカ買います。

なのである。

それどころか、『高値で結構ですから、どうかこの私に喧嘩を売ってください。』くらいの積極的アピールをしているようなもので、当然、本人もそれを覚悟で持ち歩くことになる。

たとえば『オオチョンバン』を持っていたとしても、ケンカの腕っ節が並以上の自信をもつ人間達に常に狙われているも同然となるわけだから、実際には部屋の飾り物となるのが通常であつた。しかし、このチュウボウは堂々と持ち歩いている。

『…よっぽど喧嘩に自信があるのか、事情を知らないアホかのどっちかだ。いずれにしても関わらない方が利口かもしれん…』

ザイケイ男がそう考えていると、再びチュウボウが凄んできた。

「ちっ、セイガク（高校生）だからってなんだよ、上等だべや。次（の停車場）で降りろや。」

「ううんと、いや、ヤッパやめとくわ。俺急いでっから。」

一応、「お前にビビッている訳じゃないぞ。」というニュアンスのトボけた口調でザイケイ男が答えると、

「なんだそりゃ！ザイケイもたいした事ねえなあ、チュウボウに上等かけられて、ズラす（避ける）ってか？腰か？（腰が引けている、ビビッてる）じゃあ最初からイキがんな。この辺でもうでっけえ態度とんじゃねえぞ、なあ！センパイ。」

チュウボウはそう言いながら、転がったエナメル靴をもつと遠くへ蹴飛ばし、座っているザイケイ男にわざわざ席を立てて拾わせ、空いたその席にドツカと座った。

中学二年、『チュウボウ』竜二は、例え相手が高校生でも関係ないのである。

「俺なあ『ヤノ竜二』っつーんだわあ、忘れんなよお！」

そんな毎日を送っていたある日「従業員が全員ツツパリリーゼントの店が原宿からやってきた。」そう不良仲間に誘われ、どんな店かと冷やかし半分に訪れた途端、そのスタイルにシヨックを受けた。

当時の不良といえば、洋ランで学校生活を送り、私服は『マンシングウェア』や『トロイブロス』を代表としたヤクザ風ゴルフウェアが定番だった時代、竜二も矢沢永吉が好んで着ていた白いＴシャツにコットンパンツスタイルがほとんどで、その他バリエーションはごく一部で流行していたＧＩスタイル（マッকারサー大佐の様なスタイルで、細く結んだネクタイの３分の２をシャツの第二、第三ボタンの間に入れてしまうファッション）や『ダウンタウンブギウギバンド』が火をつけた『ツナギ』ファッションが関の山だった。

そんなご時世に突然、水色の外壁に『CREAM SODA東京』と赤文字で大きく書かれ、その隣にはアメリカ爆撃機に描かれてい

たピンナップガール、そして店内は一転してピンク、黒白の市松模様
様に配されたピータイルが敷かれたフロアーの真ん中にビリヤード
台、至る箇所にフェニックスの観葉植物が置かれ、天井には大きな
シーリングファンが回っているという、古き良きアメリカ風雰囲気
で、常にロックンロールが流れているブティックが登場したのだ。

新鮮なショックを受けた竜二は、彼の友人の殆どが暴走族方面に突
き進んでいた中、その方面には一切興味をもたず、この店『CS』
にのめり込んでいった。

その独特な雰囲気ของ ショップスタイルも驚いたが、そのうえ、原宿
からやってきたスタッフ全員がリーゼントなのである。

革ジャンの襟を立てたままで接客もする。

革ジャンリーゼントが、人前で堂々と仕事をしているのだ。

竜二にとって今まではどちらかというと、そういったスタイルの人
種は、あまり人前で仕事をしていないのが常識だと思っていた。

こういった類は大抵、肉体労働か、イケナイ仕事をしている。

「ロックンロール風ファッション」と呼んでいた竜二に、「これは
ファイフティーズスタイルというんだ。」と『CS』スタッフは教え
た。

呼び名ひとつ取っても拘りが感じられ、竜二はマニアックな印象を
受けて感激したのだが、所詮「不良スタイル」なのには変わりはない。
い。

しかし、その外見からは裏腹に、彼らの挨拶が爽やかで好感が持て
た。

「はいっ！いらっしやいませえ！」「どうも、ありがとうございま
したあ！」と全員が大きな声で挨拶する、まるで鮎屋である。

パツと見はアメリカンだが、実際中身は体育会系、そしてその外見

のスタイル、第一印象を覆す爽やかな挨拶以上に、販売トークが凄まじかった。

竜二がまだ『CS』に通い始めて間もない頃、値段が高くて手が出ない『コンバース オールスター』に似せた『CS』オリジナルのスニーカーが手ごろな値段で売られていたのを見つけ、早速喜び勇んで購入すると、

「紐を通すんだったら、ジエームスディーンのやっていた通し方がカッコイイんじゃない？」

そう言いながら、スタッフが真剣な顔付きで適当に紐を通しはじめた。

しかし、世間にはジエームスディーンがスニーカーを履いた映画も写真も一切ない。

眉唾だったのである。

それどころか、古着のナイトガウンをデディボーイジャケット（70年代頃からロンドンテツズ達に流行した、その昔イギリスのエドワード七世が愛用していた丈が異常に長いジャケットのことで、襟はヒョウ柄やゼブラ柄のベルベットが施されているものが多かった。70年代初頭は、後に『セックスピストルズ』のパンクファッションを生んだ、かのヴィヴィアンウエストウッド、マルコムマクラレンのブティック、『Let It Rock』でも売られていた）と振れ込んで買わせたりもした。

ここまできたら詐欺である。

しかし客は騙されていることに気が付かず、それどころか尚も崇拝させ、何を言っても信じさせる、カルト集団のリーダーのような、巧みなトークセンスと妙なパワーをもっていた。

お客の方が無償で彼らの手伝いをかってで、拳句に自己満足している始末である。

竜二は彼らを知って『不良』そのものの考え方が変わった。

『不良』なのに、頭は非常に切れる。

『スマート。』という言葉がピッタリだった。

そのうえ彼らの商売にかけるパフォーマンスのアイディアは鋭く、ある日突然、映画『アメリカングラフティ』のウェイトレスさながらスタッフ全員ローラースケートで接客したり、冬、寒さ真っ盛りで吹雪いた外から店内に入るとハワイアンソングが流れ、全員アロハシャツに白いパンツで接客するという、今迄にない、独特かつ斬新で粋な遊び心を持っていた。

商品構成にしてみても、どちらかというと完成しきっていない『うまへた』な印象が強く、どうみても浅草の合羽橋あたりで仕入れたようなチープな物ばかりで、ラベルなどに印刷されたヒョウ柄模様は『どう見ても手書き』という物も有ったほどだったが、『飛び出しナイフ』型のクシなど、戦後ドサクサ時代のヤケクソでキツチュな雰囲気好感をもたせていた。

そして襟元のタグはドクロマーク。

ロンドンファッションも並行して取り扱われ、アメリカンフィフティーズとロンドンパンクがゴチャ混ぜの感はあるが、ラメ入りパンツやモヘアセーターなど、札幌中何処を探しても決して目にする事のないアイテムをいち早く取り扱っていた。

竜二は、特に買い物をするわけでもないが毎日のように『CS』に通い、その二階で営業している同系列の喫茶店『ミルクホール』に入り浸って常連客たちとも交流を持ち始め、やがて1960年代に

流行したダンス「ツイスト」を教わると、喧嘩に明け暮れていた彼の生活の中心は完全にフィフティーズファッションとダンスになっていった。

そして、『ある事件』を最後に、竜二は本格的に広い意味で『更正』していく事となるのである。

翌年、15歳となった竜二が、ダンスパーティに呼ばれて地下鉄北24条駅を歩いていると、ベンチの背もたれに腰掛けながら何やらこちらを見ている4人に気がついた。

彼らは紺色の特攻服で揃えている。

そのなかでひとり、紫のロンスタ（ロングスタジアムジャケットの略で、フェルト地で出来たスタジアムジャケットのコート版、映画『アメリカングラフィティ』に登場する『ファラオ団』が着用していたことから呼ばれた『ファラオジャケット』と同型だが、丈は非常に長く『長ラン』風で赤や紫に黒のヘチマ襟が主流である）に、マスクをつけた男もいる。

マスクの装着は、シンナーを染み込ませて随時ラリっていられるということ、しかも一見怖そうに見えるという、まさに一石二鳥の不良必執アイテムなのであった。

目の悪い竜二は、最初こそ気がつかなかったが、4人に近づくにつれ、彼らはパンチパーマの少年だという事、しかもこちらを『ガメツ』いる事が次第に判明してきた。

「…おつ、小僧、俺をガメツてんなあ…。」

相手の目を睨み付ける事は俗に一般で『ガンを飛ばす』『メンチを

きる』などと呼ばれている。そして『ガメる』は全国的には『クスねる』という意味で広がっているスラングなのだが、目でケンカを売っている行為を、札幌では市民の99パーセントが『ガメる』と呼んでいる。

竜二も反撃しようとしたが、重大な事実にはハッと気が付いた。

「シマッタ！よそ行きの靴だ！」

この日は『ソックホップ』というアメリカ1950年代で流行した、靴を脱ぎソックスでダンスを躍るスタイルのパーティに呼ばれていた。したがって靴が傷む心配のないこの日は、穿いている白いパンツにコーデインイトして、傷ひとつ付いていない真っ白なレザーに黒いステッチが入った、イギリスブランド『ジョージコックス』社のコピーモデル、18,500円という超高額で購入した自慢のラバーソールシューズを履いていたのだ。

竜二がファイティーズに没頭しはじめたきっかけは、この靴の「あまりのカッコよさから」といつても過言ではなかった。この靴と出会ってから実に1年の年月を経て、やっと手に入れた『宝物』である。

その宝物のために我慢して歩いていると、特攻服4人組は次第に調子に乗って、オーバーアクションを加えながら『ガメッて』くる。

「くうー！ぶちのめしたいい…うーん、だけど我慢ガマン…」

やがて竜二が4人の前を通り過ぎようとしたとき、マスク少年がつぶやいた。

「シャミ野郎。」

『シャミ』も、恐らく北海道でしか使われていないであろうスラングで、一般には「いくじなし」が一番近い表現と思われる。アメリカでいうところの「チキン」だ。

パンチパーマには到底似つかないマスク少年の幼い顔つきは、どうみても中学生だった。

「ああ…完全に小僧に舐められているう…せめてあのマスク小僧だけでもやっちやいたい…だけど、今この感情に流されて、やっと手に入れたこの靴がダメになった方が後悔は重いし…」

葛藤である。

竜二がそう考えているうちに下を向いたまま4人の前を通り過ぎていた。

それから10メートルほど行ったところで、マスク少年が竜二を追いかけるまねをして、彼らから笑いが起こったのを背中で聞いた。

「大した事ないな。」という、完全に舐めた笑い方である。

その笑い声を聞いてしまった竜二は、体中の血液が頭に昇り結集した事を実感すると、遂にUターンし、無表情のまま、早歩きで彼の前に戻った。

もう『瞬間湯沸かし器』の脳みそには、宝物であるはずの靴の存在はどこか遠くへスッ飛んで微塵も無くなっている。

4人の中で一番強そうなりーダー格の『ロンスタマスク少年』がすかさず、Uターンした竜二の前に立ちはだかり、顔を近づけて眉間にしわを寄せ、威圧した。

「なんだよアニキ！、やんの…か…」

マスク顔が「か」を発する直前、既に怒りで瞳孔が開きっぱなしになっっている竜二の『チョーパン』が瞬間で顔面に炸裂していた。

竜二という男は性格上キレると会話がない、即効で行動に出る。

チョーパンを食らった直後に、力無く「か」を発した後、

「イテッ！」
とつさに『ロンスタマスク少年』がそう口にすると、彼の目に見る見る涙があふれてきた。

顔を手で押さえた指の間から鼻血が流れて止まらない。

「…いつから反射的に『イテッ』と言うようになったんだろう？ベ
つに親から『とつさにそう言うんだよ。』って習った訳でもないし、
たとえその言葉を覚えたとしても、とつさに口から出る位、痛い思
いをする経験回数は多くはないはずなのに…これが『イテッ』じゃ
なくて『ケロッ』だったら、果たしてみんな痛い思いする度『ケロ
ッ』と言うんだろっか…。」

竜二はチョーパンを一発決めて気分が落ち着いたのか、血を流す少
年を見下ろしながら冷静にそう考えるとニヤツと笑ってしまった。
その笑顔の事情を知らない残りの3人には、血を見ながら微笑む竜
二を不気味に思いはじめた。

『…ああ、変な奴にカラんじまったなあ…、血を見て喜んでるよお
…』

続いて竜二は右手をポケットに突っ込むと10円球を握り締め、ひ
るんだマスク少年の胸ぐらを左手で掴み上げながら、鼻血で真っ赤
になった顔の中心を、鼻をかばっている左手の平を通して何度も何
度もしつこく殴った。

10円球を握り締めることにより、拳を傷める事無く、しかも、よ
り破壊力がアップすること、しかも顔のどの部分よりも『鼻』を殴

られるのが一番痛いことを、竜二は自らの経験で知っていた。

『ロンスタマスク少年』は鼻だけを集中的に殴られ、涙が止まらず前がはつきり見えていない。

「おらあ！おらあ！おらあ！」

竜二のあまりの勢いに、残りの3人は「あわわ…」といわんばかりに、その恐怖で硬直している。

『ロンスタマスク少年』も奇襲攻撃に圧倒されて、反撃どころか、右手で竜二を押し退けようとはしているものの、魂のない人形のようにやられるがまま、やがては鼻をかばっていたはずの左手もダラリとたれ落ち、真っ赤に染まったマスクも吹っ飛んでしまった。

「おらあ！おらあ！おらあ！」

以前、肩を殴られてから左腕が圧倒的に弱くなった竜二が右手だけの一方で殴っていたため、ロンスタ少年の鼻の骨が向かって左方向に『くの字』に曲がってきた。

「もういいべや、やめてくれ。死んじやうよ。」

手が出せず、事の始終をただ見ていた外野3人のひとりが言つと、

「デメエ、タメグチで命令かあ、こるあゝ！」

竜二は殴る手を休めることなく、止めようとした少年の顔をも見ずに、そう凄んだ。

すると少年が顔を下に向けたまま言った。

「…や…やめて…ください…」

全く聞いていない。

更にビシビシ殴ると、少年の瞼が切れて顔面左半分が真っ赤になっ

ていった。

最後に竜二は少年のミゾオチに2回蹴りを入れて、ハアハア言いながらユツクリと歩き出した。

こういったことは中途半端に終わらせると、背を向けた直後に反撃を喰らってしまう時がある。その防止策として、一旦始めると相手が戦意喪失となるまで徹底的に潰すのだ。そして、あくまでもユツクリ歩く。急がない、慌てない。堂々と歩く。ことによって『襲ってきても恐くないぞ。』をアピールするのである。

ミゾオチに蹴りを入れられて吐いてしまった血まみれの少年を、仲間3人と地下鉄駅事務所のドア越しに覗いていた駅員が、ただ呆然と見つめている。通行人は『見て見ぬふり』である。

啞然と見つめている少年達の一人が着ている特攻服には「喧嘩上等」の刺繍があつた。

急いでパーティ会場に向かいながら、竜二は飛び散つた真つ赤な血で染まつた、白いはずの『よそ行きの靴』を見て愕然とした。

…靴の先端がパツクリと口を開けている。

蹴りを入れたときに底を剥がしてしまったのだ。

「あれ？なんで剥がれてるんだろっ…？」

頭に血が昇りすぎて、最後に蹴りを入れた記憶が飛んでいる。しかし、底が剥がれている現実には違いはない。

冷静に現状を把握し、物凄く落胆し、気落ちしながら思った。

『…ああ…完全に後悔…。』

フィフティーズスタイルのダンスといえば、ジルバかツイストである。

札幌でやっと広がり始めたツイストとは、足を縦に並べ、キュッキュツとつま先を中心にしてかかとを振る、1960年代に流行したオーソドックスなスタイルだけだった。

そんな中、竜二は『スリーステップ』という、身体を大きく動かし、時には空中にジャンプもできるテクニクを習得していて、『場の華』としてパーティには必ず誘いがかかっていた。

以前『ミルクホール』が主催したダンスパーティのゲストとして原宿から来た連中から教わった竜二は、札幌で『スリーステップ』の第一人者となった。そして後にツイストコンテストで優勝したのをきっかけに、どんなパーティにもお呼びがかかるようになったのである。

竜二が気落ちしながらパーティ会場となったダンスホールに到着すると、底の剥がれた自慢の靴を脱いで目立つ場所に置き、テーブルに用意されたパンチを飲みながらフロアに入った。

するとすぐ、ポニーテールがよく似合う娘がパーティフロアで声をかけてきた。

「あれえーヤノ君じゃーん、きてたのぉ…。」

声をかけられ振り向くと、男好きする顔立ちの彼女を見た途端、竜二の目が輝いた。

「じゃあーんって…アンタだれだっけ？」

嬉しいのをこらえて竜二が聞いてみたが、そんな事は全くお構いなしに、

「ねえ、チークタイム、アタシ相手がいないんだよね、一緒に躍るよっ！ねっ！」

そう誘ってきた。

「『踊るよ！』ってねえ、…へえ…、俺とねえ…。」

願ったり叶ったりではあったが、竜二はあくまでもクールを装い、誘ってきた彼女にはまるで無関心の様に振る舞ってみせた。

竜二の到着を知った、DJ役である主催者が『フラッシュキヤデラツク&コンチネンタルキッズ』の『アットザホップ』をかけると途端に、竜二の周りに人の輪ができあがった。

実は『フラッシュキヤデラツク&コンチネンタルキッズ』とは、映画『アメリカングラフィティ』の中で、ハイスchoolの体育館で催されたソックホップパーティー場面に登場した『オールデイズバンド』なのだが、竜二にとっては、オリジナルである『ダニー&ザ・ジュニアーズ』版よりも、この『コピー版アットザホップ』の方がハイテンポで踊りやすかった。

彼はこの頃ともなると体力の関係で、お気に入りの曲、しかもパーティに登場してまもなくのハイテンション状態時間だけしか踊らなくなっていた。従って竜二のステップをなんとか盗もうとするギャラリイ達は、彼が登場した直後のせいぜい2〜3曲程度しかその姿を観ることができないため、その時は視線が釘付けである。

竜二のワンマンショーが終わり、やがてアップテンポな音楽からスローな『ヘイポーラ』へと曲が変わると、待望の『チークタイム』となった。

すると先程の約束通り、ポニーテールが何処からともなく竜二の横

に姿を現した。

体にピッタリとしたポロシャツの襟を立て、サーキュラスカートとボビーソックスを併せて穿いた彼女の背中に竜二が手を回すと、シットリと汗ばんでいる。

「私汗かいちゃってるでしょ？ああ、シャワー浴びたい。そう思わない？」

「エッ？俺と一緒に？」

「そこまで言っていないでしょ！けど、どうかなあ？そうなっちゃったら、嬉しい？」

「クウー、ウレシイウレシイ！」

結局、2人はパーティ半ばで会場を後にし、帰りのタクシーも一緒に拾った。

年頃の男女が帰りのタクシーを共にするという事は、ちょっとした意味がある…。

「…お前、やばいことしちゃったみたいよ。」

パーティから3日経った夕方、修理の終わった例の白いラバーソールを靴屋で受け取った竜二が『CS』に顔を出すと、従業員の『コウチャン』が声をかけてきた。

コウチャンは、コメカミあたりまでサイドを真っ青に刈り上げた『男はつらいよ』の『タコ社長』のような個性的リーゼントスタイルで、『バイクの免許を取ろうとしたが、問題文の漢字が読めず3回

も落ちた。』という伝説の持ち主である。

以前通っていたボクシングで鼻の骨が砕けたのをいいことに、気に入った女性客を見つけては、骨がなくなったその鼻をペチャンと指でつぶしてウケをとる得意技も持っている。

「なんすか？」

わざと感情を押し殺したイントネーションのコウチャンの問いかけに、竜二は何がなんだか分からず、素直にそう答えると、

「惚けんなって、お前、チサトとヤツちやったる？チーク踊った後に仲良く2人で帰ったって、パーティ開いたヤスオから聞いたぞお。その女、タッチの彼女だぜ。」

『タッチ』とは、竜二と同様『CS』の常連客で、東京帰りの身長190センチはあろう、元4回戦ボクサーである。

さすがの竜二も絶対に勝てる相手ではない。

それどころか、勝てる勝てないの問題ではなく、果たして『生きたまま負けて終わらすことができるか？』という言葉を使ったほうが、この場合は正しい。

「えっ？…やつ、やってないっすよお！」

信号機の青ランプのような顔色に変わると歌舞伎役者のような恐ろしい顔つきで答えた。

脇にはザブザブ汗をかいて、赤いリネンシャツがマダラ模様になっている。

「…あの女、チサトっていうんだあ…なにが『コニー』って呼んで。だよ…ったくう。」

竜二がそう考えているその一方で、

「…赤いシャツに青い顔が綺麗だなあ…。」

コウチャンは、必死になつて答えている竜二を見つめながらそう思っていた。

完全に他人事である。

ダンスパーティーの前に喧嘩した後悔こそ日常たまにあるかもしれないが、その後のこれは、まだこれから明るいであろう将来が待っている少年の尊い命にかかわる重大な可ち、といつても決して大袈裟ではない。竜二はそう考えると鼓動が激しくなっていくのを感じた。

「…お前、多分、半殺しにあつちゃうなあ…。」

コウチャンは口調こそ心配そうにしているが、その表情はまさに、嬉しさを隠し切れていない。

「…なまらヤックイ（とてもヤバイ）…。」

竜二がそう考えていたそのとき、偶然のタイミングで『CS』にタッチが入ってきた。

「うわあー、タッチ君だあ…。」

まるでハリネズミのように全身を逆立て、アルマジロの様にこわばっている竜二に向かって、低音が効いた声でタッチが言った。

「よお、この間はチサトが世話になっちゃって、すまなかつたな

あ。
」

拍子抜けした竜二が、とりあえず瞬間的に応えた。

「いえ、とんでもないっす、大丈夫でしたか、コニイ…あっ、いやっ…チサトさん。」

何の根拠も無かったが反射的にこう反応したのだ。

「ありがとう、って伝えてくれって。」

タッチのこの一言を聞いた瞬間、竜二の視界が途端にパーっと明るくなった。

こんなに目に映るもの全てが美しく感じたことは、彼にとって恐らく生まれて初めてであろう。

コウチャンまで美しい人に見えてくる。

タッチはチサトを溺愛しており、チサトが話したデタラメを素直に受け止めていたのだ。

どういうデタラメか全く分からないまま、兎にも角にも、この一件はとりあえず事なきを得、全身の力が抜けてヘタヘタと崩れ落ちそうなところをこらえるのが、竜二にはやっとだった。

コウチャンはなぜかガツカリしている。

『何も考えずに行動をした後悔は、後から倍以上になって襲ってくるから、そのつもりで。』

この事件が竜二にとっては教訓となり、ささやかながらも生活態度が更正していくキッカケとなった。

そんな折、竜二が通う中学の担任教師が、「現状では彼の高校進学は無理。」と母親に進路相談を持ちかけてきた。

「なんとか頑張れば、私立高校がかるうじて拾ってくれるかもしれない。」とのことだったが、家には不良少年を授業料の高い私立高校に行かせる経済的余裕はない。

となれば、あとは就職しか道は無くなる。

それよりも竜二には、何としても高校に合格しなければならないもうひとつの大きな理由があった。

一年前、その素行不良さから、自分の二倍もあるつかという体格をした担任教師に防音設備が万全な校長室に呼び出されると、『生活指導』と称して一方的に殴る蹴るの制裁を加えられた経験を、竜二は持っていたのである。

だから竜二は、この担任教師から、挙句に『やっぱり駄目なやつ。』と絶対に言われたくなかった。

そこで奮起した竜二は『スッポン』性格を入試勉強でも発揮、放課後すぐに帰宅して部屋に籠もると夕食もままならず、ほとんど毎日徹夜で勉強した。

ただ『このセンコーだけには絶対負けたくない。』という理由で猛勉強に打ち込んだ結果、中偏差値の公立高校に合格したのである。

竜二は爽快だった。

竜二が晴れて高校生となった1980年、巷では、一億総ツツパリ時代に突入、やがて『横浜銀蠅』なる暴走族風ロックンロールバンドがパンチパーマリーゼントと革ジャン姿で、一般家庭が楽しむゴールデンタイムのベストテン番組に毎回登場し、『ナメ猫』なるキヤラクターグッズが飛ぶように売れ、『ホットドックプレス』『ギヤルズライフ』を代表とした、ティーンエージャーをターゲットとした雑誌が数多く出回っていく…。

時のブティックとなった『CS』は空前のブームとなり、連日、客でごった返した店内は、朝の開店直後からまるでバーゲンセール会場さながら、一日の売上げが一千万円を越える日も珍しくなくなつた、と同時に、竜二がスタッフ達とゆつくり歓談する機会もなくなつていた。

そんなある日、「黒人4人が日本語でドウアップを歌っている……！」深夜番組を見ていた竜二が驚いたグループは、まだレコードデビューをしてもない、『シャネルズ』という、日本人が靴墨を顔に塗つて黒人をまねたグループだったのである。

そんな時代の3大「族」は、「暴走族」「竹の子族」「ロックンローラー族」。

第一次漫オブームとあいまって、この「族」に便乗したタイトルで放映された番組が、「俺たちひょうきん族」であつた。

札幌もご多分に漏れず、元々古くから存在していた暴走族は勿論、竹の子族まがいや、ロックンローラーを気取つた若者のグループが増えはじめ、毎週日曜日ともなると、冬の『札幌雪まつり』会場で有名な大通り公園の夏は、さながら東京名物『日曜日の代々木公園』小型版と化し、やがて某コマーシャルで使われた曲『ランナウェイ』で火がついた『シャネルズ』を筆頭に、1960年代のアメリカンポップを歌うグループ『ヴィーナス』もコマーシャルソングによって人気が発、ついには『CS』のスタッフだけで構成されたロカビリーバンドのデビューによって、ロカビリーブームが到来した反面「竹の子族」は完全消滅し、札幌の中高校生は皆同じようなロカビリースタイルで街を埋め、ついに『CS』が若者のマーケットシェアをほぼ独占するかたちとなった。

そんな中、竜二の通う高校の同級生バンドが、ヤマハ提供の人気番組『コッキーポップ』の主催する『ポプコン』北海道予選を見事勝ち抜き、ツマゴイで全国大会出場となつた。同級生の勇姿をテレビ

で観ていると、そのあとに九州地区代表として『ザ・コースターズ』の代表曲『ヤケティ・ヤック』を日本語にかえて歌う黒スーツにリーゼント姿のグループが目に入ってきた。気になっていた竜二は『ポプコン』を終えて札幌に帰ってきた同級生に、そのバンドが何という名前だったのかを聞くと、『チエツカーズ』という九州のグループだと教えられた。

こうした『石を投げればリーゼントに当たる。』風潮も手伝って、札幌だけでなく全国的に『CS』を筆頭としたアメリカの1950年代風ファッションに身を包んだ『フィフティーズスタイルのブティック』に、修学旅行生や暴走族予備軍があふれ、この現象を、多くのマスコミが取り上げるまでになってきた。

ブーム到来である。

一方、次第に連日超満員の『CS』に顔を出さなくなり、一時は珍しがられた『スリーステップ』が一般となってしまった上、以前の高校受験勉強期間を機に自分の存在が薄れてしまったダンスパーティにも行かなくなっていた竜二は、17歳となるこの年、また再び自分を夢中にしてくれる『何か』が現れることを信じていた。

散髪を終えた竜二が咥えタバコで『伊藤理容室』からトントンと階段を上がると、朝からシンシンと降り続いていた雪が吹雪に変わっていた。

ビルのエントランスのドアを開けると路面電車通り。そこを左に曲がり、ワンブロック行ってまたすぐ左に曲がりツーブロック行くと、『狸小路』に出る。

整髪を終わらせたばかりの竜二は、雪で濡れるヘアースタイルを気にしながらハリウッドジャケットの襟を立て、小走りして狸小路へ

と向かった。

次第に狸小路沿いの電信柱に備えられた小さなスピーカーから、最新ヒット曲、松田聖子の『青いサンゴ礁』が次第に大きく響き始めると、竜二の小走りが加速した。

『狸小路』とは、雪積もる冬に快適に買い物が出来る札幌住民には欠かせなかった、100メートル（一丁）ごとに区分けされながら900メートル（九丁目まで）続くアーケード型商店街である。

札幌オリンピック開催年に完成した『札幌地下街』の登場以後、ほとんど独占していたマーケットシェアを奪われてしまったが、古くから営業している老舗らが『狸小路』にしかない一種独特の風味を醸し出し、いまだ『時計台』『ラーメン横丁』に並ぶ札幌の観光スポットとして君臨している。

竜二は狸小路のアーケードに駆け込むと、頭や肩に積もった雪を払い落とし、店のショーウィンドウに映った自分を見ながら、尻ポケットから引き抜いたクシでヘアースタイルを整え、今度はユツクリと『平和ビリヤード』へ向かった。

狸小路でも外れにあたる七丁目に、この辺りでは唯一のビリヤード場『平和ビリヤード』がある。

竜二が以前没頭していた『ダンス』以上に、『プール』と呼んで現在ハマッている遊びが『ポケットビリヤード』であった。

1981年の札幌、『ポケットビリヤード』をファッション面も含めて本格的に『プール』と呼んで熱中している高校生は一人もいない。

巷の不良高校生の生活風習はというと、同じ不良でも二つのグループに分けることができた。

ひとつは『健康的不良』グループ。

これは喫茶店やゲームセンターで屯すか、誰かの部屋または雀荘で

麻雀、学生服から着替えてパチンコ屋、はたまた彼女等とデートしたりディスコでナンパして部屋に連れ込むかラブホテルへ直行という生活。

もうひとつ、『不健康的不良』グループ。

『溜まり場』となっている部屋で薬物（ほとんどがシンナーか、頭痛生理痛薬）に走ってドロドロしている。この類は社会復帰が困難だ。

ちなみに双方ともに、バイクが必需アイテムとなっているのが共通点、というのが世間一般不良の日常生活である。

カラオケボックスすら無い時代なのです。

『平和ビリヤード』に着き「ギイー」っとドアを開けるとまず踊り場、右側には2階に上がる階段が目に入ってくる。

踊り場や階段には、壺や釈迦の石像、その他の何とも言えない骨董品が雑に置かれていて、客のほうを気をつけて歩かなければならなかった。

その奥のもう一つあるドアを開けると、ビリヤード台が2列に6台並びフロアーが広がり、一番手前に2台のポケット台がある。

竜二が「ちわあー。」と入っていくと、フロアー奥の3台に2人づつ、いつも常連客がこっちを見向きもせず「ハイひとつ。」と声を上げながら「四つ球」をしている。

もうすでにリタイヤしている老人達なのだが、竜二はいつも彼らを見るたびに、

『こいつら、毎日毎日こうして、後はこのまま死ぬだけだなあ……こんな年寄りにはなりたくねえなあ……』

と哀れんでいる。

伸びかかったパンチパーマを無理やり七三に分けたようなヘアースタイルでいつも無愛想の店主が、店に入ってきた竜二の姿を見ると、いつも通りニコリともせずに2台あるポケット台の奥側に視線を送

った。

竜二がその方向に目をやると、もう既に、竜二と同様、襟足が刈りあがったサイドバックリーゼントに真つ赤なVネックセーター、中に着た紺と赤の細かなチェックのオーブンカラーシャツの襟を出し、渡りの太いグレイの霜降りパンツで決めた男が、瓶のコーラを飲みながらタバコを吹かし、こちらに背を向けてキューにチヨークを塗りながら立っている。

竜二の登場に気がついた男が振り向くと、すかさず左まゆげをキュツと上げ、一重マブタの目をギラッとさせて竜二に話しかけてきた。

「お？、髪切ってきたのかい、イトー（理容室）かい？」

1年前、高校に進学したばかりの竜二が、背が高くほっそりとした顔色の余り良くない男に興味を持った。

目つきが悪く、ロック歌手のように口をとがらせながら喋る。その声は小さく聴き取りにくい。

しかし笑った顔が人なつこく、決して暗い印象はもたせなかった。

「おおツールウ、もう来てたかあ。」

竜二が少々トーンダウンで答えた。

実家が質屋の『イリキツール』は、中学生時代、不良グループと仲が良く、目立ってはいたが決して本人はグループに入らなかった。実家の商売上、繁華街で産まれ育った彼は、誰が見ても、いつも風呂上りのようにスツキリと清潔な垢抜けした『シテイボーイ』に映り、動きが何事もスマートでマナーもよく、女性にモテるタイプである。

物心ついたところから頻繁に店に出入りする大人達を目にしていたトールは、捕らえ方がいちいち子供らしくなかったが、親が質屋なだ

けにモノに対する目利きは鋭く、何にでもこだわりの持っていた。いわゆる高級品とは違う意味での『ブランド指向』で、目立つ格好をしていたのだが、決して不良たちから襲われることのない得な性格をもった不思議な男である。

竜二とトールの二人が通う高校は新設で、札幌一円の生徒に受験資格があった為にありとあらゆる中学から、俗に言うピンからキリまで多種多様の生徒が合格した。少々努力をした不良達も多からず合格し、中学時代にいがみ合っていた者同士も晴れて仲間となったのである。

いかにも中学卒業直後にパンチパーマをかけたと分かるヘアスタイルの『高校デビュー』まるだし新入生がチラホラ目に付くその高校でただひとり、ポマードで固めた直毛リーゼントだった竜二のスタイルを一目で気に入ったトールから声をかけたのがキッカケだった。

「考え方や行動は実はスマートだがトボケた態度は忘れず、おしゃれで清潔だが一度キレたら誰にも止められない凶暴性をもっていないければならない…」

CSの影響をもろに受けた竜二なりの哲学を聞いて、トールは竜二を自分の理想の人間だと確信すると、さっそく紹介された『伊藤理容室』で髪を切り、竜二と同じヘアースタイルにするほど竜二に憧れ、竜二を慕った。

そのトールと竜二の放課後は、いつも『平和ビリヤード』だったのである。

札幌にはアメリカ映画にでてくるような『プールバー』のような店は微塵も無い。それどころか、そんな言葉すら知られていない。

今や「パツクマン」や「ドンキーコング」によって「スペースインベーダー」以来のゲーム機全盛の時代、『ビリヤード』をするには、虫の息ではあったが何とか生き残っているビリヤード場や一部のビリング場に行くしかなかった。

実のところ、竜二も『ビリヤード』は『CS』のスタッフ達から教わるまでは、その存在すら知らなかったのである。

『平和ビリヤード』にいる客は、皆『四つ球』と呼ばれている、白球2つ、赤球2つをぶつけ合う、ゲートボールのようなビリヤードをしている老人ばかりだったおかげで、ポケットビリヤードの台はいつも空いていた。

同世代でビリヤードをする人間は誰一人として存在しておらず、竜二にとってトールはビリヤードを教えこんだ、いわば唯一のビリヤード仲間だった。

それから1年経っても、相変わらず竜二にとって、ビリヤード相手はトールだけなのである。

ふたりは『平和ビリヤード』の『平和』を麻雀で使う言葉から『ピンプ』という愛称で呼んでいた。

「...やられた。」

店の奥のポケット台に向かって歩きながら、竜二は、振り向いて話しかけてきたトールを見ながら、そう思った。

実は、店にはまともなキューが一本しかないのだ。

『平和ビリヤード』には、『四つ球』を打つ常連客達は各自マイキューを持参しているせいか、ハウスキューは温泉街にある遊技場レベルよりも遥かに使えないものしかないのである。

たまに来店する客達にはそこまで分別する知識がなかったので、店側も気にしていなかったのだ。自分のキューなど到底買えない高校生にとつて、キューを先に抑えておくことは必至なのである。

だから先に来た方が、唯一のまともなキューを使う権利を得る。

竜二が発したトールへの返事が少々トーンダウンしていたのも、このせいだった。

以前、竜二はその唯一のまともなキューを前もって隠したが、店主

が見つけて元に戻していたことや、挙げ句にそのキューを二つにしてジャケットに隠し、持って帰ろうとして見つかったこともあった。いつものゲームは、ドンデン返しの可能性が高い『ナインボール』より、実力がものを言う『エイトボール』。しかもルールとして、一個一個落とす場所をコールし、その場所以外はスクラッチペナルティと一緒に扱いという、誠に厳しいものである。

2人は学校が終わると『平和ビリヤード』に寄り、土・日曜日以外はキッチリと2時間『エイトボール』をする。賭けるものはもっぱらコーラやタバコだったが、なにより負けることが屈辱で、お互い嫌だった。

エイトボールをしながら2人の会話は他愛無く、

「林家三平のリーゼントは、バディ・ホリーよりも凄い。」

「アメグラ（映画アメリカングラフティ）で、一瞬、白いカローラが映っている。」

「徴兵から帰ってきたエルビスは、実はニセモノだったらしく、ベトナムで既に戦死したが、アメリカ国民が落ち込むからソックリな別人を登場させた。だから終いには、ニセモノから真実をチクられる前に、ドーナツ食べ過ぎって事にして政府が暗殺した。」

レベルである。

しかし、たまに真剣な評論をし合う事もあった。

「なあトール、『ストレイキャッツ』って知ってた？3人組で、みんな一応リーゼントでロンドンテッズみたいなスタイルでよお、なんか、ロンドンで売れはじめてて、ロカビリーっていわれてるバンドらしいんだけど、日本でもレコード出てよお、この間聞いてみたんだわ、2〜3曲それっぽいのがあって、エディコ克蘭の曲も入ってたけどよお、ぜんぜんロカビリーって感じじゃねえんだよな、パンクみたいなロックって感じで。そいつらの格好も中途半端で、イマイチ格好よくねえし。ギターの奴なんか金髪でデッカイリーゼントでよお、あれじゃあ暴走族だべや。」

「俺も聞いたよ。ロカビリーとかいつている音楽評論家の奴等が素人だな、知ったかぶりだべさ。俺は認められんなあ、あのバンド。けど、ロカビリーって新鮮な響きだよなあ、ロックンロールよりも一歩こだわってる感じがするっしょねえ。」

「ストレイキャッツはそれとは違うべや、ありや、ロカビリーっつーより、ニューウェーブだな、ロンドンテッツの格好したパンクだね。ギターはグレッツチのエディコ克蘭の使ってたのと同じモデルだし、ウッドベースだし、ドラムは立って叩いてるっつーのはアイディアだけだよ、弾いてる奴らの格好と合ってないべや。ラフ過ぎるんだよ、そんなの、どうせだったらブルーキャップス（ジーン・ビンセントが率いていたバックバンド、ノーネクタイのスーツ姿でブルーのベレー帽を揃えて被っていた）みたいなスタイルだったらカッコイイのによオ…今っぽい。音だってロカビリーって言うんだったら、もっとチャカチャカでペラペラじゃないと雰囲気出ねえべや。最近のああいうバンドだったら『ポールキャッツ』や『ロカッツ』のほうがかッコイイっしょや。」

2人の評論とは裏腹に『ストレイキャッツ』は、その後すぐイギリスのみならずアメリカでも火がつき、日本でも人気が発見したことは有名である。

「なあトール、サムクックの『ツイストで踊り明かそう』、にでてくる、『チキンストラックス』って何のことだか知ってるかい？」

- 第2章 -

竜二とトールが『平和ビリヤード』で2時間ほど遊んだあとは、おなじく狸小路の少々中心街寄り、5丁目の角にある喫茶店『Tip Tap』で一服するのが日課である。

『Tip Tap』は一見なんの飾り気の無い、なんてことのないただの喫茶店なのだが、サイフォンを使って一杯一杯入れる絶妙なコーヒート、なんといつても店に並ぶレコードのコレクションが物凄いことで『知る人ぞ知る』老舗であった。

長いカウンターの隅から隅まで3段を使ってレコードが並ぶ。しかもこれが全部アメリカンオールディーズなのである。日本におけるアメリカンオールディーズレコードコレクター界では、その世界の情報誌にはかかさず登場している、超有名なマスターが経営しているだけはあるのだが、いつも他の客の姿をみたことがない。

竜二とトールは、平日であれば学生服のまま煙突のようにタバコの煙をモクモクやるので、入り口から視界に入らないテーブルがいつもの場所だった。

この日もいつも通り他の客の姿を見ることなく、2人が『Tip Tap』を出ると、『CS』が古着の取り扱いをやめてしまつてから札幌で唯一となつてしまつた古着屋『Tチープ』に向かった。週に一度、新入庫の古着をチェックするのである。

『Tチープ』は、狸小路の一丁北側に狸小路と並行に走る『およよ通り』の愛称で呼ばれる『南二条通り』の5丁目、まだ舗装もされていない小さな袋小路の突き当たりにある、これまた小さな2階建ての店である。

1階、2階ともに2人も入れれば身動きが取れないほど狭いのだが、それでも2階には小さなカウンターが設けられ、店のオーナーであるタカハシ氏の奥さんがよくコーヒーを出してくれる。

古着はどちらかというと、童話にでてくる魔女や農夫や狩をするハンターのようなメルヘンチックなスタイル用か、ボロボロのデニムオーバーオールにランニングシャツ、ワンポイントで首にバンダナを巻くといった、大ブレイク寸前のバンド、『デキシーズミッドナイトランナーズ』風『ちよつと見は汚いけど本当はお洒落』的人種御用達であった。

そういった洋服が多い中で、ごく少量ではあるが『ボーリングシャツ』や『ハワイアンシャツ』『レーヨンシャツ』などがまぎれて売られている。

古着屋の仕入れは、いわゆるベール（主に100パウンド分がビニールに包まれている）単位で色々な古着が一色痰に送られてくるので、彼ら好みのアイテムが、ツィードジャケットやコート、セーターなどにまぎれて入っている。よって、当然一緒に店先に吊される事となるのだ。

店側としてみれば、需要の低いフィフティーズアイテムは『ついで』のようなレベルなのだが、それでも背中に刺繍の入ったボーリングシャツや柄の良いレーヨン素材のフィフティーズハワイアンシャツなどは軽く1万円を超える、竜二やトールの様な高校生には到底手が届かない高額なものであった。

そこから一部の古着愛好家たちから『Tチープ』ではなく『Tエクスペンシブ』と皮肉に呼ばれている。そんな高額なものでも、2人にとっては他人の手に渡ることは許しがたい。

『…値段は高いが、どうしても欲しい。こういった上物シャツたちは、価値が分かりそして着こなせる者が手にするべきなのだ…。』

そこで彼らは、多少の客が出入りする日曜日になると自分の着ていた古着とコッソリ着替えて、そ知らぬ顔をして店を出るといったコソクな作戦にでていた。その時のために、事前にチェックしておくのである。

なにせ所詮、『不良』は『不良』。良が、不なのです。

昔から、『不良』を美化して評論する人間がいる。

『不良』は甘く切ない不器用な人間なのだ。

そういう、さも何もかもを知っているかのように同情的な評論をする人間は、決して『不良』だった経験が無い。それどころか幼少時代は『不良』を煙たがっていた連中である。

したがって当然、本当の『不良』を知る由もない。

『不良』は『タダの不良』にしかすぎない。

美しい物でも星の王子様でもない、せつなくロマンチックなものではないのだ。

チンピラの脳みその中は、店のスタッフと仲良くなれば彼らが油断して楽勝で万引きできるだろう、くらいにしか思っていなかった。

そんなセコイ作戦があるから、竜二とトールは犯行当日の『Tチープ』に、お気に入りのシャツは着ていかない。しかも目立った柄や色のシャツではなく、売り物と一緒にまぎれても決して目立たないものを着ていくことまで計算していた。

古着屋は世間一般では知名度が低く、一般客が頻繁に出入りするところとはほとんど無いため、防犯対策の必要が無い。

なおかつ古着は同じものが一着も無く、売る側としても一着一着覚えきれないので、店のものか客のものか見分けがつかなくなってしまう弱点を持っている。

したがって同じジャケットさえ着ていれば、インナーのシャツが変わっても余程劇的でない限り店側としてもその変化に気が付かない

のだ。

竜二とトールは、そういった悪知恵には頭がまわっていた。

しかし、まだ一般では比較的体型にピッタリとした1970年代ファッションの余韻が残っている中で、ゆったりとしたシャツに、ダブル裾のブカブカパンツという1950年代ファッションを当時そのまま再現したかのように古着をキチツと着こなしている彼らは常連客から人気があり、店のスタッフもいつも歓迎してくれている。なにかと周りを威圧し、どこかムサ苦しさを漂わせる『不良スタイル』とは違い、2人のような襟足のスツキリとした清潔なリーゼントの『アイラブルーシー』で登場する『リッキーリカルド』風スタイルを見るのは新鮮だったのだ。

傑作なのは、彼らが吸っているタバコの銘柄や持っているライター
の銘柄までも興味を持たれることである。

スタイルが徹底していると、『ハイレイト』や『セブンスター』、ましてや『キャビン85マイルド』などはもってのほかというほど、こういった小道具までも徹底しなければならなかった。したがって2人とも外ではゴールデンバットを吸う。両切りタバコゆえ口に入った葉を指で取り出しながら話す仕草も板についたものである。そして当然ジッポかアンティークのロンソンのオイルライターで火をつける。

しかし、本当は彼らも『ショートホープ』を100円ライターで吸っている方が気楽だった。

ある意味これらは、考え方によつてはアメリカ1950年代スタイルの『コスプレ』なのかもしれない。

『CS』を卒業し古着に走った竜二のファッションを『CS』熱狂ファンのひとりが罵倒したことがあった。

「オマエは何でも古けりや良いんだもんなあ、例えば3日前の刺身とか、半年たつて腐ったプリン……」

竜二は古着好きな男に変わってはいたが、『瞬間湯沸かし器性質』は全く変わっていなかった。

饒舌だったその男が、竜二の右肩越しに背後から話しかけている途中で、竜二の右ひじを顔面中央にキレイに食らい、前のめりになって鼻血をボタボタと落とすだけで、何も言わなくなった。

「古着着てて、俺が何かテメエに迷惑掛けたか？えっ？しかしテメエは今、俺に迷惑を掛けたわ。」

まだまだ『古着ファッション』は市民権を得られない、特別な人間御用達レベルである。

無事に高校2年に進級も決まった竜二が、街も雪解けがはじまった3月のはじめ、ベチャベチャと砂利道に足をとられながら、いつものように『Tチープ』に向かうと、見た事のあるクチヒゲを蓄えたリーゼント男が、きっちりとプレスラインの入ったラングラージーズにウエスタンブーツ、白いシャツと黒の細いネクタイ姿で店の前に立っていた。

彼の隣にはカーリーヘヤーの彼女も立っている。

「あれえ〜シノブくんじゃあないっすかあ!。」

「おお、ヤノじゃねえかあ!。」

口からタバコの煙をモクモクだしながら応えた『クチヒゲウエスタンブーツリーゼント』は『オオサワ シノブ』であった。

「あれー、シノブくん、ここでなにやってるんです?。」

札幌の不良は、質問の語尾に『か』をつけないのがトレンドである。

「おお、俺、バイトはじめたんだよね、ここで。」

その瞬間、竜二の目の前が真っ暗になった。

『えっ？…ああ、もうこの店では、金払って買うしか方法がなくなっちゃった…』

店で販売されている品物は、お金を支払うことによって自分の物になるというシステムは法律上においても当然といえば当然なのだが、『当然』のとらえ方が少々湾曲していた竜二にとって人生最大の悲劇が突然襲ってきたのである。

切ない表情で啞然としている竜二に、シノブが言った。

「もうちょつとで休憩だから『Hub』で茶でもするか？」

『「チープ」から1ブロック行った南2条西4丁目にそびえ建つ『ダイエービル』の1階に『Hub』という、イギリスの居酒屋『パブ』をそのまま再現した店がある。』

ダークブラウンを基調とした、イギリスならではの重厚な雰囲気をもった広い店内には2箇所ダーツレーンも立派に設置されていて、フィッシュアンドチップスやフレンチフライ、ボイルドソーセージなどをつまみながら、1人でも気軽にビールとダーツを楽しめる。

そのうえ、ジョッキ生ビールは破格の200円、庶民の味方的店舗であった。

向かう途中でタバコを買った竜二が遅れて『Hub』に入るとすぐに、先に着いたシノブと彼女のナミが座っている席を確認し、セルフサービスのカウンターで頼んだコーヒーを受け取ると、そそくさとその席へ向かった。

「この間だな、高校時代の仲間集めて野球チーム作っただよ。」

コーヒーを持ったままの竜二がまだ椅子に座ってもいないうちから、シノブは早速、タバコの煙を両方の鼻の穴からフンと出しながらそう話し始めた。

シノブは札幌大学に籍を置く大学生で、竜二とは『CS』の2階にあった喫茶店『ミルクホール』で知り合った3歳年上、竜二にとって、いわゆる不良仲間の『先輩』である。

1980年12月、世界中に放映された「ジョンレノン射殺。」という衝撃ニュースを偶然『ミルクホール』に設置されたテレビで数人の客と見ていた竜二が、実は『射殺』の意味を完全に把握しておらず、「もしかしたら生きてるかもしれないすね。」とポジティブな意見を述べると、『射殺』とは『撃たれた』だけではなく『撃たれて死んだ。』というまでの意味であることをシノブから教わり、顔から火を出した想い出を持っている。

あの時シノブに教えられていなければ、竜二は社会人になって、もつと大恥をかいていたかもしれない、小型ながら『命の恩人』でもあった。

八重歯を見せながら笑う顔が、「デビュー当初の石原裕次郎とソツクリ。」と、両親にとってシノブは『自慢の種』だったが、本人は全く無関心どころか、親バカの息子に見られると嫌がってた。

竜二にとってシノブは、学校が一緒の訳ではない、仕事や部活動からでもない、いつまでも永遠に終わることの無い『死ぬまで先輩』である。

『シノブ君のバイクをカッコよくする会』をシノブ自ら発足、月会費と称して毎月バイク改造費をカンパさせていたのだが、『死ぬまで先輩』なだけに、竜二はこの会が永遠に続くのではないかと心配だった。

シノブはいつも彼女のナミを連れている。

ナミはカーリーヘヤーにアイビーを崩したアメリカンカジユアルでセンスが良く、モデルのような容姿だが、大のパチンコ好き、ユーモアがあり明るく人なつこい性格は、竜二にとって憧れの存在である。

「あのね、野球チームなのにまだ八人しかないの…でね…」

ナミが怪訝な顔つきでしゃべり始めた瞬間、それを阻止するかのよう
にシノブが、

「さあ、なんていう名前でしょう？」

話しに割って入ってきた。

「えっ？ん、想像つかないっすねえ、フラッシュキャデラック
スペシャルズとか…イッタイなんていうんです？」

お約束通りの返事をした竜二に、シノブは『待ってました！』とばかりに少し胸を張って、鼻からタバコの煙をフンと出しながら遠くを見つめるような顔をして言った。

「『ボストンクラブ』っていうんだわあ。」

優越感にドップリと浸かった表情である。

「名前の由来はだなあ、プロレス技に『逆海老固め』ってあるだろ、あれボストンクラブって呼ぶんだ、そこから。だから、スペルは『BOSTON CRAB』なんだわあ。」

自慢気である。

「なんか趣があつてカッコイイっすね、BEATRIZとBeetleをかけた『BEATLES』みたいで。」

「この間さあ、『ウエストコースト』って店あるだろ？そこでやったルーキーズのパーティに呼んでもらつて、一発で、『俺達もチーム作ろう！』って思つたんだよな。」

「ルーキーズ？」

竜二はルーキーズを知らなかった。

「今度、『ボストンクラブ』の創立パーティをするんだけど、そのときルーキーズを呼んであるんだわ。ヤノも来いよ、絶対！」

そう話すシノブの姿が竜二の目にイキイキとして映り、羨ましく思えた。

10日後、『ボストンクラブ』創立パーティに、竜二は一人の男を連れて出席することにした。

当日、黒をベースに、ペンキを飛ばしたように何色もの淡いカラーがちりばめられたギャバジンブルゾンに、大きく尖った襟元に黒いダーツステッチが縫いこまれたクリーム色のレーヨンシャツをあわせ、ブルーグレー色のゆつたりとしたウールパンツというスタイルの竜二が、少々時間に遅れて地下鉄ススキノ駅の改札を出ると、グレイ色のカスリ柄と紺色のギャバジン生地との切り返しブルゾンから、薄いサーモンピンクに黒のダーツステッチが入ったレーヨンシ

ヤツの襟を出し、まるでサメの背びれのような高さのあるリーゼントスタイルでキメた細身の男が一人、タバコを吹かして待っていた。この『ナガノ アツオ』は、通う高校は違ったが竜二とは同年代、ロックンローラー族がひしめく日曜日の大通り公園で竜二と偶然知り合った。

出会った当初、非常にセンスの良い古着のボーリングシャツと、線が細く繊細な顔つき、一本の乱れも無い尖ったリーゼント姿が、竜二に『クールな男』という第一印象を持たせた。

しかし、その容姿とは裏腹に「チョット頭が足んないんじゃないかねえの？」と思ってしまう程、おっとりとした温和な独特の喋り方をしている。単刀直入に言えば、『ペシヤリがトロい。』しかも『ナガノ』という苗字を後からつけたのではないかというほどピツタリな、馬のように長い顔をしている。

彼はいつも穏やか、必ず一歩下がった参謀のような性格で、何かと猪突猛進気味となってしまう竜二にはバランスが丁度良かった。

しかしその反面、突然とんでもない行動をとる『地雷』のような部分もあわせ持つ『クセモノ』である。

ナガノには、札幌で指折りの暴走族のリーダーをしている、狂暴性の非常に高い兄がいる。

幼い頃から仲の良かった兄は、中学に入学してから急に様子がかわっていった。

髪の毛は日に日に金色となり、チリチリのパーマは指が通らない。何処から手に入れたのか、帰宅してはバイクをいじっていた。毎日彼の仲間が屯し、部屋からシンナーのおいが漏れている日が続く。やがて高校進学はせずに鳶となり、赤や黄色のメッシュを入れたチ

リチリカーリーヘアの少女が家に転がり込むと、お決まりの同棲をはじめた。

ナガノは、そんな兄が暮らす環境のなかで中学時代を過ごした。彼の穏やかな性格からは決して想像のできない、屈折した毎日を送ってきた。

毎晩、隣の部屋から女のあえぎ声が聞こえてきたと思うと、その後はラリってロレツの回らない口調の大喧嘩がはじまる。時には壁に物を投げ付けている音や、顔を引っぱたかれ、女が悲鳴をあげている声も聞こえてきた。しかしそんな兄は、決して自分が所属する暴走族にナガノを紹介しなかった。それは決して、カワイイ弟を悪の道へ引きずり込みたくないからという理由ではない。

おっとりとしたナガノが自分の弟だということを暴走族仲間知られたくなかったのだ。

ナガノ自信も兄がバックについていると思われるのが嫌で、ただの落ちこぼれ不良学生として、やり場のない時間を過ごしてきた。そんな環境のなか、自らの感情を押えることによって丸く収まる、という切ない技が知らずのうちに彼の身に染み込んでいった。

しかし、そんな状況を、音楽が救った。

たまたま兄からクスねたカセットテープがきっかけでロックンロールに没頭したナガノは、収集しはじめたレコードジャケットのスタイル達を参考にフィフティーズスタイルを覚え、フィフティーズ達が多く集まる日曜の大通り公園に行ってみると、いきなり多くの仲間ができた。

その仲間達が所属していた、大通公園で踊ることが目的で結成されたグループ『ルーデイズ』に自分も参加したのだが、チャラチャラとした軟派な感じが苦手でスグにそのグループを抜け、一匹狼となって大通り公園を徘徊中に竜二と知り合ったのである。

ナガノは自分のオットリとした喋り方にコンプレックスを持っていたのだが、竜二はそんなことは全く気に留めることなく、まったく普通に接してくれていたのが嬉しかった。

しかし、兄と同じDNAを持つがゆえ、時折その喋り方が原因で不良たちからかわれる事があると、いつも押さえ込んでいる潜在的な狂暴性が途端に表面化し、一旦キレると敵味方の区別なく暴れ出すという、もうひとつの顔も持っていた。

いわゆる『発狂タイプ』なのである。

そうになると、たとえ竜二でも止められない。

よって普段から暴走しそうな竜二に対し、いつも冷静に『まあ落ち着きなつて。』とナガノが後ろから肩をポンポンと叩いてやると、さすがの『瞬間湯沸かし器』も落ち着きを取り戻さずを得なかった。周りから見ると竜二がいつもオットリとしたナガノに従っているその様は実に不思議な光景に映っていたのだが、竜二自身は、ナガノと一緒にいるかぎり、自制心が利かなくなつて得意のチョーパンをいきなり炸裂させ、自分の意とせずにもメごとが大きくなる危険性もないだろうと安心していた。

竜二はナガノを信頼し、ナガノも竜二の右腕に徹していたのである。

2人は待ち合わせたススキノ駅から地下鉄で北二十四条駅まで行き、そこから5分ほどで到着する筈である目当ての店が入居しているビルを探した。

北二十四条駅前の繁華街は、雑居ビル群を抜けると今度は一杯飲み屋が連なり、まるで下町の雰囲気である。

「ああ、あれじゃねえか？」

日中の雪解けが夜には凍り、アイスバーンとなつてアチコチで酔っ

払いの足もとをすくっている中、シノブにもらった粗末な地図を見ながら歩いていくと、5階建ての雑居ビル入り口に今回の会場となっている店の看板を見つけてエレベーターに乗った。

かじかんだ両手のひらにハアハアと息を吹き掛け、竜二が3階ボタンを押してしばらくするとエレベーターのドアが開き、降りてすぐ正面の壁にピンク色の画用紙にマジックで『Welcome Boston Crabs Party!』と書かれたポスターが目に見え、飛び込んできた。

それは非常に手の込んだ、まるで本当のネオン管が点灯しているかのような色鮮やかな配色の流し文字で、その下にある矢印をたどって廊下を歩くと、チャックベリーのデビュー曲『メイ・ビリーン』が微かに聞こえ、廊下の壁にしつこく張られた矢印が終わったところで、ピツタリと閉め切られた向こうから「ブンブン」と籠もった音を響かせている『スナック 親不孝』と書かれたドアを開けると、途端に大音量が二人の耳を突いた。

店内を見渡すと、そこは40畳ほどのただのスナックだったが、その店内に似合わないフイフイーズスタイルの男女たちが12〜3人ほど、ビールを飲みながら支度をしている。

「よう、来た来た！」

薄いグリーンと淡いクリームの太い縦縞が全体に入ったイタリアンカラーのシャツに、薄い茶色のコットンパンツ姿のシノブが竜二に手を差し伸べてきた。

この世界の挨拶は、まず『握手』である。

シノブと握手をしながら竜二が足元に目をやると、彼にとっては正に高嶺の花、白いコンバースオールスターを履いている。

「ヤノォー、うちのチームがついに10人になったぞォー！」

BGMの音量があまりにも大きく、近くでも大声を出さなければ聞き取れない。

「シノブ君、ナガノっていう奴です。宜しくです。」

竜二は、これ以上ないシンプルなナガノの紹介をシノブにすると、今度はシノブが『ボストンクラブ』のメンバーを2人に紹介し始めた。

カウンター越しから、背中にチェーンステッチの刺繍が大きく入ったサックスカラーの古着のボーリングシャツに、同じくサックスカラーのバンダナをリーゼント頭に巻いた、ちよつとハーフ顔のハンサムが竜二に手を差し伸べてきた。

クリツとした目が印象的で、リーゼントヘアにバンダナを巻いている姿は、白人というよりも、1950年代のメキシカンギャングを感じさせている。

「ヒロノブっていうんだけど、通称、エロノブっていうんだ。」

そうシノブに言われて照れた顔がいかにもモテそうに思えた。

「そゝか、キミがかの有名なヤノ君かぁ、一度、澄川（町）でやったダンスパーティーに顔出したときに見かけたよ。大勢の輪の中でキミひとり踊っていて、光ってたなぁ。カッコよかったよ。」

「そーっすかぁ！ありがとうございます。恐縮です。」

「…この竜二様を知らずに札幌でフィフティーズやっている奴は、

相当のモグリだ…。」

この男は少々天狗になっている。

話を続けようとしたエロノブが、天狗の背後に映った男を見て言った。

「おっ、ボスが来た。」

リーゼントというよりも、オールバックに近いヘアースタイルにアロハシャツを着た体格の良い熊のような男が、ノツシノツシと近づいてきた。

「マルデ、サモアジンミタイダ…。」

振り返ってこの男を見た瞬間から竜二が硬直していると、たださえ丸い背中をもっと丸くしながら、小さな目をこれ以上できない位に細めた蔓延の笑顔をしたサモア人が手を差し伸べながら、

「ボスのヒグです。キミに来てもらって光栄です。」

とても腰が低い。

「いえいえ、とんでもないっす。こちらこそ、こんな大切な行事に呼んでいただいて光栄です。」

竜二が恐縮していると、空気を読んだシノブが、

「本当はタケヌマっていうんだけど、ヒグマみただから、ヒグって呼んでんだ。こいつなあ、オマエに会いたがっていて、今日楽しみにしてたんだぞ。」

「こうしてヤノ君がせっかく来てくれたんだ。ウチは酒屋だから、酒ならガンガン飲んでいつてよ！」

竜二はチョット持ち上げられて、鼻がグングンと高くなっていった。まさに嘘をついたピノキオ状態である。

ピノキオがヒグにナガノを紹介し、しばらく歓談していると、そこへゾロゾロと、年齢にして30歳ほどの集団が店に入ってきた。

その瞬間、ピノキオの鼻がポツキリ折れた。

実にオシャレでカッコイイ中年達がヤノの目に飛び込んできたのだ。リーゼントも多種多様で、側頭部を青々と刈り上げたのもいれば、サイドバックにバディホリーさながらの黒縁メガネもいる。どうみてもジエームスディーンそのものの顔をした二枚目もいて、男からみても惚れ惚れした。いずれも日本人離れた濃い顔をしていて、着ているものも、竜二でさえ『イッタイ何処で手に入れたのだろう？』と思わせる程、ダントツにセンスの良い古着である。

息をすることすら忘れて彼らを見入っている竜二とナガノに、

「ルーキーズがやつときたぞ！」

ヒグはそう言い残し、エントランスへ向かった。

「おおージージョさん、よく来てくれましたあ！」

ボスのヒグが握手をしながら叫んだと思うと、シノブやエロノブらが彼らに飛んでいった。

その中でひときわ背の高いアメリカ人顔の男が、茶系でまとめた品の良い色合いのアーガイル柄がワンポイントで左むねに刺繍された

赤いVネックセーターに、真っ白のボタндаウンの襟を覗かせ、アイガイル柄と同じ薄茶色のユツタリとしたパンツに、シャツと同色のホワイトボックス（白いボックススキン製のプレーントウシューズ）を合わせたスタイルで立っていた。

その男はルーキーズのリーダーで、背が高く彫りの深い日本人離れしたハーフの様な顔つきの二枚目なのだが、頭のバランスから見ても耳が大きく、その昔、子供達に圧倒的人気を誇った人形劇の主人公ネズミ『トッポジージョ』に似ていることから『ジージョ』と呼ばれていた。ニックネームの由来はどうあれ、本名である『ニノミヤ』以上にピツタリとマッチしていることは自他共に認めている。

ジージョを先頭としたこの集団の登場で、一気に場が明るく、そして少々緊張した空気が流れた。

竜二がナガノに目をやると、彼らを見ながら呆然としてグラスを持ったまま固まっている。

「ヤノオ、この人ルーキーズのジージョさん、ジージョさん、こいつは後輩のヤノっていいいます。」

「あつ、はじめまして、ヤノっていいいます。よろしくです。」

「へえー、かつこいいじゃん、キミ。なあシノブ、カッコイイよなあ彼。」

自信から生まれる余裕の誉め方をしたジージョは、竜二のことを知らなかったが、竜二は以前『ミルクホール』でジージョを見かけたことがある。

その時、「こんな人が札幌なんかに住んでいるのだろうか？」と物凄いショックをうけた事が記憶に残っていた。しかしそれどころか、今、目の前にジージョ級の男が今ウジャウジャと登場してきたのだ。竜二はもう、めまいに近い意識モウロウ状態である。

「ところでさあシノブウ、ノドが乾いたから何か飲ませてよ、みんなにも何が飲みたいか聞いてくれない？」

そう言いうと、ジージョはシノブの肩を揉むふりをしながら店の奥で陣取った仲間の中へ消えていった。

呆然と立ち尽くす竜二は、彼等から痛烈に思わされた。

「ルーキーズを知らないでフィフティーズをやっていた俺のほうがよっぽどモグリだ…。」

『ルーキーズ』とは、平均年齢が30歳以上のグループで、皆リーゼントのアメリカンフィフティーズスタイル集団である。

容姿がメンバー全員アメリカ人のようで、スマートな年配ハンサム集団なのだが、全員が札幌で有名な体育会系男子高校不良グループOBで、当時、手がつけられなかった連中が、社会人になってバラバラになった今でも一つの目標に向かって集まれる機会を持つとうと、社会人野球チームとして発足したのだった。

大抵、この手の元不良中年はヤクザ風や不動産屋風のいでたちになっってしまうのだが、皆なぜか日本人離れたアメリカンの風貌を持っている。スタイルも、アイビー調や、その昔、日本でも大人気だったアメリカホームドラマ『パパは何でも知っている』的雰囲気を持ち、どこにいても大体ルーキーズの人間か否かは分別がつくほど彼らは段違いに垢抜けていた。

しかし、皆、いまだ喧嘩っ早く、パーティ中もすぐ仲間内でドツキ合いをする、根は不良少年、いや、悪戯っ子のままだった。取り巻きにとっては、それがまた堪らなく格好良くみえる。

「…なまらだな…。」

「…なまらだわ…」

ルーキーズを眺めながらそう呟いた竜二とナガノは、彼らとすぐに打ち解けた。

しばらくして『ジョイ デイ&スターライツ』のヒット曲『ペパーミントツイスト』が大音量で流れ出し、待つてましたとばかりに竜二が得意のスリーステップで踊ってみせると、歓談に夢中となっていたルーキーズ達が途端に注目し、歓声を浴びた。

エロノブが竜二の踊りを皆に見せて驚かせたかったのだが、竜二自身としても、自分を売り込む恰好の機会を与えられた形となった。酒もほどよくまわってパーティは盛り上がり、しばらくして『ボストンクラブ』ボスのヒグが椅子の上に立って挨拶をした。

「最後に、俺たちが生涯のテーマソングとして愛している曲があります。この曲で、このパーティを締めさせていただきますと思います。本日は有難うございましたあー。」

目を滲ませ感無量の顔をしながら、そうスピーチをしたと思った直後、アントニオ猪木のテーマソング『ボンバイエ猪木』が大音量で流れ、会場は爆笑の中、終了した。

そんな和やかな空気が流れる中、一方で、今回この2つのグループの一部始終を見てしまったのがきつかけとなつて、『喧嘩』『CS』『ダンス』の次なる「生きがい」を模索し悶々としていた竜二が、何かに取り付かれたかのように1人だけ真剣な表情で拳を握り締め、硬直して立っていた。

『どうしても俺達世代の野球チームをつくつてやる。』

『…俺達の世代で、こんなレベルのグループが札幌に無いほうがおかしい…野球なら小学生時代に誰でもやっているはずだ。たとえ野球をしたことがなくても、後からなんとでもなる…』

竜二が遂に見つけた「生きがい」、それは『野球チーム』だったのである。

この構想計画には、普段から毎日のように行動を共にしているトールと、ルーキーズを目の当たりにしてしまったナガノの2人は、もう当然のように竜二の頭の中で勝手にメンバーとなっている。そのグループの名前も勝手に決めていた。

『T i c k - S』
ティックス

ダニである。

つまり、自分達は札幌の『ダニ』。
立場を自覚したネーミングだった。

パーティの2日後、興奮冷めやらぬ竜二は早速『T i p T a p』にトールとナガノを呼ぶと、『野球チーム構想計画』を打ち明けた。

実はトールとナガノは、この時が初対面だったのだが、竜二は全くそのことに気が付いていない。

「『ズ』という語尾の名前は『ルーキーズ』があんだろ？つでよお、『クラブ』にすると『ボストンクラブ』が既に有る。だから複数ではなくてもワンワードで『S』がついて、しかもズでなくてよ、スと読む名前がないものか探した結果が『T i c k S』だったっつー訳なんだわ。」

トールとナガノの二人は、『よくぞそこまで考えました』と感心し

た顔をしてフンフンと何度もうなずいている。

竜二は続けて熱弁した。

「しかも、俺が名付けた『T i c k s』は、アポストロフィー（濁点）があるんだよな。『ヤノの』は、『Y a n o ' s』という風に、『T i c k ' s』は『T i c k の』、という解釈にもなるんだわ。」

得意げである。

「じゃあT i c k って誰だい？」

トールが素朴な質問をした。

「えっ？知らねえ。誰だ？」

急に弱気な表情となった竜二が宙を見てつぶやくと、トールとナガノが笑った。

そして2人はすぐに『T i c k ' s』に賛同したのだが、メンバーになるにあたって、竜二が拘っていた事があった。

それは、互いの親指に針を刺し、血の流れ出た親指同士を合わせ、『血を交わす』のである。

マフィアを題材にした映画『ゴッドファーザー』での一シーンなのだが、竜二が中学の不良グループに入るときにも行なわれていた、義兄弟になるための儀式だった。

ヤクザの行なう『杯こかずきを交わす』の西洋版と考えてよい。

『…たかが野球チーム、ここまでする必要があるのだろうか？…』

いささか疑問に思っではいたが、ナガノとトールは、竜二との3人それぞれの親指に針を刺して血を出し、お互い親指同士を重ねて血を交わした。

竜二の、すぐ飛び出して突っ走ってしまう性格にぴったりとバランスをとるように、トールとナガノの2人は、落ち着いて冷静な判断を下すことができる。結果、竜二の火消し役となった。

水戸黄門でいうところの、助さん、格さんである。

竜二は目を輝かせて思った。

『ついに俺たちの野球チームが稼動し始めたのだ、クーツ！』

- 第3章 -

高校2年生の竜二は、平日であれば朝7時30分に起床する。

目覚ましは、アメリカ映画『暴力教室』で一躍脚光を浴びた、ビルヘイリー&ヒズコメッツの『Rock around the clock』。

映画『アメリカングラフティ』の主題曲でもあるこの曲の始まりが『ワン、ツー、スリー…』なのが、まさに彼の目覚ましには好都合な曲だった。

ワン、ツー、スリーオクロック、フォーオクロック…

軽快なロックンロールにまったくふさわしくない、まことに不機嫌な状態の竜二がムツクリ起き上がると、まず、頭にかぶっているシヤワーキャップを外すのが日課である。

竜二のリーゼントヘアは、バサバサ状態からの場合、通常のセット時間で約20分、セットがうまく行かない事態に陥ると、一度洗髪し直したりして1時間以上かかってしまう。

睡眠を非常に必要としている成長期であり、そしてまた夜を充分有意義に過ごす17歳の少年にとって、そんなことを毎朝続けるのは不可能だった。

なにより、

『髪に塗ったポマードは油性なので、2〜3日髪を洗わずにいたほうが、自分の脂分と混ざり合ってどんどん深い光沢をかもし出し、リーゼントもシックリくる。』

根も葉もない『CS』スタッフの言い伝えをともに受けとめ、洗髪は1週間に2回しかしていない竜二にとっては、髪にへばりつくホコリを遮るのと枕がポマードでベタベタにならないための対策として、女性用のシャワーキャップが丁度良いアイテムなのである。

シャワーキャップは2つ所有していて、1つは黄色とオレンジの花柄、もう1つは半透明の下地に赤い水玉。共に決して人には見られてはいけないデザインであり、なにしろ非常にムレるのだが、他に代わるモノは無いと思っている竜二は、それでも我慢して使っていた。

まだヒゲも産毛程度の17歳には、セット以外に必要な時間は要らなかった。

時には顔を洗うことすら忘れる。

シャワーキャップを外すとトイレで用を足し、洗面所に行って顔を洗い、自分の部屋に戻ると啞えタバコでヘアースタイルのセットをはじめるのが毎朝行う一連作業である。

竜二の部屋は六畳間、建物自体かなり古い旧家を借りていたため、部屋は自分でリフォームをした。

まず土壁や天井は、淡いスカイブルーのペンキを塗り、畳をはがしてベニア板を置き、その上に白と黒のピータイルを市松模様柄に並べて貼った。

拾ってきた黒いビニールソファをカラーズプレーで白に塗り、合板を買ってきて、糸ノコギリで苦戦しながら、1950年代に流行したテーブル、その名の通り腎臓の形に似たキドニーシェイプ（パレット型）の形に切ると、これまた拾ってきた折りたたみテーブルの足をつけて黒いカラーズプレーで全て塗った。パレットテーブルなどというハイカラな物は何処を探しても販売されていない、それどころか一般には知られていなかったので作るしかなかったのだ。

1個980円のカラーボックス（三段重ねの普通の棚）を3つ買い、

『CS』で売っていたヒョウ柄のカッティングシートを貼って横一列に並べ、天板を乗せてカウンターを作り、拾ってきた小さなワンドア冷蔵庫にもヒョウ柄シートで化粧するとコカコーラのステッカーを真ん中に貼った。

押し入れの upper にマットを敷きヒョウ柄フutonカバーとヒョウ柄マクラカバーを被せ、ヒョウ柄クッションを4つ並べてベッドを設けた。

『ミルクホール』が主催したダンスパーティーの広告として作られた、ギターを抱えて前かがみになっている若きチャックベリーが大きくモノトーンでプリントされた使い古しポスターを壁の真ん中に貼り、部屋の角1メートル幅の壁には、これまたコカコーラの壁掛けミラーを飾って出来上がり。

アメリカ製のモノが簡単に手に入らない竜二世代にとって、コカコーラ関連商品がアメリカを感じさせる手軽なアイテムなのである。

ちなみにこの時点で、もはや竜二の部屋には『勉強机』が存在していない。

そんな勉学生活とは程遠い部屋に籠もって、毎朝ヘアースタイルのセットすると、合わせ鏡で後頭部もしっかりチェックして、鞆の代わりになっているコンビニエンスストアの紙袋を小脇に抱えて家を出る。中学生時代は『オオチヨンバン』を自慢気に振り回していた男が、今ではまるでランチボックスが入った紙袋を小脇に挟んで通勤する、1960年代の黒人気取りである。

竜二の自宅は札幌中心市街。通学に利用する地下鉄の駅までは、いつもこれといってイザコザもなくすんなりで行けたが、地下鉄に乗ってからは他校生徒も一緒となるので、なにかしら事件が起きた。

高校生は、毎朝学校までたどり着くのも大変なのである。

駅ごとに最寄りの学校の縄張りがあり、まかり間違つてその駅で他校の制服を着たままひとりで歩こうものなら、身包みはがされて袋叩きにあい、尻の穴に鉛筆を刺されるくらいが落ちなのだ。

そんなご時世なのだが、さかのぼること数ヶ月前、高校1年の3学期も終わりに近づいた頃、竜二がよりによつて札幌でも3本の指に入る不良男子高校、札幌商工高校の縄張りである平岸駅で通学ラッシュ時に降りてしまったことがある。

きつかけは、毎日通っていたブティック『CS』の恒例、店内改装（ペンキ塗り）の手伝いだった。

毎回『CS』の店内改装は、午後8時に閉店してから徹夜でとりかかり、翌朝10時には平常営業をしていた為に従業員だけでは手が足らず、『CS』OBや『普段は顔を見せない常連』達が手伝いに集まり、店内改装は親睦会のような雰囲気をもっていて、そこに竜二はいつも呼ばれていた。

午前3時過ぎともなると、高級クラブのホステス達がゾクゾクと差し入れを手に改装中の店内に訪れる。高校生がススキノの高級クラブのホステスなどと知り合うチャンスは皆無であるし、その上しかも仕事を終えて重箱弁当やテイクアウトした惣菜と酒をもつて向こうから来てくれるのだから、普通に暮らす人間にしてみれば、一生味わえないかもしれないスバラシイ体験なのである。

この日も2、3店の高級クラブのホステスが6、7人、5分ほどの間隔でバラバラと入ってくると、そのなかのひとりを見て、竜二は口をアングリと開けたまま動かなくなった。

いとも簡単に一目惚れしてしまったのだ。

彼女達が応援にきた途端、作業のピッチが途端に上がり、結局ペンキ塗りは朝5時半には完了した。

そして、午前6時を少々過ぎたころ、待ちに待った打ち上げが、店に隣接しているスタッフ寮の40畳ほどのリビングルームで始まったのである。

この日の作業は3月という季節から、寒さで閉めきつたまま暖房をかけて行なわれた上に、普段は使わない油性ペンキを床に塗ったため、シンナーが充満していたのと寝ていないのが重なって、皆、軽くハイになっていた。

竜二もご多分に漏れず、疲れているはずが、かえってエンジン全開ロケット噴射秒読み状態である。

ハイになっていたのもそうなのだが、彼がギンギンになった一番の理由は勿論、一目惚れしてしまったホステス、『サツキ』嬢の存在だ。

「お疲れさん！」と乾杯をし、しばらく歓談した後、恒例の一気飲み大会がはじまった。

ルールはビール一気飲みの時間を1対1で争うというもので、遅い方が残されて次の挑戦者と対戦することになる。飲みが遅いとまた次の人間と競わなければならず、競う度にもっと辛くなって遅くなり、また負ける可能性が高くなっていくという、弱いものを徹底的に挫くゲームである。対戦は男性陣のみ、女性達は面白がつて手を叩き笑いながら、それを肴に酒を飲んでいた。

一気飲みのビールは、巷で流行している『ぐい生』。350ccの樽の形をした瓶タイプで一気に飲むことは誰でも相当に辛い。

今回はトップバッターから竜二の登場である。

この手のゲームが得意種目だった竜二は、最初に登場しサツサと終わらして一緒に飲んでいた『サツキ』嬢と抜け駆けしようと企んでいた。

「サツキさんさあ、もしこれで俺が勝ったら、一緒に外に出ない？ 行こうよっ！。…っでさあ…本名おせーて。」

「外に出たら、おしえてあげる。」

「クーツ!。」

ここでの『外に出ない?』は、時間からいって『如何わしいことしない?』と誰でも察する。

いささか強引ではあったが、サツキもまんざらではない様子だ。

こうなると、一度明るい希望を持ってしまった少年の勢いは、もはや誰にも止められない。

寝ていないのとシンナーの効果で、目を真っ赤に血走らせた竜二の鼻息は荒く、その姿はまさにマタドールに突っ走る『闘牛』そのもので、のんきに見えているギャラリィ達を圧倒した。

「なんだなんだっ、ヤノのあの迫力は!」

コウチャンが笑いながら叫ぶと、一同がドツと沸いた。しかし闘牛は真剣だ、反応が無い。

「ヨーイ、ドンツ」の号令と共に、闘牛は一瞬で350ccを飲み干した。

「はやあゝい!」、ホステスの一人が潤んだ目で叫ぶと、それに嫉妬した男のひとり「おおー、お前、早いから、もう一回!」と、闘牛に再び飲ませる作戦にできたのだが、「ぜんぜん平気だべさあ」と、闘牛はまた次もあつという間で勝ってしまった。

実は、少々練習すれば誰でも一瞬で一気飲みできるコツを闘牛は知っていただけである。

『すんげえゝ!、じゃ又』、『おおゝ!じゃ、又』そして、ホステスの『飲んだ後の顔がおもしろい。』『腰に手をあてて飲む姿がかわいいゝ。』でマタマタ。

結局ついに闘牛は350ccの『ぐい生』を8本連続で全部勝って

しまった。

もはや闘牛の頭の中はサツキ嬢とのこれから過ごす桃色の時間のこととで一杯、鼻血噴射寸前である。

それでも平然を装い、しばらく歓談したあと『サツキ』嬢と抜け駆けしようとして闘牛が立ち上がると、窓越しに空が明るくなっているのが見えた。時計を見ると、すでに時間は朝8時になるうとしていたのだ。

「あー、やつくい（やばい）！学校はじまる！サツキちゃん、したつけ（それじゃ）また！」

進級が確定してはいたのだが、教師から目をつけられていた竜二は、学校を一日休む度、親に確認の電話が掛かってくるのだ。これはプライドの高い年頃の彼にとって、非常に恥ずかしく情けないことだったのである。

『CS』に制服を持ち込んでいた竜二は、既に寝込んでいる者や、床に座り込み酔って騒いでいるホステスたちがいるその場所での何のためらいも無く着替えると、そのまま地下鉄駅へ向かった。

小走りしながら『腹が減った』と思っていたのもつかの間、ビール8本分の酔いが途端に廻ってきた。

地下鉄に乗ると、唯一空いていたシルバーシートに座り、最初はウトウトしていたが、地下鉄の揺れも手伝って、気分がドンドン悪くなり、吐き気をもよおして『ウツ……』と胸にナニモノかが上がってくるのを感じた竜二は、次の駅で飛び降り、急いでトイレを探した。

もはや完全に酔いが廻って真っ直ぐには歩けず、壁伝いにフラフラになりながら進んでいると、急に目の前が暗くなった。

縄張り駅である札幌商工高校の不良4人に取り囲まれてしまったのだ。

「おいこらっ、てめえヒラ高（平岸台高校）のヤノじゃねえか。」

ひとりが竜二を見下ろすように言った。

「なにひとりでノコノコ歩いてるんだあ？」

『…普通、ノコノコって言葉、使うかあ？…』

3流ドラマのセリフのような男の言い方が余りに可笑しかった竜二が思わず噴出しそうになった時、本物が噴出しそうになって慌てて口を押えた。その格好が、まるで『ウフフ…』と女性がやる仕草を真似ているように見えたひとりが、ドスを利かせて凄んできた。

「なんだあこら、チョしてんのかあ？（おちよくっているのか）こらあ。」

凄まれても今回はそれ以上の危機が体内で繰り広げられていた竜二は、まるで相手にしていない。

「今日だけはカンベンしてくれ、でねえと、大変なことになっちゃうんだわ。だから便所どこにあるか教えてくんねえかなあ？ところでここは何駅だい？」

何駅どころか、相手がどこの高校かも判断できていない。凄んだ男が、

「なんだあ、こら、何処で降りたかも判んねえのかあ！なんだその目はあ？、ラリッてるんかあ？こらあ？それとも腹でもこわし…」

その瞬間、『ゴボボボオー』と、まるで『ゴジラが口から放射能光線を放つ』がごとく、はたまた『ピナツボ火山の噴火』や『宇宙戦艦ヤマトの波動砲』のごとく、体内に蓄積されていたありとあらゆる固体液体が、ついに我慢の限界となった竜二が開けた口の口径以上の大きさで一瞬にして噴出された。

竜二を取り囲んでいた4人はズボンや靴に汚物をまともにくらい、そのあまりの悪臭に四方八方へ散ると、

「ほら、言わんこつちやないべさあ…おうえ」

竜二はそう言いながら、口から撒き散らしたものをそのままにして、ちょうど駅に入ってきた地下鉄に乗り、自分の目的駅に着いた途端、ホームでまた思い切り吐いた。

なんとか校舎まではたどり着いたが、相変わらずの血走った目、シンナーと酒の臭いが教師にも気付かれ、厄介な事になる前にそそくさと早退したのである。

たとえたったひとりで敵対する高校の駅に降りてしまったとしても、喧嘩の腕っ節や小道具以上に『その場を回避できる強力なウェポン』があったことを、竜二はこの時、発見したのだった。

その事件数日後の春休み、そのペンキ塗りに参加していた男と地下街でバツタリ出くわした。

彼のその容姿は実に垢抜けていて、遠くからでも独特のオーラを竜二は感じた。そのオーラ男は隆二が時折参加するダンスパーティーや『CS』に度々顔を見せていて、お互い言葉を交わしたところそ無かったが、一応顔見知りではあった。

黒に近い紺色がベースに赤とグレイの太いラインがVネックになぞ

るように入ったセーターに白いボタンダウンシャツをインナーに合わせ、ツータックのグレイの霜降り柄のウールパンツに白いラバーソールを履いている。

長身で日本人離れた彫りの深い『ハンサム』という言葉がピッタリな甘いマスクに、サイドを青く刈り上げた短髪リーゼントが小さな頭をより小さく見せ、9頭身の容姿は、セルロイドのメガネをかけると、スーパーマンのクラークケントにそっくりで、モデルのような外見は他の者を簡単に寄せ付けない雰囲気をもっていた。

「あつ、こんちわあ。」

竜二が先に声をかけた。

「よう。」

彼は竜二の1歳年上、高校はナガノと一緒に、つまりナガノの本当の先輩にあたる。

実際は両親共に日本人なのだが、なぜか日本人離れたハーフ顔のせいで、小学時代はいじめられ、村八分にあつて友達はひとりもいなかった。

背が高いこともコンプレックスとなっていた彼が中学へ進学するとあっけなくすぐに仲間ができた。

寄ってきたのは不良グループである。

不良たちは彼の容姿から、格好のナンパ道具として利用するぐらいにしか考えていなかったが、それでも彼は始めてできた仲間の為にいままでしたこともないナンパを一所懸命に繰り返した。

そのナンパ勝率の高さから、小学生時代にいじめの原因だった憎き自分のルックスが、今ではナンパの強力な武器になっている、ということを次第に自覚しはじめ、やがてその立場を利用してナンパした女子をあてがっては子分をつくり、次第に勢力を広げて、ついに

3年に進学すると総番として君臨したという経歴を持っている。しかし、周りからは『コマシ（スケコマシ）』『たらし（女たらし）』と呼ばれ、軽視こそされても決して尊敬はされていなかった。やがて高校へ進学し、当時交際していた彼女に薦められたのがきっかけで『CS』を知り、ファイティーズスタイルに目覚めたのである。そんな過去を持っているせいか、彼はいつも女性には冷酷だった。女性に対して感情を持たない。ただの道具としてしかみていないのだ。

「この間はペンキ塗りお疲れ様でした。よく会うねえ、ヤノっています。そのセーターどこで買ったんすか？」

「これ？親父のお古。だからここ、ちょっと虫くってるんだよね。ところでアンタ自己紹介してくんなくても、この間のペンキ塗りの後にビールの一気飲みでも対決したっしょ？俺、6番目の相手。」

竜二は覚えていなかった。サツキしか見ていなかったのだ。

「俺『タケモト マサト』って言うんだわ。『パラダイス』っていうグループやってるんだけど、俺たちのグループ知ってた？」

「パラダイス？悪いけど知らないなあ…パラダイスキングだったら知ってるけど…でかいの？」

「いや、3人。」

爆笑した。

これがキツカケとなって竜二とマサトは今まで会話をしたことがな

かったのが嘘のように仲良くなり、偶にはあるがツールやナガノ
らとも行動を共にするようになっていった。

そうしているうち、次第に竜二は一見クールなマサトの実態を掴み
はじめた。

実は、マサトは恵まれた外見からは想像できない程おしゃべりで行
動は3枚目、そして、冷酷なくせに異常な女好きのナンパ男だった
のである。

「女は男の器量で落ちる。」

マサトのナンパ理論らしいのだが、竜二からは決してそうは見えな
かった。

ほとんどの女はマサトの見掛けだけで落ちていた。なぜなら、相手
と一夜を共にした翌朝には、見事にフラれているのである。

いつも『あんな女はダメだ。』と捨てセリフを吐くが、それが毎回
続く。

『いつたい、夜はいつもどんなことをしているんだろう？』竜二は
疑問に思っではいたが、そんなことも含めて、やる事なす事、第一
印象を裏切るトンチンカンな思考と行動が、逆に竜二を感動させた。

「俺さあ、実は『T i c k・s』って野球チーム作ろうとしてカツ
コいい奴誘ってるんだけど、一緒にやらないかい？どうだい？」

学校帰りにナガノがマサトを連れ、竜二と待ち合わせた『H u b』
でコーヒーをすすりながら、2人でマサトを説得した。

そして、マサトは年上ながらも彼等に賛同し、後日、やはり『たか
だか野球チームで…？』と思いながら『T i p T a p』で血を交わ
しあったのだった。

『T i c k・s』ナンバー4は、ここでもタラシ（ナンパ係）とし
て奮闘することになるのである。

『Hub』でマサトをスカウトしている最中、竜二がこの店で黙々とダーツの練習をするフィフティーズ少年を見かけた。実は以前から竜二が店に行く度、一日中黙々と一人でダーツをする彼の姿を必ず見かけていて気になっていたのだ。

サウスポーから投げられるダーツの矢は、物の見事に一定のピンポイントに集中して命中している。

グレイに近いほど淡いグリーン地に、ピンク、オレンジ、濃いブルーなどの色の、ペンキを飛ばしたような柄が小さく全体的に点在したギャバジン地のブルゾンからクリーム色のイタリアンカラーシャツの襟を出し、紺色のツータックパンツに、白黒コンビのローファールでコーデインイトしたその少年は、何度か『CS』や『ミルクホール』でも竜二は見掛けてはいたが、決して親しい仲ではなかった。マサトと同様に日本人離れた顔つきは、若き時代のエルビスプレスリーにそっくりで、額の生え際の形までそっくり似ている。本人も自覚しているのか若きエルビスに似せたリーゼントは日本人に多い剛毛ではなく、細い髪の毛が持つキメの細かさで、鏡のようにテクレカと輝いて反射していた。

「あれ？『ショーン』だよねえ、久しぶり！大晦日に『CS』で会った依頼かい？」

この日はさすがに竜二が声をかけた。

実は『CS』のスタッフ達が彼のことを『ショーン』と呼んでいたのだ、竜二は本名を知らないままでいたのである。

『ショーン』は竜二の1歳年下の16歳、アメリカンスタイルのショットバーで働いている。

そのマスターの趣味から影響を受けてダーツをはじめたのだが、ひ

とつのことに徹底的にのめり込む性格の『ショーン』は、夜の仕事が始まるまでの数時間、ひたすらダーツに没頭しているのである。

「あつ、ヤノさん、でしたよねえ、こんちわつす。どうしたんです？こんな店で。」

「うん、俺、『Tick's』っていう野球チーム作ったんで、メンバー集めてんだよ。で、あの背の高いのを説得してたんだわ、でよ、ちょうどショーンにも話しをしたくて、どうすれば連絡がつくかを考えてたからよ、グッドなタイミングだべさ！」

「野球チーム？…へえー、ヤノさんが集めるんだったら、結構、フイフティーズにウルサイ人達ばかりになるんじゃないんです？俺なんかよりもレコードに詳しい人とか…」

凝ったことには徹底する『ショーン』のもう一つの趣味はレコード。

ジャンルは、黒人白人のこだわりは無いが、ロックンロールカリズム&ブルースに限られている。

そしてレコード収集だけに留まらず、その物凄い数のグループ、個人名、それらの曲名やヒットランキング、ヒストリー等を全て記憶しているのだ、彼の記憶力は並ではなかった。

ショーンと対等にレコードの話ができるのは、『TipTap』のマスターぐらいであろう。

しかも、甘いマスクとは裏腹に、非常に硬派なのである。

頑固で硬派なショーンは、竜二の話に全く興味がなかった。

ショーンも、『Tick's』のメンバー同様に「自分のような人間は他にいない。」と思っているから、『Tick's』なんて

自分の思想に伴わないと思っている。しかもおまけに『野球チーム』なのだ、なおさらである。

「まあ、考えておいてくんねえかなあ？ 気軽に。」

竜二がショーネンに手を差し伸べて握手し、『Hub』を出ると、これからバイトに向かうナガノ、パチンコへ向かうマサトと別れた。

その後『Hub』の店先に着いたトールと『平和ビリヤード』に向かうために『札幌地下街』を歩いていたところ、なにやら向こうから肩をブンブン振って歩いてくる2人組が目についた。

一人はパンチパーマで、紫と赤とが入り混じった、いかにもといわんばかりのセーターと赤いフレアーパンツの、ゴルフウェアで決めた男、もう一方は、どちらかというところニグロヘアーに近く、黒のトックリセーターに白いフレアーパンツでコーディネートしている。竜二もトールも「彼らがヤクザでは？」と、気が付かない振りをしてやり過ぎそうとしたが、相手がそうはさせなかった。かわして歩いていくとする彼らの行く手を阻んだのである。

「にーちゃん、誰に向かって、なにガメツてんだあ？」

まったく顔をあわせず、下を向いて歩いていた竜二とトールに、黒トックリニグロヘアーが因縁を吹っかけてきた。

竜二とトールが、たいした事のない軟派コンビと思われたのだ。

ところで、なぜか不良は女性にモテる。

1980年代に入ってからというものの、『ツッパリ』は一種のトレンドとなりつつあるから、尚更である。

ではなぜ一般の若者は、せめて見かけだけでも、そのスタイルを真似ないのか？

それは、モテる反面、いつでもどこでも自分の身に襲いかかってくる、弱肉強食の危険をはらんでいるからなのである。

札幌は、通りによつては100メートル歩く間に3回はケンカを売られるというほど、意気盛んな不良達であふれていた。

格好によつては、よほどの気合と根性を入れて歩かなければならぬ。見掛けだけのハッタリは一切効かない実力主義の世界なのである。

まして地下街ともなれば、なおさら過酷な環境となる。

『札幌地下街』は、札幌オリンピックを機に、凍てつく冬でも快適にショッピングができるよう建設された東西南北に伸びるモール街で、同時に出来た地下鉄との相乗効果によつて地上よりも需要が伸び、活気があった。しかし、一年中快適に過ごせる環境から、通りの角にはホームレスと不良たちが次第に屯しはじめ、待ち合わせに格好な場所として本来建設された、地下街の中心地的スポット『4丁目プラザ（通称ヨンプラ）デパート』のエントランス広場付近には、建設時当初の構想とは裏腹に、必ず10〜15人の不良たちが一列に並び、しゃがみこんでいた。不良は、なぜかいつも皆しゃがみ込む、不思議な性質を持っている。

『待ち合わせ場所に最適なスポット』であるはずの4丁目プラザ地下エントランスは、『不良の屯し場所に最適なスポット』となつてしまった。そして、そこを通る不良達と、しゃがみこみ達の『ガメリ』合いとなり、やがて喧嘩となるのだが、その風潮はその場所だけとは限らなかった。なにせ地下街は両側通行で、必ず人とすれ違ふのであるから、目と目が合ってしまうのは必然なのである。当然あちこちで喧嘩となるが、目と目が合ってしまった同士のほとんどは、『おう、ベンバ（便場、ようするに便所のことなんである）こ

いや。』となり、決まって地下街の公衆トイレが犠牲となる。一般客が公衆トイレを使えるのは、警察が見回りにきた後ぐらいなものだった。

「はあ？」

ヤクザ風貌2人に向かって、馬鹿にしたようにトールが応えた。生れてから今まで実家が営む質屋で育ってきたトールは、このテの5流ヤクザに対しての態度が、めっぽう強い。普段は偉そうだが、裏ではコソコソと毎日頻繁に入れ替わり立ち代わり出入りしているヤクザを見慣れていたので、ヤクザに対して妙に肝が据わっている。

「ニイチャン、イイ度胸してんやないけえ、モメツか？こら。」

なぜか中途半端な関西弁も入っている。ちなみに『モメツか？』とは、『喧嘩するのか？』の意味で、こちらは北海道人が愛用する隠語である、このヤクザ、関西、北海道混合弁であった。

「まあまあ、おい？事務所くつか？おい？」

黒トックリニグロを宥めた赤紫セーターが、とぼけた喋り方で凄んだ。

「はあ？事務所？なんの事務所お？」

トールが赤紫セーター以上にとぼけた口調でそう言った途端、彼の顎から額にかけてパンチパーマの顔面が舐めるかのごとく滑り上がっていった。

「なめとんのかあ！コルアア！」

赤紫セーターが凄んできたのだ。
と、その時、

「やめえやめえ、お兄さん方ビビッておろうがあ！」

と、なにやら兄貴分みたいのが急に割って入ってきた。
その瞬間、曇っていた竜二の表情が急に変わり、

「ニシノじゃねえか。」

「あつ、ヤノお……」

兄貴分のトーンがいきなり落ちた。

「なあにやってんだあ？ニイシノオ。」

竜二は噴きだすのをこらえ、押し殺した声で囁いた。

「こらあ、なにタメグチきいてんだあ、おお？」

そう黒トツクリニグロが凄んだが、ニシノと呼ばれた男はそれを止めて竜二に会釈し、顔を真っ赤にして2人を引き連れ、去っていった。
てしまった。

本来であれば、兄貴分が2人を宿め、宿め賃として金をせしめようという作戦だったのだが、

「知り合いかい？」

トールが聞くと

「うん、あいつドンパ（同じ歳）なんだわ。ちょっとサ店でも行くか？おもしろえからユツクリ話すよ。」

ちようどあつた『UCCコーヒーショップ』に入り、タバコに火をつけてフウっと一服すると、すぐに竜二は忘れていた思い出を話しはじめた。

竜二がまだヤンチャだったころ、彼が通学していた伏見野中学校と対立していた柏木中学校との丁度中間地点に、『赤い風船』というゲームセンターがあつた。

当時は『スペースインベーダー』の全盛期であり、学校にも行かない暴走族や、学校をさぼった男子女子中高校生が屯している、自他共に認める不良の溜まり場であつた。

当然のように、100円を使わない方法として5円玉にテープを2巻きにしたり電子ライターの着火部分を基盤に当ててパチンパチンと何度かスパークさせてゲーム回数を稼ぐなど、やってはいけない技を駆使しながらも、他校の不良やチンピラからの喝あげ、そして警察、その両方に神経を尖らせながら彼らは遊んでいた。

当時は常連客だった竜二もいつものように放課後『赤い風船』に向かつていたところ、入り口手前で柏木中学の生徒らしきグループに囲まれているオールバックのヘアースタイルをした生徒が見えてきた。

柏木中学らしきグループは、中ラン（短ランはまだ存在していない）ボントタンにトクナガ（冬ともなると、ひざ下までくる丈の長い長靴を履くのが不良達のトレンドだった。特に長い長靴なのでトクナガ。ボントタンに併せるとツメエリ学生服は、まるでナチスである。）でコーディネートされていて、オールバックヘアの少年も含めて、どうやら不良同士のイザコザらしい。

竜二が遠くからよく見てみると、詰め襟のカラーについている校章の感じから、どうやら自分と同じ伏見野中学の生徒が被害にあっているように見えた。

しかし、自分の中学でオールバックにした生徒を見たことが無い。勘違いかと思っていたが、そこに近づくにつれ、その生徒は、普段は大人しく目立たないオカッパ頭のニシノだという事が判明したその途端、竜二は全速力で走り寄り「おいこらあ、なにやってんだあ」と、一番手前にいた生徒の肩をぐっと引っ張り道を開けさせると、輪のなかに割り込んでいった。

「あつ、ヤノだ！」

輪の中にいた中心的生徒が竜二を見ると、驚いて身をやや引きつらせながら叫んだ。

中学生時代の竜二は、身体が大きく喧嘩も強いことで、近郊の中学生には有名だったのである。

「あれえ……？オメエら、見たことねえ顔だなあ……。」

竜二が中心的生徒に顔を近づけながらそう言うと、

「俺ら、明慶中のもんだ！文句あつか？」

そう言うって中心的生徒が怖がりながらも、伸びて取れなかった自分のパンチパーマヘアを思いきり手クシで後ろへ撫でながら凄んでみせようとした瞬間、いきなり竜二のチョーパンが鼻のド真ん中に炸裂した。

通常であれば、ここで2言3言会話があるはずが、通常ではない竜二の突然の攻撃でビックリしたのと、そのあまりの痛さに顔を覆った中心的生徒のミゾオチに今度は膝蹴りが入り、あまりの苦しさに

前のめりになったところ、顔面に思いきり2発目の膝蹴りが炸裂して全てが終わった。

5秒だった。

取り囲みは、ビビッて手も足も出ない。

「明慶つつつたら、キンヤの学中（中学）だべや、奴が居ねえっつーことはよお、お前ら2軍だな、おい！」

竜二の言葉が耳に入っていないのか、それとも無視したのか、取り囲み達は竜二にやられてしゃがみ込んでいる少年を見つめたままでは反応が無い。

「ヨウちゃん、大丈夫かあ…歩けつかあ…シケよお（帰ろう）。」

連れのアイパーオールバックヘアーの少年がまさに蚊の鳴く声で囁きながら中心的生徒を抱きかかえ、竜二に背を向けたままボソッと「こんど伏見野をツブシに…」と捨てセリフを言うか言わぬかの瞬間、今度は自分の後頭部に竜二の肘鉄をまともにくらい、中心的生徒を抱きかかえたままバランスを崩したアイパーオールバックもばったり倒れた。

「つぶすってなあ、キンヤと手打ちしてっから、明慶とモメることは一生ねえんだわ…たく、ネンペ（1年生）かあ？オマエら。だつたらトットとシケろ、そんな格好してヨチヨチ歩いてっど柏木（中学）の奴ら集まってくるぞお、あいつら蠅みたいに寄ってきては、弱きを挫くからよお。」

キンヤとは、竜二が通う伏見野中学のすぐ隣、明慶中学の総番であ

る。

喧嘩には必ずジャージ姿という本格派で、小さい癖にやたら強い。竜二が生まれてはじめて本格的な喧嘩をした相手だった。

2人は共にボコボコにやり合い、あまりにも終わらないために見届け役の上級生が止めに入ったため、お互い勝ったか負けたかの記憶がない。しかし、竜二にとって、いわば初体験の相手である。勝ち負けに関係なく、キンヤに対しての感情は並々ならないものがあった。

彼らを退散させた後、凍り付いて直立不動となっているニシノに近づき、即席オールバックヘアをマジマジと見ながら、

「へえ、カッコイイけどよお、もちつと気合入れてからにしるよなあ。俺、これから『ナゴヤ打ち』の練習しなきゃなんねーっつーのに、お前のおかげで…」

と話していると、なにか変な匂いがするのに気がついた。

「うわっ、こいつションベン漏らしたっ！」

ニシノはビビッた挙げ句、竜二のひと言でスイッチが入って漏らしてしまったのだ。

足元には湯気が立っていた。

2年後、高校デビューしたニシノは学校を中退し、急に大きくなった体と、この事件を機に通い詰めて習得した空手を武器に暴走族の特攻隊長となり、やがて小さな組ヤクザの組員となった。

恐さの余り、オモラシしてしまったオカッパ頭の男の子が、その後、特攻隊長になり、挙げ句にヤクザである。

そして地下街で竜二との再会となったのだった。

「あいつ、俺に借りが有ると思ってんだよ、俺、忘れてたわ。」

冬には珍しいアイスコーヒーをストローを使わずに飲みながら、竜二はそう言って笑った。

夕方遅くまで『平和ビリヤード』で遊んだ後、ツールと別れた竜二は、帰宅しようと狸小路をそのまま歩いていった。

狸小路は、7丁目まではアーケードの照明が照らされて明るい、8丁目からアーケードも店舗もなくなり、急に寂しい路地へと変わる。竜二の自宅は11丁目、あと300メートル行った先にある。この付近は新宿や池袋、蒲田や足立区の綾瀬ほどではなかったが、夜ともなるとかなり治安が悪い。竜二がいつも通りタバコをふかしながら歩いていると、何やら背後から人の気配を感じて振り向いた。スカジャンを羽織ったニグロヘアの男がこちらに向かって歩いてくる。

竜二がそのまま又歩き出すと、今度は男が小走りで近づいてきた。もう一度振り向くと、

「兄ちゃん、金貸してくんねえかなあ？」

タカってきたのだ。

薄暗くて分からなかったが、タカられた竜二が男をよく見てみるとヤクザ風ボカシサングラス越しには眉毛が無い。これ以上怖い顔は無いという位コワモテにしていたが、少々カン高いトーンの声は、少年の色を隠せなかった。

『…今日はよくイチヤモンを付けられる日だなあ…』 そう思いながら、

「兄ちゃん呼ばわりされる筋合いはねえよ、少年。」

竜二は比較的やさしい口調で答えた。

すると『スカジャンニグロボカシサングラスマユナシ少年』が、

「じゃあしょうがない、これだよ、先輩。」

尻ポケットから抜いた二つ折りの粗末な登山ナイフの刃を光らせた。

「…フツーじゃねえな。」

刃物を武器にする人間は普通ではないし、バタフライナイフなど簡単には手に入らない。売っていないし買う者もない。だから登山ナイフを手に入れる程度が、弱者の武器としては目一杯である。

本来やり過ぎつもりでいた竜二だったが、この瞬間から、こいつはトドメを刺しておかないと何をされるかわからないと判断した。

「あららあ、それはもしかしてナイフ？それアリ？どっかオカシイんじゃないの？アンタ。」

自分のコメカミに人差し指をトントンやりながら、竜二がユックリとした口調で言うと、

「なんだよ、わりいか…」

男が答えようと隙ができた瞬間、ナイフを持った男の右腕を、竜二

が正面から向き合った状態で自分の左脇に挟み、挟まれた相手の左半身が開いたところで、右手で男の髪を掴んで顔の向きを整えると、自慢のチョーパンを男の鼻に炸裂させた。焦った男の左手が竜二の髪を掴み、再びチョーパンを食らわないよう竜二の頭を引っ張ったが、今度は至近距離から竜二の右ひじが同じく男の鼻にめりこみ、その拍子でサン格拉斯が吹っ飛んだ。

幸い、男の持っていたナイフが小さくお粗末なものだったので、こういった作戦が成功したが、もし、短刀や刺身包丁のような、細くて長い刃であれば、竜二が脇に挟んだ腕を抜かれた場合、脇腹はスツパリ切られていたに違いない。

2発も鼻を直撃されて、さすがに竜二の頭から左手を離し鼻を押えてひるんでいる男の右腕をそのまま完全にロックした状態で、今度は相手の顎にアッパーカットを入れ、パンチが効いてフラフラになったところで右腕をやっと開放し、

「ちっ、シャミかあ？ 喧嘩が弱え奴に限って武器を出すんだよなあーおい、この見掛け野郎。」

そうセリフをキメながらユックリとナイフを奪おうとした。

しかし、実際はテレビドラマの様にいかない。

男もヨロヨロはしているが、ナイフを離すどころか、ブンブンとやけくそに振り回しはじめた。

だが、身体の反射が悪く、今度は竜二に足をすくわれて倒れ、馬乗りになられて又殴られた。

観念しはじめた男を、竜二は容赦なくボコボコに伸した。

2度と自分に襲ってこないよう、徹底的に恐怖心を植え付けたのである。

「てめえ素手で喧嘩したことあのかよ、えっ？こら。道具持ってるや天下だと思ってるなよ、こんなの持ってる奴はよお、『すいま

せん、俺は喧嘩が弱いんで、これ持つてないと恐くて歩けないんです。』って宣伝してるようなもんだべや。大体刃物持ち出すなんてよあ、女が逆上して使うくらいのもんだって。お前がこんなもん出さなかったら、俺だってチョットはビビったのによあ。お前、この辺でこんな事もうすんな、三条交番すぐそこだぞ。」

クシでヘアースタイルを整えながらそう言つと、男のナイフを持ってたままタバコに火をつけ、警察に見つからないよう竜二は小走りで自宅へ向かった。

その外見から一目で不良と判断できる『ツツパリ世代』、不良同士のイザコザで刃物を振りかざす人間は、どこか頭がイカれているか、よっぽどの小心者か、さもなければオカマかと言われてしまう。

1981年、札幌の不良少年達には、不良社会のルールがしっかりと有るのである。

- 第4章 -

「俺の学校でさあ、かなり癖があつてカツコイイ奴がいるから『T i c k ' s』のメンバーに是非どうだろう？」

ナガノが通う『北海道東工業高校（通称ドントコ）自動車整備科』は『トンシャ科』と呼ばれる、どうしようもない『不良科』である。車やバイクに興味を持つ年頃の少年たちにとって『趣味と実益』を兼ねている学科の訳だから、不良暴走族達の世界では、ある意味『宝塚』ともいえる。

その『宝塚』の同級生で、非常に不思議な雰囲気を持った男がいた。

ナガノが、ツールと竜二の待つ平和ビリヤードに『癖あり』を連れてくると約束をした当日、異常に機嫌が良いのか、やたら明るく入ってきたナガノの後ろで、赤や茶色、白などの細い縦縞模様の紺色ハンチング帽を頭にひっかけ、耳にタバコを挟んだ無表情男が『よう』とばかりに顎をあげて会釈した。

「こいつ、サカガミっていうんだ。」

ナガノが得意げに胸を張り、男の肩にまわした手をポンポンと叩きながら紹介している。

この男『サカガミ ヒデオ』という、石屋のセガレである。足を洗って石屋になった元ヤクザの父親が心に抱く『男は強くなければ世間を渡っていけない。』という信念に従い、物心ついた頃からプロボクサーを目指してジム通いの毎日を送った。

しかし中学卒業後、何を思ったのか、高校は自動車メカニックスを養

成する自動車整備科を専攻し、そこで出会ったのが、同じく自動車整備科に入学したナガノだったのである。ナガノの影響で次第にフイフティーズスタイルに目覚めていった。

放課後は耳にタバコを挟む癖を持ち、言葉少なく物静かで、決して羽目を外さず熱くならないクールな行動と冷静な判断力を持ち味としているサカガミは、プロボクサーを目指していただけに一重まぶたの目はするどく、色黒で精悍な顔立ちはスポーツマンそのものの、古着をこよなく愛していて、センスも良い。

しかし、メンバーの皆とは一味違う、何か不思議な雰囲気をもっている、竜二は、ナガノがサカガミを連れてきた時の第一印象から、そう思っていた。

『なんだろう…』とよくよく考え、答えをつきとめた瞬間、竜二は爆笑した。

『ニッポン』なのだ。

『T i c k・s』のメンバーは、皆アメリカンフイフティーズスタイルに憧れ、そして誰が見てもその雰囲気を感じさせていたが、サカガミのスタイルは、どうしても日本の昭和30年代に見えてしまう。

ナガノが連れてきた初対面の日こそ、シルクシャントン調の生地で作られたワインレッドのイタリアンカラーシャツに濃紺のパンツ、ワインレッドのソックスに黒いスリッポンという濃厚カラーで合せていたのだが、いつもは茶系カラーが多く、他のメンバーはみなギヤバジンブルゾンを好んで着込んでいるのに対し、サカガミはいつもマクレガー社製のインナーがボアになっているスイングトップを常に羽織っていた。

しかも色はアイボリーなのである。

アイボリーは悲しいほど中途半端に地味な色だった。

その姿は、本人自身、特に意識しているわけではないのだが、日本でその昔、ロカビリーの平尾昌輝やミッキーカーチス、映画の赤木敬一郎の雰囲気が強くと表れ、それは夏の季節ともなると、まさに『太陽族』そのまま『ニッポンアイビー崩れ。』に映ってしまう。

被っているハンチング帽も、本人は『ジーンビンセント&ブルーキヤップス』をイメージしていたのだが、どう見ても日活映画の若き石原裕次郎風に見えてしかたがない。

全く意識的にそうしている訳ではないのだが、どうしても一人だけ浮いてしまう彼のルックスは、まさに『天性。』と呼んでも決して大袈裟ではなかった。日本的にレトロな『平和ビリヤード』の雰囲気にもピッタリと溶け込んでしまう。

しかし、こと車に関しては知識が深く、やがてメンバー達が所有する旧車の整備には欠かせない存在となるのであった。

こうして『Tick's』ナンバー5が、『TipTap』で嫌がり抵抗しながらメンバー4人と血を交わしたのである。

『ニッポン代表』サカガミが参入して2ヶ月が経った7月、北海道では珍しく夏休み早々から気温30度を超えた。

一足早く18歳になったマサトが自動車運転免許を取得し、さつそくレンタカーを借りてナガノと竜二の3人でドライブを兼ねて大浜海水浴場に行ってみると、すでに大勢の海水浴客でひしめいている。

ここでまったく予期せぬ偶然の出来事が起きた。

長く続く砂浜、しかもその隅々まで海水浴客達がギッチリと埋め尽くしているのにもかかわらず、偶然にも『ショーネン』とバツタリ

出くわしたのだ。

しかも、海水浴などとは全く縁の無いインドア派であるショーンンは、この日に限って仕事先のマスター達にイヤイヤ連れてこられたのである。

「こんな広い場所で行くわすのは珍しいんでしょー！」

竜二はその時、ショーンンとの縁を感じた。

大学講師を父親に持つ、ショーンンこと『ミウラ トシアキ』は、教育に厳しい父親に嫌気が差し、中学入学直後から登校拒否となつて街をフラついては『CS』に通い、『ミルクホール』で知り合つた常連客からファイフティーズフアッションや音楽の影響を強く受けると、中学を卒業後、その常連客が経営するアメリカンショットバーでバーテンとして働き始めた。

実はショーンンが中学を登校拒否した理由は父親だけではない。彼は集団行動を極端に嫌い、しかも同年代のすることは幼稚すぎて相手にならなかったのである。

一匹狼だが、頭のいい父親の遺伝と社会人デビューが早かつたためか、礼儀をしっかりとわきまえ、いつも謙虚で挨拶もしっかりとした、『好青年』の印象を皆に与えていた。

一日に使うポマードは大量で、昼と夜の2回は髪に塗るため、ポマード缶を常にポケットの中に携帯している。

大浜海水浴場でバツタリ出くわした竜二は、マサトとナガノをショーンンに紹介し、彼らにもショーンンを紹介した。『Hub』にいた時と全く同じメンバー構成である。

そしてこの日、ちょっとした事件がおきた。

しばらくして、今まで何事も完璧で常にクールをキメ込んでいたシヨーンが、浅瀬にもかかわらず溺れたのだ。『海で泳ぐ』という慣れないことをして、足が攣ってしまったのである。

『どざえもん』と化していくシヨーンの一部始終を、3人は大笑いしながら眺めているだけだった。

『…なぜ助けてくれないんだ…』

自分がパニックになりながらも、ただ笑いながら眺めているだけの3人をシヨーンが恨み始めたとき、竜二がもついいかとばかりに吹き出しながら叫んだ。

「おいシヨーン、そこ、足とどくぞぉー！」

「えっ？あつ、ほんとだ…。」

今まで溺れてパニックになっていたシヨーンが、竜二の一声で今まで何事も無かったかのようにあつさり立ってしまった。

周りを良く見てみると、自分より遥かに小柄な子供たちがビーチボールで遊んでいる…。

「ブアー、ハッハッハッハッ！」

自分の腰までしかこない水面で啞然としながら仁王立ちしているシヨーンの姿が、3人に、よりいっそうの笑いを誘った。

「テヘヘ…」

爆笑している3人につられて、シヨーン本人も非常に恥ずかしがりながら一緒に苦笑してしまった。

この和やかな雰囲気で『Tick's』への参加を躊躇していた shoreline が、一寸ではあるが興味を持ち始めた。

自分が溺れたことがきっかけとなって、何事も気取りなく受け止めてくれる3人の雰囲気が、何事にも完璧を求め虚勢を張っていた shoreline の心を開き始めていたのである。

この日の夜 shoreline は店のアルバイトの為、3人よりも一足早くマスターと帰宅したのだが、その後日、竜二から電話口で説得され、ついに『Tick's』のメンバーとなることを決めた。

海水浴場で偶然会ったその週の土曜日、shoreline が出勤前に毎日通う『Hub』にメンバー5人が集まり、血を交わして『Tick's』はやつと6人になった。

恒例のこの儀式に、shoreline だけは『野球チームらしくなくてカッコイイっすねえ!』と感動しきりである。その後『Tick's』メンバー達が耳にする音楽は、すべて shoreline の編集によるものとなった。

shoreline の加入で、ある程度集まった自分のチームをお披露目しようとして竜二が『ボストンクラブ』を誘ってボーリング大会を開く事となった。

今回が『ボストンクラブ』と『Tick's』の初顔合わせである。

『大通り公園』に集まっている女性グループや、ただファイフーズファッションが好きな女子高生など、互いのブレーン達も参加して総勢16人の大会は、さすがに参加者全員が選りすぐりの古着ボーリングシャツでキメている。その光景は、まるでボーリングシャツの品評会のように、居合わせた客達から当然ナンダナンダと注目を浴びた。

今回『Tick's』のボーリング大会は、普通のそれとは少々ルールが違う。

「えー、全員、靴を履いてはいけません。えー、それとお男性陣は、利き腕で投げてはいけませんから、よろしくです。」

大会委員長のマサトが参加者に伝えたと、『ボストンクラブ』のヒグが、

「えー！デブで汗っかきはヤツクイべやあ。」

不満をもらした。

つまり、靴下でボーリングをするので、やたら滑るか全く滑らない者が出てくる。

靴下が汗で湿れば、当然滑りが悪くなる。

しかも、パワーでは勝てない女性陣に対してのハンデキャップをつける為、男性陣は利き腕を使ってはいけない。利き腕ではないので、余計なりきみを生み、バランスを崩して転倒する者も出てくるのだ。これで、誰もが優勝のチャンスを持つことができる。

賞は優勝だけ、準優勝も3位も無論ブービーも無い。優勝賞金は、参加者全員で集めた3,200円。

しかし、『Tick's』のメンバー達は、スコアよりも、どれだけウケを取れるかが重要であつた。

なにせルールがルールであるから、ホストとなったメンバー達は、どこまで係員から注意を受けずに目立つことが出来るかを競うのが目的なのである。

わざとピチピチのシャツに着替えたツールは、球を振り上げたときに脇の下が破れボタンが飛んで笑いを取った。

ナガノがピンの手前までレーンを走って球を投げる一方で、勢い良く走って球を持ったままうつ伏せに転び、ヘッドスライディングの

ようにピンの手前までレーンを滑るマサトがいた。

ショーネンは、隣りのレーンのピンを倒した。

女性ゲストの黄色い笑い声が絶えないなか、この日は高価なボーリングシャツでキメたサカガミが、球を後ろに振り上げた瞬間に手から離して宙に飛ばし客席にまで転がしてみせたが、これにはさすがに全員の顔色が真っ青になっただけで、決して笑いは起こらなかった。

竜二は助走中にズボンがズリ落ち、ハート柄の赤いパンツが丸見えのままズリ落ちたズボンを足にからみつかせて転んで見せた。そしてガーターとなって転がっていく球を「ちッ」と悔しそうな表情で見送りズボンを上げながら、ユツクリと戻ってきた竜二の目に、係員から注意を受けているメンバーが映った。

実はこれが初めてではなかった彼らは、「今度一度でもこういった事を又やると、出入り禁止」の警告をうけていたのである。

見た目でも目立っていた上、やる事が派手だったせいで、関係の無い一般ギャラリー達が増え始め、一体何が起きているのか、係員も来てしまったのだ。

係員が来た後は普通にゲームをしていたのだが、この、自らが開催した大会を最後に、このボーリング場から『出入り禁止』を通告された。その結果、彼らは札幌で少数となったボーリング場のすべてから『出入り禁止』を食らい、その後ボーリングは半永久に封印されてしまったのである。

しかし、このボーリング大会がきっかけとなって、今までは竜二とパーティーに参加したナガノだけしか面識が無かった『ボストンクラブ』と『Tick's』の互いのメンバー同士が交流を持ち始めた。

若くして死んだソウルシンガー『オーティス レディング』を崇拝している『ボストンクラブ』は、「彼の曲はただ音楽としてだけでなく、歌詞の内容がいかに心に響くか。」を『Tick's』メンバーに説き、どちらかというインドア系の彼らをキャンプやビー

チでのバーベキューに誘うなど、アウトドアの楽しさも教える『Tick's』の兄貴分的存在となっていた。

彼らは廃墟寸前の一軒家を借り、映画『アニマルハウス』に登場する学生寮『デルタハウス』を本当に造ってしまっただかと思うと、バイク主流の彼らは外からバイクに乗ったまま玄関を通って部屋の中まで乗り込み、部屋ではホイルスピンをさせて畳をどれくらい剥がせるかを争うという、ワイルド志向派グループである。

『Tick's』達の夏休みも終わりに近づいた8月初旬の週末、ナガノ、マサト、トール、竜二の4人が『Hub』から出てきたところ、店に入ろうと向かってきた、ロイドメガネに七三リーゼント、1960年代のアメリカンアイビー調の3つボタンスーツにボタンダウン、細いレジメンタルタイというスタイルの男と出くわした。

「おお、ヤノじゃねえか、もう帰るのかい？」

男はどこかでイッパイやって来たともみえて、少々酒臭く、鼻が赤い。

「あ、チヂさん、お疲れ様です。これからっすか？」

と、竜二は自分の背後のドアに親指を背中越しに刺しながら聞いた。

メガネの男は、『ボストンクラブ』の、通称『チヂ』こと『イイヤマ オサム』である。

彼は、同じく『ボストンクラブ』のヒグ、シノブ、エロノブと高校時代の同級生で、高校卒業後は某有名メガネ会社に就職した、いわゆる唯一の『サラリーマン』で、一見は人が良さそうな中肉中背の優等生風貌ではあるが、その容姿からは想像もつかぬほど喧嘩が強い。

「久しぶりだから、お前らに付き合つか。いいだろ？そのへんで一杯ぐらい。」

チヂは店に入るのをやめ、4人と一緒に歩き始めると酒屋の自動販売機でビールを大量に買い、夜の大通り公園で酒盛りとなった。チヂは色々と言葉を使おうと面倒見の良い男である。

「んー、つまみがないかあ…何か買ってくるか？」

公園の芝生に5人が丸くなって座り、『プシュッ』と缶ビールの蓋を開けながらジジが早速気を使い始めた。

『いらない』と遠慮して断わる4人に、「あつ、これ有るわ。」とズボンのポケットに手を入れた。

ズボンのポケットから登場してきたものは、なんと竹櫛に刺さった焼き鳥のネギマとツクネ、レバー。何かに包んであるのではなく、そのままポケットから登場したのである。

よく見ると、ゴミが付いている。

「いやあ、『Hub』で食おうと思って。ちよつと良かったな。さあ食べ食べ。」

本人は、いたって真剣だ。

「いえ、遠慮しときますよ。チヂさんどうぞ。」

マサトが言つと、チヂは「えっ、そうかあ？じゃ、悪いな。」と旨そうにモグモグ食べてしまった。

「なんか、悪いなあ」

恐縮するチヂに、4人は「トンでもないっす」と、自分の顔の前で

腕をブンブン振っていると、チヂがまた急に思い出したように、今度はスーツのジャケット内ポケットから、サキイカとカニカマボコがゴチャ混ぜになった状態のものを取り出した。

チヂは、うれしそうな顔をしている。

「えーっと、それとお…。」と、逆の内ポケットに手をつ突っ込むと、今度はなんとマヨネーズがそのまま出てきた。

チヂの手の平に、こんもりとマヨネーズが盛られている。

よく見ると、彼のジャケットの丁度その内ポケットにあたる部分が、こちらから見てもハッキリ確認できるほど、油の染みが滲んでいた。4人は、それを見ているうちに吐きそうになってきた。

「ナガノオ、チョット悪いけどコッチのポケットに七味唐辛子が入ってるから取ってくれるか？」

両手が塞がっているジジのジャケットの外ポケットに手を入れたナガノが苦笑いしながら手を出し戻した。想像通り、七味唐辛子もそのままポケットに入っていたのである。

チヂのこういった行動は、全くウケを狙っていたわけではない、日常のことなのだ。

「俺のこのリーゼントはよお、こつやつて光沢を…。」

手の平に残ったままのマヨネーズを両手でこねると、頭のサイドに塗りクシで撫でた…。

…何はともあれメンバーは、そんなサラリーマンのチヂを心から尊敬している。

「そついえば多分今度の日曜日に『BIGビーチ』で俺たちバーベ

キューやる予定だから、お前らも来いよ。」

『T i c k ' s』メンバーが、チヂだけではなく、『ボストン クラ
ブ』自体の決して並ではない発想を痛感したのは、この誘いからで
あった。

- 第5章 -

8月になって2回目の日曜日、『ボストン クラブ』が海水浴を兼ねたバーベキューを企画し、『T i c k ' s』そして『ボーリング大会』に参加した取り巻きも誘われての計20人程が、通称『BIGビーチ（大浜海水浴場）』に集まった。

海水浴とはいえ、決して自己スタイルを崩さない『T i c k ' s』達は、相変わらずのリーゼントヘアに、ブルーとホワイト2色の太いボーダー柄の開襟シャツやハワイアンシャツをウエストでギュッと結び、袖口はロールアップさせてレイバンのサングラスをかけている。一方の女性陣はパラソルハットと呼ばれる、映画「ティファニーで朝食を」のオードリーヘップバーンばりにツバの異常に大きな帽子をかぶり、目尻の上がつた大きな教育ママ風サングラスをするなどのアメリカ1950年代風の海水浴ファッションでキメていた。

その全員が、そのファッションのまま地下鉄とバスで移動してきたのだ。当然周りから注目を浴びた。ここまでは皆、お洒落にウルサイ集団のようにしか見えない。しかし彼らは『ボーリング大会事件』の実績をもっている…。

北海道のバーベキューといえば、すなわち『ジギスカン』である。

『T i c k ' s』たちのカラフルさこそは無かったが、1960年代に流行した南国テイストの渋いパディックプリントシャツでキメた『ボストンクラブ』がジギスカンの支度を始めた。

しかし、20人もの大所帯が一緒になってジギスカンを食べることは不可能である。そんなに大きなジギスカン鍋は、この世に存在しないのだ。

ところが、チヂとエロノブが石ブロックで土台を作り薪に火をつけて待っていると、そこへヒグとシノブがブ厚く大きな円い鉄板を重そうに持ってきて、そこにドンと置いたのである。

「いやあ、よくこんな鍋、見つけま…。」

置かれた鉄板に笑顔で近づき、そう言いかけたところで竜二の口が止まった。

その鍋は、マンホールだった。

チヂとヒグが何処からか拝借してきたのである。

「道路の真ん中で男2人がマンホールを外し、すかさず抱えて逃げてきたのかもしれない…、ククツ。」

竜二は少々微笑ましく思いながら眺めていると、マンホールの下では、薪にあらはじめ撒かれていたガソリンによって、炎の勢いが次第に増してきていた。

ただでさえも目立つファッションをした集団が、異常な勢いとなった炎で熱せられているマンホールを使ってジンギスカンをするのだから、居合わせた海水浴客からは尚の大注目を浴び、アチラコチラでザワザワと笑いや話し声が聞こえた。

「さ、やっとこ熱くなって来たから脂身を全体に滑らしてえ、おい、肉は？ニクウ！」

周りの空気をヒグは全く気にしていない。
すると真っ赤なアロハにポニーテールスタイルで、エロノブの彼女

サシコが青いプラスチックのバケツをもって小走りしてきた。それを見ていた『T i c k ' s』メンバー達が、個々に抱いていた「もしかしたら俺の予感の外れているかも…」という期待は見事に外れ、悪い予感通り、サシコから渡されたバケツの中から解凍し始めているラム肉を何の抵抗も無く無造作に手で掴み出したヒグがマンホールに散らし始めた。

「これぐらい底が深いと、砂が入んないっしょ。」

サシコはグッドアイディアでしょ？と言わんばかりである。

『…豪快すぎる…』

ナガノがそう思いながら硬直し、持っていたビーチボールをポトリと落としている。

ラム肉は、肉屋であるルーキーズのメンバー『イワタ シンサク』から業務用を譲ってもらったものだった。

バケツを上から覗き込むと、まるで動物園の餌である。

「人数多いからな…」

シノブが言ったが、『…そういう問題では無いんじゃないかなあ？…』竜二は思っていた。

結局、野菜類も青いプラスチックのバケツに入れられている。

マサトが度胸一発、肉を取って口に入れてみると、見た目と同様、味の方もやはりスツキリしない。

『バケツに入っているものを、マンホールで焼いて食べている。』のだ、当然である。

果たしてこのマンホールは綺麗なのか？その心配の方が先だったが、当然の『ボストンクラブ』メンバーはそんな周りの心配をヨソに、日

常の食事と思わせるぐらい普通に、しかも『非常に楽しく』『非常に美味しく』『モグモグ食べていた。』

そうなるの後輩グループも食べないわけにはいかない。竜二もなるべく顔が歪まないように気を配いながら『楽しそうに』『美味しそうに』『していながら、心の中でひたすら祈った。』

『どうか腹痛をおこしませんように…天変地異でも起きて、この悪夢の時間が早く中止になりますように…。』

結局、竜二の祈りも神様には届かず夕方までジーンギスカンをしたその日の夜、一度帰宅してから再び『二次会』と称して、エロノブ、マサト、トオル、竜二の4人が、ススキノのライブハウス『ペニーレーン』に集合することとなった。

『ペニーレーン』は、原宿が本店のその名の通り『ザ・ビートルズ』の曲だけをBGMとする店なのだが、その一方、札幌で唯一オールディーズの生バンドが演奏することで人気でもある。

アメリカンポップ調の広い店内のフロアー中央に設置されたバーカウンターで、先に着いていたエロノブと竜二がビールを飲んでいるうち、エロノブが、アルコール度数の非常に高いウォッカ「スピリタス」のショットをダブルで頼むと、突然それに火をつけた。

「イッタイなにをするんです？」

突然の行動にあっけに取られながら竜二が問いかけると、得意げにエロノブが、

「いいかあヤノオ、『男の飲み方』ってえのを見せちゃうからよお！」

そう凄みながら、炎が青く燃えたままのスピリタスを、一気に飲み干そうとした。

ここで竜二に自分の度胸を見せ『おお。』と感動させて、箔を付けようというのだ。

あっけにとられている竜二の顔を見ながら、『見ておれよおー』と上目使いで視線を送ったままエロノブが前屈みになったその瞬間、口に運んだグラスの炎が鼻やマツゲを直撃し、その熱さで火がついたままのスピリタスを口から溢してしまった。すると今度は、鼻やマツゲだけではなく、火がついたままのスピリタスが下唇から顎まで流れ、その直後、ついに服にまで引火した。

「うわあーあちちちちちい！」

目の前に映るエロノブの炎を自分の顔面に煌々と反射させながら事の始終を見ている竜二も驚いたが、本人は相当に慌てた。

飛び上がるように席を立つと『阿波踊り』でも始めたかのように物凄い速さで手足を動かし狂気乱舞しながら、自分に降りかかってきた火がついたままの酒を払い落とし、何とか事は収まったのだが、結局エロノブは口から顎にかけて結構な火傷を負い『二人にヨロシク』とだけ残して帰ってしまった。

『イッタイ今のどこからどこまでが「男の飲み方。」だったんだろ
う…。』

竜二は、突然『一方的にコトを始め』『一方的にトラブルを起こして』『一方的にパニックとなり』『一方的に火傷を負って』『一方的に去っていく』『エロノブの背中を、呆然と見送りながら煙草に火をつけ、ため息のように深く煙を吐いた。

実はこの『男の飲み方』、エロノブが以前、行き着けのバーでバー

テンが教えてくれた技だったのだが、本来は「点けた火を、手の平でグラスに蓋をして消してから飲む。」のが正解だったのだ。酔ったエロノブがバーテンから教わった内容の「火を消してから。」という部分が、彼の脳から完全に欠落していたのである。

『熱い炎を手の平で消す。』

この部分が『男の飲み方。』だったのだ。

肝心なポイントを把握していないと、年下に箔を付けるどころか、逆に大怪我をしたうえ哀れに思われてしまう。この正反対の結果を生むのは紙一重である。不良も大変なのだ。

「あれ？エロさんは？」

その後、遅れてきたマサトとトールが竜二に早速聞くと、

「ん？えーっと、急用ができたって帰ったわ。ふたりにヨロシクって…。」

その数日後『Hub』で、鼻から下を包帯で巻き、それでもストロ―を使ってビールを飲んでいたエロノブを目撃してしまった竜二は、そつと立ち去り、『見なかったこと』と心の奥にしまい込んだのだった。

『ボストンクラブ』の存在は『Ticks』を常に刺激していくのである。

- 第6章 -

北の街、札幌は『お盆』を過ぎると急に秋が訪れる。

Tシャツだけでも不愉快な東京並みの暑さが終わる『お盆』明けから、あまりの寒さで格好どころの騒ぎではなくなる12月までの、この約3カ月半の間が、一年のなかで最もお洒落を楽しめる季節となるのである。

勉強嫌いで読みものが全く苦手な『Tick's』のメンバー達が、毎月欠かさず購入している本があった。

男性ファッション誌『メンズクラブ』。

この手の男性情報誌は、他にも『男子専科』^{ダンセン}『ポパイ』『ホットドックプレス』などが代表にあるのだが、『メンズクラブ』は余計な情報は掲載しない100パーセントファッション情報誌で、分厚いページは紙質も良く、保存版としての価値が高かった。

しかしそれにもかかわらず『350円』という価格は魅力的で、さすがに文字こそ読まないが、彼等にとって唯一の愛読本なのである。

夏休みが短い北海道の学校は、盆が過ぎると途端に二学期がはじまる。

エロノブの火傷事件から一週間も経たずに迎えた始業式の帰り、竜二が本屋に立ち寄ってみると、発売したての『メンズクラブ』の横に、これまた真新しく積まれた雑誌の表紙が目についた。

趣のあるレンガ立ての校舎をバックに、1960年代アイビーファッションの男性3人が並んで歩く、古いタッチのカラー写真の表紙の下部に『IVYリーガー』と書いてある。

表紙の雰囲気妙に惹かれた竜二が思わず手に取りページをめくつ

てみると、彼の脳みそに電気が走った。

「オォー…カッコイイー…。」

『リーバイス』や『リー』、『ラングラー』などの細身のホワイトジーンズに白いソックスが映え、足元はピカピカに磨かれたスリッポン。ボタンダウンの襟をちょっと出したクルーネックのセーターには、“H”のレターパッチが大きく胸に付いている。（どうやらアメリカ東海岸のエリート大学、Hらしい）レタードカーディガンにスタジアムジャケット、どれも竜二が『CS』に通いだしたところの1960年代ファッションだった。

『Tick's』のファッションは、フィフティーズスタイルの中でも、アメリカ1950年代スタイルの代表といえる、シャツもパントもユツタリとしたサイズにコンビのダブルコバの革靴といった大人びたスタイルなのだが、この本にでてくる学生達は色目こそ落ち着いてはいるが若々しく見える。

巷のトレンドはというと、田原俊彦、近藤真彦らのアイドル全盛期ということもあって、一般人の基本スタイルは、赤いベストやフレアーパンタロンなどの『アイドル系スタイル』が主流で、その延長的存在が、『サーファースタイル』。この両者は共に、ウェーブをかけた額を出さない長めのヘアースタイルがトレードマークで、未だ1970年代独特の『垢抜けなさ』が強く、その上、一部の人間たちからは『オカマ』呼ばわりまでされているファッションである。また、同じく『一般人』グループでもファッションの先端をいく者達は、王道だったテクノファッションや『文化屋雑貨店』系のチャイニーズテイストスタイルから枝分かれを始め、ロンドンから発祥されたニューウェーブ系スカバンド『スペシャルズ』が所属する『ツートーンレーベル』が火をつけた白黒のみでコーディネートしたモッズ系『ツートーンファッション』、果ては全身黒づくめで、後

にカラス族と呼ばれた『デザイナーズブランド』という新しい分野に身を包んだ者、そして、これまたヨーロッパ発祥の『ニューヨークマンティック』というスタイルが広がり始めていた。こちらはアイドル系のヘアースタイルとは逆に直線的なデザインを売りにしていて、長短に極端な差を持たせ、もみ上げ部分は、男女共テクノヘアの様に横一直線にカットされているのが特徴である。

そして、そのまた一方の『不良グループ』はというと、これまた王道を突っ走っていた、オールバックに近いリーゼントに『キャロル』『クールス』系革ジャンライダーズスタイルや、アフロヘアに金や銀で『JUN』『DOMON』と胸にプリントされたブラックTシャツの袖を肩までロールアップし、裾が極端に細いスリータックのブカブカホワイトパンツを併せる『デイスコスタイル』などの大きなジャンルから枝分かれをはじめ、『スカジャン』や、『ドカジャン』（土方職人が愛用していたジャンパーの略からついた、襟にボアがあしらわれたナイロンジャケットで、ショート丈とミドル丈がある）を羽織り、特攻服や、『ヤートラ』と言われている、派手なセーターにこれまた派手な色のフレアーパンツを併せたヤクザ風トラッドファッションに、『サシ』を入れたパンチパーマ（極端に短いパンチはニグロヘアと呼ばれる）や菅原文太風角刈り、または、矢沢永吉風オールバックでコーディネートする『アダルト系』。

もしくは前髪にパーマをかけてボリウムをもたし、サイドはポマードで後ろへ流したリーゼントに、どちらかというと黒や赤を基調にしたシャツやパンツにドクロのループタイをし、ジャケットや革ジャンを羽織ったロカビリー風スタイルや、相変わらずの王道を突き通す、革ジャンにツイストTシャツといわれる細いボーダー柄シャツまたは真っ白のTシャツにユーズドジーンズといったシンプルスタイルの『ちよっとお洒落なヤング系』がトレンドになりつつあった。

細かな内容は違えども、大きく二つに分けられたこの両グループのスタイルの違いによって、世間は『一般人は一般人、不良は不良』と一目で分別ができる。

蛇やカエルに例えれば、毒をもったものは模様が派手で、一目で「危険だ。」と判断できるのと同じである。

しかし、どちらかというと「危険だ。」種類に属している竜二は『IVYリーガー』を目にしてから、どちらかというと「危険ではないよ、安全。」スタイル『アイビーファッション』に魅力を感じていた。

「頭の中がこんな感じになるのは、『ボストンクラブ』でのパーティー以来だなあ。」

血は沸いたが、諸事情から購買不可能と判断した竜二は、高額なこの本を穴が開くほど『立ち読み』をしたのだった。

2年前の1979年、日本製アイビーブランドとして一世を風靡した「VANジャケット社」が倒産したが、札幌は依然として「安全」人種の世界ではアイビーファッションが根強く生き残っている。しかし、街で良く見かけるアイビースタイルとは全く違った印象を竜二は受けた。

すぐさま古着屋『Tチープ』に行ってみると、

「おー、有った有った!」

チェック柄のボタンドウンや、60年代に流行した細身のパーマネントプレスパンツ（カレッジで流行した、パーマント加工によりアイロンプレスをしなくても、いつもキツチリとプレスラインの入ったカラージーンズ）などが、人氣が無いのかササガの『Tチープ』でもそれほど高くない値段で売られていた。

竜二自身も今まで興味を持たなかったアイテムだったので『Tチープ』で取り扱っていることに気が付いていなかったのだ。

一旦帰宅し、全財産をかき集めると『Tチープ』へ再び向かい、『リーバイス』のホワイトデニム2900円と『ペニーズ』（当時のストアブランド、日本でいう高級百貨店のオリジナルブランド。現在は『JCペニー』）の、ダークグリーン地に紺の太いラインと細いラインが交互に縦に入ったボタンダウン、そして『ペンデルトンの、ウール製だが半袖で、赤をベースにしたダイヤチャック柄のボタンダウン、それぞれを1900円で購入。

これで今月の所持金はゼロ。しかし竜二は全く気にしていない。パンツこそジャストサイズを見つけたが、シャツは『IVYリーグ』で見たスタイルのようなピッタリサイズではなく、ゆったりサイズである。

なにせ大柄なアメリカ人が着用していた古着である。平均的日本人に合うサイズを見つけるのは困難で、当然大きめとなる。しかしながらパンツとなると、1960年代に流行した細身のデザインは人氣がなく、その上アメリカ人には細すぎる日本人平均ウエストサイズは、デッドストックまで登場するほどであった。

時代の流れに逆らうと、たまにこういった好都合なこともある。

竜二は買い物を終わらせると速攻で帰宅し、さっそく上下併せて着替えて鏡に映った自分を見てみると、ヘアースタイルこそ本に登場している七分けやクルーカットと違い、相変わらずのリーゼントではあったが、刈り上げてスッキリとした襟足を持つ清潔感のあるヘアースタイルが洋服とほどよくマッチしている気がして嬉しかった。

くるぶしが見えるくらい丈の短いホワイトデニムから白いソックスが見える足元は、ラバーソールではなく、ピカピカの『Bass』ブランドのローファーだ。

実はこのローファー、竜二が中学入学直後に『ヤキを入れた』

際、上級生に奪われたものだった。その後『おとしまえ』をつけた竜二が奪い返したのはいいのだが、今度は履く機会が無くなり眠っていたのである。

翌日、竜二は早速ツールと平和ビリヤードで待ち合わせた。ニュースタイルのお披露目である。

「昨日テレビで『グリース』やったの観た？ ジョントラボルタの声が野口五郎で、オリーブアニートンジョンの声が桜田淳子だったべさあ、似合ってなくて、なんまらウケたべやあー！ あれ？ なんか若くなっただんでない？」

遅れてきたツールが第一声そう話しかけながら、先に待っていた竜二の変貌したスタイルに気が付いた。

「そう？ やっぱこれからはアイビーだべや。けどよあ、17歳のウラ若き少年に『若くなっただ』って、いったい幾つに見えるんだよ？ 俺は。」

竜二は何か解せていない。

「俺よあ、ヤノのそういうスタイル、実は前にやってたんだわ！」

ツールは、自分が得意分野とするスタイルをしている竜二を見て嬉しかった、目が輝いている。

「レタードカーディガンとかスタジャンなんかはよあ、着てはいなかったけど、俺、何枚か持ってるんだわ！ けどヤノはアイビー好きではなかったんでない？ 前にそんなこと言ってたっしょ？」

ツールは、本来こういったスタイルの方が好みなのだが、竜二の問題発言がきっかけで、着用せずにコレクションしていたのだ。

『…さすがシティボーイ、目の付け所が違っ…』そう思いながら、竜二は尊敬の眼差しでツールを見つめて答えた。

「どうしてかつつーとなあ、『正ちゃん帽』に『紺ブレ』なんかの現代アイビーはやっぱ未だに嫌いなんだわ。あとアウトドア系とかマリン系の軟弱学生のテニスサークルみたいにしか見えないアイビーみたいなのも、見ていて体が痒くなるっしょや。『Boathouse』のトレーナーとか着て『山下達郎』とか『大滝詠一』とか、はては『ユースミン』なんかを聞きながらドライブしたりテニスするんだぞお。っでよお、自分のこと捕まえて『俺、大好き少年!』とか又力してよお。肩にセーターまわして…ウゝやだ、軟弱で。アゝ自分で言っで、なんか痒くなってきた!」

そんな竜二には、なおさら硬派的「アイビーリーグ」スタイルが新鮮に映ったのだ。

古着とはいえ、スタジアムジャケットやレタードカーディガン、レタードセーターなどは、やはり高値がついて高校生にはナカナカ手が出せなかったが、シャツ、パンツ類は流行とは程遠く人気が無かった。したがって、彼らの新しいワードローブは、以前彼らが必死になっていたフイフティーズのシャツやパンツに比べて、何倍も簡単に手に入りやすくなったのだ。

やがて、ニュースタイルの竜二とツールが、オープンして間もない『77 サンセットストリップ』でマサトと待ち合わせた。

通称『セブンセブン』と呼ばれるこの店は、42歳にして現役リーゼント、アダルトなフイフティーズスタイルのマスターが狸小路六

丁目雑居ビル地下一階に開いたダーツバーである。

決して広くはないフロアーは、1950年代のナイトクラブを連想させる、大きくウェーブがかかったカウンターとキドニーシェイプのテーブルが印象的な洒落た店で、オープン前から既に話題の的だった。

淡いサーモンピンクを基調にしたフィフティーズ風店内は、マスターのポリシーから、徹底して黒人音楽しか流れていない。

「この間よお、『クールス』ってビール見たんだわ！『クールス』って、アメリカじゃビールだったんだなあ！」

ボトルキープしてあるウイスキーと氷、そして炭酸水をウエイトレスから受け取りながら竜二がツールにそう自慢していたその時、

「いやあ、昨日パクツて（ナンパして）連れて帰った『たくぎん』の女、『精神的に疲れてて、全然寝れないの』とか又かしてたくせに、へっぺ（SEX）し終わった直後からすげえイビキかいてガーガー寝やがってよお、俺、結局その騒音でゼンゼン寝てないんだわあ。いやあ、マイツタマイツタ。」

マサトが店に入ってくるなり、人目もはばからずいきなり大きな声でそう話しながらフロアの一番奥までスタスタ歩き、竜二とツールが既に座って待っているこの店のVIP席のような半円状のフィフティーズ風ソファにドッカと座ると、ジッポーを『カチャ』っと開け、『ジュボツ』と、天井に届くのではないというほど物凄く大きな炎を放ちながらタバコに火をつけた。

マサトはダーツステッチの入ったアイボリーのレーヨンシャツにダークブルーのカスリ柄ツータックパンツ、足元は白いラバーソールを履いている。

「っでよお、その女とやり終わってコンドーさん（コンドーム）外したら、中になんと、血が…。精子と一緒に血が混ざってたんだわ。」

「マイッタマイッタ」とばかりにプっつと煙を吐きながら、マサトは一方的に話題を進めている。

「もしかすると、それって赤玉ってやつかもしれないべやあ、これで俺はもう…。あれ？ふたり共、いつもの格好でないんでないかい？」

店に入ってきた瞬間から独走態勢で突っ走っていたマサトが、『ペニーズ』シャツとスイングトップにホワイトリーバイスを穿いた竜二、胸にダークブルーで『R』と大きなパイルパッチが縫い付き、腕にダークブルーの2本線が入ったクリーム色のクルーネックのスクールセーターにブルーのギンガムチェックシャツの襟を出し、ホワイトジーンズにスリッポン姿のトール、2人のスタイルにやっと気が付いた。

「なんか、まるで絵に描いたようなフィフティーズだなあ、どうしたのさ？」

「フィフティーズじゃねえよ、これ60年代のカレッジファッションってやつだべさ。アイビー、アイビー。」

アイスペールから取り出した氷をマサト用のグラスに入れ、『サントリーホワイト』のキャップを『キュッ』と回しながら竜二がそう言つと、マサトは「へえー」っという顔をして、

「もしかしてよお、これからこの格好でイナす（攻める）気かい？」

そして、

「なんかガキっぽくないかい？どう見ても『素人フィフティーズ』
って感じだべさ。」

マサトはどうも否定的である。

「けど古着を使うわけだし、色目も渋いのを選んで軽くないようにして…」

額に血管を浮かし、氷とウイスキーが入ったマサト用のグラスに今度は炭酸水を注いでやりながら竜二が説明していると、その時、

「コンニチワ、もう秋ねえ、夜はもう寒いくらい…あれえ？イメ
チェンしたの？イーッ！、イイ、カッコイイよ。この辺のスタ
イルしてるコたち居ないもん、ゼツタイ前よりイイ！札幌で流行っ
ちやうかもよ！又いつそう女の娘たちにモテモテねえ！このお」

「

『セブンセブン』オープン初日から常連客のキヨミが、店に入るや
いなや彼等を見つけ、嬉しそうに話しかけてきた。

半テクノポップスグループ『ジューシーフルツ』の『イリヤ』に
似ていることで知られるキヨミは、新宿の服装学院を卒業すると間
もなく地元である札幌に戻り、スタイリストとして活躍、そのうえ、
その美貌と恵まれたスタイルから自らモデルをもこなす、一人二役
のパーフェクトウーマンである。

実は彼女が『Tick's』ファン第一号といってよいのだが、2
5歳という年齢は、メンバー達にとって『アネゴ』的存在だった。

「…又いつそう女の娘たちからモテモテねえ…」この『鶴のひと声』ならぬ、『キヨミのひと声』で、アイビーに否定的だったマサトの態度が、一瞬にして、劇的とも言えるほど鮮やかに180度変貌し、まるで自分は本来『生れた頃からチャキチャキのアイビーっ子』だったかのごとく語りだした。

「やつばいいよなあ、アイビーってよお。素人つばい感じになるのもならないのも、センスだべさ、センス。あれ？俺、なんか色々持ってたなあ、ツールが着ているようなレタードセーターのスゲエやつとか。」

いとも簡単に『ジキルとハイド』並みの変貌を見せたマサトの姿は、それまで根気よく真剣に説得していた竜二を啞然とさせた。

その後、ナガノに会い、ショーンンに会ってみると、2人とも何故か何の抵抗なく、そのスタイルを受け入れたのであった。

実は皆、最初はそのテのスタイルがファイフティーズとゴチャ混ぜの解釈をしていたので、ただ初心者時代に戻っただけなのである。

既に『アイビー崩れニッポン代表』のサカガミを説得する必要はない。

結局、何の抵抗もなく『Tick's』は、すんなりとアイビー集団となった。

それからの彼らは、今まで以上に、よりサイドを刈り上げたリーゼントヘアやトップが長めのGカットに、古着のスタジアムジャケットやレタードカーディガンまたはストライプカーディガン、胸に大きなレターパッチがついたクルーネックセーターのインナーに

併せたボタンダウンシャツやオープンカラーシャツの襟元からは必ず白いＴシャツが見えるのが鉄則となった。

暖かい季節となると、ボーダー柄のパイルＴシャツにスイングトップ、パンツはというと、くるぶしが見えるほど短い丈の細目ホワイテデニムやパーマネントプレスパンツにコットンパンツ、ブルージーンズはリーバイス５０１、そして足元は白か、さもなければシャツと同色のソックスに、常にピカピカに磨かれたスリッポン、若きジョnfケネディのように素足にデッキッシュスニーカーなどの、アイビー調優等生スタイルに変貌した。

そのスタイルは、街で良く見かける不良少年達とは全く異質で、アイビーは本来、アメリカ東部のエリート大学生の象徴ファッションのはずなのだが、かたや、この少年たちは日本国北海道札幌市在住の、それも『中卒』と『退学ギリギリ高校生』の不良達なのである。こういったバックグラウンドのようなものを彼らは全く分かっていない。

しかしながら、アイビースタイルとなった『T i c k s』のメンバーに色々な大人達が嬉しそうに寄ってくるようになったのは確かであった。

「俺も若い頃はアイビーでなあ、当時は東京で『みゆき族』って呼ばれて、晴れてても傘持つて、VANの紙袋脇に挟んで歩いてたもんだわ。昔はトップかったんだぞお。」

今までは接したことも接しなかったこともない大人達から自慢げに話しかけられる機会が多くなったが『へえ、そうだったんすかあ、それはそれは……めでたい……』メンバー達はまったく興味が無い。それよりも果たして現役ヤクザに向かつて『俺も昔ヤクザかじったことあってなあ。トップかったんだぞお。』と言えるサラリーマン

がいるのだろうか？、そちらの方がよほど興味があった。

次第にメンバー達は、それまで白黒テレビのようなフィフティーズスタイルから一気にカラーの世界へ入り込んだような、カラフルで明るいアイビースタイルを個々に気に入り、個々にアイテムを増やしていったが、優等生スタイルのアイビーとはいえ、やはり彼らは自分らしい着こなしとして、人には気付かれない程度の小さな拘りがあった。

それは、羽織るものは全て襟元を後ろにズラして少々のだらしなさを演出し、半袖シャツは、まるで石原裕次郎の若かったころの様に袖もとをロールアップさせて腕を露出させ、あくまでもまったくの優等生風には見えないような気を配っていたのである。

そうした着こなしと同様に、彼らの拘りは『音楽』にも当てはまっていた。

アイドル全盛期、しかし決して彼らは日本の歌謡曲は耳にしていな。むしろ敬遠しているほどである。よって、彼らは誰一人として流行曲を知らない。

日本が生んだドウアップグループ『キングトーンズ』や『シャネルズ』の曲すら、『ただの猿まね』と興味を示さなくなっていた。

「なあ、安岡力也がロックンロールを日本語で歌ってるって知ってた？」

『平和ビリヤード』でツールが竜二に得意そうに言った。

「えっ？そうなの？知らなかったなあ、なんて曲？」

「ホタテのロックンロール。」

「ボアハハッハハハハッ！」

竜二は爆笑し、話しているトール本人までつられて笑ってしまった。

「スゲェんだわ！力也がホタテの恰好して、額にホタテくつつけて、『ホタテをなめるなよ！』って歌うんだわ、最高だべ？」

「ブアハハハッ、最高だわ！」

その後、この会話がきっかけとなって安岡力也の『ホタテのロックンロール』が『Tick's』でも冗談でブームとなったのが唯一である。

つい先日、日本の一世を風靡した女性デュオ『ピンクレディー』が解散した事すら、皆知らなかった。

聞くのはもっぱら『リズム&ブルース』。

そして、たまに『マイルス・デイビス』を代表とした1950～1960年代の『クールジャズ』『ハードバップ』までも聞いている。このことから、以前『Tip Tap』のマスターに言われたことがあった。

「お前ら、やることはガキだが、聞く音楽は見かけによらず渋い。」

巷ではフィフティーズスタイルというと、イコール、ロカビリーとされている。

「ありや白人ミュージックだわ。」

『平和ビリヤード』で竜二がトールにそう話したことがあった。

「50年代のアメリカってよお、少年時代に黒人達と過ごしてR & Bの影響を大きく受けた、かの『エルビス・プレスリー』でさえもデビュー当時のニックネームは『ヒルビリーキャット』だったっていうくらい、肌の色でジャンルが分けられていたんだよなあ。あれだけアクの強い曲を歌っていたにも関わらずよお、白人が歌えば『ヒルビリー』扱いされてたんだわ。その昔よお、黒人の『リトル・リチャード』と『パット・ブーン』って白人シンガーが、まったく同じロックンロールを売り出したことがあったんだけど、トールはこの話、知ってた？」

それから続く竜二の長い説明はこうだった。

要するに『黒人マーケット』は黒人が、『白人マーケット』には白人が歌うレコードをと、メーカー側の市場拡張アイディアだったのだが、『ヒルビリー』育ちで優等生色が強く、まったくノリの悪い白人シンガーに対し、激しくシャウトし、ときには裏声を響かせ下品に歌う、『ゴスペル』育ちのリトルリチャードの圧倒的売り上げで、数曲企画された二人同時発売のほとんどは、リトルリチャードの代表曲となつて世に知られている。

それだけ白人センスの音楽はつまらなかったのだ。

『T i c k ' s』も同様の印象だったのである。

彼らは、俗に言うR & Bから枝別れしたロックンロールであれば『チャック ベリー』や『リトル リチャード』などの有名どころももちろん嫌いではなかったが、どちらかというと、知る人ぞ知る、四角くカスタマイズしたグレッツギターを操り、独特のリズムで黒人労働者の日常を題材とした歌詞を歌う『ボー・デイドリー』のような、あか抜けない癖のある方を好んで聞いていた。

そうは言っても、決してそれを一貫していたわけではなく、最初は『コースターズ』や『ドリフターズ』を代表とする、ドゥーアップ

が主流だった時期から、やがて『シュープリームス』や『テンプ
ージョonz』、初期の『マービン ゲイ』などの1960年代に流
行したモータウンレーベルサウンドへと進化し、やがて『オーティ
ス レディング』や『サム&デイブ』のアトランティックレーベル
サウンド、そして『ジエームス ブラウン』へと、どんどんソウル
フルな音楽へと進化していったのである。

そんなメンバーは皆、自分が聞いてみたい音楽の入手には困らない。
なにせシヨーンンがついているから、彼に頼めば、どんどん新しい
曲が出てくる。

そのことからシヨーンンは『ドラ』ではなかったが『大浜海水浴事
件』の一件もあって『ドザエもん』とも呼ばれていた。

1960年代カレツジアイビースタイル、ヘアースタイルは清潔リ
ーゼント、聴く音楽は1960年代の『R & B』や『モダンジャズ』
という不良少年グループは札幌で『T i c k ' s』だけ。そして彼
らのなかで知らず知らずに、ファッションだけでなくライフスタイ
ル自体までも『T i c k ' s』独自のスタイルへと進化していつた
のである。

また、未だ札幌でほとんど知られていない、1950年代の『ビー
ト族』界から生まれ、1960年代のアメリカ東海岸のアンダーグ
ラウンドで流行した黒人独特のアイビーをモジッたスタイル『ジャ
イビーファッション』も積極的に取り入れた。
もはや完全に『フィフティーズ』ではなくなっていたのだ。

『C S』という、『ロンドンファッション』と『アメリカンフィフ
ティーズファッション』をミックスさせた独特のスタイルを持つブ
ティックで育った『T i c k ' s』のメンバー達は、次第に拘りを
持ちはじめ、何処でも手に入る既製品は下着や靴以外は殆んど身に
付けなくなっていたのである。

古着についているファスナーのブランドひとつにまで拘る『Tick k's』の頑なな姿勢は、彼らか主催した記念すべき第一回パーティーの『古着着用者限定』というドレスコードにまで及んだ。

そんなメンバー達は『マクレガー・ドリズラー・（ゴルフアー）スコッティッシュ』を、なぜか『ドツちゃん』の愛称で好んで羽織っている。時のハリウッドスター『ジエームスデイン』が、映画『理由なき反抗』で着ていた赤いスイングトップと同じモデルである。しかし、メンバーが愛用し始めたキツカケは、かのジエームスデインではなく、アメリカのテレビドラマ『サーフサイドシックス』で主演した『トロイ・ドナヒュー』のプロマイド写真だった。

サイドリーゼント姿の『トロイ・ドナヒュー』は、このドラマで細身のパンツにデッキッシュという、まさに『Tick's』スタイルそのままに、併せてドリズラーを羽織っていたのである。

この写真から、『ドリズラー』が一気に彼らのブームに火がついた。実はそれ以前から、サカガミのトレードマークとも言える、悲しいほど中途半端はアイボリー色でインナーにボアが入ったスイングトップが、実はなんと、タイプこそ違うが『マクレガー・ドリズラー』の『アンチフリーズ』モデルだったのだ。しかし、サカガミの着こなしが実に地味だった為に、それまで日の目を浴びなかったのである。

皆、サカガミの地味さによって、着こなしの大切さを思い知らされた。

スイングトップといえば、襟がボックス型、内側がタータンチェックの『バラクーダ』タイプが主流で、独特なシルエットを持つドリズラータイプは、古着以外に一般で手に入れることは皆無であった。その上ジエームスデインの着ていたレッドカラーは幻とまで言われ、まず手に入れることは不可能なのだが、通常、ブラウンやスカイブルーカラーは根気良く入荷を待ちさえすれば、1万円前後で何

とか手に入れることが出来る。

しかしツールは、どうしても欲しかったお気に入りカラーであるダークグリーンの『ドツちゃん』を、持ち主であるシヨーンネンから譲ってもらおうと交渉すると、

「俺だってこれは宝物なんつすから、もしツール君が3万円でもいいんなら売りますよ。」

「…買います。」

言われた通りそのままの値を支払って手に入れるほど熱狂的だったのである。

そんな事をしていたから、メンバー全員、アルバイトして得たお金は、その殆どが洋服代となって飛んでいった。

そのうち、嵩じて1960年代カレッジファッションの古着コレクションで気に入ったデザインを参考に、オリジナルのTシャツやスタジアムジャケット、レタードカーディガンなどを揃えて作りはじめた。

せっかくのデザインでも状態が悪かったり、配色が好みじゃなかったり、サイズが大きすぎたりして、古着でも限界があったのだ。ホンモノにこだわりの持っていたのだが、古着は2枚と同じものがない。

『実は野球チームなのに、統一性がなさすぎる。』皆が集まると、いつも最後はこの話題となっていた。

こうして起ち上がった『Tick's』オリジナルウェア第1号の作品が、『Tシャツ』である。

竜二が駆使してデザインした自慢の『Tシャツ』を、『TipTap』でメンバーにお披露目することとなった。

これは、彼が愛着していた古着のカレッジTシャツのデザインを参考にしたもので、『TICK・S』と大きく書かれたすぐ下に、4つ角を丸くした横細長い長方形の塗りつぶしがプリントされ、その直ぐ下に『UNIVERSAL』とある。竜二自身その意味がわからなかったが、とにかくローマ字が沢山並んだデザインがカッコイイという理由で『ミルクホール』時代に知り合ったプリント屋に頼み、まずは『ヘインズ』社製のグレイ霜降りTシャツに、ダークグリーンで文字をラバープリントしてもらい、サンプルとして1枚だけ無料で作ってもらったものだった。

竜二としては最高の出来で鼻高々だったのだが、胸を張ってメンバーに見せたところ、どうも理解できない2つの不明点が浮上した。

「『Universal』って何だい？」

トールが上目ずかいで竜二に聞いてみると、

「多分、大学の意味じゃねえかなあ。」

トールは、竜二がそう答えると「…やっぱり。」という顔をして申しわけなさそうに、

「もしかしてそれだったら、『University』なんじゃないかい？」

竜二の顔をつぶさないよう、問いかけるように柔らかく優しく答えた。

「エッ？ウソだろ…そうなの？…エエー！、ヤックイ！なんまらヤックイ（『なまらの上級』非常にまずい）！…」

大げさに驚いた竜二にナガノがなだめる様に、

「だけど、1枚しかないんだから、直せるっしょや。」

そう言うと、首を振りながら竜二が返した。

「もう、プリントの型を起こしちゃってんだわ、このデザインの他にあと2種類。シャツとプリント代は今回タダだったけど、型代は高かったから、もう修正不可能なんではないかなあ。それじゃあ『Universal』って、なんだイッタイ？」

結局その件については、ついに意味もわからないまま封印され、二度と触れてはならない「タブー」となった。

そして『Universal』に続き、Tシャツの真ん中にある横長の長方形が、これまたどうも理解できない。竜二が言った。

「ここに自分の名前をマジックで書くんだわ、カレッジの常識だよ。」

自慢げだったが、すかさずマサトが、

「なんか、タンポンみたいだなあ、この横にチョコッと一本紐を書いたらどうだ。」

店からサインペンを借りて、竜二が寝ずに考えたせつかくのTシャツの横長の塗りつぶしの右端にチョコッと波線を書いた。

「ああー、これだあ！」

竜二を除く全員が急に盛り上がった。

その後、これは「タンポンシャツ」と呼ばれ、メンバー皆、好んで着用したのである。

「『Tick's』オリジナルウェア第一号」は、『Univer
sity』のつもりが『Universa1』となり、しかも胸に
大きくタンポンがデザインされたものとなった。

やがて『Tick's』のグループカラーはダークグリーンで定着
し、続々とつくられた『T』のレターが入ったスタジアムジャケッ
トやスイングトップ、ウインドブレーカー（これらも日本でしか通
用しない呼び名である）やレタードセーター、レタードカーディガ
ンなどのどこかに必ずダークグリーンが入っていた。

「エバーグリーンって言うっしょや。」

竜二はそう言っていたが、どういう意味なのかは知らないことをメ
ンバー達は知っていた。

その後登場したスイングトップの左胸部分やスエットシャツのま
んにプリントされた『Tick's』トラッドマーク（校章のよう
なもの）には、『Universta1』のスペルが、なんの疑いも
無いほどに堂々と収まっていたのである。

トラッドマークは、スイングトップやスエットシャツがクリーム色
やグレイの場合はグリーンのペイント、逆にグリーン地にはクリー
ムやグレイでペイントをし、パイル地でできた『T』のレターパッ
チはグリーン地にクリーム色で縁取りをし、どんなカラーでも合わ
せられるようにした。

このレターパッチは『T』の縦棒の中に小さく『ick's』の文字
を、やはりクリーム色で入れ込んだ、少々凝ったデザインである。

『Tick's』オリジナルウェアのアイデアは全て、アメリカのハイスクールやカレッジの古着をただ真似ただけだったが、どこにも販売されていない、個性的で斬新なデザインがメンバー達の自慢だった。

ただしメンバー全員が同じスタイルになることを嫌い、3人以上が同じものを着ていることはない。

たまにその行き過ぎた拘りも、結果的に実は『ただの勘違い』ということも多く、結局は、ただの『アメリカかぶれ』より性質が悪いことも度々であった。

なにせ参考としていたのは、アメリカのホームテレビドラマ『奥様は魔女』や『じゃじゃ馬億万長者』『ブレディバンチ』『イルカのクリッパ』果ては『チャャーリーズエンジェル』『バイオニックジェミー』『刑事コロンボ』『スタスキー&ハッチ』『白バイ野郎ジョン&パンチ』『トムとジェリー』からの情報が関の山、無論、そんな程度で本格的アメリカンライフスタイルを知る余地もない。それでも何とかわかる範囲で、なるべくアメリカ生活風習を取り入れようと努力はしていたが、世間から見ると、かなりバカバカしい。

サカガミは学校が終わると、近い将来大好きな車を購入するために、好きでも無い餃子屋でバイトをしている。

その餃子屋がススキノだったこともあって、『Tick's』のメンバーは、サカガミの出勤日となると顔をみせていた。

実のところ彼等は日常生活にも自他共認める変な拘りを随所にもつていて、プライベートで食事をする時ですら、けっして箸を使わないのもそのひとつだった。

アメリカ一般家庭の生活に憧れを抱いている彼らにとって、

「おにぎりとか焼き魚なんかの日本食は、もつてのほかだべや。」
である。

そのなかでもジャンクフードといわれる分野では、ハンバーガーよりピザの方が好物で、特に『シェーキーズ』のランチタイムスペシャル「食べ放題500円」は彼らには、まさにうってつけであった。食べ過ぎてグッタリし、身動きが取れない状態になるまで食べ続けたこともある。

血圧や血糖値、コレステロールなど彼等は考えもしない。

それ以前にそういった知識がまったく無い。

メンバー達が、本来は餃子屋であるサカガミの店に来ては必ず注文して主食のようにしていたのが『びつくりカレー』。

『びつくりカレー』とは、ボリュームの割に『200円』という、『びつくり』する価格というのがネーミングの由来で、メンバーは注文する度に毎回大きな声でビックリしている。

「スプーンはよお、日本人はエンピツを持つように、こんな感じで持つだろ、だけど、アメリカ人はよお、こうやってガキが持つように握り締めて使うんだわ。」

竜二はスプーンの持ち方まで拘りを持っていた。

しかし、その彼がひとり、サカガミの店に立ち寄って、いつものように『びつくりカレー』を注文したとき、本人にとって衝撃的事実を知らされることとなった。

「ヤノオ、今日は大事なことを話さないといけないんだわ。」

サカガミが、サンダーバードの隊員が被っている様な店の紙帽子を脱いで険しい表情をし、恐縮しながら言った。

「なした？」

「実はよお…今まで黙ってて悪かったけどよお…カレーライスだよお…アメリカ人…食わないんだわ。」

カレーをほおばっていた竜二は、突然知らされた事実にも、まさに『びっくり』し、持っていたスプーンを落としそうになった。

「なに？…えーっ！カレーライスはアメリカで食わないのかよおー！？」

竜二は、今までどうしてもそのことを打ち明けられなかったサカガミに嘆くと、偉そうにスプーンの持ち方まで教えていた自分だけが、そんなことも知らなかったという不安が襲ってきた。

「カレーはよお、日本以外だったら、インド人だけしか食わないんじゃないかなあ…インドカレーって言うしょ。」

サカガミは優しい口調でそう答えた。

「だけど、インドカレーは手で食うしょやなあ…カレーはアメリカ人は食わないって、みんなは知ってたのかい？」

「いやあどうだろ？ヤノからみんなに言ってみてくれねえかい？」

ではなぜ、カレーライスがアメリカ人にも食されていると勘違いをしていたのか？

「だってスプーンを使って食うしよや。」

なのである。『洋食』『イコール』『アメリカ』なのだ。

「じゃあ、チキンライスとかオムライスとか、ピラフなんかはどうなんだろう？あれ？スパゲティも違うよなあ……っつーことはシェーキーズのピザも……ハンバーグはハンバーガーがあるからアメリカだよな？そのへんの系統は、得意になってあんま人に言わないほうがイイかもなあ……。」

竜二は、自分が描くアメリカンライフスタイルに対して少々弱気になつていった。

こういった大きな勘違いは、密かに『決して人に話してはならない非常に恥ずかしいお話。』として、闇に葬られたのである。

そんな彼らの『かぶれ方』は決してトンチンカンなお笑いだけではなく、音楽を聴くときは、部屋の目につかない場所に隠したステレオ配線をアンティークラジオのスピーカー配線に繋ぎ、わざわざそのラジオからチャラチャラとした音で雰囲気を出したり、ビーチでは小型で丸みを帯びたポータブルアンティークラジオの中の機械を一切取り払って小型カセットを忍ばせた『特性カセットデッキ』を携帯するような画期的なアイディアも持っている。

こんな『Tick's』の、多少行き過ぎだが情報が少ないながら『アメリカかぶれ』に徹したファッションやライフスタイルと、独特なユーモアの突飛した行動がスキノ界限でも少しずつ人気を呼び『知る人ぞ知る』存在になりはじめたのであった。

- 第7章 -

前回の『ビッグビーチバーベキュー』の夜に巻き起こったエロノブの火傷が完治した8月の終わり、『ボストンクラブ』との大浜海水浴場でのジנגスカンはやがて進化し、肉屋シンサクの多大なる協力もあって『羊の丸焼き』までに成長した。

羊一頭をトラックに乗せて大浜海水浴場まで行く根性は『Tick's』達にとって、ユーモアを超え、もう尊敬の域にまで達しさせている。

その羊の丸焼きにいくつかの親しいグループを誘い、今回は前回から、よりパワーアップした総勢約30人ほどのビーチパーティとなった。

この日は、いつも通りのカラフルなスタイルの『Tick's』と一緒に、紺やダークグリーン系カラーのパディックプリントシャツで渋く統一された6人グループが付き添ってきた。

そのなかの2人は、濃紺のパナマ帽でキメている。

『Tick's』が連れてきた『コンテンポラリーキッズ』というこのグループは、ロックンローラー族が集まる札幌大通り公園では『カリスマ的存在』である。

その名の通り、メンバー全員がコンテンポラリースーツ（主に1950年代後半から1960年代の前半まで、ジャズを愛する黒人達から広まった、襟が細く、浅いサイドベンツのシンプルなデザインに、玉虫色に光沢が出る繊維を使った独特のスーツ）を身にまとい、細いネクタイ、音楽は初期のエルビスプレスリーだけしか受け付けない、という硬派グループで、少人数のグループだったが、数あるグループの中で圧倒的に存在感があった。

リーダーの『モリイ カットシ』が、地元である豊平区の幼なじみの悪友を集めてつくったグループで、メンバー6人のうち、モリイを含む3人が『Tick's』と同年である。

『Tick's』も『コンテンポラリーキッズ』も、お互いの存在を知っていたし興味は持っていたのだが特に交流はなかった。

しかし、ひよんなキツカケから、『コンテンポラリーキッズ』の『ヤマグチ ヒロアキ』と『ノグチ タツヤ』が竜二と狸小路でバツタリ出くわし、ノグチが口を開いた。

「あのお、ヤノさんですよねえ、スイマセンけどお、ペニーレーンって何処っすかねえ？」

モゾモゾと敬語を使って話しかけてきたノグチを見て、

「あれ？たぶん俺達ドンパでない？マサト君を知ってるっしょ？俺あいつのイツコ下。」

「えっ？じゃあドンパだね。なんだあ、俺、なまら年上かと思ってた。」

マサトの顔の広さは、こういう時に役に立つ。

互い同年と分かると、急に親しくなった。

『ヤマ』と呼ばれているヤマグチは、大きくキリリとした目元が印象的な、その昔日本人としては初めてのハリウッド映画俳優『早川雪州』を彷彿とさせる二枚目で、声が太く、感情を余り表に出さないクールなボーカリーフェイスがどこか怪しい色気を感じさせていた。

しかしその外見とは裏腹に、女性には目が無く、とにかく手が早い

男である。

男に対しては、仲間以外の人間には冷酷で愛想がない。

『ノグチ』は大柄な体型で、腕っ節が強く、今まで喧嘩は一度も負けたことが無い。

その才能が認められ、中学生時は右翼団体の準構成員としてスカウトされるほどであった。

中学卒業後に薦職人となった彼は、過去に落雷の直撃に遭い、身体が硬直したまま三階の足場から転落したが、奇跡的に何の怪我も無く翌日から現場に復帰したという伝説を持つ、タフな男である。

相手に自分を殴らせ、頭に血が昇ったところで炸裂する一撃必殺のパンチ力を持った腕力と、一度切れたら敵も味方もわからなくなるという、ナガノと同類の決して誰も止められない凶暴さを持つてはいるのだが、普段の温厚さと、太った日本人には珍しい愛嬌のあるクリッとした大きな目、ポツチャリした体型は『熊のプーさん』やアメリカのハンバーガーチェーン『BIG BOY』のキャラクタ―そのもので、『ノグチャン』の愛称で皆から親しまれていた。

公園で躍ることに飽きたヤマとノグチの2人は、『ビックビーチ羊丸焼きパーティー』がきっかけで、やがて自分たちのグループ以上に『Tick's』と行動を共にするようになっていったのである。その後、血を交わした訳では無かったが、2人は『Tick's』のメンバー同然の存在となった。

こうして、よりパワーアップした『Tick's』は、独自の『みんなが集まった時の楽しみかた』をもっている。

ナガノが以前、サカガミと同様、車購入計画のために『ダイエー』のレストラン街にある蕎麦屋でアルバイトをしていたことがあった週末ともなるとメンバーはナガノのバイトが終わる頃を見計らって

ダイエーに集まり、ナガノが店から出てくるまでの少々の時間を潰す為に『鬼ごっこ』をして過ごしていた。

ダイエービル、全階を使ってである。

ナガノのアルバイトは、ダイエーの閉店時間、午後9時に終わる。午後8時30分頃から、なぜか『全員サングラス』姿で始まる『鬼ごっこ』は、丁度帰宅途中に立ち寄ったお客を巻き添えにして、かなり派手に行なわれていた。

メンバー達がドタバタとフロアーを駆けまわり、ときには彼らが流れに逆行して走られているエスカレーターに乗り合わせてしまった客たちは迷惑を被る、衣料品コーナーは服が撒き散らされる、試着コーナーに隠れようとして、中にいた女性客に叫ばれたこともあった。

しかし、当のメンバーは悪気も見せず、なにより、ダイエーの若い女性従業員達は、彼らの悪態を毎週楽しみにしている始末である。

なぜかいつの時代でも、女性はヤンチャな不良にチョットだけ憧れをもっているのかもしれない。

ナガノのアルバイトが終わり『鬼ごっこ』も終わった後、ダイエーの従業員専用出口前で待ち合わせるのだが、そこには、仕事を終えた何人かのダイエー女性従業員の姿も見せていた。

この『Tick's』の『鬼ごっこ』は、その毎回の酷さから従業員に警察を呼ばれる危険性があったが、結局、別件でナガノがバイトをクビになる方が早かった。

子供のような遊びをしていた反面、彼らは夜ススキノ付近に集まると、酒を飲みながらダーツやバグギャモンに熱を上げる。

実は、彼らが一番好きなビリヤードができる洒落た店がススキノに

は無いのだ。

唯一のプレイスポット『平和ビリヤード』は老人相手だけに、午後8時には閉店してしまう。ビリヤードこそ無かったが、ダーツ、バックギャモンの両方ができる『セブンセブン』では、奮発してサントリーホワイト3000円也のボトルキープをしていた。

彼らは何時もそれを炭酸水で割る『ハイボール』で飲む。

『ハイボール』は1960年代に流行した飲み方で、その名前の格好良さと、炭酸によって『少量で早く酔える。』ことが、彼らを気に入らせたのである。

そして彼らの遊び道具のもうひとつは『ピンボール』。

つい先日閉店となった『ミルクホール』以外にピンボールマシンが設置されている店はボーリング場しか無い。どのゲームセンターにも、もうカケラも無い。よって彼等は、出入り禁止となった『ボーリング場』へ『ピンボール』をやりに行くのだ。

こうして夜遊びをした夜中一時過ぎになると、きまって『スピナッチ』に屯して解散となる。

『スピナッチ』はススキノの外れ、『セブンセブン』から歩いて10分ほどの雑居ビルの地下にある、日本中に流行している『カフェバー』のハシリである。

午前2時には閉店してしまう『セブンセブン』では、始発の地下鉄まで時間が空きすぎる弱点があったのだが、マサトが「パクツた〇しに連れてきてもらった。」とメンバーに紹介したのがキツカケだった。

雑居ビルのエントランスとは別に独立した専用ドアを開けるとすぐ地下へ降りる鉄筋階段があり、トントんと降りていくとやがて片側

の壁が無くなって右手に店内全体を見下ろせるという独特な構造で、全体的にはコンクリート打ちっぱなしを基調としているのだが、高い天井に走る水道管や至るポイントに『スピナッチ（ほうれん草）』の名にふさわしく、淡いグリーンがアクセントとしてペイントされ、店内はダイニングフロア だけがまた一段低くなっていて、一見は水の入っていないプールとそのプールサイドにテーブルを置いた様な、誠にお洒落な空間が細長く奥へと伸びる、ユニークな店である。午前4時まで営業しており、店内にはアメリカ産ビール『バドワイザー』の自動販売機も設置され、そこから直接購入することも出来た。

バーテンをしていたショーンを除いて全員高校生の『Tick's』のメンバーは、アルバイトで得た少々の金しか持っていない上、その殆どが洋服に化けていたため、容易に飲んだり食べたりは出来ない。本来は彼らともなると、デイスコに行けば300円で一晩中遊べる。しかし『スピナッチ』での300円は、ビール一杯も頼めなかった。コーヒー一杯でも350円である。しかもアメリカと違って、コーヒーはお代わり自由ではない。バドワイザーにいたっては350ミリリットル一缶で650円である。

しかし、VIP待遇を受けるデイスコと比べても、今の彼らには『スピナッチ』のほうが何倍も魅力的に思えた。

そこで、目をつけたのが、サイドメニューである『スピナッチヌードル』200円。

ほうれん草パスタなのだが、本来サイドメニューであるそれは、本来、単体でのオーダーは出来ない。第一、一口で食べられてしまうくらいの量なのである。全員、これだけで朝方まで店に屯しているのだ。

なぜそこまでしてでもこの店に拘るのかというと、「こういった雰囲気朝4時まで営業している店を他に見つけるのは面倒くさいべ

や。」という、誠にシンプルかつ身勝手な理由からなのであった。店側としては、たまったものではない。

しかし、メンバーの存在がビジュアル的に良らしく、呼び水となつて女性客が彼ら目当てにチラホラ来店するようになってきたことがわかれると、店側も何も言わないどころか、宣伝費がわりにビールやアペタイザーのサービスまでもしてくれる程になり始めていた。

『スピナッチ』の階段を下りてすぐにＵターンをした店内の角にある、段違いに低くなっていないフロアーに設置された丸い大きな１０人がけテーブルが『T i c k ' s』のお決まりの場所である。なぜなら、１０人がけテーブルはここだけなのと、なによりスチール階段の隙間から、下りてくる女性客のスカートの中を覗けるからなのである。

秋もすっかり深まつた午前２時、メンバー達がワイワイ言いながら、いつもの席に皆が座つた。

「おおつ、この店、この間発売になつたばかりの『ゴーゴーズ』の『バケイション』がもう掛かつてる！あつ、『ゴーゴー』で思い出したけど、なあ、『シャネルズ』がついにアメリカ行つて『ウイスキー ア ゴーゴー』で外人相手にライブやつたらしいべさあ！」

マサトがこのタイミングまで温存しておいたニュースを、いかにも偶然思い出したかのような口調で自慢げに公表すると、隣に座つていたトールがクールに、

「さつき皆でそのこと話してたんだわ。『スモークーロビンソンとミラクルズ』の歌にも登場した店だなんて。本場ロサンゼルスだからスゲエんでしょ、やるなあつて。『コースターズ』のオリジナルメンバーも来てたらしいつしょや。」

「えっ？そうなの？そこまで知らなかったべやあ。だけど『シャネルズ』なんかもう興味なくて、この情報は知らないかと思ってたんだけどなあ。うーんと、じゃあ、『マッドネス』が『ホンダシテイ』ってコマースシャルで芋虫みたいに並んで歩いてて、ひそかに『ジョージコックス』のラバーソール履いてる奴がいるっていうのは？」

情報屋マサトがプライドにかけて熱弁している最中、皆が座っているテーブルに、見たことの無いウエイトレスが歩み寄って来た。皆、そのほうが気になり、だれもマサトの話しは何ひとつ聞いている。ない。

カーリーヘアを無造作に束ね、色落ちしたリーバイスに、黒地の背中に鮮やかなチェーンステッチで刺繍の入った、『T i c k ' s』言うところの「只者ではない」古着のボーリングシャツをグレイのタンクトップの上に羽織っているそのウエイトレスは、モデル並のスタイルで大きな瞳と高い鼻をもった、品のある垢抜けた綺麗な顔立ちの娘だった。

『コリーみたいだ…。』

竜二の目が輝いた。

実はコリー犬の様な女性が大の好みだったのだ。

その上いかにも育ちのよさそうな綺麗な顔たちの娘が、洗いざらしのユーズドジーンズを履きこなすアンバランスさは、矢が命中した竜二のハートに、なお一層の威力を発揮した。

「『T i c k ' s』の人達ですよね？」

コリー犬が竜二に聞くと、

「はあ？僕は西山製麺のもですけど…。」

まったく訳のわからない言葉が返ってきた。

「えっ？」

このところ、いつも同じ質問を受ける竜二は『またか』とばかりに答えた。

『…俺たちを知ってるんだったら、わざわざ質問してくるなよ…。あーやつぱり！って、ただそんだけで、どーせこの会話が終わっちゃうんだからよお…。』

竜二がそう考えていると、ウェイトレスが、思いもよらぬ言葉を返した。

「その冗談、ゼンゼンおもしろくないですねえ。」

直球だった。

しかしそれが、少々天狗になりかけていた竜二には新鮮に聞こえた。

「…スンマセン…」

先生に怒られた子供のように、上目遣いで少々おどけて竜二は謝ってみせた。

コリー犬が水の入ったグラスを人数分テーブルに置くと、オボンを胸に抱きかかえながら、

「ねえ、ヤノさんって言うんでしょ。」

竜二の横にしゃがみ、小さな顔を近づけて得意げに言ってきた。

「いや、実はアイツがヤノで、俺はイトーっていうんだ。」

近づいてきた小顔に少々ドキツとしながらも、竜二はもつと自分の顔を彼女の顔に近づけて、斜め向かいに座っていたツールにアゴを指して、小声でまるで内緒話のように耳もとで手を添えながら、そう答えた。

『はいはいそーですか』といわんばかりの顔をしながら、コリー犬が竜二に店の紙マツチを渡して、

「よかつたら、今度ランチにでも。」

『ようこそ！』と紙マツチの裏に書かれた、その下には電話番号、そして『Yuri』とある。

コリー犬の名前は『ユリ』だということを確認すると、

『：昼飯のことを、ランチだなんて、今まで誰からも聞いたこと無いしやあゝなまら都会的だべやあゝ：』

心の中でそう感動しながらも、

『あれ？いつの間にユリはマツチに電話番号と名前書いたんだろ？』

そう疑問を抱いたかと思うと、

『：ひよつとして、俺が来るまで、持って歩いていたのかあゝ？、このマツチィ。』

頭の中で誠に都合の良い推理をした挙句、

「ねえ、今日は何時にバイト終わるの？」

「えっ？プツ：4時だけど：。」

ユリは、その思ってもみない竜二の速攻攻撃に、思わず吹いてしま

った。

『4時か…待つか…』

竜二は『今度』が嫌いだった。

『今度とお化けは出た試しがない』

あと2時間、『スピナッチヌードル』で待とうというのである。

『オーナーの差し入れも、そうジャンジャン出るわけでは無いし…まあいいか。』と竜二が思っているところに、ユリがバドワイザーを人数分持ってきた。

「内緒ねっ。」

そういいながら片目をキュツとつぶった顔がなんともキュートで、竜二は胸を締め付けられ、吐きそうになった。

好かれていると思うと、なんともいえない気持ちで相手を見てしまうものである。

「なあ、『内緒ね』って言われても、コレ飲んでるの、一目見りゃあバレねえか？」

『おおー！』と感動しているメンバー達に、そう話し掛けながら竜二はそっけない態度でいたが、実のところ、彼女の行動の一部始終、五感を使って目一杯観察していたのだった。

「…なんで俺じゃねえんだ？…。」

自他共に認める二枚目マサトは、ユリが自分ではなく竜二に声をかけてきた姿を見ながらポカンとしている…。

「…じゃあな…。」

朝4時少し前になって表に出た竜二がメンバー達と別れ、早めにバイトを切り上げたユリをつれて『スピナッチ』から歩いて5分ほど、狸小路にある、24時間営業のドーナツ屋『ダンキンドーナツ』に入った。(ダンキンドーナツは、1950年代にアメリカで流行したチエーン店で、エルビスプレスリーの有名な死因『ドーナツの食べ過ぎ』は、このメーカーという噂だった。)

上着は太いストライプカーディガンだけの竜二に対し、『スピナッチ』から出てきたユリは10月ともなるとさすがに寒いのか、オレンジカラーのユーズドスエットシャツを重ね着し、胸にオレンジカラーで『M』のパイルパッチがついた、本場ではチアリーダーが着る、黒のフードスタジアムジャケットを羽織っている。甘いものが苦手な竜二はコーヒー、ユリはスタジアムジャケットを脱ぎながらオールドファッションとココアをたのんだ。

「いつもどうやって帰るの？」

竜二が聞くと、彼女はスクーターを持っていた。ベスパに似た、『ホンダ ジェンマ』という真っ赤な50ccである。

『Yuri』の本名は『ユリエ』だった。

彼女は、札幌にもある日本で一番有名なお嬢様学校、神聖女学院高等部2年生、つまり竜二と同学年である。

なぜそんなお嬢様が、朝の4時までバイトをしているかと聞くと、『社会見学という建前で週末だけ。』、しかも『成績がひとつでも落ちたら即刻辞める。』という親との約束をしているそうなのだ。まさに文武両道である。

天は二物を与えたのである。

しかも、そんな完璧令嬢が、竜二に惚れたんである。

「…奇跡だ…」

竜二は感動していた。

「どうして俺達のことや俺の名前を知ってたんだい？」

「あのねえ、2カ月半くらい前だったかな？ ヨーコ知ってるでしょ？ あの娘、学校で同じ部活の1年生なんだけど、1年生の間でアメリカンスタイルのカッコイイグループがススキノにいるって噂になっていたのね、実はそれが『Tick's』だったの。でね、ヨーコがマサト君のファンで、『スピナッチ』によく居るから一緒に観に行こう、って誘われて私も興味あったから行ってみたの。だけどその時はみんなは来ていなかったのね。しばらくして、やっぱり今日みたいに一時過ぎだったかな？ 『夜は地下鉄駅まで物騒だから、余り遅くならないうちにそろそろ帰ろう』ってなった時に『Tick's』のみんながワアワア騒ぎながら、楽しそうに階段を降りて来たの。みんなが入ってきて、その姿を見たとき、お店が急に明るくなって、それまでとはパァーっと雰囲気が変わったのね、なにかオーラが出ているような…。お店にいたお客さんも、待つてました！ って感じで、みんなの表情も変わったの。マサト君が入ってきて、ああ、なるほどなって思っていたら、ショーネン君が足を踏み外して転がり落ちそうになって…だけどそれ、実はジョークだったの。」

「ああ、覚えてる！ あれからアイツ、ウケたからタマにやるんだよ。そーかあの時かあ…俺、目が悪いから、店内の客の顔、わかんねえもんなあ…まさかあん時こんな綺麗な娘が居たとはナァ…。」

そう言いながら『…しかもマサト君とかショーネンとか、メンバーの名前まで、もう覚えてるとはなあ…。』空中を見つめて感動して

いる竜二に、まだ話しは終わっていないとばかりにユリエは続けた。

「そしてね、聞いて！最後にあなたが入ってきて、何かみんなと違う思いを持ったの。あつ、この人とお話してみたい、親しくなりたい、つて。でね、ヨーコにあなたの名前を聞いたの。そして、彼女『Tick's』の皆のようなファッション好きじゃない？だから彼女のスタイルや彼女の良く読む雑誌を教えてもらって勉強して、でね、『スピナッチ』でバイトしちゃえば、あなたとかみんなに確実に会えるし、お金もかからなくて皆を見ていられるでしょ？だから、夕方だけだった以前のお店を辞めて、あのお店の深夜担当でバイトをはじめたの。」

『社会見学が建前。』と言った意味がここでわかった。

自分のことを『あなた』といきなり呼んできた事と、自分達がキツカケで『スピナッチ』でバイトを始めたというダブルパンチで、竜二はメロメロ、そしてゾクツと身震いをした。

『…あなた。…オマエ。…クーツ！』

なぜかやたらとスツキリした表情になった竜二が、

「ヨーコが言ってたなあ、俺たちのスタイルって『オリーブ』とか『MCシスター』に出てくるやつ男版だつて。だけど、まだ読んだこと無いんだよ。ところで、お前のそのボーリングシャツ、どこで買ったの？」

早速、オマエの登場である。

「お父さんが東京に住んでね、以前行つた時、原宿に『Dep't Store』っていう古着屋さんがあつて、その店内でディスプレイされてたところを見つけて、あつ！これつて。結構奮発したんだあ。」

「えっ！そこオープンしたばっかの店だよな？明治通り沿いの地下にある。俺もその店、行ってきたよ、夏休みの時。俺、去年停学くらって修学旅行いけなかったから、その代わりってことで東京行つて。」

「あれ？私もあ！夏休みの時に！」

しかし、同じ『夏休みの東京旅行』でも、かたや『お父様との再会に。』かたや『停学くらった代償に。』…大きな差である。

「うわー、なんたる偶然！、じゃあその頃、もしかして同じ東京の空気を吸ってたのかも！これは運命だなこりゃ。ウンウン。」

どさくさに紛れて言った竜二のセリフはあっさり聞き流され、

「ヤノ君、いつからこういうスタイルに目覚めたの？」

「んー、目覚めたんじゃないくて、もともと頭や身体ん中にモヤモヤアつとあったものが次第に形になってきたんじゃないのかなあ？つて思う時があるんだ。」

「ユリのそのヘアースタイル、学校でダメなんじゃないの？」

「うちの学校、肩に付く長さから三つ編みだから、バレないの。」

「不良だな。」

「えー、違うよー、みんなやってるよお。」

「プツ、ムキになってる。ジョーダンだつて。」

他愛の無い会話をしているうちに、あっという間に2時間が経ち、午前6時になったところで帰宅となった。

『スピナツチ』前に止めてあったユリエのスクーターに2人乗りをして、いつもは歩いて帰る竜二の自宅まで短いドライブを楽しんだ。50ccはヘルメットをかぶる必要がない。

10月の札幌は、顔を通り過ぎる早朝の風が心地よかった。

だがしかし、50ccの二人乗りは、違反である。

竜二は帰宅し布団にもぐっても、ユリエのことを思い出すと、なかなか寝付けずにいた。

ユリエの唇は『蜜の味』ならぬ『苦手な甘いココアの味』だった。

「これは、神様がゼツタイに『二人はこうならなければならぬ運命にあるんだよ』って導いてくれたんだろうなあ…、だって俺達、何をするんでも息が合ってたもんなあ。」

大抵、恋愛感情が盛り上がっている時期は、自分の行動や考えは、もしも相手ならどうするか？を重点にし、それを前提にコトが進む。常に相手を意識して相手に逢わせようと努めるから、まるで息が合っているように感じるのである。それとは反対に、お互いの恋愛感情も消え失せ、破局寸前の険悪時期ともなると、相手がこうするであろうという考えや行動とは、わざと違う行動をとる。お互いが似てしまうのがイヤなものなのだ。恋愛は、人の性格をもコントロールしてしまうものである。

その翌日の夕方、日曜日で遅く起きた竜二に一本の電話が掛かってきた。

「リュウジく電話あ〜。」

電話を取った母親が呼ぶと、洗面台に屈んで洗髪をしていた竜二がムクつと起き上がった。

その右手には、食器洗剤『ママレモン』が握られている。

そう、髪にポマードをベツトリと塗ったまま2〜3日間も髪を洗わないため、通常のシャンプーで完全に洗い流すとなると、膨大な量と時間を要するリーゼントヘアーにとって、油污れには強力な洗浄力を発揮し、しかも肌にやさしい『ママレモン』が絶好のシャンプーなのである。

頭を泡だらけにしながら受話器を取ると、電話の向こうはトールだった。

- 第8章 -

洗髪中の竜二が母親に呼ばれて頭を泡だらけにしながら電話に出てみると、トールがいつもとは雰囲気の違う重々しい声で、『相談があるからピンフに来てくれ。』とだけ言ってきた。

竜二はヘアースェットもほどほどに一足早く『平和ビリヤード』に到着して球を打っていると、まもなく『よお。』と店へ入ってきたトールのその背後からもう一人、ダブルの革ジャンを着た男が、貫禄充分に、実にゆったりと姿を現した。

男はバイクで来たらしく、黒いヘルメットを持っている。彼はトールの幼馴染で、事の内容をトールが説明した。

「なにやら奴がガイチカ（地下街）でモヤ引いてたら（一服していたら）、『ダーティエンジェルズ』の奴らに突然引っ張られて（連れさらわれて）所属してるグループを『ツブす』って言ってきたらしいんだわ。」

グループ同士の揉め事ではあったが、男が所属しているグループ『スリップス』を狙っているという硬派ストリートグループ『ダーティエンジェルズ』と竜二は交流があった、そこでトールを通して竜二の力で和解できないものかの相談に来たのである。

『エイトボール』をしながら竜二はその相談に応じたが、その風貌からこの男が『ダーティエンジェルズ』につぶされる感じには見えなかった。

男は『コクラ ヒデアキ』という、北海道では有名な菓子会社『コクラ製菓』の御曹司である。

しかし竜二の目には、どうしても御曹司に映らない。

確かに実際、彼自身の余りにもひどい素行不良さ加減から親に半勘当されていて、彼女とアパート住まいをしていた。

身長こそ竜二と大差は無かったが、体重は1.5倍以上あると思われる程ガツシリしており、力は物凄くありそうに見えた。

トールの話では、確かにケンカの腕っぷしはかなりのもので、小学生のころから高校生と互角に渡り合い、今でも2〜3人は軽く10分以内にブチのめして、決して殴り合いにはならないらしい。

しかし、喧嘩第一主義の『ダーティエンジェルズ』と揉め事になれば後が面倒と、手打ちを希望してきたのである。

「ブルートは俺のダチだから、ナシ付けられる（交渉できる）わ。大丈夫。」

竜二とブルート（ダーティエンジェルのボス）とは『ミルクホール』時代からの友人関係だったのでコクラの頼みには応じられたのだが、それよりも竜二は彼をビジュアル的にも是非とも『Tick's』のメンバーに欲しくなっていた。

相手を圧倒する体格、映画『寅さん』のアツミキヨシにそっくりな顔つきに、リーゼントヘアの頭のとっぺんだけを、まるで芝刈り機で刈った様に、まっ平らに短く刈ったスタイルの『ハワイアンリーゼント』が良く似合っている。

ハワイアンリーゼントとは、映画『アメリカングラフィティ』に登場したメガネの三枚目、自称『テリーザ タイガー』や、『アニメルハウス』でハーレーに乗って寮の階段を上がってきた『Dデイ』がしていた、トップは角刈りでサイド部分は長く後ろへ流した独特なヘアスタイルである。

聞くと、ハワイアンリーゼントにしたきっかけは、高校の頭髮検査で生活指導教師にリーゼントヘアのど真ん中に一本バリカンを入

れられ、落ち武者のようなヘアースタイルでそのまま床屋へ行き、
ハワイアンリーゼントに整えると、再びまた登校したというのだ。
そのヘアースタイルに至るまでのいきさつが、竜二をいっそう気に
入らせてしまった。

その後、何度かツールも交えて『TipTap』で説得し、コクラ
は『スリッパス』を抜けて『Tick's』のメンバーとなった。

どちらかというところ清潔感重視のスタイルを目指した『Tick's』
のメンバーは皆、不良の象徴である革ジャンを着る事はない。しか
し、バイクを駆るコクラだけは特別で、ダブルのライダーズにジ
ンズ、エンジニアブーツという、『Tick's』らしくはないス
タイルを通していった。

コクラは、その体つきから『タイショー』というニックネームで呼
ばれ、『Tick's』のいろいろな揉め事を解決させていくこと
となる。

メンバー6人とタイショーとの『儀式』は、ショーネンの都合上、
再び『Hub』で行われた。

本来、野球チーム結成が目的だったが、ビジュアル重視で寄せ集め
た『Tick's』は未だ七人しかおらず、なおかつ札幌の198
1年の短い野球シーズンは、既に終わろうとしている…。

そんな秋も終わる頃、竜二とユリエのデートは、もっぱら竜二が地
下鉄で彼女の家まで迎えにいき、そこから彼女のスクーターに二人
乗りして、彼女の家の近所であった『宮の森』の北海道神宮前通り
で過ごすのがお決まりコースとなっていた。

無免許の竜二が運転するスクーターに2人乗りしてのデートの様は、

まるでオードリーヘッピン主演の1950年代映画『ローマの休日』のようで2人のお気に入りであった。

『手を繋いで歩くカップルほどダサイものはない。』という思考の2人にとって、スクーターの二人乗りはそれに代わるスキンシップだったのである。

以前、ビールを飲んだ竜二に替わって、偶然にもこの時には免許を所有するユリエが運転していたところ、2人乗り運転で警察に捕まったことがあったが、全く懲りることなく、その後も『ローマの休日』デートをやめる事はなかった。

2人はなるべく静かな場所を選んだ。

比較的暖かい夜は、チザキ団地へと足を伸ばすこともあった。チザキ団地とは、いわゆる団地ではなく、札幌市街を見下ろす藻岩山の中腹までを切り開いた『札幌の田園調布』とよばれる超高級住宅街である。

こういった札幌市街を一望できるデートスポットというと、旭山公園が一般的で人気があるのだが、当然利用客も多く騒がしい。

若干上り坂が続くチザキ団地での50ccのスクーター二人乗りは、ところどころユリエが乗り竜二が歩くシーンもしばしばだったが、晴れている夜は、マル秘スポットで札幌市街の夜景を眺めながらのデートは格別であった。缶コーヒーでもいい、2人で過ごす時間がないより幸せなのである。『ローマの休日』デートは、初雪が降る12月まで続いた。

互いに『…将来は一緒に暮らすのだ…』と、当然のように思っていたのだが、竜二は既にひとつだけ心に決めていたことを、実は、どうしてもユリエには言えずにいた。

それは彼の旧友との、ちっちゃな、ちっちゃな約束だった…。

1982年の年が明けた。

一般に、誰もが高校3年に進級すると、いよいよ卒業後の進路を考えなければならぬ。

竜二は進学を考えていたが、それを機に少しの間、札幌から離れて暮らしてみようと思っていた。

東京である。

しかし、東京での大学生活4年間は竜二にとって長かったのと、なにしろ大学に進学できる自信も実力もなかったので、2年間専門学校に通い、また札幌に帰ってこようと考えていた。

「2年もあれば充分だ。」

札幌の住み心地や自分の仲間は何論だが、何より、ユリエと離れている時間はつらかった。

それでも東京に行こうと決めたのは、旧友との小さな約束があったからなのである。

実は、竜二が『Tick's』なんて考えてもいなかった中学生の頃、本当の『マブダチ（親友）』だと思っていた男がいた。

その男は常に冷静で、現在のツールやナガノのように、つい暴走する竜二の頭を冷やす役に徹し、知らないところで竜二の起こした揉め事を解決させていた。

一見、冷たく見えるその横顔は、ハンサムだが死人のように青白かった。

…沖田総氏みたいだ…。

竜二が第一印象でそう思った彼の名は『イトイ サトシ』。
IQが高かったのか、頭の切れが良く物知りだった。

竜二のトレードマークであるサイドバックリゼントは、実は彼を見本としたのである。竜二はヘアースタイルだけでなく、サトシからあらゆる影響を大きく受けた。

今の竜二があるのは、サトシのお陰といっていい。
しかし、サトシは悪い習慣をもっていた。

シンナーである。

彼はシンナーの常習犯で、真剣に止めさせようとしている竜二に対して、いつも笑顔だった。

「アンパン（シンナー）に頼っている奴ほど、ダサくてみっともない奴はいない。」

竜二は決してシンナーには手を出さなかったが、サトシは流された。

「アンパンに頼っている奴ほど、自分に正直な奴はいない。」

薬物は中毒になる本人も悪いが、もっと悪いのは、売人である。

金ズルにしようとして最初は薬物をタダで使わせる。ナニかと格好をつけたがる年頃は、箔をつけるため自慢気に手を出してみる。そして、くだらない見栄を張るために人前で頻繁に使用し始め、ついに中毒になったところを見計らって、そこではじめて回収にまわるのだ。薬物付けになった身体はボロボロになっても、自分を止める事が出来ずに、何とかして手に入れようとする。いくらそれを止めようとしても、薬物によって意志までもモロくなってしまう、売る相手が寄ってくれば、いとも簡単にまた手を出してしまう。この世

に売人がいなくなる限り、このサイクルは死ぬまで回り続ける事となるのだ。

サトシの家庭は、義理の母親と、1歳違いの義理の兄との3人暮らし。医者である父親は、今の母親と再婚したが、その後しばらくして、出て行つたきり帰ってこなくなった。

サトシの父親から十分な生活費を毎月与えられていた義理の母親は、実の息子だけを可愛がり、サトシには食事さえまともに与えずに、1日500円のこずかいを食費として渡すだけ。そんな時、自分に『CS』を教えた義理の兄のポマードや洋服をクスねては外出していたサトシにとって、『ミルクホール』が第二の家となっていた。

いや、『ミルクホール』が第一の家だったのかもしれない。

一日500円が命綱のサトシにとって『ミルクホール』で一番安い200円のコーラ代を払う余裕がなかった。だからいつも、店の前をウロウロしていると、常連客やスタッフの誰かが、『入れ入れ』とやってくれる。

皆、サトシは『ミルクホール』の他に居場所が無いことを察していた。

『親のスネツかじり』のどうしようもない不良で私立高校に通っていた義理の兄とは反対に、サトシは義理の母親が出す学費の都合上、公立高校に合格しなければ高校にも行かせてもらえない状態だった。しかし、もともと頭の良かったサトシは、竜二の通っていた高校よりも、かなりランクが上の公立高校に合格していたのである。

サトシと竜二は、通う中学こそ違っていたのだが、互いの学校不良グループ同士の喧嘩で『タイムン相手』だったのがキツカケで親友となった。

そもそも喧嘩のはじまりは、サトシの中学校サッカー部員が、試合中に竜二の中学校サッカー部員に顔を蹴られ、鼻の骨を折ってしまった事への報復だった。

当のサッカー部員は互いに一人も参加していなかったが、こういった学校同士のイザコザを解決させるのが、不良グループの仕事である。しかし慈善事業ではないので、後日、その見返りは当人たちからキッチリ回収するシステムが確立していた。

その頃からシンナー常習犯のサトシは、哀れに思ってしまうほど喧嘩が弱かった。

パンチ力と同様に体が軽く、竜二の膝蹴りがミゾオチに入るたびに吹っ飛んだ。

しかし、周りの連中は既に互いに決着がついているのにも関わらず、決してサトシ自身の口から「マイッタ」の言葉は出てこなかった。素手でのタイマンはフラフラになるまでやられてしまうと、よっぽどのラッキーパンチやラッキーキックが炸裂しない限り、一発大逆転は99・99パーセント有りえ無い。

大抵は、やられている方が何となく結果を察してくると「マイッタ」となる。

やられるだけ無駄だからだ。

しかし、サトシは立ち上がれなくなっても、けっしてネはあげなかった。

向かって来れないほど衰弱した人間を駄目押しでボコボコにするほど、竜二は卑怯ではない。

「お前の方がスゲエ、俺、疲れたわ、マイッタ。帰る。」

有利だった竜二が先にギブアップしてサッサと引き揚げようとした

が、ちよつと歩いてから振り返り、仲間に取り囲まれたサトシに手をさし伸ばして起こしてやりながら言った。

「オマエ、酒飲めんの？」

負けず嫌いの『スッポン』竜二が、唯一、『負けました。』と自分で認めても、後から復讐することのない唯一の相手となった。ボコボコになった顔を、少しだけ微笑ましてサトシが言った。

「飲めるけど、今晚、熱出すと思うから、やめとくわ。」

「それもそーだ。今度だな。」

竜二は納得してサトシを相手中学の仲間に担がせ、自分の仲間と帰った。

その後この一件を機に、結局引き分け勝負だった両校は仲良くなり、特にサトシと竜二は『マブダチ』となった。

中学2年の竜二を最初に『CS』に誘った男とは、実はこのサトシだったのである。

進学高校が決まった頃には札幌市内の雪も溶け始め、サトシは義理の兄所有のバイクで『ミルクホール』へ来ることがたまにあった。サトシはまだ15歳、もちろん無免許である。

「おれさあ、金が無いから16になっても、当分単車の免許取れないと思うんだわ。だから高校入ったらバイトして金貯めて、免許とってさ、ソンデまだまだ頑張ってバイトして単車買って、高校卒業したら、一年中単車に乗れる街に引っ越すんだあ。」

サトシはシンナーの力を借りてやっとリラックスできると、きま
て同じ事を言っていた。

サトシの『自分の将来』を聞く度、竜二もきまって答えた。

「俺、もし行くんだったら東京だな、都会だしな。シティーボーイ
てやつ。」

「じゃあ、俺も一緒に行く、おまえだって独りじゃ怖いモンな、新
宿とか。」

「ふたりで行くかあ、トーキョー、なあサトシィ！」

『サトシはもしかすると、独りになるのが本当に恐いのもしれ
ない…。』

そう感じ取っていた。

高校入学の3日前、竜二がいつものように『ミルクホール』へ行く
と、サトシが上機嫌で常連客達と笑っていた。

新生活が楽しみなのか、口をあけて笑う明るいサトシを見るのは久
しぶりで自分まで嬉しかったが、笑ったサトシの前歯が溶けてボロ
ボロになっていた事実にはショックを隠せなかった。

やたらとハイテンションだったサトシが、『これから高校の制服を
取りに行く。』と、ロレッツの余りまわっていない口調でヘル
メットを肩に担ぎ、『ミルクホール』を出て行った。

「高校生になれば、あいつもチョットは変わるんじゃないかい？
あんなもん（シンナー）に頼んなくてもいい時が来るっしょや。」

『ミルクホール』の常連客、皆でそう話しながらサトシを見送った。

それがサトシの最後の姿だった。

単独事故だった。

清田の現場は、見通しの良い緩いカーブの片側二車線道路で、スリップ痕もなく、ガードレールにしばらく張り付きながら、しまいに何かにバイクが引っかかったのか、拍子に本人が吹っ飛んだらしい。ヘルメットのストラップがされていないかったらしく、彼から10mほど離れてヘルメットが見つかった。

頭蓋骨骨折で即死だった。

バイクの所有者であるサトシの義理の兄が警察からの連絡を受け、『ミルクホール』にかけてきた電話で訃報を知った竜二は、身体の中の何かがズシンと重くなって下に落ちていくのを感じ、フラフラと外に出てボーっとしながらタバコに火をつけ、フーっと一服つくと、今度は胸が急に締め付けられ、気持ち悪くなって不意に吐いてしまった。

翌日の夜、竜二がサトシの通夜が行われている自宅のチャイムを鳴らすと、義理の母親が玄関に出てきた。

「あのお、サトシ君の友人だった、ヤノと申します。この度は…。」

緊張しながら、慣れない挨拶をたどとしく話していると、それを察したかのように、

「ささ、どうぞどうぞ、サトシがお世話になりました。」

と、竜二の挨拶が終わりきらないまま母親に招き入れられ居間にあると、出前の鮎が置かれているテーブルの前に、実の父親だけがポツンと座っている。

実の父親の服装や身につけているものは、15歳の少年から見ても即座に高価なものだと判断できた。

「あれ？」

という顔をしていた竜二に感ずいたかのように、実の父親は、吸っていたタバコを揉み消しながら言い訳をはじめた。

「うちの実家は江別なもんでねえ、親戚が向かっている最中だから、今、誰もいなくてねえ。」

連絡をしてきた義理の兄貴は、イッタイ何処行ってるんだ。

竜二が部屋の奥へ歩いて行くと、小さなお膳にロウソクと線香、果物とご飯、ドラ焼きが供われているのが見えてきた。

その奥に置いてあるサトシの写真を良く見た竜二は、啞然とした。

写真のサトシは小学生だったのである。

最も現在に近いサトシの写真でも、小学生までなのだ。

その瞬間、竜二は、自分の意もせず涙が勝手にボロボロと流れてくることを知った。

中学校入学式、宿泊研修、運動会、球技大会、修学旅行、とにかく中学時代の思い出の写真は、サトシの部屋から一切出てこなかったらしい。

義理の母親は、サトシにこれだけ無関心で、これだけ何もしてあげていなかったのだ。

『サトシだつて今までの事は、二度と思い出しくなかつたのかもしれない…。』

そう思いながら、火を灯した線香をさし、手を合わせながら、なおもボロボロ涙を流した。

「なあ、サトシ、おまえ何やってんだよ。あさつてから高校に行くんだろ？早く目を覚まして、行くぞ！高校！お前、カッコイイし頭もイイから高校でもモテるぞ、なあ、だから早く起きろよお、ふざけてねえで早く起きろっ！なあサトシ！」

日頃から、喧嘩の最中に殴られている時や事故で怪我を負った後は『痛い』という感情を大腦から取り除き無感覚でいられる。だから竜二は、本当は痛い思いをしていても、何ごとにも立ち向かつて行けた。

しかしなぜか、この悲しみの感情だけは、大腦から取り除くことができない。

特に、大人たちに対しては決して感情を見せることのない彼が、両親の目もはばからずオイオイと泣いた。

棺桶のサトシを見ることが出来ないまま、2人が差し出してくれた鯨を断り、竜二は一度帰宅すると、またサトシの家に戻ってきた。

「これ、自分と一緒に写っちゃってますけど、これしか無かつたんで、葬式用に使ってください。」

サトシが、どこか寂しい笑顔で竜二と肩を組んで写っている写真だった。

自分の都合しか考えていない両親に見放され、寂しく過ごす毎日を、笑顔でくるんで生きてきた15歳の少年が、楽しみにしていた高校

入学を目の前にして、唯一、押し殺した自分の気持ちを開放してくれていた薬物が引き金となって自ら率先したかのように死んでいた。

あんなに頭の良かった、将来の可能性を十分に持っていた少年が、まるで雑巾の様な姿で散った、余りにもあつけない15年だった。後日、サトシの葬式が行なわれ、参列した竜二は新しく加工されたサトシの写真の前で手を合わせながら、高校卒業後はサトシの夢だった東京で暮らすことを決めたのだった。

1980年3月30日の、世間から見れば、『どうせ不良暴走族が無理をして事故を起こしたのだろっ、ああいう世間のゴミが又いなくなつてセイセイする。』ぐらいにしか思われていない、ちっちゃな、ちっちゃな出来事だった。

ふたりで行くかあ、トーキョー、なあサトシィ！

いつか話したサトシへの言葉は、竜二にとって果たさなければならぬ『男と男の約束』のような気がした…。

前年のクリスマス以降、親に嘘をついたユリエが竜二の部屋に泊まりにくるようになっていた。彼女はそのままエスカレーター式に地元大学へ進学することが既に決まっている。

ある夜、ユリエの家の前まで来た竜二は、電気の点いているユリエの部屋の窓に小石を投げた。

気が付いていないようだったので、もう一度投げた。

すると、隣りの家の犬が吠え出し、隣りのオバサンの方がユリエより早く玄関から出てきてしまった。

竜二が真っ赤な顔で事情を話していると、玄関からやっとユリエが姿を現した。

彼女は、2階にある自分の部屋ではなく1階の居間にいたところ、外から竜二の声が聞こえて慌てて出てきたのである。

うつすらと寒い満天の星空の下、北海道神宮まで二人乗りでスクーターをとばし、神宮の参道入り口の階段に二人が座ると、自動販売機で買った暖かい缶コーヒーマットの蓋を開けた。

タバコに火をつけ、プウーっと煙を大きく吐いた竜二が、意を決して口を開いた。

「寒くない？」

「ううん、大丈夫。」

履いていたモスグリーンのパーマネントプレスパンツの折り目を指でなぞりながら竜二は言った。

「まだ、誰にも話していないんだけど、俺、卒業したら2年間だけ東京行ってくるつもりなんだわ。」

「えっ？」

いきなりの話題にキョトンとしたユリエだったが、我にかえってしばらく黙った。

「専門学校に通おうかと思ってるんだ。だから2年だけなんだけど……。」

沈黙の時間を避けるように続けたが、すぐに沈黙状態となった。そんなに長い期間ではないと彼女に納得して欲しかったのか、「2年だけ」という言葉が不意に竜二の口から出ていた。しばらくして、やっとユリエが、

「じゃあ、私たちはどうなるの？」

「遠距離になるけど、夏休みと冬休みは必ず帰ってくるし、俺たちはこのまま変わんないしょ。実はユリと知り合うずいぶん前から、決めてたことなんだわ。」

竜二はなぜか、サトシとの思い出はユリエに話さなかった。

「うーん、一度決めたら今更ナ二言っても曲がらない性格だもんね。」

ユリエは少々落胆したが、彼女もまた、竜二の東京行きを決心させた理由には一切触れず、オドオドしている彼のために明るく振舞ってみせた。

ユリエなりに納得してくれたと察した竜二が唐突に、

「『刑事ヨロシク』って新番組、見たかい？先週偶然見たんだけどさあ、ビートたけしが刑事役でさあ、リーゼントのグループ出てて、なんと、全員赤い革ジャンに赤い革パンツなんだわ。衣装担当の奴、センスやばいよ。しかもグループの名前が『虚無僧』だってよお、アーはずかしい、こっちが赤面しちゃうよ。あとさあ、『積み木くずし』ってドラマ、あれさあ役者の娘の実話で俺達とドンパで…」

と明るいトーンで話題を変えた。

その、まるで胸の奥のモヤモヤが吹っ飛んだかのような竜二のすがすがしい顔を隣で見つめながら「こうして私に話すまで、相当苦しんだことだろうなあ…」と考えていたユリエが、「ふーん、今度見てみるね。」と明るい口調で応えた。

一度決めたら決して曲がらない竜二の性格を知っているながらも、ユリエは、万が一でも彼の気が替わってくれないか祈っていたのだ。た…。

- 第9章 -

1982年も4月に入ると『Tick's』のメンバーは、マサト、ショーンを除いて、皆いよいよ18歳を迎えはじめた。

『18』という年齢は、彼らにとって特別な価値がある。
普通自動車運転免許を取得する権利を持てるのだ。

既に免許を取得済みのメンバー最年長マサトは、ペーパーミントグリーンにペイントされた1968年型フォルクスワーゲンを駆っている。

他メンバーでの自動車免許取得トップバッターは、さっそく4月生まれのナガノだ。

「北海道の冬は寒いので、少量ならば酒を飲んで運転してもよい？」

3月の時点から教習所に通いだし、18歳になると同時に自動車免許の試験を受ける予定のナガノに、筆記試験経験者マサトが練習問題として聞いたことがある。

「さて、マルでしょーか？バツでしょーか？」

マサトの冗談を「うーん…良かったって聞いたことあるような無いような…。」と真剣に悩んで周りを騒然とさせたのだが、そんな皆の心配をよそに、その後ナガノは見事、筆記、実施試験の両方共に一発合格したのである。

免許を取得すると、早速ナガノはバイトで貯めていた金をすべて叩

いて車を購入した。

『スバルR2』というその車は、紺色のボディにシルバー、居住性を重視した結果のリアエンジンリアドライブ、独特なサスペンションを持った360ccではあるが大の大人が4人乗れる軽自動車で、俗に言う『てんとう虫』で親しまれた名車『スバル360』の後継者である。

日差しも暖かく、まさに心地よい4月になって3回目となる日曜の朝、竜二の家先に『R2』が登場した。

「うわぁー、すげえ！でかした！ナガノオオ」

ユリエに対して心に詰まっていたものを吐き出して間もない竜二が歡喜して叫ぶと、得意げにナガノは愛車「R2」のボンネットをギョッと開けて見せた。

その1ヶ月前

車どころか免許も持っていないナガノ、トール、シヨーン、ノグチ、ヤマ、サカガミ、そして竜二の計7人が『スピナッチ』の閉店時午前4時まで屯した後は、地下鉄の始発時間までの1時間半を、いつも通り狸小路2丁目角にある24時間営業の日活ロマンポルノ劇場で過ごしていた。

市街中心部に住む竜二とトールの2人は歩いて帰宅できるのだが、他メンバーを置き去りにせずに最後まで付き合っるのが鉄則である。

普段であればコンビニエンスストアかスキノ通りの屋台で夜食を買っていくのだが、皆、全財産が映画代以外は地下鉄代しか残っていないこの日は、なんとか夜食なしで切り抜けなければならなかつ

た。

17歳、午前5時になろうとしている、成長期の彼らがこの時間まで小皿に少々の『スピナッチヌードル』だけで動き回っていたのだから、当然、腹は減る。皆が空腹で苦しんでいるうち、その中でも一番苦しんでいた、巨漢ノグチがハツと気付いた。

「この時間だったら、朝パンできるんでないかい？」

「おお、ナイスアイデアでしょ、ノグちゃあん！」

トールが飛び上がって感激している。

3月、春の訪れを待つススキノの早朝はまだ薄暗く、そして肌寒い。

通常、早朝にパン屋に行くと、シャッターが下ろされた店先に、工場から直接配送された何段もの箱に詰まれたパンが、店の開店時間まで置きさらしになっている。よって、『物凄く早起きをして』パン屋に行くと、パン屋がオープンする前にそのパンを横取り出来てしまう訳なのである。

この窃盗行為は、『朝パン』と呼ばれていた。

しかし、不良少年達にとって『物凄く早起きをして』わざわざそれだけの為に行動を起こすことは、富士山が噴火するようなものと同じ。つまり、ほとんど実行される事はなかった。しかもこの3月、早朝は肌寒い時期である。こうなると富士山の方が可能性が高い。

「こんなタイミングは絶対逃しちゃ駄目だべさあ。」

皆から褒められ、おだてられて、登るにいいだけ木に登ったノグチが偉ぶって、まるでかなり以前から企画していたかの様な口調で非常に嬉しそうな顔をしながら語っている。

「あずま商店だな。」

竜二が作戦参謀の様に冷静な口調でそう言うと、皆が無言のまま直ちに向かった。

彼らは、こういったことにだけは瞬時に団結力を発揮し、俊敏に行動する。その無駄の無い完璧な行動の様は、まさに『S・W・A・T』である。

狸小路二丁目から一丁（100m）ほど北にいった角に大手メーカー『パンの東屋』系列店の小さなパン屋がある。メンバー達はその店を偶に利用していたので、今回の『朝パン』の絶好なターゲットとなった。

『あずま商店』の場合、母体である『パンの東屋』工場から商品のパンが直送されるのは一日おき、したがって店先にパン箱が積み重ねられている確立は50%、その上、もしかするともう店先にパン箱を置くという無謀なシステム自体、既に廃止してしまっている可能性もある。そうなると『朝パン』ゲットの確率は一段と低い。彼らは、それが気になっていた。

「俺、ちよつと行ってくるわ。」

まずツールが店の前にパンを満載にした箱が詰んであるかどうかの確認に向かった。

先に皆がゾロゾロと店の前を通り過ぎ、そしてまた戻る行動は実に不自然である。早朝とはいえ、どこで誰が見ているかわからない。したがって誰かひとりが先に偵察をするのだ。

箱が有った！

通り過ぎたツールがサングラスを掛け、皆を手で招くと、残りの6人が全員、これまたサングラスを掛けながら、堂々とした歩き方でユックリと店に向かった。

そして、ナガノ、サカガミ、ノグチの順で、パンがギッシリ詰まった箱をガツチリと持ち上げると、ヤマ、ショーン、竜二がパン箱を持った各自の後ろで護衛する中、早歩きでその場所から去ろうとしたその時、中年の男がひとり『待ってました』とばかりに店の横の隙間から「こらあー！」と走り出てきた。右手には木刀のシルエットがうかがえる。

「やっべえーっ！」

サングラス7人は一斉に逃げた。それでも、パンが詰まった箱を持った3人は、箱をけっして離さない。

その姿はまさに『獲物を捕らえた野獣』と化している。

「畏だ！」

ツールが叫んだ。

実は以前から『朝パン』の被害にあっていた店主が、店がオープンするまでの少々時間、根気よく待ち伏せしていたのである。

そこへ運悪く、たまたま『Tick's』メンバーが遭遇してしまったのだ。

『朝パン』の犯人は一概に不良少年達だけとは限らない。

ホームレス、いつも通りがっている新聞配達や牛乳配達、朝までの仕事帰りや、遊び帰り、色々な事情で『あずま商店』の前を通り、

店先に詰まれたパン箱を偶然見つけ、ほんの出来心で拝借してしまったケースもあるはずである。

その今までの様々な人間達が起こしてきた窃盗行為の蓄積が、年に一度有るか無いかの『Tick's』達が試みた『朝パン』のタイミングにバツチり合ってしまったのであった。

日ごろの行いが悪いと、こういう喜ばしくない偶然に遭遇してしまうものである。

逃げ惑う少年達と、それを追いかける店主。

端から見ると、この光景は逆に店主が『獲物を捕らえた野獣』である。

通常であれば、本来『中年世代も後半にきている店主ひとり対ギンギンの少年7人』、店主をボコボコにしてから、余裕でパンを持って逃げればよい。

しかしそれは少年達にとって、非常にアンフェアな行為なのである。

「俺達はただでさえも悪いことをしているのだから、その上この被害者に関き直って暴力をふるうのは、人の道『仁義』から外れている。」

しかも、店主は危険を承知で追いかけている。

脂ののった若者7人に、中年後期がたったひとりで挑んでいるのだ。

「取り囲まれて集団暴行を受ければ確実に半死半生状態になる。それを覚悟してまでも商品を取り返そうとしているこの店主の根性に敬意を表さなければ『武士道』に反する。」

彼らの流儀であつた。

だから逃げる。

7人はひたすら全速力で、早朝の狸小路を曲がり入ると、誰もいないアーケードを目一杯バタバタと走った。

ナガノ、ノグチ、シヨーネンの『パン箱持ち続けトリオ』は、走っている振動でパンをアチコチにこぼしながらも、けっして箱を離さない。

しかし、その緊迫した現状とは裏腹に、皆なぜか爆笑し、キヤーキヤーと女性の悲鳴のように叫びながら走っている。

彼らからは危機感というものが全くうかがえない。その様子からは、まるで『鬼ごっこ』を楽しんでいるかのようである。

捕まったら警察に突き出される可能性があるのを承知でふざけている。

そもそも本物の『武士』であれば、もしその時代にパン屋が存在したとしても、けっして早朝から7人でパンを盗んで逃げるようなセコイことはしないはずだ。

やがてメンバーは皆、四方八方に散つたのだが、店主は逃げ足の遅いノグチにターゲットを絞り、しぶとく追いかけた。

標的となったノグチは、たまつたものではない。着ていたスタジアムジャケットが乱れ落ちそうになりながらもひたすら走った。

肌寒い空気のなかを汗だくになって逃げた挙げ句、空腹状態のノグチは力尽き、抱えていたパン箱をついに捨てて逃げた。

店主は体力の限界も手伝つて追いかけるのをやめ、ハアハア言いながら、捨てられたパン箱と、四方に散つたパンを拾い集めて店に戻りはじめた。

結局、逃げ切った7人はサングラスのお陰で店主に面が割れること無く、一人につき2個だけパンを抜き取ると、店主が見つつけ易い道端にそつとパン箱を戻し、ススキノ駅から始発の地下鉄で皆帰宅したのだった。

そして

「うわぁー、すげえ！でかした！ナガノオオ」

竜二が歓喜して叫ぶと、得意げにナガノは愛車『R2』のボンネットをギョッと開けて見せた。

すると、

「あれ？この車、パンで走るの？」

開けられたそのボンネットの中にギツシリと詰まったパンが竜二の目に飛び込んできたのだ。

竜二の問いかけに、ナガノはいつものオツトリとした口調で得意げに答えた。

「そう…しかも調理パンだけね。」

例の『朝パン』である。

ナガノは『物凄く早起き』して、どこからか横取りしてきたパンを『R2』のボンネットの中にギツシリ詰め込んで登場したのだ。

運転免許と車の両方が手に入った今、以前のように大人数が全速力

で逃げることなく、たったひとり、『朝パン』が余裕で出来るのである。それはまさに彼等にとって夢物語だった。
竜二は思った。

「ああ…ドリーム カム チュルー…。」

『朝パン』は、基本的に菓子パンと調理パンがあり、メロンパンなどの菓子パンとサンドウィッチなどの調理パンでは、調理パンが格段に値段が高く、調理パンだけチョイスすることは、朝の一瞬では高テクニクが必要とされていた。

そういった背景もあって、大抵、菓子パンと調理パンがゴチャ混ぜになるのだが、ナガノはものの見事に、調理パンだけを、リアエンジン構造である『R2』のトランクにあたる、ボンネットに詰めこんでいたのだった。

さらに竜二を感動させたのは、ナガノの大好物のメロンパンを自分の分だけ確保していたのである。

「プフッ」と竜二は笑った。

この、「プフッ」のために、ナガノは早朝から手間暇をかけて、これを仕込んでいたのだ。

『T i c k ' s』のメンバー達は、意表をついた笑いをとる為であれば手間隙をかけての仕込みには努力を惜しまなかった。

それどころか、逆に手間がかかればかかるほど、さらに燃え上がる。

アイドリングしている『R2』のリアハッチから、軽自動車独特のエンジンサウンドが響いていた。

テケテンテンテンテン…。

それは非常に軽く、爽快なテンポである。

「おしつ、さつそくクルージングにいくべやあゝ！」

朝食用にハムカツサンドと焼きそばパンをチョイスし、それを両手に握り締めた竜二が、早速『R2』に乗り込んだ。

見た目よりも広く感じられた車内では、コンソールに後付けされた安物のカセットデッキから流れていた、初代『ザ・ドリフターズ』のスローテンポな曲『アップオンザルーフ』が終わり、続いてアツプテンポな『ザ・コースターズ』の『ヤケティヤック』が軽快に流れたすと、否応なしにハイとなっていく2人を乗せた『R2』は、全開にした窓から入り込む冷たい風を受けながら、大通り公園からススキノを抜けて中島公園を廻り、豊平川沿いの堤防道路を走った。ハイな気分ではあるが金の無い2人は、ガソリン代の為に『R2』の灰皿にある『シケモク』を摘まんで吸った。今日一日のタバコ代を節約しながらのドライブである。

「…シケモクは、味がマイルドになってウマイよなあ…。」

運転するナガオの隣で、痩せ我慢している竜二がつぶやいた。

「あつ、そういえば、あとでマサト君とトールがヤノの家までこの車を見に来るって。だから、いったんヤノん家に戻るわ。」

ナガノがそう話しながら、交差点を慎重に右折している。

テケテンテンテンテン…。

丁度そのころだった…。

- 第10章 -

北海道一の大都市の街とはいえ、札幌の中心街の大きさは、たかが知れている。

まして地下街をうろついていれば、必ず誰かと顔を会わせることになる。

ナガノの『R2』が納車される1ヶ月前、『朝パン』事件から2日後の月曜日、愛車を車検に出したマサトが、その帰りついでにビリヤードでもしようとツールを誘って地下街を歩いていた。

すると、品のよさそうな、聖子カットに膝丈スカートと紺色ハイソックスのハマトラ（正式には横浜トラッドという。タツノオトシゴマークのワンポイントが入ったブランドメーカーが発端の、お嬢様スタイル登竜門）ファッション風な制服の着こなしたイマ風の女子高生が2人、こちらに向かって歩いてくる。

「おっ！結構マブそうなギャルですよー！」

マサトがいつものように目を輝かせた。

「ぐあっ！ユーコだ。」

前方の二人を見た途端、ツールはそう言って急に立ち止まると、視線を右斜め下に落とした。

「ユーコ？」

「うん、俺のレコ（彼女）。」

トールはそう答えただけで、右斜め下を見つめたきり決して顔を上げようとしなない。

実は3年前、すなわち竜二と知り合う前から、トールには付き合っている彼女がいる。

『ノジマ ユーコ』という、同じ中学の同級生で彼の実家の近所、狸小路六丁目にあるタバコ屋の娘、生まれつきの都会っ子である。トールはメンバーが集まる機会に全くユーコを連れることはなかった。

ユーコがいると、羽目を外せないからである。

「お前、レコなんかいたのかよっ！どっちさ？」

「左。」

「くそー、やっぱり俺のタイプの方かあ。」

希望を失ったマサトはうなだれた。

それと同時に、右斜め下に視線をやっているトールに気が付いた品のよさそうな女子高生2人の左側の方が、足早でズンズンと近づいてくる。

「よお。」

ズンズン近づいてきた左側に、観念して右斜め下から視線を上げたトールが挨拶をすると、いきなり、

「電話しても家にいないと思ったら、また遊び歩いてんのぉ？」

怒り気味にそう返事が返ってきた。

「ユーコ、マサト君。マサト君、ユーコ。えーっと、それと彼女は……」

双方を紹介しているトールがたじろいでいると、

「ノリコっていいです。よろしくー。」

ちよつとキツネ目でウケ口の右側が、マサトに上目遣いで熱視ビームを浴びせながら、そう答えてきた。

百戦錬磨のマサトは、ノリコのその『自分売り込みモーション』に、当然気がついてはいたが、全く反応しない。毎度のことで慣れているのと、なにより全くタイプではないのだ。マサトは、自分のタイプではない相手となると、ドライアイス以上に冷酷になる。それよりもユーコの存在が気になって目が離せない。

「おふたりさんは、どちらへ行かれますのぉ？」

ユーコが嫌味な口調でトールに問うと、いきなり

「どう？サ店でもいかないかい？」

マサトが2人の会話に入ってきた。

「えっ？マサト君、プールいらないのかい？」

トールが目丸くしてマサトに聞くと、

「えっ？大の男が2人でプールにいくの？もしかして丸山公園にある厚生年金会館の温水プール？」

今までマサトに視線が釘付けとなっていたノリコが、急に驚いた顔をしてトールに目を向けると、そう早口で攻めてきた。

「アハハ、プールってねえ、ビリヤードのことなの。トールちゃんに言われたとき、私も最初、同じこと言っちゃったわよ。ほら、ビリヤードの台って、ちっちゃなプールのみたいでしょ？そこからそう呼ばれるようになったんだってえ。」

ユークは自慢げに答えると、

「ねえ、裏参道に『バナナボート』っていうサ店がオープンしたらいいの。私、行ってみよう。」

トールに手を合わせて嘆願した。

「よし！行きましょ行きましょ！『バナナバナナ』って店に！ほれ！いきますよ。」

お願いされたトールではなく、連れのマサトがいきなりそう切り出すと、なぜか彼はハイテンションになって歩きはじめた。

そして

「うわあー、すげえ！でかした！ナガノオオ！」

ナガノが竜二の家の前で『R2』を披露している頃、一方では、トールがマサトの部屋のドアを開けていた。

実家の隣ではあったが、すでに一人暮らしをしているマサトのアパートには、いつも鍵がかかっていない。

この日は、トールがマサトのワーゲンと一緒にナガノの『R2』を見に行く約束で、本来はマサトがトールの自宅にピックアップしに行くことになっていたのだが、トールが氣遣って早めにマサトのアパートまで出てきたのだ。

「マサトくん、ヤノントコ行く前に朝メシでもどうだい？」

そう言いながらトールが部屋に入っていくと、次の瞬間、コンビニエンスストアで気を利かせて買ってきたサンドイッチと缶コーヒーの入ったビニール袋を床に落とし、凍りついた。

ベッドで青ざめているマサトの隣に、ユーコが蒲団で隠れていたのだ。

トールの登場があまりにも咄嗟だったので、ユーコが隠れるタイミングが遅く、トールの目には慌てた彼女の顔がハッキリと焼き付いていた。

「トッ、トールじゃねえか、マイツタなあ…、あれ？俺が迎えに行くて言ってたべさ…！しかもマイツタなあ…。」

マサトがシドロモドロとなつて動揺していると、トールはそのままその場でドリズラージャケットのポケットに左手を突っ込み、タバコをユツクリと取りだして口にくわえると、右手でホワイトジーンズのポケットから抜き出したジッポーの風防をカチャッと開け、これまたユツクリと巨大な炎でタバコに火をつけて『フ』と深く吸った煙を口からユツクリ吹きながら、まことに穏やかな表情で言った。

「いつからだい？」

「えっ？」

青ざめ引きつった表情をしたままのマサトが、ツールに返した。

「いつからだい？」

まったく穏やかに、お釈迦様のようなツールがもう一度聞くと、ユツクリとマサトが蒲団から出てきた。

かろうじてパンツは履いている。

何も言わず、ツールと同じくタバコを手に取り、ジッポアの風防をカチャッと開けると巨大な火をつけ、『フ』と深く吸った煙を吐きながら、なんとか表情を乱さずに答えた。

「1ヶ月くらい前によお、彼女の友達と4人で『バナナなんか』
つつーサ店行ったの覚えてるか？裏参道の。」

「ああ、マサト君がはじめてコイツと会った時だべさ。」

「ああ、あの時、店で盛り上がったつしよ？っで、あの後から、もう一人のナントカつつー女がしつこくてよお、っで、彼女に頼んで俺たち密かにデキてるっていうことにしてもらって諦めさせたんだけど、その相談に乗ってもらった御礼ってことで、ちょうど俺の車が車検終わったから、ドライブ連れてってやって…んで、なんかこう…。」

「マサト君、コイツのことタイプだって言ってたもんなあ…、まっ、いいや…、んー…、かえってよかったよ、コイツ、こんなヤリマン

だっただけ教えてくれたんだから…。だけどマサト君はいいなあ、自分のタイプだと思ったら最後はやっちゃえるんだもん、羨ましいよ…。ヤノんとこ行くつしょ？俺、表で待ってるわ。」

そう言いながら部屋を出て行くトールの背中を、下を向いてうなだれているマサトの背後から見つめていたユーコが呟いた。

「トールちゃん、相当怒ってる…。」

「わかるのか？」

「前にねえ、トールちゃんが言ってたことがあるの。『俺、人のことコイツって言う奴、嫌いなんだよな。』って。『俺、先輩からコイツコイツって言われてきて、なんか相手を見下した言い方で、なまら嫌だったんだ。』って。だから私、トールちゃんの口からコイツって言葉聞いたことなかったのね。だけど、さっきは私のこと、コイツコイツって呼んでたでしょ？男っぽかったなあトールちゃん…もう手遅れかあ…。あのさあ、トールちゃんねえ、アナタ達と遊ぶようになってから、何かが変わったんだよねえ…。」

諦めとも取れる、なにか吹っ切れたかのような穏やかで明るい表情をしてユーコは答えた。

「なんだよ、トールはいままで優し過ぎて物足らなかったってかい？」

「んー、内緒。」

「…まったく、優しくしてやんなかったら怒るし、優しすぎたらこんなこと言うし、オナナの頭ん中は、本当にワカラン。」

ぶつぶつ独り言を言いながらそそくさと服を着終えたマサトは、それどころでは無いとばかりに部屋を出て、駐車場に停めてある自分の車に近づいていくと、トールがフロントバンパーに足をかけ、中腰でタバコを吸っているのが見えてきた。

向こう向きに駐車されているワーゲンのリアガラスとフロントガラスを通したトールの後ろ姿を良く見つめなおすと、その背中が微かに震えている。

その姿を見てしまったマサトは、一度そつとアパートに戻り玄関のドアを開けると、すでに服を着終えたユーコが、トールの落としたサンドイッチと缶コーヒーを冷蔵庫に入れていた。

「えーっと、あのよお、ワリイけどこれからトールと一緒にヤノんところ行かなくちゃなんないんだわ。だから、テキトーに帰ってくれねえかなあ？俺んち普段鍵かけてないからよお、そのまま出てっていいから。」

そう言いながらスタジアムジャケットを手にとって「じゃあ。」とだけ挨拶し、改めて駐車場に行ってみると、今度は「遅い」とばかりに、ワーゲンの横にもたれ掛かったトールが咥えタバコで立っていた。

マサトは「わりいわりい」と、とぼけて言いながら車に乗り込み、助手席のドアロックを解除してやるとエンジンをかけ、暖機のためにアイドリングしていると、ドアを開けて乗り込んできたトールが普段と変わらぬ口調で、

「ところでさ、ノリコって女は結局ヤラなかったのかい？」

タバコに火をつけていたマサトが、一寸考えて、

「ノリコオ〜？誰だっけ？…おお〜、あれかあ！実は、あんまりしつこかったからよお、こん中でヤツて、そのあと大浜（海水浴場）に捨ててきたんだわ。」

「えっ？こん中でつて、この車ん中でかい？」

「そう。」

「…っで、おまけに大浜まで行つて捨ててきたつてかい？」

「んー、わざわざ大浜に捨てに行つたわけじゃなくてよお、平岸駅で待ち合わせして、その辺ドライブしてホテルにでも寄つてイッパツやって帰るつもりだったんだけど、そんな時、車ん中でシヨーンネンが編集した『鬼の考え方』って名前のカセット掛けてたんだわ。」

「ああ、それってフィアデルフィアソウルばかり入ったテープだ、俺も貰った。」

「そしたらよお、あの女『つまんない』ってぬかしてよお…、最近流行つてる歌手のテープつつたら『シャネルズ』くらいしかなくてよお、それ流したら、そんなの『トゥナイト』って曲を聞いた途端に『海連れてつて。』って又かしやがったんだわ。…っで大浜までドライブした拳句に『休憩代のお金持つてないよ。』って言い出しゃがつてよお…っで、じゃあここでつて…あの女、マグロでよお『ナニやってんの？』みたいな顔しやがつて…俺だつてイヤイヤだったのに何様のつもりだ、この女？つて思つて…っでヤツた後、なんかケツきた（頭にきた）から『オマエ歩いて帰れ。』って置いてきたんだわ。…だけどバス停があつたのは確認してたしよお…。」

『…マサト君はホテル代も出し渋るんだなあ…。』そう思いながら、

トールが聞いた。

「今月の事かい？」

「えーっと、『バナナなんか』に行ってからそんなに経ってないから、先月かなあ？」

「どっちにしろ、シーズン前の大浜にバスが何本走ってるんだろう？　しかも何処行きのバスが走ってるのかなあ？」

「えーっと、…知らねえなあ…。」

「でたあーっ、マサト君の得意技！　なまらだわあー！」

2人は腹を抱えて笑った。

しかし本来は笑うところでない。

女子高校生とカーセックスした上、車で一時間以上かかる砂浜に置き去りにしてきたのだ。

『…残酷といえば残酷だ。親が知ったら鳴くぞこりゃ…。』トールは考えていた。

しかし、そんなトールもつい先ほどまで、『3年間付き合っている自分の彼女が、仲間であるこの男とアッサリ寝ていた。』という残酷な事実を目のあたりにしていたのだ。

そんなことが起きたというのに、2人とも何も無かったかのように笑っている。

「なんかねえ、部屋で見たあんなシーンってどっかのドラマで見たことあったんだわ。…あんなこと俺だったら絶対、相手をぶっ殺し

ちやうだろうと思つてただけど、いざ自分が食らつてみると、あれー？つてくらい客觀的に見れたんだわ。…ぜんぜん頭に血が上らないっつーか…。俺ねえ、ヤノと知り合つてマサト君たちなんかとツルむようになつてから、ユーコというより、皆というほうが、大事な時間を過ごしている気がしてきたんだよねえ。ユーコとマサト君、どつちか比べて、マサト君が勝つちまつたんだわなあ…。」

「ホモだべや、そりゃ。」

そう言いながらもマサトには、愛車の窓越しに見た、背中を震わせたトールのうしろ姿が自分の脳裏にしっかりと焼き付いて離れなかった。

スマンッ！トールッ！

マサトは心の中でトールに何度も詫びた。

ユーコに手を出してしまったことを、今までの人生で一番後悔していた。

『コマシ』『たらし』と呼ばれ、湾曲した育ちから女性に対して冷酷で感情を一切持たず、自分にとってはただの道具としか思っていない無秩序男は、拳句の果てに仲間の女にまで手を出す軽率な行動をとつてしまった代償として、仲間はもちろん、人間関係に必要不可欠な『仁義』の心までも失つた上、再び『仲間はズレ』として、ただ独り寂しい毎日に逆戻りするところだった。

しかし、「彼女に優し過ぎただけでなく、マサトにも優しすぎる男」トールによって、間一髪救われたのである。

- 第11章 -

納車から1ヶ月、ナガノの『R2』は『Tick's』の宝物となっていた。

テケテンテンテン…。

「よっこらしょ。」

5月になって、やっと車の窓を開けてのドライブが快適になってきた頃、札幌市の名物ともいえる路面電車に並行して走る『R2』から、トールが電車に向かって尻を出した。

トールは、映画『アメリカングラフィティ』で一瞬登場した悪ふざけのシーンを、一度真似てみたかったのである。

運転席の後ろ、リアサイドウィンドウはわずかながら開閉する。

トールは尻を押し付けて、そのわずかに押し開けた窓の枠に引っ掛けた状態のまま、器用にその姿勢をキープしていた。

トールの尻がウィンドウガラスにピッタリと張り付いた状態で『R2』が並走していると、路面電車に乗った女子高生の一人が気がつき、やがてキヤアキヤア言いながらギャラリーが増えはじめ、ついには乗車客のほとんどが『R2』が走る左側へ移動して見物するまてになっちゃった。

大流行中の『ブリッツ』言葉「やだぁうそぉかわいいい」の中の「やだぁうそぉ！」は車内で連発されたが、けっして「かわいいい」の「か」の字も聞こえてはこない。

年寄り達は一度それに目をやると、不愉快そうにして無視するか、又はあきれた表情をしていたが、ちょうど下校時間とあって、この

ハプニングに大勢の女子高生は両手で口を覆いながらも目を輝かせ、笑いながら見入っている。

尻丸出し男は得意げだ。

しかし、信号が赤に変わり、電車のとなりで一緒に停車してしまった。

当然、トールも尻丸出しのまま停止している。

中途半端な前傾姿勢にも体力的限界がきていたが、ここで止めるわけにはいかない。なぜなら、ここで尻を下ろせば、その拍子に今度は顔がバレる。

「ナガノオ、この信号、無視して行っちゃってくんない？」

そうはいかない、ナガノだって取ったばかりの免許は命に等しい。信号無視は引かれる点数が大きいのだ。

こうなると引くに引けずに肛門までさらけ出したままのトールは、女子学生にジックリと観察され、笑われた。

『…多分、一度でこれだけの女子高生に自分の肛門を披露した男は、地球上でトールだけだろうなあ…』

ナガノは運転席から冷静に、焦るトールを眺めながら、ひとり感心していた。

もし警察に見つかれば公然わいせつ罪となって、信号無視どころの騒ぎではなかったのかも知れない。

しかしその後、バックシートの背もたれに二人が座ってリアウインドウに2つ尻を並べてのドライブは日常となり、しまいにナガノ、シヨーン、トール、竜二の4人が、大真面目な表情で素っ裸にネクタイだけを締めてドライブするまでにエスカレートしている。

そんな折、中間テスト期間の1週間が終わった土曜日。

「『R2』に乗って『狸小路二丁目』の映画館へ『ポーキーズ』を観に行こう！」

竜二の企画に、マサトだけが都合が悪く参加できなかったが、他のメンバーとヤマ、ノグチは話に乗った。

『ザ・ドリフターズ』の『サタデーナイト アット ザ ムービース』をはじめ聴いてから『映画館は土曜日の夜に行くもの』と、なぜか彼等では決まっている。

映画館へはナガノ宅からは車で30分かかる。

しかし『狸小路二丁目』までに、通称『ナンパ通り』と呼ばれる『札幌駅前通り』を走ることになる。

この通りは土曜日ともなると、「ナンパされ目的」の女性歩行者が大勢出没し、意味も無く浮遊するのだ。

短いドライブ時間ではあるが、内容は何処を走るよりも遥かに濃い。この日もさっそく2人組の高校生らしい女性が、声をかけてと言わんばかりに歩いていった。

テケテンテンテンテン…。

「ねえーっ、どこ行くのー？乗らなーい？なんかしちゃうかも知れないけどおー。」

ナガノが例のおっとりとした口調で車の窓を開けて声をかけた。

このおっとり口調が、実は結構な効果をもっていて、マサトレベルまでには程遠かったが、ここにきてナガノもナンパ打率が右肩上がりになってきている。その実績は、メンバーから『今世紀最大の成長株』と捧まれる程となっていた。

「そら来た！」とばかりに、声をかけられた2人は顔をやや緩めたが、なんとかクールを装っている。

「えーうそおー、どうしょつかあ？」

片割れが相棒に、いつものサインと思しき声をかけると、相棒も「えー、どおしよかなあー」と、これまたお決まりの返事を言いながら、ナガノの車に目を向けた瞬間、口をあんぐりと開け、呆然として固まった。

「どうしたの？」と片割れも車を見ると、大人4人でも無理がある軽自動車に、なんと『Tick's』のメンバー6人と、ヤマノグチの計8人がギョウギョウ詰めに乗っていたのである。

車は重さでペシャンコとなり、おまけに皆の顔は窓にべったりと張り付いて、まるでストッキングを被った銀行強盗の様に醜い。

ナガノ以外に唯一車を所有しているマサトが参加しない夜は、何度か『Tick's』のメンバーは交通費を浮かすため、定員オーバーで『R2』に乗り込んでいたが、さすがに8人乗りはこの日はじめてだった。

暴走族が一世を風靡し、警察やグループ同士の抗争で社会問題となっている一方で、彼らは軽自動車に8人乗ってナンパをしているのであった。

呆れて行ってしまった2人組を「なんだよ、嫌な感じだべさ」とやり過ぎし、交差点で信号待ちをしていると、『R2』のとなりで、やたらエンジンを吹かしている車に気が付いた。

『ブォーン、ブッブツ、ブォーン！』

「おつ、ヨンメリ（ケンメリスカイラインの4ドア）が挑んでるぞお。」

サイドリアウインドウに顔を張り付けながらヤマがそう言ったが、当の、紫にペイントされたスカイラインは『R2』に決して挑んでいるのではなく、横断歩道を横切っている、先程ナガノが声をかけた2人組の気をそらせる為の空吹かしだったのである。

「張るかい？」

「いいぞお〜！いけえ〜！ナガノオ〜！」

ナガノの問いかけにヤノがそう答えると、『R2』も空吹かしで挑発した。

『テケテンテンテンー！』

その360ccの軽すぎるエンジン音に気が付いたパンチパーマが、『R2』をちらりと見た瞬間、窓の向こうで爆笑している。

信号が青になった。

『ブンブン、ブオー！』

『テケテケ、テンテンテンー！』

暴走族の2人が乗った『スカイライン2000GT』と、アイビー8人が乗った『スバル360R2』の『シグナルグランプリ』が始まった。

「いけえー！ぶつちぎるんだあー！全開バリバリだあー！キャアー

キヤー！」

8人は大声で騒ぎ興奮していたが、まったく相手にならないままスカイラインの姿は小さくなっていった。

実力の差を実感し、向かった映画館裏の小さなスペースに車を止めると、軽自動車からゾロゾロと皆が、『降りてきた』というよりも、『出て』きた。

その様はまるで、車で国境を越えてきた不法入国者のようである。

新着映画『ポーキーズ』を観終えた8人は、今度は4人が『R2』に乗り、残り4人は歩いていつもの『スピナッチ』へと向かった。映画館から二丁（200メートル）行けば『スピナッチ』なのである。

『スピナッチ』では、都会的な店の雰囲気とは似つかわず、お客が席につくとオシボリを出すという、心和むサービスをしている。

さっそくヤマが、そのオシボリを他のお客に投げては知らない顔をしてトボけるイタズラをはじめた。

オシボリの標的は女性客、それも気に入った女性客に投げてはチョッカイを出す。

ヤマのその行動は、なぜか嫌がられることなく、逆に投げられた女性からは「いやだあゝもうゝ」と喜ばれる次第である。

そつして声をかけるキツカケをつくるのだ。

通常であれば、非常に手荒なワザすぎて苦情が起こるはずなのだが一度もそのような経験がない。大抵は、自分に手を振るヤマの姿を見つけると、うつすらと表情が明るく変わる。

それは母性本能をくすぐるものなのか、呆れて笑って許せてしまうのかは、メンバーにとって永遠の謎である。

この夜は、2投目が外れて男性客に直撃してしまった。

「あつ、ヤツクイ、ヒュ〜ヒュ〜」。

ヤマは、音楽になっていない口笛を吹きながら宙を見つめて全く知らない顔をするという、みえみえのトボケ方をしている。

おしぼりを頭にくらった男性客は苦笑いしながら水割りを飲んでいった。

「あゝあ、あの男が襲って来たって俺達助けてやんないからなあ。」

ノグチはそう言ったが、ヤマが謝りに行く気配は一向にみられない。いずれにせよ、被害にあった男性客だってモメゴトにはなりたくない。

結局これに懲りずにいつまでもヤマの『おしぼり投げチョツカイきっかけナンパ』が続くのだ。

ヤマは30歳半ばの女性達にも絶大なる人気があり、この年齢層、つまり熟女のツボをつかむ絶妙なセンスを持った会話で相手を盛り上げると、メンバーを残して先に店を後にすることも度々みられ、なぜかアルバイトもしていないのに金を常に持っていた。

同じ女好きでも、マサトの場合はモデル並みの容姿に、それとはアンバランスな軽いノリを武器にして、主に同世代までをターゲットにしている。

一方のヤマは、子供のようなイタズラをきっかけに、キレのある流し目を武器としたクールな顔つきと、それをなおも強調するかのような低く甘い声で、しつとりと年上の女性を攻めていく、正反対な

攻撃パターンをもっていた。

結局、両極端なマサトとヤマのおかげで、メンバー達は幅広い年齢層の女性たちと交流を持てるという恩恵を受けている。

ついに竜二がメンバー達に東京行きを打ち明けたこの夜、男性客にオシボリを直撃させてしまったヤマの収獲がないまま、これといって竜二の発言にショックを受けた素振りを見せていないメンバー全員が、少々拍子抜けしている竜二と共に店内の階段を上り外に出た。そして外に出たその途端、突然全員が円陣を組み、

「ジャア〜ンケエ〜ン、ホイッ！」

何の打ち合わせもなく、いきなりジャンケンをする、グー、チョキ、パー全部が出て皆息を呑んだ。

「アア〜緊張するうー」

ナガノが体を震わせた。

「あーいこーで、シヨッ！」

一瞬沈黙があつて、今度は、パーとグーの2種類だけが目に入り、みんなが沸いた。

パー組は助かり、グーを出したノグチ、トールの敗者が2人でジャンケンとなった。

「ジジ、ジャア〜ンケエ〜ン…ホイッ！」

非常に力が入ったジャンケンなのは誰もが見て取れた。まるで命がけの勝負のようである。

はたから見れば、ジャックナイフが登場していてもおかしくない雰囲気だ。

今回は一発で勝負がついた。

ノグチが負けた。

こういう大舞台では、ノグチが必ず負ける。

「また俺かよゝ、先に逃げちゃ駄目だぞ！しっかしみんなジャンケン強えゝなあ。」

皆が強い訳ではなく、実はノグチが間抜けなのである。

ノグチは緊張すると冷静さを失い、ついチカラが入ってグーを出してしまう。

この実態をメンバー達は知っていたが、本人はまったく気付いていない。

ノグチが小声でブツブツとボヤキながら店のドアを開け、大きく息を吸うと、階段のエントランスから店内に向かって突然、『ぎやああ！！うわあああ！』と、まるで誰かに襲われているかのような、聞いている方がドキッとするほどの大声で悲鳴をあげた途端、全員が全速力で逃げた。

最初はこのゲームを度胸試しのようなもので始めたのだが、結局やらされるのはノグチばかりで、彼が担当者のようなものである。

しかし、このように迷惑なことをしても、彼らは何事も無かったかのように、又『スピナッチ』に来店する。

性懲りもせずノコノコやってくる彼らも彼らなのだが、そんな彼らを店のマスター自身も黙認していたのだ。

『Tick's』の存在は、店でくつろいでいるお客には誠に不愉快

快な事この上なしの筈のだが、当のお客達が楽しみにしていることを知った、この店のオーナーでもあるマスターは、逆に客寄せパ
ンダとして『Tick's』を利用していたのである。

「一度なあ、ナガノがふざけて階段を降りていたときに、足を踏み
外して、階段を転がり落ちながら入店したことがあったんだわ。背
中を強く打ってなあ、本人は呼吸困難になっているのによあ、受け
狙いかと勘違いされて店じゅう大笑いになって拍手されたこともあ
ったなあ。ヤノはヤノで、『クアーズ』っていうアメリカのビール
を『クールス』だとはっかり思っていたし……。」

マスターは『Tick's』ファンの客に、彼等が店で起こしたエ
ピソードを自慢げに話すほどだった。

しかし、そんなマスターも、

「あいつら挙句にゴミ収集用のでっかいポリバケツを階段から転が
し落としてきた事があってなあ、満卓に近い店内を騒然とさせた時
があったんだわ。そんな時はさすがに『それだけはしてくるな。』
って、忠告したべさあ。」

という経験もしている。

『スピナッチ』のエントランスでノグチが顔から火を出しながら叫
んでいると、店の前にペパーミントグリーンのワーゲンビートルが
横付けしてきた。

「あつ！マサト君のワーゲンだ！」

エントランスのドアを開けて叫んでいるノグチを独りだけ残し全速
力で逃げたはずのメンバーが、10メートルも行かない場所で立ち

止まったまま横付けされたワーゲンを見つめた。

この夜は『R2』に8人が乗りこんで来た為に帰りはどうするかを考えていたところ、マサトが絶好のタイミングで登場したことで皆が沸いたのだが、ワーゲンのドアが開き、むっくりと出てきたのは、メンバー達が全く見たことの無い顔の男だった。

「あんな色のビートルって、他の奴も乗ってるんだなあ……。」

トールがそう言つと、

「あれ？」

目を凝らして、その男をもう一度よく見てみたショーネンが、

「マサト君！どーしたんですぅー?!」

驚きながら走り寄って行つた。

暗がりではボンヤリとしか映らなかった顔をよく見ると、そこにいたのは知らない男ではなく、顔面をボコボコに腫らしたマサトだったのである。

両マブタが腫れに腫れて、本来パッチリとした瞳が一本線と化している。

タラコのように肥大しアヒルのようにパクパク動く唇から、いつものマサト声が出てきた。

「いやあ、ついに罠にハマったんだわ……。」

前日、仕事を終えたマサトが『セブンセブン』に顔を出してみたが誰も居らず、しかたなくビールを飲みながらマスターの『バックギ

ヤモン』相手をしていると、そこへ3人組の女性客が入ってきた。

「あ、どーもおかえりー。」

マスターがそう言って、

「さっき一度顔だして、サッサと出てっただわ。多分、客で誰かを探していたんだろうなあ…。」

そうマサトに伝えると、マサトは彼女たちを見るやいなや目の色を変えて、

「あー、こんちわー！なしたのさあー？3人でえー。」

即効で声を掛けた。
すると、

「えー！マブイわあ！オニイサアン！なんで一人でいるのぉー？えー、チョットオ！マブインでしょー！」

『3人のなかのひとり』が物凄く感激しながらマサトを見つめている。

まるで漫画に出てくる、キラキラとした瞳をしているかのようにである。

「あれ？俺、アンタどこかで見たことあんなあ…、あのさあ、あれ、あのデイスコ、うーんとあそこ、『カルチェラタン』なんて行つことない？」

適当だった。

マサトは気に入った相手には必ず『どこかで見たことがある。』と言う。

「えー、行ったことないよ！だけど、どーでもいいっしょーそんなことおー、このオニイサン、タイプウー私いー！」

『3人のなかのひとり』は、もはやマサトにメロメロサインをいだけ思い切り存分に発射している。

「いやいやあーまいったなあー、んじゃ、行くかいー？シッポリとおー！」

さすがの百戦錬磨マサトでも、彼女は御目にかなったらしい。

瞬間で誘ったが、この日は彼女の連れと一緒にいた都合上、翌日に待ち合わせの約束となった。

「明日、7時半に中島公園駅の前で…いい？」

彼女からの誘いに、

「忘れんなよー！絶対いくからな！」

マサトはそう答えると、格好良く『セブンセブン』を後にした…。

…そして、

「ん？なんだオメエらあ？」

翌日午後7時半、マサトが時間通り『中島公園前駅』に着き、先に

来ていた『昨夜の彼女』に走り寄っていった途端に、パンチパーマの暴走族数人に囲まれてしまったのだ。

取り囲んだ男たちにマサトがそう言つと、連れていた『昨夜の彼女』が、サツとその男達側にまわった。

「んー？なんだあ？もしかして、ヤツクイことになつかあ？俺はあつ……」

その瞬間、マサトの『弁慶の泣き所』に木刀が炸裂し、その余りの痛さに飛び上がって倒れた。

丸くなって痛がっているマサトの顔面に今度は蹴りがまともに入ると、一瞬にして鼻血が噴出し、慌てて両手で鼻を押さえたが、その両腕を二人に抱きかかえ上げられると、ミゾオチにパンチが入り、余りの苦しさの前にめりになったまま、止めてあつた車の後部座席に投げ入れられた。

さらわれたのである。

「何やらヤツクイことになっちゃったようだなあ、包茎くうん！」

運転役の男がそう言いながら背中では薄ら笑っている。

10分ほど経った後。

「うらあつ！うらあつ！」

いったい何処なのか分からない場所で車が止まり、マサトは引きずり降ろされると、オモチャのように数人の男たちに遊ばれていた。

「顔の上でオマエらの好きな『ツイスト』踊ってやつかあゝ？おら
おらあゝ！」

もうマサトは反応しなくなっていた。やられるがままである。

「オマエ半殺しにして、コンクリ詰めて石狩湾に沈めちゃっからよ
おゝ！」

「タモツさん、一回やったんすよねえー！それえゝ！」

激しい痛みを通過して、もはや何も感じなくなっではいたが、なん
やら物騒な会話はかろうじて把握できたマサトは、

「…もうやめてくれ…。いてえよ…。」

虫の声でそう言いながら、

『…こいつ、ほんとにオレをぶっ殺して沈めるってかあゝ？オレは
絶対に死なねえぞ、死んでたまつかよ…。これからもつとカツコ
イイ素敵な未来の人生が、俺を待ってるんだからよ…。』

マサトがそう思った直後、^{けいつい}頸椎に蹴りが入って気を失った。

以前、大浜海水浴場に捨てられたノリコが女友達に泣いて話したと
ころ、怒ったその女友達が本人自らマサトを誘き寄せ、待ち伏せし
ていたその女友達の彼氏と仲間の暴走族達から『袋』にされたので
ある。前日の『セブンセブン』からすべて計画されていた罠であっ
た。

当のノリコは、怖気づいて現場には姿を現していない。

気がつくと、マサトは『大浜海水浴場』に捨てられていた。

見るも無残な姿でバスを待ち、見るも無残な姿で地下鉄に乗って『中島公園前駅』まで来てみると、拳句にマサトの車は駐車違反で既にレッカー移動までされていた…『泣きっ面にハチ』である。

「どうする？マサト君、そいつらの顔、覚えてるか？なんだったら顔を覚えている奴らだけでも、居場所を調べて一人ずつ襲撃するかい？」

集団から暴行を受けた報復として、そこに加わった人間一人ずつ、後から集団で待ち伏せをして敵討ちをするのが、不良世界の一般常識である。トールがそう提案を試みたが、

「んー、いや、俺が一人でジワジワやるわ。あの連中の中で、見たことある奴が2人いたから。もし皆で襲った拳句に戦争になったらヤックイッしょ。そんなことより、しばらく気が付かなかったんだけどよあ、車に乗ろうとしたら『こりゃ肋骨ヒビ入ってんなあ、苦しいべや』って思ってたよあ、目は目で、まぶたがこんなになつて前が良く見えないし、でもって『だれか運転してくんないかなあ？』って寄ってみたんだわ。」

マサトは自分の状態を、まるで解説者のような口調でひょうひょうと説明している。

「…つつてもなあ、まだみんな免許もってないっしょあ…。」

トールが答えると

「俺、運転するわ。パクツた車で何回も運転してるし、この時間は車あんまり走ってないから大丈夫っしょあ。」

名乗りを上げたのはタイショーだった。
普段は目立たないが、こういう時になると『ジャンヌ ダルク』の
ように彼は登場する。

「大丈夫かよお…酒飲んじやってるし、無免許だし、マサト君はこ
んなツラだし、マッポにとっ捕まったら相当しんどい事になるべさ
あ。」

心配しているトールにタイショーが言った。

「なんのための仲間さ？こういう時に助けしないで、いつ仲間を助け
るんだい？俺も助けてもらってるから恩返しだべさ。」

「マサト君、タイショーを助けたことあんのかい？」

トールがマサトに聞いたが「知らん。」と首を振っている。

「ほれっ、乗りなつて。いくよ。」

マサトと帰宅方向が一緒のトールとショーネンが、恐る恐るワーゲ
ンに乗り込んだ。

「マサト君、病院行かなくていいのかい？19丁目の救急病院だつ
たらやってるんでないかなあ…。熱でてると思うから寄ってみるか
い？」

そう言いながら、タイショーはクラッチを踏み、ギアを入れ、アク
セルを踏んだ。

「ブルルルルウーブオーッ！…ガクッ！」

いきなり物凄い轟音が、静まりかえった早朝に近い深夜のススキノに響きわたったかと思うと、その直後、急に「ガクッ」と、まるで臨終で息絶えるかのごとく、ワーゲンはモノの見事にエンストした。

「いやいやあ、このブーツの底が厚くてよお、足の裏の感覚がないんだわ、カンカクが。」

ついさつき、かつこよくセリフをキメたタイショーとはギャップの差が大きすぎて、笑う余裕すら皆もっていない。

頭をかきながら真っ赤な顔をして言い訳しているタイショーを、真っ青になった同乗者3人が車の中で固まって見つめている。

「病院は行かなくていいよ、そのまま俺んち帰ってくんないかい？ みんな泊まればいいっしょ。ああ、口ん中がアチコチ切れててイテエイテエ。」

今はなるべく最短コースで直帰した方が、病院へ行くよりも遥かに自分の体には良い気がしてきたマサトがそう答えた。

「たすけてえ〜っ！ たすけてえ〜っ！」

後ろに座ったショーネンが窓をドンドンと両手で叩きながら、泣きそうな顔で叫んでいる。

そのショーネンの叫び声は車内で大きく響くだけで、締め切った窓にさえぎられ、外にはほとんど聞こえてこない。

その残酷な光景が、外で見守る5人の目に、尚いつそう悲劇的に映った。

しかし一方のタイショーは真剣そのもので真っ直ぐ前しか見ておらず、周りの状況を全く把握していない。

5人は満天の星空を見上げ両手を合わせながら、自分がショーネンのような目に遭わなかったことを神様に感謝したあと、この悲劇的な光景を引き続き固唾を飲んで見守った。

「あつ、ギアがサードに入ってた、これじゃ進まないわなあ。」

いちいち言い訳がましく状況を説明しながら、今度は間違えなくローギアに入れたタイショーが、外にいるナガノの指示を受けながら、再び恐る恐るアクセルを踏み、クラッチペダルをこれまた再び恐る恐る上げていくと、

「ブロロロロオ〜」

ユツクリとペパーミントグリーンワーゲンが動きはじめた。

「おお〜、進んだぞ！進んだ！」

ノグチが丸い目を更に丸くして、隣りで何のリアクションもないまま眺めているサカガミを抱きしめ感激している。

次第に調子が出てきたのか、タイショーの運転もスムーズになったようで、息を止めて見守っていた竜二とヤマが我に帰ると「がんばれよーっ！死ぬなよーっ！」と手を大きく振りながら見送った。

進んでいくワーゲンのリアウインドウに、相変わらず泣きそうな顔で後ろを向き、こちらを見つめ、両手でウインドウを叩きながら何かを叫んでいるショーネンの姿が小さくなっていく。

「なにか、連れ去られていく丁稚奉公の親になった気分だなあ。」

一段落して竜二がタバコに火をつけながらそう言つと、続いてノグ

チが言った。

「赤い靴うゝはあくいてたあくおおんなあのおこゝって歌あつたなあ、シヨーンも『異人さんに連れられて行っちゃった。』つー感じだな。」

「えっ？あれって、『ヒイ爺さんに連れられて』でないの？」

ナガノがユツクリと答えた。

「あれ？どっちだあ？」

「『ヒイ爺さん』がなんで登場するんだよ、『異人さん』だべさ。」

「それをいつたら『異人さん』だって突然登場して変でないのかい？」

この瞬間から、見送った5人の頭の中は、もはやシヨーンら4人の存在が微塵も無くなっている。

あれだけ同情していたのにも関わらず、今は「はたして正解は『異人さん』なのか？『ヒイ爺さん』なのか？」という問題の方が、仲間の生死をかけたドライブ以上に5人にとって重要な問題となっていた。

先ほどもでの、『半殺し寸前』の目にあつたマサトの姿や無免許にも関わらず運転を買って出たタイショ、そして、彼を信用し危険を承知で命を預け同乗したツールとシヨーンらの感動的な出来事は一切無かつたかのように、「どっちだったか、帰ったら個人個人で調べてみよう。」という、誠に爽やかな結論となつて、竜二を除く4人が何事も無く『R2』に乗り込むと帰路についた。

「恩返しって、俺、タイショーに何かしたっけ？」

一方、その後は順調な運転のタイショーに、顔面がグローブのようになったマサトが、腫れた唇のためにハッキリとしない言葉で問いかけた。

「ヤノだよヤノ。2回恩があるんだわ。ひとつは『ダーティエンジン』とモメそうになった時、手打ちにしてくれてよお。もうひとつは『Tick's』に誘ってくれた時。『仲間になっってくれ。』って言われて、『仲間』って言葉を久しぶりに聞いたんだわ。ジーンときたねえ。あの時は。しかも血を交わすまでするとはねえ…。野球チームって感じじゃあねえなあ。俺が前にいた『スリッパス』とはゼンゼン違うんだよなあ。気取りのない『家族』みてえな。本当は、ヤノに会わせてくれたツールがキツカケだからツールにも恩があるんだけど、それ以上にツールは俺に恩があるもんなあ、なあ、ツールウ！」

バックミラー越しにツールを見てタイショーがそう言うと、後ろ座席のツールとヨーネンは、よほど緊張の糸がほぐれたのか、子供のようにグッスリ眠り込んでいる。

北海道民であれば誰でも知っている、代々続く大会社の社長御曹司でありながら、自分の生き方を貫き通して家を飛び出し、親族から勘当同然でひとり生きてきたタイショーが、ヤノのたった一言に胸を打たれ、今まで時間を共にしてきたグループをも捨てて『Tick's』に賛同し、そして余計な口出しもせずになだ黙々と『仲間』のために身を挺していた。

『Tick's』の中でも人一倍個性が強く、決して自分のスタイ

ルを変えないタイショは、実は、人一倍、実の家族以上に『T i c k ' s』を愛し、自身の本当の家族のように思っていたのである。そんな時、最後までひとり残った竜二は、『スピナッチ』から出てきたユリエと一緒に、いつもの『ダンキンドーナツ』でコーヒーを飲みながら今日の出来事を熱弁していた。

「…ところでよお、なあユリ、本当は『ヒイ爺さん』なの？それとも『異人さん』なの？」

- 第12章 -

マサトの予想通り、自分の肋骨3本にヒビが入っていたのが判明したのと同じくして、ついに『Tick's』が、札幌の人気タウン情報誌に特集取材を受けることとなった。

一部2000円のそのタウン誌は、若者向けにススキノを中心としたトレンスポットを紹介する内容が中心だったが『スピナッチ』取材の際、マサトの診断結果発表で偶然店に集まっていた『Tick's』に記者が関心を示したところ、マスターがいつものように彼等のエピソードや来店客にファンが多いことを話してみせた。その結果、急遽、彼等まで取材となったのである。

『ハロー！ ウィーアー Tick's！（ティックス）』と題されたその記事は、それまで不良の世界ではタブーだった『ユーモア』を持った突飛な行動と、類のないファッション、ビリヤードやダーツ、バックギャモンやピンボールなど、彼ら独特の世界をもったライフスタイルがページではあったがスポットとして掲載され、トレンドに敏感な札幌の若者達に大きな反響を呼んだ。

今まで不良グループが一般情報誌に掲載されるのは、なにか犯罪でも犯さない限り皆無であった。

百歩譲って、日本中の暴走族を取材し紹介した写真集『暴走列島！』シリーズくらいである。

これを機に「ススキノで『Tick's』を知らない遊び人は通ではない」的存在に成長し、次第に『本人達が知りもしない「Tick's」の友人知人』が増えはじめ、週末の『スピナッチ』はいつも満員、それだけではなく、プレイスポットとして紹介された『平和ビリヤード』までも、連日、影響を受けた若者客でポケット台を

占領されると、メンバー達が顔を出すこともなくなってしまった。

「フィフティーズ戦後世代」では『Tick's』のコピーグループまで登場する始末である。

竜二はいつか『ボストンクラブ』のヒグに『Hub』で言われたことがある。

「俺達ボストンクラブは戦時中、ルーキーズは戦前、そしてお前らは戦後の人間だ。」

もちろん第二次世界大戦のことではない。

全員終戦の遙か後の生まれなのだが、これはどういう意味かというと、日本では1974年に上映され、後の彼らのバイブル的映画となった『アメリカングラフティ』を戦争に例えたのである。

『ルーキーズ』は『アメリカングラフティ』上映以前の世代、『ボストンクラブ』は正にオンタイム、『Tick's』はその後の世代というわけだ。

それだけ『ルーキーズ』も『ボストンクラブ』も、『アメリカングラフティ』は『人生を大きく変えた映画』として扱われていた。

そもそも『戦後世代』の『Tick's』は、『ルーキーズ』や『ボストンクラブ』に感化され、野球チームとして結成されたので、9人以上いなければならぬのだが、実際のオリジナルメンバーは7人しかない。

しかし、いつもメンバー以外の人間が2〜3人は一緒に行動している。そうなると合計人数は9人揃う。

「もしかすると念願の野球試合ができるかもしれない。」

竜二はそう思うと、別に『Tick's』オリジナルメンバーにこ

だわる必要はないと考えはじめた。

野球チームは野球チームとして『戦後仲間』を集めて別のチームネームをつければよい。『ボストンクラブ』も野球チーム名は『ジュエルス（宝石）』なのだ。

そうなると話しは早かった。

他府県と違い、梅雨のシーズンを知らない北海道、6月は快適そのものである。

タイショーが道路工事のアルバイトで参加できなかった日曜日、メンバー以外の仲間『コンテンポラリーキッズ』のヤマとノグチ、そしてリーダーモリイの三人が参加し、『Tick's』はついに晴れて『ボストンクラブ』と野球試合をする事とあいなった。

ついにあの『Tick's』が野球の試合をする。

この噂が広まって、当日は多数のギャラリーが集まった。

その一週間前、『Tick's』と3人の『コンテンポラリーキッズ』混合チームは『Rocket's』と命名されたのだが、実はこの名前に至るまでも、拘りをもった9人が個々に知恵を絞ったチームネームを主張したため、いつまでも決定せずにいたのである。

拳句、最終的にジャンケンで決めようとなり、最後まで残った名前が、なんと『けっつ（尻）』であった。

最後にできたチームということと、メンバー達みんなが愛用しているデッキシューズ『Keds』にかけて『Kets』という、まことに深い意味をもった気がする、トールの提案だった。

「なんで、よりによってケツなんだあ？」

『こつという名前を考えていた奴に限って、ジャンケンに強い。』と

皆思いしらされた。

しかし野球チームとしては『最下位』ともとらえられる、縁起でも無い名前ということと、第一、恰好悪くて恥ずかしいとの理由で、却下されそうになってしまった。

なにせ他の皆は、もつとこだわりの強い、そして格好よく強そうなネーミングを用意していたのだから納得がいかない。絶対自分の考えた名前が一番だと個々に疑わないのだから、尚やっかいだ、絶対に結果が出ない雲行きとなった。

そこへ竜二が、

「シンプルでいいんでしょ。だけどケッツはねえなあ、あつ、いいこと考えた！じゃあ『けつつ』に『ろ』を付けてロケッツってどうだい？」

『けつつ』よりは遥かにいい。

しかもモリイの用意していた名前と同じだったのだ。

モリイが賛成となると、ヤマ、ノグチも賛成せざるを得ない。竜二とトールと併せると5人、多数決で勝てる。

結局、あっさり彼等の野球チームは『Rocket's』で一件落着となった。

当日、本格的に野球チームとして活動している『ボストンクラブ ジュエルス』は、勿論ユニホームを持ち、スパイクまでも使用している。

かたや即席寄せ集め野球チーム『ロケッツ』は、服装はバラバラ、それどころかコンポラスーツに革靴を履いたトール、ヤマはリーゼントにハラマキとジ力足袋、その上をいくノグチは、同じくリーゼントにダボシャツ、ハラマキにニツカポツカと、本職の鳶のスタイ

ルで登場した。

竜二に至ってはパジャマにガウンを羽織り、スリッパで登場である。あれだけネーミングに時間をかけたのにも関わらず、どこにも『Rocket's』の文字は見当たらない。

『…ittyのミーティングに果たして意味があったのだろうか…？』

一週間前、この日のために一夜を寝ずに名前を考えていたヤマは思っていた。

『…べつに『ケッツ』でもよかったのではないのか…。』

チーム名の問題はともかく、彼等のこの格好は、全く野球をバカにしている。相手が『ボストンクラブ』だからできることだったが、もしこれが普通の相手なら激怒する筈である。

しかし、その各自の装いは相手チームがどうあれ「もし野球試合をする時が来たら、絶対やるう。」とかなり以前から『スピナッチ』で計画されていたのだった。

それに加え『ロケッツ』全員サングラス。

キャッチャーとなったノグチのミットとマスクは『ジュエルズ』リーダーヒグからの借り物だったが、他メンバーのバットとグローブは、個々の小学生時代に買ってもらった子供用、しかも、全員そろって金色に塗られている。いわゆる『ゴールデングローブ』である。前もって缶スプレーでペイントしたものだだったが、ペイントが固ってしまい、果たしてグローブとして機能するのか分からない。

『ロケッツ』のラインナップ

- 1 番ライト・シヨーン (バーテンススタイル)
- 2 番セクター・サカガミ (シルバーボクシングパンツとランニングシャツ)
- 3 番ファースト・竜二 (ガウンとパジャマ)
- 4 番ショート・モリイ (ボーリングシャツにスウェットパンツ
靴下外出し)
- 5 番サード・ヤマ (ジカ足袋にハラマキ)
- 6 番レフト・マサト (アロハにサラシを腹に巻き、ホワイト
パンツ)
- 7 番セカンド・トール (コンポラスーツに革靴)
- 8 番キャッチャー・ノグチ (ダボシャツにニツカポツカ)
- 9 番ピッチャー・ナガノ (婦人用エンジ色ジャージにペニーロー
ファー)

少しの間キャッチボールでウォームアップをしたあと、以前から予定どおりピッチャーを務めたのは、自称『七色の変化球を持つ流れ星』ナガノである。

女性用の、エンジ色に太い一本ラインが入ったジャージ上下に、「間違つて、よそ行きの靴を履いてきた。」ナガノの第1球は、履いているペニーローファアの靴底が皮だったせいで足元を滑らせ、大暴投となった。

観戦に集まったギャラリイ達の頭上はるかを飛んでいく球の行方を見つめながら、メンバー全員が啞然としている。

「まるで赤エンピツみたいだ…。」

そんな時、サードを守っているモリイだけは唯一人、ただでさえも細い体にピツタリとしたジャージをまとったナガノの姿を見つめていた。

結局『七色の変化球を持つ流れ星』は、デッドボールこそひとつ出したが、アウトはひとつもとる事が出来ぬまま言い訳を延々と並べながら、赤いアロハに白パンツのマサトと交代となった。

長身から投げ下ろされる様は、一見迫力はあるのだが、肋骨が完治していないマサトの球はスピードがなく、しかも軽い。

打たれに打たれ、『ジュエルズ』の半同情から、やっとスリーアウトチェンジとなると『ロケッツ』が円陣を組み、作戦会議となった。

「こうなったら、一回づつ全員ピッチャーやってみて、良かった奴が続投することにしよう。」

さすがにスリッパからスニーカーに履き替えていた竜二の提案は、全員が既に考えていたほど平凡だったので即可決し、キャッチャーのノグチ以外全員が投げたのだが、良かった人間はひとりもおらず、5回を終えた時点で11点もとられてしまった。

全員、再び円陣を組んで緊急会議を開いたが、その光景は、個性的すぎる各自のスタイルから、どうしても野球試合の最中には見えない。

「さあどうする？このままだったらゴールドゲームでギブアップしない限り、今日中に終わらないぞ。」

竜二が言つと、モリイが目を輝かせて言った。

「実はよお、俺のオンジ（弟）が来てるんだわ、でさあ、あいつ、ガクシヨー（小学生）の頃に野球やってたから、もしかすると今日中に終わらせられるかもしれないべやあ。」

モリイの朗報を聞いた全員がギロつと観客の方に目をやると、ポニ―テールのかわいらしい彼女を連れた、ダブルのライダーズジャケツトの襟を立てたリーゼントがコックリと頭を下げ、モリイが呼び寄せると顔を曇らせながらゆっくりと歩いてきた。

「お前、ピッチャーやれ、でないと今日中に試合が終わんないって結論がでた。」

モリイが言うところ『やつぱり…』という顔つきで、弟は履いていたお気に入りのウエスタンブーツを見下ろしながら、

「コレが痛むから嫌だよ。」

そう答えたその直後、すかさずモリイが拳で弟を殴る仕草を大袈裟にした。

それを周りで見ていたギャラリーからは、いよいよもって野球の試合中に見えていない。

結局、嫌々サカガミと選手交代し、サカガミのスニーカーを借りた弟のウォーミングアップで10球ほど投げた球を見て皆が驚いた。

「…なまらだな…。」

「…なまらだわ…。」

ヤノとナガノが啞然としながらそう囁きあっていると、

「最初からナガノなんかじゃなくてモリイのオンちゃん（弟）に投げさせればヨカッタんでしょー！」

ノグチが感極まってそう叫んだ。

結局、応援に来ていたモリイの弟が飛び入りで、残り4回をパーフェクトに抑えた。

『ボストンクラブ』ですら、モリイの弟には刃が立たなかったのである。

結果、11対0、『ボストンクラブ ジュエルズ』の圧勝で『戦後世代多国籍軍ロケッツ』のほろ苦い野球デビューは幕を閉じたのだった。

『…モリイのオンちゃんが最初から投げていれば、もしかしたら勝っていたかも…あつ！もともと全員、打てないんだから、点数とれないんだな。じゃあ引き分けが関の山だったか…』

記念すべきデビュー戦であり、また散々な結果となった『ジュエルズ』との野球試合が終わった『ロケッツ』のメンバー達が『お疲れ会』の打ち合わせをしている最中、ひとり外れて一服しながらそう考えていたマサトに、少年がひとり、近寄っていった…。

- 第13章 -

マサトに近寄ってきた少年は、何とかして『T i c k・s』のメンバーになるうと嘆願してきたのである。

マサトとは少々顔見知りということで、そのコネを利用している少年の名前は『オサナイ クニヒロ』。

『ショーネン』と同年齢である『オサナイ』は、アイドル風の甘いマスクを持ち、洋服のセンスも良かった。

腰が低く、挨拶もキチンとしていたが、どうも調子がいい。

人の顔色ばかり伺う姿勢が、頑固にこだわりを持ち、個々にアクの強い性格の『T i c k・s』のメンバーには気に入られなかった。だいいちオサナイ自身が、子分を従えて自分のグループを既に持っている。

最初から全く相手にしていなかったマサトが、あまりにしつこいオサナイを諦めさせようと考えたアイディアが、「入団テスト」。

こういったことになると、マサトという人間は本当に冷酷である。

一・人通りの多い日曜日の地下街の端から端まで『狼がきたぞー！狼がきたぞー』と、両腕を大きく頭の上で左右に振りながら走り、それを二往復する。

一・地下鉄の客席頭上にある、荷物置の上に寝て出発駅の北24条駅から、最終駅の真駒内駅を往復する。

オサナイは諦めずにやってみせた。

続いて日曜日、人通りの多い地下街のど真ん中でひざまずき、「おーベイビー、カモオーン」と、宙を見ながら3回、30分ごとに計3回を叫ぶ事も、顔から火を噴きながらオサナイは見事クリアした。

しかし、ウサギのぬいぐるみを肩車して、一流ホテル『札幌グランドホテル』のロビーに行き、そして、『ウサちゃん、ウサちゃん、僕のウサちゃん、お腹空かない？大丈夫？』と叫びながらフラフラする筈だったが、これにはさすがに、『危ない人間ではないか』と従業員が警察に通報しようとしたため、全員全速力で逃げる結果となった。

ついにマサトはオサナイのひたすらな根性に僅かながら同情し始め、控えめではあったが竜二に交渉を試みたところ、予想通り、まったく聞き入れてはもらえなかった。

その理由は、ただ単に竜二のメガネにそぐわなかったただけなのである。

その竜二自信から直接メンバー勧誘の声をかけられた事に、マサト自身は少しばかり優越感をもったのだが、

「さて、ここまでさせたオサナイをどうするか…？」

マサトから呼ばれたオサナイが『スピナッチ』に行ってみると、そこにはマサトとナガノが複雑な表情で『スピナッチヌードル』を前に座っていた。

「お疲れ様です。どうしたんです？」

少々察しがついていたオサナイは、マサトに聞いた。オサナイも『Tick's』のメンバーに憧れ、彼らと同じく質問文の最後に「か？」を付けない。

「おお、例のよお、俺達のメンバーになる件なんだけどな…。」

『やっぱり』とオサナイは思った後、『あそこまで恥をかいただ、この根性は認めてもらえ…』

と自分のやってきた事に満足するかしないかのうちに、マサトが、

「おまえ、これできる？」

と、ベロをだし、その真ん中に吸っていたタバコをジュツと押し付け火を消して見せたのだ。

「えーっ！」

オサナイは驚いた。

入団テストの結果発表かと思いきや、それどころか、オサナイにとって今まで以上の過酷な根性試しが待っていたのである。

「これはなあ、いかに『T i c k ' s 』に入りたいかを、体で示す儀式なんだわ。メンバー全員がやってきたことだからよお。」

マサトが哀れみを含んだ表情で、そう説明した。

「ナガノ君だつて出来るんですう？」

オサナイがそう言うか言わないかのうちに、すかさずナガノが自分のベロでジュツと火を消した。

実は、舌の中央は温度を感じない為、本来は誰でも出来ることである。しかし、何せ最初は度胸がいる為、たとえそれを知っていたとしてもナカナカできる技ではない。

「ええー、できねえよお」

何度もタバコを舌の近くまで寄せてはみるが、よっぽどの熱さを我慢しなければならぬと思っていたオサナイの根性が、ここでナエた。

普通であれば誠にクダラナイことなのだが、オサナイにとって、かなりのシヨックである。

泣きそうな顔をしているオサナイに、

「しょうがない、失格！けどおまえ、今から『Tick's』の準構成員な。」

竜二の了解は得てはいなかったが、マサトがそう言うのと、オサナイは自分の立場を余り理解していないまま、

「やったー！有難うございます！ガンバります！」

と、これまた理解できない返事をして歓喜すると、さらに調子に乗ったマサトが、

「実は『Tick's』のメンバーは、それぞれ『ニックネーム』つつーものがあるんだ、知らなかったろう？オサナイ、お前はこれから『ナフタリン』と命名されたぞ。よかったなあ、アニマルハウスでも使われている呼び名なんだぞお！」

それからのオサナイは、『Tick's』からは『ナフタリン』と呼ばれ続け、自分の後輩からも、「ナフタリンさん。」と冷やかされた。

こうして『Tick's』には、メンバー本人達も理解できない『準構成員』達を持つグループとなっていたのだが、更に『Tick's』人気を決定的にしたのが、製造当時最もアメリカ車に近い日本車と言われた『プリンス グロリア スーパースックス』を『R2』の持ち主だったナガノが購入したことである。

『R2』は、軽自動車でボディカラーは濃紺、エンジンサウンドは、ご存知の通り、テケテンテン…。

しかし、『グロリアスーパースックス』は、非常に静かで滑らかな直列6気筒の2000cc。

ボディカラーも、元の黒色からホワイトとスカイブルーの鮮やかなツートーンにペイントされた。しかも今度は6人乗りフルサイズセダンである。

ボディスタイルは『フラットデッキ』と呼ばれる独特なテールデザインを持ち、『てんとう虫に毛が生えた。』スタイルの『R2』とは、まさに『天と地』であった。

「…なまらだな。」

「…なまらだわ。」

これが、仕上がったナガノのグロリアを見たトールとヤノの第一声である。

更にこの頃ともなるとメンバー達も続々と自動車免許を取得。

数台の車で行動するようになったこともあって、時には8人詰め込み状態で移動していた『R2』に変わり、今回の通称『グロリアスーパースックス』は、フロントベンチシートに3人のメンバーだけを乗せて、ゆったりと快適にドライブができることとなった。

リアガラスには『T i c k ' s』のステッカーが貼られ、ナガノに続いて免許を取得したサカガミのオフホワイトとスカイブルーにペイントされた『マツダキャロル』、続いてグリーンとオフホワイトのヤマ所有『トヨペットクラウン』、以前所有していたワーゲンビートルを下取りに出して手に入れたマサトの、イエローとオフホワイトの『プリンススカイライン』、4台は札幌中を走り回った。

『アメリカかぶれ』の彼らがアメリカ車には乗らず日本車に拘った理由は、V型8気筒5000cc以上の大排気量、その上オートマテイクトランスミッションがほとんどであるアメリカ車は、冬は雪が積もる札幌の道路事情には向いていないからなのである。

トルクが太いアメリカ車は、雪道ですぐホイールスピンをして埋まってしまう。

金額もパーツを含む全てが高いし燃費も悪い。まったく良いことが無いのだ。

その点、マニュアルトランスミッションで小排気量の日本車が丁度よかった。

同世代たちが憧れる、いわゆる『カッコイイ車』とは、車高を落としたいいわゆる『シャコタン』のハコスカやケンメリ（4ドアはヨンメリとも呼ばれていた）などの『スカイライン』やバットマンローレルと呼ばれた『ローレルS G X』、ダルマまたはバンナと呼ばれた『サバンナR X 3』、ホットロッド仕様の『セドリック430』などの、『族車』だったが、細い『糸タイヤ』を白くペイントした1950年代のアメ車風セダンで、ポマードで固めたリーゼントとアメリカンアイビースタイルグループの登場は、新しい不良カルチャーの誕生といっても過言ではなかった。

暴走族か、『暴走族風』のスタイルで一色だった夜の札幌街中に新しい風が吹きはじめた瞬間だった。

『スピナッチ』前に彼らの車が横付けしてあると、その夜の店内は

いつまでも賑わう。

タウン誌に登場して以来、彼らにカブレて来店する客は多かったが、本格的に女性ファンまでもが付き始めたのである。

「オーライ、オーライ…おおつとストオップブーツ、危ねえ、もう少しでイン石に擦るところだったべやあ。」

『…それって「エン石」って言うんじゃないかなかったつけなあ…』

アルバイトを早めにあがったユリエを連れて竜二が先に帰宅してしまった土曜の深夜。『スピナッチ』前の路上スペースを先に使っていた一般車が立ち去ると、頻繁にチェックしていたナガノがグロリアを移動させ、その縦列駐車を誘導していたサカガミの口からフト出た『インセキ』という言葉に疑問を抱きながら、トールとマサトが『スピナッチ』から出てくるのを待っていると、出てきた二人の後ろから、いつも見る顔ぶれ女性グループ4人が、一緒に付いて店から出てきた。

以前マサトが声をかけた事がキツカケで、店でもよく雑談する程度の仲ではあったのだが、店の外で一緒に行動することは無く、今回も特に声をかけて一緒に出てきた訳ではない。

そのグループが『スピナッチ』から出てくると、『Tick・s』4人に付き添うかのように、または声をかけてくれるのを待っているかのように、これという事をするでもなく、丸くなって立ったまま、一向に帰ろうとしない。

こういった空気を察することには天才的才能を持つマサトが、なれた口調で「みんな泊まってくかい？」と絶妙なタイミングでモーテルの看板に顎を指すと、みんな「いいよ」と返してきた。

冗談のつもりだったが、このタイミングは決して逃してはならない。

「おっ！じゃあ、誰は誰がいい？」

すぐにマサトが返してみせると、そちらが選べと言う。

『グルーピー』だ。

『Tick's』にも、ついにグルーピーが付くようになったのだ。『引っ付き』とも呼ばれている、行くところ常について廻る熱狂的ファンのことで、ロックバンドやアイドルに多く見られる、完全に割り切っていてメンバーと一晩を共にすることはあるが、決して他のファンには公表する事も、追い払う事もしない、まさに『都合の良い女』達である。

「けど、金ねえよ。」

トールが残念そうに言う

「いいよ、持ってる。」

彼女たちの一人から、気前のいい返事がかえってきた。

さすがに最初は、調子の良いことを言っ、最後には後ろから恐いお兄さんが登場する『美人局^{つつもたせ}』ではないかと緊迫した空気が走ったが、その物腰からして、決してそうには見えない。しかも、かなり以前から『スピナッチ』で彼女達を見かけていた、もし『美人局』だとすれば、こんなチンプラグループ相手に、物凄く長いスパンで計画していたことになる。

しかし、そんなのは全く時間の無駄だ。

そう考えると急に気が楽になって、マサトの顎が指したホテルへみんな腕組みしてスキップしながら直行となった。

オマケに代金は向こう持ちである。

グルーピーの登場で、数週間後には『Tick's』のメンバー同士、違う意味ではあるが、本当の『ブラザー』となった。

『スピナッチ』でアルバイトをしているユリエと竜二の関係は、たまに竜二のシャツをユリエが着ていた事もあって既に噂は広がっていたため、竜二はグルーピーを連れて歩くことは無かったが、他のメンバーは特定の相手を作ることなく、その日によって一緒に帰る娘を決めていた。

1960年代アイビー風のスタイルだが、この辺のところはヒッピースタイルに似ている。

個人的感情が入らないのか、互いの嫉妬もなかった。

その姿は決して隠微ではなく、実に明るく爽やかなものである。

『Tick's』メンバーのスタイルこそアメリカ1960年代風であったが、彼らの女性に対するセンスは決してポニーテールやサークユリースカートスタイルでは無い。

無論、髪の毛を染めたヤンキ風はもつてのほかで、そういうスタイルの女性を見つけると、きまって隣で『サビテルツ、サビテルツ！』と、まるで咳をしているような言い方をして罵倒する始末である。

実はメンバー全員、サーファー風や、トールの彼女だったユーコのようなハマトラ風のお嬢様スタイルの方がタイプで、『グルーピー』の彼女達も、どうみても『Tick's』とは無縁に見える育ちの良さそうな娘ばかりだった。

年齢も彼らより少々年上の社会人。しかも皆、不良時代を持たない、ごく普通の育ち方をした、ごく普通の一般市民である。

地味な学生時代を卒業して開花した『社会人デビュー』と考えれば

よい。

高校生のメンバーからしてみれば、食事代やホテル代も、相手が社
会人であれば払ってもらって当然だった。逆をいえば、彼女達から
してみればツバメみたいなものである。

聞くと彼女たちグループのリーダー的存在である20歳の「チエコ」
が、不倫関係だった会社のマネージャーと『スピナッチ』へ訪れた
のがキツカケで、『Tick's』を見つけた途端にファンとなっ
てしまい、最初は彼女の親友「シノブ」と2人だけで『スピナッチ』
へ週末訪れ、数回通ったころマサトに一度声をかけられたらしい。
「チエコ」は「チエコ」と呼ばれていたので、『Tick's』の
メンバーからは、何故か「スロバキア」という愛称がついていた。
彼女は『Tick's』と知り合い、今の立場になっても相変わら
ず不倫相手との交際も続けている、タフな体力の持ち主である。
『カネは天下のまわりもの。』不倫相手の金は『Tick's』へ
と流動していた。

「スロバキア」ことチエコと、『ボストンクラブ』のシノブと同名
な為、メンバーから「オシザカ」と呼ばれている「シノブ」の2人
が、美容専門学校時代の仲良しグループを誘って、今となった。
まさに『類は友を…』である。

彼女達グループは少々入れ替わりながらも毎週末には5、6人が集
まってはいたが、全員がグループピーという訳ではなく、相手にその
気になっている『Tick's』メンバーの期待はずれにならない
よう、事前にチエコがメンバーに「あの娘は違うからね。」と耳打
ちで断りを入れていた。

その「あの娘は違うからね。」のひとりにシヨーンが恋をした。

シノブの高校時代からの友人である彼女は、女子寮で一人暮らしを

している看護師である。

サーファーやハマトラファッション界隈で流行しているベージュのムートンジャケットがよく似合う、明るく綺麗な女性で、名前は「ミサ」といった。

ショーンは、ミサが宿直明けの日いつも彼女の部屋に迎えに行き、終日一緒に過ごしていた。『Tick's』最年少のショーンは、メンバーから「硬派でっして女性に媚びない」イメージを持たれていたために、ミサに恋焦がれている事は格好悪くて秘密にはしていたのだが、彼にとって非常に充実した幸せな時間を密かに過ごしていた。

そんな時、日中は友人の引越しの手伝いがあつて会えないというミサに併せて、ショーンが夕方彼女の部屋で自分の料理を振舞つてやる約束をした。

将来シェフを目指していたショーンにとって、料理は自慢のひとつである。

昼間にスーパーに買出しに行き、時間を見計らって彼女の部屋に行く予定だったが、少々早く彼女の寮に来てしまった。

ショーンが寮に向かって50mほど手前のところで、ミサが玄関からグリーンカラーのスイングトップを羽織って出てきた。

「あつ、ちょうど良かった！みさ…」

そう言うか言わないかの瞬間、ショーンの顔がこわばった。

そのスイングトップに見覚えがあつたのである。

すると『ミサ』に続いて後からスラリとした男が一緒に出てきた…。

- 第14章 -

予期せぬ男の登場に目を凝らしたショーネンの脳みそが、その名前をつぶやいた。

「あれっ？…トール君…。」

ミサの羽織っていたものは、以前に自分がトールに高額で譲った『ドリズラー』だったのである。

一瞬、『なぜ、自分がトールに売ったドリズラーをミサが羽織り、なぜミサの部屋からトールが登場してきたのか。』ショーネンには現状が把握できずにいた。

しかしそのうち、彼女が言っていた「引越し」は嘘だったこと、その代わり今までトールと部屋にいたこと、年頃の男女が一つ部屋で一緒にいた時間というものが一体どんな時間だったかということ、ショーネンは、やっとではあるが理解し始めてきた。

自分が羽織っていたドリズラーを、ハラリとトールの肩にかけてやったミサが、頬に『チュッ』とキスをして部屋に消えていく、その光景の一部始終を垣間見てしまったショーネンには、トールがまるで昭和初期の雲助の様に映り、なんともいえないやるせなさを覚えて狼狽した。

ショーネンはあわてて隅に隠れるとスーパーの袋をかかえたまましやがみこみ、タバコに火をつけ一体ナニが自分の目の前で起きていたのか、せわしくなくスパスパ煙を吸いながら考えた。

そのうち、なぜ自分がコソコソと隠れていなければならないのか馬鹿らしくなり、トールのために嘘をついたミサにまでも腹が立ってきた。

「だけど『Tick's』だからいい想いできてるんだ、あの女だって俺が『Tick's』だから誘ったんだ、トール君だって同じだわ。あの女も所詮グルーピーと変わんないべや。」

自分の前頭葉が、そうショーンに訴えた。

そしてその後、何事もなかったかのようにショーンはミサの部屋に行き、得意の料理を作って喜ばれたが、ミサとは何も無いまま、後ろ髪を引かれながらも決して振り返ることなく帰宅した。

その後もショーンはトールに対し、いつもの通り普通に振舞っていたが、どうしても胸の引っかかりが取れず、思い切って、自分がミサを好きになり彼女の部屋に入り浸っていたこと、あの日、夕飯を作ってやろうと部屋にいくとトールが出てきた所を見てしまったことなど、すべてを打ち明けてみた。

それはまさに、以前トールがマサトの部屋で経験したことだった。

ショーンとミサとの関係を知らなかったとはいえ、マサトと同じことをしてしまっていた自分に小さなショックをうけたトールは、ゆっくりとタバコをシャツの胸ポケットから出し、箱をトントンと指で叩くと頭が突き出てきたタバコを一本、ゆっくりとくわえ、そしてもう一本だけ頭が出ている自分のタバコの箱をゆっくりとショーンに差し出してやった。するとショーンがそれを抜き取り啜えながら、トールのタバコに火をつけてやると、今度はトールもショーンのタバコに火をつけてやった。

「フウ。」

何も言わなくても、これで一件落着だった。

互いが納得し、互いに詫び、互いに許した証しの儀式だったのである。

「なあシヨーン、結局、ミサもヤリマンだったかあ？」

「いやいや、トール君と僕があまりにもカッコイイから両方断れなかった、ってことですよ。」

2人は冗談交じりにそう笑っていたが、内心はお互い『自分の彼女のつもりだった』ミサに裏切られたショックは決して小さくはなかった。

女性がらみは時に個々に感情的になり、時にはそれが原因で不仲となつてグループを抜けたり拳句は解散となるケースが多い。

しかし『義兄弟』の2人は、それ以上にもっと太くて強い絆が結ばれはじめていたのである……。

…『ついに今月かあ……』

かたや、そんな小さな事件があつたことなんか全く知らずにいた竜二にとつて、一番憂鬱な日が近づいてきていた。

憂鬱の元は『CS』店長『ジン コウサク』という男にあつた。

永遠の不良を地で行く40歳のジンは勿論リーゼント。堀の深い顔に口髭を蓄え、スリムな体型でセンス良くフィフティーズファッションを着こなし、新宿や原宿で養ってきたその垢抜けた姿はまるで芸能人のようなオーラを放つ、北海道で長者番付のトップテンにまで登場している完璧な男である。

彼は竜二に「人当たりの軽さの内側に潜む、決して人には見せない、

自身の本当の重み。」を教えた。いわゆる外での印象は軽い、内面は『男は黙って』理論の持ち主なのだ。

ジンは誰にでも、とても明るく、誰でも受け入れる、軽い姿勢で接している。しかし、それを舐めてかかると、とんでもないことになる怖さをもっていた。

竜二は、14歳でジンに初めて会ってから急に人あたりが柔らかくなった。

竜二が『CS』に通いだして間もない頃、一見して極道とわかる男に声をかけられたことがある。

「ジンさんは、おるか？」

竜二がスタッフと間違われたのだ。

男の後ろに連れの若い衆みたいのが2人、周りを警戒して立っている。

「えーっと、ちょっと待ってください。」

竜二がコウチャンに、店の裏にいたジンを呼んでもらおうと小声で囁いた。

「やくざが来てますよ、目茶苦茶やバそうっすよ。」

2人組に視線を送って確認したコウチャンがジンにそのことを告げると、誰だとはかりに裏から出てきた。

「あららら、どうしちゃったの、久しぶりなんだもん！」

グリーンのポロシャツとジーンズに茶色のローファアを履いた、普段とかかわらないスタイルのジンが、途端に、非常に軽く、まるで主婦に声をかける八百屋のように『目茶目茶ヤバイやくざ』に声をかけると、

「あつ、ジンさん、お久しぶりです！ご無沙汰してますっ！」

竜二に声をかけた時とは全く違う、人懐こい笑顔でそう答えながら、やくざがジンに歩み寄ると頭を下げた。そのやくざの足の先から頭のテッペンまでを見つめながら、

「なに？まだヤバイことやってんの？」

「いやあジンさあん、かなわないっすねえ、相変わらずっすよ。」

熊みたいな男が頭を掻きながら、ものすごくペコペコしている。

「時間あるんだろ？ちよつとコーヒー飲みに行こうよ。またナンデ札幌に来てるのよ？なにか悪いモンでも売りに来たのお？カッカツカツ！」

そう笑いながら、熊男の肩に2分の1の細さのジンが腕をまわしながら店を出て行った。

なんだか状況を把握できず拍子抜けしてしまった竜二だったが、見るからに、性格も体格もそして人格までも重そうなヤクザ男が、すべてにおいて2分の1の印象をもつジンに、まるで飼い主に腹を見せている犬のようにしていることだけは判断できた。

後に竜二がジンに聞いてみると、その昔、新宿のスナック『怪人二十面相』営業当時の常連客で、スタッフのジンが可愛がっていた舎弟だったらしい。

その見るからにヤクザとわかるスーツ男の『舎弟分』に対して、まったく肩肘張らずに、ポロシャツ、ジーンズ、ローファースタイルのジンが、いつもの調子で接していたのだ。

イザというとき実力で自信があるのなら、普段は自然でいればいい。

これには竜二はショックだった。

相手かまわずスゴんでいた竜二に本物を知らしめた男だった。事実、かの『ルーキーズ』のメンバー達も、実はジンを憧れの存在としているのである。

なのではあるが、その一方でジンはイジメやイタズラには『右に出るものはいない』ほど、人一倍熱心になる横顔を持っていた。ある意味、彼はそれだけを楽しみに生きているといってもいい。

彼は札幌一の『イタズラ番長』なのである。

ある日竜二が、『セブンセブン』に遊びに行くと、ジンが同伴予定なのかクラブのホステスと一杯やっていた。

するとそこに丁度店に入ってきた竜二を見つけたジンが彼を呼ぶと、それまで座っていたホステスを左隣に移させて、わざわざ自分の右隣りに座らせた。

するとジンは竜二の左手の甲をつかみ、何やら嬉しそうにコンコンとかなり軽く拳で叩き始めたのだ。

「いったいナンナンだ…」

しかしその行為は全く痛くないのか、竜二はされるがままに酒を飲みながら歓談していたが、ジンがそれを延々一時間ほど地味に続けていると、やがてその部分がどす黒く腫れ上がった。

そうなつてくると、触るだけでも激痛が走る。

ウソだと思ふなら、やってみるとイイ。

それでもジンは止める事無くコンコンと同じ調子で叩きつづけている。

この状態に至るまで、コツコツと地道に続けるほどの徹底したイジメ精神をもっていた。

ジンにホンのミクロほどの良心があつたとすれば、竜二の利き腕である右手を狙わなかった事ぐらいであろう。結局、竜二の左手は、翌日グローブのように腫れ上がり、コブシすら握れないほどの激痛が2日間続いたのだった。

ジンから日常小さなイタズラを受けている竜二は、この7月、誕生日を迎える。

本来であれば、今年晴れて普通自動車運転免許を取得できる年齢となる、嬉しいはずの月なのだが『40歳を越えた究極のいじめっ子のジンが竜二のために『お誕生日祝い』をすることが、彼にとって嬉しさを吹き飛ばすほど憂鬱なのだ。

それは決して『お祝い』ではなく、何がどうやっても、どうしようもないくらい完全かつ完璧な『いじめ』だということは、皆わかっていていた。

竜二の『飲ませられっぷり』は『CSのペンキ塗り打ち上げ事件』にも登場したが、誕生日ともなると、それ以上となる。

竜二の誕生日当日はジンの都合が悪く、『ヤノ君お誕生日パーティー』は2日繰り上げた16日となった。

当日夜、会場となった『セブンセブン』のドアを開けると、早速メインテーブルにグラスが18個並んでいる光景が竜二の目に飛び込

んできた。

グラスの中身はウイスキーの水割りである。

…俺、40歳の誕生日になったら、いったいどうなるんだろう…。

そう思いながら店に恐る恐る入っていくと、

「おお！来た来た！よっ！おつかれさん！」

非常に爽やかにジンが早速声を掛けてきた。
するとコウチャンが、

「さあ、いつてみましょーかあ！ヤノセンセー、誕生日、おめでとーございまーす！せえーの！」

と、かなり大きな声をあげたと同時に「ヨイツ、ヨイツ、ヨヨヨイツ！」と皆で掛け声をかけてきた。中学卒業前から『CS』従業員となっていたコウチャンは、いつも仕事中不機嫌そうなのだが、こういう時は人一倍元気になる。

店に入ってきたばかりで、一体誰が店に来ているのかも見渡していないままの竜二は、途端に18杯のウイスキーを一気呑みさせられた。

竜二は1杯、2杯と呑んでいくうち、次第にウイスキーが濃くなっている事に気がついた。

10杯目で詰まって一呼吸置いたが、途中から参加した人間も加わってより大きくなった「ヨイヨイ」の掛け声は止まらず、また立て続けに3杯呑んだが、その濃さと、何より腹が張ってきて、ウイスキーが思ったように喉を通らなくなってまた一呼吸おいた。

この時、竜二は楽しそうに手を叩く参加者のひとりひとり、全員の

顔を確認し、記憶した。

「コイツラゼンイン、イツカ、フクシユウシテヤル…」

最後の1杯をなんとか飲み干し、大きな歓声を受けた竜二は、「ナンドアみんな嬉しそうだべやあ。」と、最後の「だべやあ」を言っただけと言わないかの間に、アイスペールに顔を突っ込み、ゴオゴオと吐いた。

その後の記憶が全く無いまま、竜二が翌日昼過ぎに目を覚ますと、なぜか、キッチンと自分の部屋で布団に入っていた。

シャワーキャップも忘れずに装着している。

ホッとした竜二は自分の行動に驚異を感じ、又、感激しながら、シャワーを浴びようと風呂場で裸になり、鏡に映った自分を見て驚いた。

全身にマジックインキで『イタズラ書き』をされていたのだ。

へその下からアソコに矢印が見える。

見ると『ちんちん』と、まるで子供レベルのものだった。

あわてて鏡に映った顔を見てみると、案の定、まるでアイヌ民族のような模様が目に飛び込んできた。もっと分かり易く言えば、『口割け女』と『火星人』をミックスしたようなメイクが施され、『ヒトラ』か『チャップリン』か、はたまた『加藤茶』かというタツチのチョビ髭がアクセントになっている。

ジンの仕業だった。

結局、竜二のマジックインキタワーは2日消えずにいた。

その間、誰一人とも顔を合わせずにいた竜二の脳裏に、微かではあるが、マジックを手にながら言った、ジンの一言が蘇えってきた。

「…いいかヤノオ、これが後々オトナになったら、いい思い出になるんだってえ…。」

竜二の誕生日当日18日、やっと16日の「バースデイパーティー事件」の二日酔いも一息ついたところで、『Tick's』のメンバーだけで『ヤノ君のお誕生日』お祝いとなった。

メンバーが竜二を招待したのは『不二家レストラン』。

『子供たちが親にお誕生日を祝ってもらいたいレストラン』ナンバーワンである。

いつもの『ウケ狙い』だった。

店内は、この日が日曜日という事もあって子供連れの家族で混雑していたが、ツールが前もって予約を入れていた。そこまでしてでも『不二家レストラン』なのだ。

席に着くなり、『不二家レストラン』から甘い物が苦手な竜二に18本の口ウソクの立ったイチゴのショートケーキが登場すると、突然「ハッピーバースデー」ソングが店内じゅうに響きだし、品の良い女性の声で、

「本日お誕生日のヤノ リュ ジちゃん、お誕生日、おめでとうございますー！」

そう場内放送が流れる中、ケーキを囲んでの記念写真を撮ってもらうと、暗くなった「不二家レストラン」で、小さな子供達とその家族たちから見守られ、現場から浮くにいいだけ浮きまくった状態で、

竜二は顔を真つ赤にしながらロウソクの炎をブオーっと吹き消して見せたのだった。

『そういえば、俺、親にも誕生日にこうして祝ってもらったこと、なかったなあ……。』

18歳の初日、照れる不良少年の心に、小さいながらもほんわり暖かい炎が燈った。

- 第15章 -

「なあ知ってる？『Tチープ』で売ってるボタンダウンやホワイトデニム、ゼーんぶ、1000円づつ値上げしやがったわ。」

高校生活最後の夏休みも終わり、すっかり肌寒くなった初秋の夜、ナガノ、トール、マサト、竜二、そして『ミサ事件』に踏ん切りがついたショーネンの5人が『スピナッチ』でいつものように屯していた。

トールのニュースが発端となった他愛の無い会話が途切れると、このタイミングをズウーっと待っていたかのように、

「あのお、実は昨日、ガイチカ（地下街）で声をかけたトルコ嬢がいてっすねえ、俺、なんとかしてその女の働く店に行ってみたいんっすけど…金が足りないんすよねえ…。」

ショーネンが間髪いれずに相談を持ちかけてきた。

その女性の源氏名は『アユミ』といい、地下街でタバコを買っているところをショーネンがナンパしたのだが、

「『私の名刺あげるから、お店にきたらイイじゃない。』と、優しく誘われちゃった。」

らしい。

そう説明している彼の姿は実に幸せそうなのだが、本当のところは誰がどう聞いても、確実に、そのトルコ嬢から『営業』されていると受け取って間違いはなかった。

「いくら掛かるんだい？」

竜二が聞くと、

「外イチマン、中、ニマン、全部でサンま…」

「タケエーッ！」

シヨーネンが「3万円」と完全に言い終わる前に竜二が叫んだ。
そして隣に座っているツールに聞いてみると、

「3000円しかねえ。」

向かいに座っているナガノは

「600円。」

マサトに聞こうとする前に、

「俺、2000円っ！」

「おおー！」

しかし、竜二の所持金500円を合わせても3400円だ。

しかも、もちろん皆、全財産をシヨーネンの欲求を満たすために払
ってやる程、人間は出来ていない。

よって、仮に皆が半分を振舞ったとして1700円。シヨーネン本
人が頑張って1万円を調達し、11700円という計算になる。

半分以上足りない。

しかもそんな大金が、ほんの2時間程度で飛んでいく。

低所得かけだし新米社会人と、高校生、アルバイトバーテンからし
てみると、非現実的な夢のまた夢物語であつた。

「…うーん…、んっ！任せておきなさい。」

少々考えた結果、何か名案が浮かんだらしく、竜二がショーネンの肩に手を廻しながら、爽やかな口調で明るく言った。

「今週中には行けるぞ！ショーネン！」

「ほんとですうー?!」

言われたショーネンは竜二を非常に頼もしく思いながらも、

「マツポにパクられるようなマネはやめてくださいね。」

照れ隠しでそう答えた。

その週の土曜日、ディスコ『アトラス』が閉店する午前1時、トール、マサト、ナガノ、そして竜二の4人が、首から『あゆみちゃんの箱』と書かれたティッシュペーパーの箱で作ったお粗末な募金箱をぶらさげて登場した。

巷では、どこへ行っても店のレジ横には「あゆみの箱」が置いてある。

竜二の作戦は、めまいがするほど直球だった。

遊び人達の間で通称『ススキノ体育館』と言われた『アトラス』は、もともと生バンド演奏が売りの正統派ディスコだったが、その昔、竜二が13歳で生まれて初めて体験した記念すべきディスコ『ディスコ55（ゴーゴー）』や『ラブリー』など、共に繁栄した同期ディスコ亡き後、豪華絢爛な内装が売りの『イスカンダル』、小説『なんとなくクリスタル』にあやかった『なまらクリスタル』、ひとつの店舗に分野の違う二つのフロアーを持つ革命的大型ディスコ『しゃかまんだら 釈迦曼荼羅』などなど、次々と生まれてくる新しい波についていけ

ず、閉店寸前の危機に追いやられたことがある。

しかし、その当時16歳『スリーステップのヤノ』が一言「ロックンロールをかけるディスコは一軒もない、今はロックンロールを売り物にすれば絶対流行る！」と提案し、『駄目でモトモト』で竜二から借りたレコードを掛け続けると、次第に噂が広まり、ついに連日行列ができるまでの人気となったエピソードを持つ店である。息を吹き返した『アトラス』にとって、まさに『ヤノ様さま』なのだが、実のところ、竜二は個人的にそういうディスコが欲しかっただけなのだ。

しかしながら、相手の年齢に関係なく、こういった『顧客の意見』を取り入れる姿勢は、『アトラス』を再び生き返らせる結果を生んだ。

その反面、ススキノで一番危険なディスコとなり、シンナーの匂いがたち込んだ店内の男子トイレでは喧嘩が日常茶飯事、女子トイレからはファスナーを上げながら少年が出てくる始末である。

新生『アトラス』はまさに『悪の要塞』となってしまったのだ。

土曜日、閉店時間の午前1時ごろから『アトラス』前は、店から出てくる連中や、店内から出てくる娘を狙って閉店時間にやってくる少年、皆の前で目立ちたいチンピラなどでこった返し、時には暴走族同志の喧嘩現場とまでなった場所なのである。

そんな地獄絵のような場所に『Tick's』のメンバーが、カンパ目的で登場したのだ。

この日は、夏休みが終わり2学期が始まってから最初の週末とあって、いつもの土曜日よりも遥かに『こった返し具合』が増している。

「みなさん！どーかあ、あゆみちゃんの箱に、ご協力おねがいしまーす！」

巷で大流行している『ドクタースランプ あられちゃん』のキャラクターをワンポイントにした不良少女でこった返す中、パンチパーマ、チリチリ金髪連中を相手に、アメリカンアイビースタイルの4人が手当たり次第、爽やかに声をかけていった。

『Tick's』は、どんな相手であろうと全く怖くない。

皆、彼らを笑って見ていたが、本人達は真剣そのものである。ウロウロと漂っていた竜二の目が急に輝いた。

「おつ、ヨッチだ！ヨッチイ、カンパお願いしマース！」

捕まったらひとまりもない。

アフロヘアーのサイドをポマードで固めたヘアースタイルに特攻服の袖をまくり、腕を組んで立ち話をしていた『ヨッチ』が、「ああ見つけた」とばかりに500円札を4つ折りにしてティッシュ箱に突っ込んだ。

特攻服姿の暴走族が、ギンガムチェック柄ボタンダウンにレタードセーター姿のアイビー少年にたかられているのだ。

金色に近いメッシュをサイドに入れた同じくアフロヘアーにしているヨッチの後輩が、その奇妙な光景を目の当たりにすると興奮して言った。

「ヨシザワさん！なんであんな格好した奴にタカられてるんっすかあ！あんなにアツサリ金だして…俺、ヤッチやっていいっすかつ！」

『タカられている。（カツアゲされてる）』という言葉に、自分の

プライドが傷つきカツときてアフロメツシュ少年の頭を小突きながらヨツチが言った。

「アイツはなあ、今じゃああんなカッコしてっけど、ああ見えて結構ヤツクイんだわ。お前もなあ、あれには関わんねえ方が身のためだわなあ。」

ヨツチは竜二と同年代でケンカが強く、『ヨシザワ戦法』と呼ばれる独特な戦術は、中学１年時から一円の不良たちには有名だった男である。

当時、竜二の中学とは仲が悪く、ヨツチは竜二を喧嘩で負かしたことがある。

しかし、負けず嫌いの竜二のしつこさで、結局、『腕っ節』というよりも『根負け』した経歴を持ち、その後も竜二を大の苦手としていた。

自分が「ヨツチ」と馴れ馴れしく呼ばれて黙っている相手は、竜二だけである。

「おありがとうございまあゝす！」

これみよがしに、皆に聞こえるように大きな声で竜二は叫んだ。

「そついえばよお、さっきドウマエを見かけたら、また背が伸びてなまらオツク（とても怖そうな風貌）なつてたべやあ。右手に包帯巻いててよお…。お前イサ才知つてたっけ？ドウマエの舎弟の。そいつに、『あいつ、どうしたの？』って聞いたら、この前モメて拳つぶしたつて言つてたべやあ。」

竜二がビクリした顔をしてヨシザワにそう言うと、爆笑しながら

答えた。

「ダハハツ… あいつ、自分で壁殴り続けてただけなんだわ。しかもコンクリによ、普通は木を殴ってつぶすのに、知らねんだよ。」

なんだあ、という顔をした後すぐに、シメシメとうなずきながら竜二はドウマエを探した。

『ドウマエ』も竜二の中学時代からの不良つながりで、なにかと「引退」を口にする、ネガティブな性格の男である。

背が高く、暴走族スタイルバンド『横浜銀蠅』の弟分、しかも『ブリッコロックンロール』で目下売り出し中の『杉本哲太』率いるバンド『紅麗威甦^{グリース}』の兄貴分、という恵まれた環境でソロ活動をしていた『嶋 大輔』に似ていることを唯一の自慢としていた。

独りだと性格がいいが、身近に仲間がいると、自分の容姿を利用して急にハツタリをかまし去勢を張ることを得意とする、会社では決して上司にしたくないタイプの男である。

格好は一丁前だが、彼が喧嘩をしているシーンを竜二は一度も見たことがなかった。

紺色の特攻服にニグロパーマ、女性用のサンダルを履いた背の高い男が細く剃った眉毛を吊り上げ、強そうな顔をして、2〜3人の同級ルックスの男たちと話しているところを竜二が見つけた。

「…おつ、いたいた。」

右手には血が染み出した包帯を巻いている。

「…いつもは白の特攻服のくせに、どうやら今夜は、白い包帯を強調するためにわざわざ紺をチョイスしたなあ？」

そう睨み、嬉しそうにドウマエに駆け寄ると、嫌そうな顔をしている彼の肩に手を廻して頭をかがませ、耳元に口を近づけて小声で言った。

「ドーマエ君、ここんとこオツくなっちゃってえゝ！いいんでないかいチョットオゝ！しかしながら君のこの右手、自分でやったんだってえゝ？しかもお恥ずかしい事に、コンクリ叩いてたんだってえゝ？あー恥ずかしい！」

ドウマエの顔が真っ赤になった。

竜二が続けて、

「皆に言っちゃあーかなあゝ？やめとこーかなあゝ？」

面倒な奴に捕まったという顔をして、ドウマエが答えた。

「だつ、誰から聞いたんだよ…、ちつ、違つよ、モメたんだってちゃんと。」

「チャントお？だれと？」

「お前が知らねえ奴だつて。」

「えっ？俺、ヨツチからガセ（ネタ）つかませられちゃったの？ガセだったの？えっ？ヨツチあそこに居るから、『なんだあ、ドウマエはちゃんとモメたって言ってたぞ！ヨツチの大ボラ吹き！バカアホ死ね。』って言ってこよーっと。」

「あつ、ヨシザワがチクツたのか…ん？あれっ？多分、奴の方が合

つてるかもなあ……あのよお、このことはよお、誰にも言わねえでく
んねえかなあ？」

「あれ？相手がヨツチだと、随分とアツサリ認めるだなあゝおい。
ヨツチ怒ったら怖えもんなあゝ、んー、しかしドーマエ君は人に頼
むときの口の利き方知らねえみたいでちゆねえゝ。あのよお、とこ
ろで今、いくら持つてる？」

「なんだよ、タカリかあー？」

怒り気味になったドウマエが眉間にしわを寄せ、あごを突き出して
脅すような口調で答えると、

「あーあ、そんなこと言っているのかよ、てめえ、そんな偉いこと
いえる立場かあ、えっ？このホラ吹き野郎。」

竜二の態度が急に変わった。

ネタをしっかりと握っている竜二は腹が据わっている。

竜二はキレると、いきなり襲ってくることを知っているドウマエが、
ヨツチ以上に恐れて答えた。

「ちつ、わかったよ、だけど今、600円くらいしかねえぞ。」

「じゃあ1000円よこせ。」

「1000円？」

「大体こういうときは、所持金の半分くらいしか申告しねえから、
お前、少なくとも1200円は持つてゐるはずだからよ、しかしなが

ら良心が痛むから1000円でいっつつてんの。」

竜二はこういう事に、本当に頭がキレる。

案の定、本当は1800円を所有していたドウマエは「ちっ」という顔つきで、500円札と100円玉5枚を《あゆみちゃんの箱》に突っ込んだ。

「おありがとうございます。」

竜二の表情が、またいつもの明るいつつやかな笑顔に戻った。

『ヨッチ』も『ドウマエ』も、大きさでは中堅クラスの暴走族の副長、特攻隊長である。

その自分達が個人的に500円、1000円もカンパしてしまった悔しさから、ヘアースタイルを整えるために携帯している普通のフオーク（食事用）を武器に、自分達の後輩も巻きこみながら手当たり次第にカンパを強制させた。

その向こうでマサトが大声を張り上げている。

「あつ！そのモヒカンくん！ちよつとメグんでえ〜！」

『モヒカンヘア』は、最も腕に自身のある人間でなければ出来ないスタイルである。

そのモヒカンヘアに特攻服というスタイルでキメた少年に、マサトがカンパを要求したのだ。マサトは、たとえ相手がモヒカンでも関係ない。

「はあ？オマエいい度胸してんなあ、あのなあテメエ、誰に向かって金タカッてるんだあ〜？こらあ。」

さすがにモヒカン少年は従わない。スタジアムジャケットを着てティッシュ箱をぶら下げているロイド眼鏡のマサトに、そう言って凄んで見せた。

「んー、あつ、そう…、残念だなあ、非常に残念。実はだなあ、あそこに2人、女が居んだろ？あの左側の女が俺の知り合いなんだけどよあ、君のことに興味があるってよあ…、だけど、モヒカンだからチョット怖そうでイッタイどんな人か分からないから、もし俺の知り合いだったら紹介してくれ、って言っただよなあ…、つで俺、眼が悪いから近づいて顔を確認してくるって、君を探してたんだよあ。あの女、シャクるの、なまら上手くてよあ…、一度経験しといたほうがイイと思うんだけど、俺、君のことゼンゼン知らないしなあ…、つて考えてたら、あつ！そーだ！知ってることにしてしまえば一件落着だ！…その代わり君からチョットだけ紹介料をもらえれば…、つてナイスなアイディアが浮かんだんだけどなあ…、たったの1000円でいいと思ってるんだけど…、まあしょーがない。非常に残念したっけ。」

そう言いながら、マサトが5メートルほどの所で立ち話をしている2人の少女に歩み寄ると、『口が大きい左側』に囁いた。

「なあアヤコオ、あそこにいるモヒカンのハンカクサイ（どうしようもない）のが居るだろ？あいつが来たら、テキトーに世間話してよあ、気に食わなかったら『やっぱタイプじゃない。ごめんね。』って振っちゃってくんねえかなあ。御礼に今度、イッパツやっちゃるから。」

以前からマサトを知る『口が大きい左側』が、マサトからいきなり頼まれた内容が理解できないでいると、早速モヒカンが3人に近づいてきた。

「よお、１０００円集めてきたけど、これでいいのかよ。」

『…引つかかった!…。』

マサトはこうして中学時代に成り上がってきた男である。こういった駆け引きは朝飯前だった。

照れ隠しもあって、強張った表情をしながらボソボソと喋るモヒカン少年の肩に腕をまわしたマサトが少年の耳に手を当て、大げさに囁いた。

「ああっ! たった今、君のことを話そうかってどこだったんだよ! ヨカッタヨカッタ、危なく『近くで顔見てみたけど、あんなヤツ知らない、ヤバそうだからヤメとけ』って言うところだったべさあ! タツチの差だったわあ。」

マサトには、ここまでのストーリーに至ることは全て計算づくだったのである。

モヒカンから１０００円を手渡されると、「アヤコ、こいつ俺の後輩だから安心しなさい。」それだけを『口が大きい左側』に淡々と伝え、「じゃあ。あとはおふたりで。」と、その場を立ち去った。コトを済ませると、マサトは途端に非情となる。

やる気満々のモヒカンが、ナニが何だか理解できていない『口の大きめな左側』にデレデレと話しかけている光景を背に、何事もなかったかのようにマサトは新たな獲物に声を掛けていった。

『T i c k・s』のメンバー達は、あくまで爽やかに「ありがとーございまあーす!」と礼を言うが、やっていることは全くの恐喝である。

その甲斐あつてか、毎週末恒例の『警察が登場し、皆が散る』までの約1時間弱で1万2千円が集まった。

プラス、『Tick's』のメンバーとその周りのカンパで8千円、計2万円を工面してやったのだが、

「使えないすよ。みんなで違うことに使いましょうよ。」

「あらあらショーネン、これで終了と思ったら大きな間違いなんだね。こういったもんは後から『倍返し』が当然だからやってあげたことだからよ、ちゃあーんとお礼はしてもらうから。」

ショーネンの遠慮に竜二が意地悪く答えながら、ショーネンが着ているスタジアムジャケットのポケットに金をつっこんだ。

結局残りの1万円はショーネンが自分でなんとか工面して、ついに悲願達成に至ったのである。

そのトルコは『モーニングサービス』と呼ばれる、早朝、特に最初のお客になると少々の特典があるシステムを持っていた。

翌週末、ショーネンは『スピナッチ』を出した後、時間を少々つぶして早朝開店と同時に店に入った。

1時間半後、コトが終わって店を出てみると、そこに、クシをジャックナイフ代わりにして『喧嘩ごっこ』をしているナガノ、マサト、トールの3人が目に入ってきた。

ショーネンはその瞬間、いったい彼らは何が目的でここに居るのが把握できず、少々驚きはしたが、次第にじわじわと何か暖かいものが体中に広がるのを感じた。まるで家族が迎えに来たような心境になっていた。

「刑期が終わって出所してくると、こういう気持ちなんだろうが…」
シヨーンネンはジーンときている。

『一方的に好きになったトルコ嬢に営業されて早朝から金を貢ぎ、独りで地下鉄に乗って帰るのはムナシだろう。』と、シヨーンネンに気付かれないように『スピナッチ』から後を付けて待っていたのだった。

驚いてポカンとしているシヨーンネンを見つけると『喧嘩ごっこ』を中止した3人は何も言わず、何事も無かったかのように、朝露で真っ白になっているナガノの車に乗り込み、タバコをふかしながら家路についた。

シヨーンネンを含む4人が乗り込んだ車内は、フロントウィンドーに張り付いた露をキューキューと払うワイパーの音と、シヨーンネンが編集したカセットテープ『キックの鬼』から『サム&デιβ』や『ウィルソンピケット』の声が聞こえてくるだけである。本当はみんな、シヨーンネンに『いったいどんなことをされたのか?』を聞いたかったはずなのに…。

15歳で大人の世界に飛び込み、今まで年齢だけで周りから舐められることを極端に嫌って、どんなことも誰より長けていなければ納得できずに、たった一人、ダーツやレコード収集に没頭していたシヨーンネンが、唯一、背伸びをせずに付き合える仲間がこの世に存在することを実感した瞬間だった。

沈黙が続くグロリアの車内、リアシートでウィンドー越しを眺めているシヨーンネンの頬に一粒の涙がたった…。

- 第16章 -

「ヤノくん、あのね、京都にいるファイティーズグループが今札幌に来てて、是非『Tick's』のみんなに会ってみたいって言うてるの。月曜日には帰っちゃうから、その前によかったら紹介させてほしいなあと思って…。今度の日曜日、都合悪い？」

降り始め続けた雪がついに根雪となりそうな12月、京都からファイティーズスタイルのグループが札幌にやってきた。札幌出身のメンバーが、京都の仲間を連れて帰郷してきたのだ。

グループではなかったが『Tick's』初期からのファンであり、ユリエの後輩であり、竜二とユリエを引き合わせた張本人でもある『ヨコ』が京都グループメンバーの妹だったことで「札幌にもカツコイグループがいる。」と京都帰りの兄に伝え、急遽『Tick's』が紹介されることになったのである。

待ち合わせた場所は、いつもの『スピナッチ』ではなかった。

『Tick's』は、他のグループに『スピナッチ』を利用される事を嫌っている。

よほど親しい付き合いでなければ、彼らからこの店に誘われることはなかったのである。

京都グループと『Tick's』の対面は『ナゴ(Naago)』という猫の鳴き声の名前が付いた、同じ名前の輸入雑貨屋2階にある喫茶店で待ち合わせをした。

窓がとても大きく、晴れた日中ならば、たとえ札幌の冬でも直接入り込む細い日差しがほんのり暖かく、気持ちが良い。

壁は淡いスモークペーパーミントグリーンのペンキで塗られ、白木のテーブルと椅子が、広い空間に贅沢な間をもってポツンポツンと置かれている。

『ナーゴ』の客層は、いわゆる時代の先端をいく『デザイナーズブランド』といわれるジャンルのファッションに身を包んだ、どちらかというと知的な雰囲気をもった者たちだったが、その世界とはまったく縁のないはずのチンピラグループ『Tick's』はその天真爛漫な行動から、ここでも常連客に好意的に受け入れられてた。

待ち合わせ時間に少々遅れて、トール、マサト、ナガノ、竜二の4人が階段を駆け上がった。

2階店舗には入り口ドアというものが存在せず、したがって階段を上がりきるとそこは既に店内となる。よって、階段を一段一段上がっていく度に、店内にいる客の様子が足元から序所に見えてくるのである。

『Tick's』4人が同じ方向を見据えながら階段を上がっていると、ヨーコを交えた京都陣が既に皆、コーヒーを前に丸いテーブルを囲んで座っているのが見えてきた。

「いやあーどーもどーも、待つちゃった？」

本来ならば『待たせちゃった？』が正解であるが、本人達は遅れても全く悪気がない、したがってこういう言葉がついつい出てくる。

京都から来たグループは、どちらかというと『Tick's』でいえばサカガミ的雰囲気、すなわちアメリカの1950年代というより、昭和30年代初期の日本的な匂いが強かった。

洋服の色使いが地味で野暮ったく、リーゼントもいまいちキチッと

決まっていな。

そのなかで人一倍身体が大きな、茶色のジャケットにクリーム色のオープンシャツの襟を出した、甘いマスクの大男が席から立ち上がり、竜二に手を差し伸べてきた。

どちらかというと、昭和初期の新聞記者の様に見える。

同席していた彼の妹『ヨコ』が、とっさに立ち上がって紹介した。

「ヤノくん、兄です。」

すると、

「トニーです。」

大男の口から思ってもみない名前が出てきた。

『ヨコの兄貴はガイジンだったのかよ……』竜二は、彼の外見と口から出てきた名前との、あまりのギャップの大きさに笑いそうになるのをグッとこらえながら、どーもどーもと握手を交わしていると『トニー』は続いて仲間を紹介しはじめた。

「彼がマイクで、彼がサム、そして彼がバディ。」

『よろしく、よろしく』と、握手を交わしているツール、ナガノ、マサトを竜二が一人ひとり横目で見てみると、彼らも笑いをこらえ、爆発寸前で顔が真っ赤になっている。

少々の間が空いて、今度は竜二が『T i c k、s』の3人を紹介する番となった。

「こいつがクリスチーヌでえ、えつと、こいつがキャサリン、これマリリンで、俺ジョニー。あつ、ねえアントニオお、俺達もホットコーヒーちょーだい。」

「なんで俺がキャサリンでお前だけジョニーなんだよ！しかもジョニーだってよ！カッペ！」

すかさずマサトが突っ込んだ。

『Tick's』のメンバーや、女性なのに『アントニオ』呼ばわりされたウエイトレス、そして居合わせた他の客は沸いたが、京都陣はバカにされている気がして少々ムツとしている。

「ところで何ていうグループなの？」

実際バカにしていた竜二がそう聞くと、

「シルエッツっていうんだ。」

「へえー、原宿にもあるよねえ、その名前のグループ、知り合いかい？」

トニーが答えている最中に『アントニオ』が運んできた水をグツと飲みながら、竜二が尋ねると、

「えっ？ そうなん？ …… やっぱりあったかあ、同じ名前のグループウ……。」

トニーはうつたえたが、実のところ竜二は原宿にその名のグループ

が本当にあるのかは知らなかった。ただカラカッタのだ。

「音楽はどんな？」

「んー、『ニールセダカ』とか…最近はアメリカンポップスかな。」

竜二が話題を変えようと咄嗟に口から出てきた質問に、トニーが真面目に答えると、

『…ニツ、ニールセダカだとお？…、“カレンダーガール” 聞いているのかよお…。』

いかにもビギナー受けするポップなジャンルを久しぶりに耳にしてしまったトールが滅滅した表情でそう思いながらナガノに目をやると、彼もまた『腐ったものを食べてしまった直後』のような面相で口をあんぐりと開けたままトニーを見つめている。

「ところで『シルエツツ』が集まると、普段どんなことしてんだい？」

彼らの音楽レベルを知ったマサトが、興味深々の表情をしながらトニーに聞くと、

「うーん、どんなつて、まあ、昔は踊る為に集まってたんやけど、今は大抵ファッションのことや車、フィフティーズの情報収集ってとこかなあ、改めて考えてみると、これっていうのもないなあ…。
キミ達は？どう？」

『…キミ達だつてよ…スカして…』マサトはそう思いながら、姿勢を正しなおして応えた。

「ボクらはですねえ、んー、大抵は政治の動向とか、ときどき日本の今後の経済対策なんかの意見をぶつけあつ…ぐらいかなあ。」

すかさず「シルエッツ」の『サム』が「ほんまかいな」と突っ込むと、マサトが『スクツ』と立ち上がり、その場の雰囲気緊張感に包まれた。

するとその直後、笑いながら「うそだつーのぉ！」と『サム』の肩をポンポン叩きながら答えると、他の客も含む店内中が沸いた。こういう場のマサトは、なぜか『周りの人間を引き付ける、天性の素質と独特の雰囲気』をもっている。

しかもそのうえ、非常に馴れ馴れしい。

少々「シルエッツ」の緊迫感もほどけてきたところで、

「じゃあ、俺たち、普段どんな遊びしてるか、付き合ってみるかい？」

竜二がニヤツとしながら横目で聞いた。

「いいのかい？俺たち、今日一日時間が空いているから、ちょっと参考にさせてもらつよ。」

トニーは相変わらず育ちの良さそうな言葉使いで応えたのだった。

『…こいつら、不良じゃねえな…ただのフィフティーズマニアだ…』

そう思った『Tick's』のメンバー4人と、『シルエッツ』の4人、ヨーコの合計9人が、ナガノとマサトの2台の車で移動した、

『シルエツ』のメンバー4人が、ナガノのスカイブルーとホワイトのプリンスグロリアスーパーシックス、マサトのイエローとオフホワイトのプリンススカイラインを見て感激した。

「俺たちで一番カッコイイのでさえ、タテグロやもんなあ。しかもあれ、黒やしなあ。」

『シルエツ』の『バディ』が呟くと、ナガノが、「それは、スペシャルシックスだね。」と、いつものテンポで得意そうに応えた。（スペシャルシックスというモデルは、縦目4灯ヘッドライトのグロリア、ナガノのスーパーシックスの後継モデルで、割と手に入りやすい）

2人が駆る車のセンスから、いつたい『Tick's』のメンバーは、どんな場所に行つて普段どんなカッコイイ遊びをしているのか、トニーも興味を沸かしている。

ともすれば、京都に帰つたら早速取り入れようとも考えていた。

グロリアのフロントベンチシートに竜二とヨーコ、ナガノの3人、リアシートにトニーとサムの計5人、スカイラインにマサト、トールとマイク、バディが乗り込んだ。

1時間半かけてドライブをし、着いた場所は札幌から一番近い『大浜海水浴場』。

以前、ショーネンが溺れ、『ボストンクラブ』がマンホールでジנגスカンや羊の丸焼きをし、マサトが少女をひとり置き去りにし、その後復習にあつて自らも捨てられたエピソードを持つ、『Tick's』とは真に縁の深い、あのビーチである。

12月の大浜は、強い横風によつて小雪が真横に吹きつけていた。

『シルエッツ』4人とヨーコが、いったい何がはじまるのかと見ていると、『Tick's』の4人が車を降りて、突然、着ていた洋服を脱ぎだし、車のトランクからタオルを持ち出して、Ｔシャツとパンツだけで両手を振り上げ、雄叫びをあげながら嬉しそうに海に向かって走り出したのだ。

よく見ると、実は4人が穿いていたのはアロハ柄の海水パンツであった。

北海道の12月、小雪を伴った浜辺の風は冷たく寒い。

『シルエッツ』4人が啞然として車中からその異様な光景を見つめている。

実のところそれは『Tick's』の身体を張った、いつものジョークだった。

さすがの『Tick's』でも真冬にそんなバカなことはしていなかったが、前もって竜二が打ち合わせした芝居だったのである。

実は海水パンツやタオル、着替えの用意で『シルエッツ』との待ち合わせ時間に遅れたのだ。

しかし、勢いにのった4人のうち、調子に乗ったナガノとトールが、Ｔシャツを脱いで本当に海にザブザブ入っていつてしまった。

「あれ？以外とヌルイぞ！なあ、ナガノオ！」

トールの言葉に、マサトと竜二もシャツを脱いで入ってみた。

「あれ？本当だ！」

海が冷たいことには間違いは無かったが、凍りつくような気温からしてみれば、よっぽど温く感じる水温だったのが功を奏して、やがてヘアースタイルもメチャクチャになりながら、バシャバシャと水の掛け合いがはじまった。

そのうち、顔はほぼ完治したが肋骨あたりに残っているアザがまだ痛々しいマサトが、

「バカお前、50年代の犬掻きってーのはだなー！」

と、得意げに犬掻きを披露して見せていた。

「50年代の犬掻きなんか知らねーっしょやあ！クチビル紫色になつてくせによおー！」

みんなから突っ込まれ、マサトは集中的に水を浴び、キャアキャアと悲鳴を上げている。

その4人を見ながら寒さで硬直している『シルエッツ』のメンバーの姿を見て、ヨーコが
呟いた。

「お兄ちゃん達、あの人達には勝てないな、頭の中のレベルがチョット違うもん。普通、こういう世界の人達って、チョット気取ってて人の目を気にしたりツツパツてるのに、全然彼らにはそれが無いの。何かに夢中になったら格好なんかゼンゼン関係無くなっちゃう。今の彼ら、チョット変でしょ？仲間みんなが集まったらお兄ちゃん達がいても関係ない、マイペース。やっぱ『Tick's』の方が輝いてる。あんなことやってるけど、彼らススキノじゃ人気があつて女の子のファンもいっぱい居るんだよ、なのにゼンゼンなびかない。仲間とああしているのが一番好きみたい、まさにワルガキそのまんま。私も最初は彼らのファッションが好きただだったんだけど

ど、そんなのより、彼らの中身の方がもつと魅力的だったなあ……札幌に住んで、彼らと知り合えて本当に良かったよ……」

ヨーコからそんな感動的な誉められ方をされているとも知らずに、「あれ？来ないの？」という顔をしながらバサバサ頭で肩にタオルを掛けた『Tick's』の4人がフーフー言いながら戻ってくる、その姿を見ていたトニーは、我が妹の言葉に少々嫉妬しながらも、けっして自分達にはできない、彼らの天真爛漫な行動に憧れを抱いていた。

少しの間、『Tick's』の4人は裸のまま、時折パンツまでも脱ぎながら『シルエツ』と皆で写真を撮りあった後、急いで着替えて裸足のまま車のヒーターを一杯かけながら札幌へ戻ると、ヨーコとトニーの家に京都組5人を待機させ、『Tick's』4人はトールと竜二の部屋に分散し、急いでシャワーを浴びてヘアースタイルを整え、早番でバイトを終えたショーンも加わった計10人でススキノへ繰り出した。

竜二から紹介を受けたショーンのルックスと、彼の得意技である音楽知識で、もう『シルエツ』は駄目押しのパンチを食らっている。しかも、自分達以上に日本人離れた容姿でありながら、ストリートにただ『ショーン』と呼ばれていることに、互いを横文字名前で呼び合っている『シルエツ』は、恥ずかしささえ感じ始めた。

『ショーン』の独壇場状態で歩き着いた宴会場は、『Tick's』と年代で仲の良い一匹狼『オーチャン』こと『オオヤマシユウジ』の働く居酒屋『つば八』である。

普段は日本食を「格好悪い」と避けている『Tick's』だが、

こういう時に限っては、いつもオオヤマの働く『つぼ八』だけを利用する。

オオヤマも『Tick's』に感化された一人である。

アメリカのクチパク人形のような顔つきで、ポマードがテカテカと光る、分け目がキツチリ入った七三分けリーゼントスタイルに、『つぼ八』のハッピを羽織ったオーチャンが『シルエツ』にビールジョッキを配りながら京都陣に話しかけてきた。

「へえー、京都から来たんだあ、こいつらカツコイっしょ？一日ツルんでたんなら、分かったっしょ？こいつらのカツコよさ。」

オーチャンは、自分のことのように自慢している。

居酒屋にまでもリーゼントのファイフティーズ少年が働いている札幌の奥の深さと、しかも、『Tick's』には、こんな熱烈なファンが居ることを知った『シルエツ』は、次第に彼らを尊敬し始めていた。

酒が入り、ほろ酔い気分の威勢のいいリーゼント男が9人もいれば、ススキノで喧嘩騒動があってもおかしくはないのだが、ヨーコがいた事もあって騒動もなく皆握手をしながら、今度はメンバー全員を揃えて会おうと約束し無事平和に帰宅したのであった。

そして翌土曜の午後、兄の帰りをお供して今度は逆に京都旅行をしてきたヨーコが、手土産で兄から貰ってきた中部地元ファイフティーズコミュニティー雑誌を、竜二と待ち合わせた『TipTap』で嬉しそうに広げてみせた。

ヨーコが札幌へ戻る前日に、発刊日より一足早く手に入れたその号は札幌特集で、なんと真ん中ページ一面に『Tick's』が特

集記事として大々的に掲載されていたのである。
実はその情報誌、『シルエツ』の『トニー』が発行していたもの
だったのだ。

『T i c k ' s』と過ごした翌日に京都へ戻ったトニーが、大浜海
岸で妹のヨーコから言われた、彼らの持つ徹底的に一括したスタイ
ルやポリシー、京都のグループでは決して見ることの無い独特なユ
ーモアに感動し、早速記事にしたのである。

その見出しは、『今回のT o pは、レベルの高いフィフティーズが
大勢いる札幌の中では、ひととき目立つ異色グループ』。

そして、そのバックに使われた写真は、例の、雪がちらつく大浜で
ボサボサ頭の丸裸4人が股間を両手で隠しながら一列に並び、片手
で股間を隠した竜二が右斜め上空を指差し、皆その方向に一斉に見
上げているものだったのだ。

このコミュニティ誌は、かなり気取った文章や写真が殆どで、街角
で見つけた札幌のフィフティーズスタイルの写真には、知った顔の
連中も結構な枚数でカッコ良くポーズをきめながら載っている。

そんな雑誌の特等席ページを使って、まったく下品な4人が、原
始人のような姿で大きく登場しているのである。

ちつともカッコよくない。

しかしその写真以外は『T i c k ' s』も、いつものスタイルで自
慢の車と写っているのだが、何につけても始めのインパクトが強
すぎる。

竜二の顔から火がでた。

…いたずらで人を騙すと、やがてバチがあたるようになってい

この雑誌が札幌で配布されていなかったのは、不幸中の幸いだった。

ヨコからの雑誌を受け取って『TipTap』から帰宅した竜二が、たまたま部屋の白黒テレビを点けてみると、偶然エルビスプレスリー主演『ブルーハワイ』が放映されていた。週末の夕刻、ローカルチャンネルは偶にこういった『懐かし名画劇場』が流れている。いきなりのエルビス登場で驚いた竜二は、その後の予定をつぶしてテレビ観覧をしていると、若きエルビスがリーゼント姿で演技していることや、彼の腕にハミルトン社製『ベンチュラ』（三角デザイン）のファイフティーズ代表的腕時計）がはめられていたことの感動以上に、映画の舞台となった『ハワイ』に興味を持ち始めた。

この映画の舞台となっている市街地は、いったいハワイの何処なのか？ までは知識がない。

しかし、ハワイのビーチ、パイナップル畑、繁華街の街並みやレストランなどを見ているうち、エルビス以上に憧れを抱いてしまった。

『死ぬまでに絶対ハワイに行つてやる…』

アメリカンスタイルの竜二が憧れた夢の場所は、ビーチボーイズの暮らしたアメリカ西海岸でも、モータウンレーベル発祥のデトロイトでも、エルビスの故郷テネシー州テュペロでも、R & Bの本場シカゴ、ニューオリンズでもなく、なんと、漠然と、観光客が集まる常夏の島『ハワイ』なのであった。

所詮、竜二もイチ少年である。

『兼高かおる世界の旅』に憧れる主婦たちとなんら変わりは無かった。

ハワイに夢抱きながら竜二が映画を観ていると、突然、電話に呼ばれた。

『ボタndaウン』の『シヨージ』からだった…。

- 第17章 -

ススキノ繁華街と狸小路の間に、「都通り^{みやこ}」という雑居ビルが並ぶ一方通行車線の細い通りがある。

普段からよく暴走族同士が喧嘩となったり、やくざに因縁をつけられたりして、夜は余り治安が良くないことで有名なのだが、その『都通り』沿いの雑居ビル3階に、竜二がユリエのバイトが終わる時間まで、たまに独りで現れるスナックがある。

『ボタンドウン』という名の、そのスナック経営者『シヨージ』は、竜二が『ミルクホール』で知り合った、5歳年上の元暴走族リーダーで、出会った頃は『ヨンゴー』と呼ばれる、レンズ部分を45度（実は60度位までが機能的に限界）に傾斜させた銀縁メガネがトレードマークだったのだが、次第に『Tick's』のスタイルに感化され、リーゼントこそ変わらないが『ヨンゴー』はボストン型セルフフレームへと変貌し、タートルネックにカーディガンのヤクザ風スタイルがビーチボーイズ風さわやかスタイルへと変貌した経歴を持つ、後輩達には誠に面倒見の良い男である。

『ボタンドウン』は彼が若干22歳にしてオープンした、その名の通り、様変わりした彼のファッションポリシーから付けた名前の店だった。

この夜も、シヨージは紺のギンガムチェックが入ったボタンドウンにコットンパンツ、足元はシャツの柄と同じく紺色のトップサイダーというスタイルである。

『ブルーハワイ』を観ながらハワイに感動していた竜二に入ったシヨージからの電話は、「やばい男がお前をさらう為に探し回っている。」だった。

「お前、何か最近面倒おこしたかい？」

竜二が連絡を受け取ってすぐ『ボタンダウン』に直行すると、シヨージが眉間にシワを寄せながらビール瓶とグラスを持ち、カウンタ―から身を乗り出して小声でやさしく聞いてきた。

「えっ？覚えはないっすよ。」

「どうやら石川会系の若いもんらしいけど、店に入ってくるなり『ヤノをぶつ殺して中島公園に埋める！』って意気込んでたべやあ、俺もっ、お前が結構ヤツクイ事したんでないかって…。奴ら多分もうこの店には来ないと思って速攻電話したっしょやあ…。本当に身に覚えはないかい？」

「石川会系の若い衆？誰だそりや？」

そう言いながら竜二がグラスに注いだビールを口につけると、店の電話が鳴った。

「はい！ボタンダウンで…。おおマサトでしょ、なした？今ヤノ来てるぞ、おお今替わるわ。ヤノオ、マサト。」

「あつ、すみません。もしもし…。ああ、たった今聞いたわ、えっ？誰それ？はあ？知らねえなあ…。ウンウン…。ホオ、っで？ウンウン…。えっ？なんだそりや？誰だそれ？俺じゃないんじゃねえかなあ…。ああ、待ってるわ。」

キツネにつままれたような顔で竜二が電話を切ると、

「なんだってさ？マサト。」

シヨージがカウンター越しで氷をアイスperlでカチ割りながら問いかけた。

「俺を探しているって男、どうやらマサト君の高校の元先輩らしいんすわ。中退したらしいんすけど、そのあとやっぱヤクザになつて…そんな事どうでもいいんすけど…そいつの女がヤバイことになっちゃったらしくて、その原因がなぜか俺になつて…って俺をぶっ殺すって…って、今ちようどマサト君、ススキノにいてサカガミの店でメシ食ってるから、今から即効でここに寄るって言ってます。」

電話の内容を聞いて、一瞬、なんだそんな程度のことか…という顔をしたが、うーんと良く考えてシヨージが言った。

「本当に身に覚えが無いにしても、もうどうしようもないなあ、多分そんなこと言っても聞かないっしょ、そいつ。」

「…しかしそれにしても、なんで俺なんだろ？しかも、なんでこの店に来るのを知ってるんだろ？」

しばらく2人が「ン」と沈黙していたとき、早速マサトが店に入ってきた。

「ヤノオ、なまらヤックイぞ、あいつ、相当女にゾッコンだから真剣に殺されるぞっ！」

マサトは店に入ってくるなり、竜二に向かって声を荒げながらすっ飛んできた。

「オノダって言うんだけどよお、高校時代から、ヤクザ関係なくボコボコにしてた奴でよお、今だって、若い衆だけど相当暴れてるらしいっつー噂だべや。しかも都通りを徘徊しているってよお。サカガミの店で『パラダイス』時代の奴とカレー食ってたら、そいつも俺と同じ学校だからオノダの話題になつてよお、そいつが、『そういえば、ヤノに、しばらく都通りを歩かない方がいい、って伝えておいた方がいいんじゃないのか？』ってことになつて。最近こういう情報を仕入れて無かったから『何それ？』ってよく話を聞いた途端にアセツて電話したんだわ。ヤノ、なまらヤクイことになつたぞ。」

「ヤククイヤククイって、俺、身に覚えが無いがないんだから、どうしようもないしよや。」

竜二がマサトの捲し立てる言い方に少々苛立ちをみせてこう言ったが、マサトに腹を立ててみたところで解決しないことに気がつき、冷静になった。

「まあ、その張本人の女に会つて話してみないとわからんべさや。」
ショージが落ち着かせるようにそう言うと、

「もしかしてその女、誰かにサラわれてマワされた上にシヤブ漬けにされて、拳句の果てに都通りに捨てられたんじゃないかあ？」

マサトが注がれたビールのグラスに目を落としながら答えた。
しかし竜二はその『行き過ぎ』ともいえる憶測話が全く耳に入っていない。

なにより今一番心に引つかかっていることは、『ぶつ殺されて埋められる。』よりも、『もしかして、その女とはユリエではないか？

ユリエが実は二股掛けていたのかもしれない』という少々行き過ぎだが、全くありえない事ではない方向での疑惑だった。自分自身がそういう可能性をもっているから、つい相手にもその目で見てしまう。

しかも実はこのところ、竜二はユリエと会っていなかったのだ。

竜二は、店からユリエの自宅に電話を入れると、

「俺、用があるからシケるわ。」

そう言つてショージに金を払い、店を出た。

『ボタンドア』がある雑居ビルから都通りに出、ユリエの自宅へ向かうため地下鉄ススキノ駅まで歩いていると、正面からヤクザ風3人と、前髪だけ茶色に染めたりーゼントにピンクの革ジャン、ブラックジーンズのロックンローラー崩れの計4人がタバコをふかしながら歩いてきた。

すると、そのロックンローラー崩れが竜二の顔を見るや、焦りながら指を刺し、早口で叫んだ。

「ああ！ヤツ、ヤノだっ！ヤノッ！」

ヤクザ風3人が、本当か？という顔をしたかと思うと、全員が全速力で走り寄り、逃がすものと竜二の両脇を2人がつかんだ。

「てめえがヤノかあ！こつちいこいやあ！」

一番偉そうな蛇革ジャケットに黒トックリセーターの男がポケットに両手を突っ込んだまま通り沿いに停めてある車に向かって歩き出した。

都通りの路上駐車は、止められる人間が決まっている。まさに石川

会系の縄張りなのだ。

「もういいっすか？」

ロックンローラー崩れが蛇革ジャケットにそう聞くと、

「ああごくろうさん、今度、事務所にアレ取りに来いや。」

車の後部座席ドアを開けながら意味深々な返事をして、4人の中で唯一竜二の顔を知っていた彼を解放してやった。

どうやらこのロックンローラー崩れが『ボタндаウン』に竜二が顔を出していることも知っていたらしい。

蛇革ジャケットが運転席に座り、後部座席に先ず竜二の右腕をガツチリと掴んでいた男が乗り込んだ。

これからどうなるのか、いや、どうされるのか不安と緊張の中、竜二が車に乗り込もうとすると、スタスタとコート姿の男2人が歩み寄ってきた。

2人の片割れ、アゴの大きな大男の方が、

「ちょおっと、聞かしてもらっていいかなあ？あんたらこれから、この人をどこに連れてくんだあい？」

蛇革ジャケットに非常に柔らかい口調でそう聞くと、彼はアゴ男を見て途端に顔色を変えた。

アゴ男は、青くなった蛇革男の顔をジーンと覗き込みながら、コートの内ポケットから手帳を出してみせた。

警察手帳だった。

「オノダア、なにやってるんだあ？」

「いやあ、お久しぶりっすねえ、イマイさん。」

そのあまりにも絶妙なタイミングは、竜二にとって『助かった。』という感動よりも『ドッキリカメラではないか?』という疑惑の方を先にもたせるほどであった。

しかし、竜二の左腕をつかんでいた男がすかさず逃げると、助けられる立場の竜二までも反射的に逃げてしまった。

条件反射とは恐ろしいものである。

先に逃げた男は隠れていた警官にあっさり捕まり、一方、革底のスリッポンを履いていた竜二は雪で滑って体制を崩し、そこにコート姿警官の一人に背負い投げをくらった。

『セメテ「アシバライ」クライニシテクレレバイイノニ...。』

背中を強打して息が出来なくなった竜二を起こしてやりながらコート男がとぼけた口調で言った。

「ちよあつと事情を聞きたいからなあ? 君たちそこまで同行してくれなあ?」

『警察はなぜいつも皆、こういうトボケた口調なんだろうか?』そう思いながら竜二が向かった先は、都通りから二丁ほど行った場所にある『ススキノ交番』だった。

「任意同行ってやつ」である。

先ほどまではヤクザに両腕をつまれていた竜二が、今度は警官に両腕をつかまれ、酔っ払った野次馬達にからかわれながらススキノ交差点を歩き、目指す『ススキノ交番』に到着すると個室に連れて行

かれて事情聴取となった。

竜二の担当は例のアゴ男である。

事情を話し、自分は一方的勘違いの被害者であることを主張すると、アゴ男は『事実なのか？』と疑ったが、連れ去られそうになった現場を実際に目撃してることと納得し、名前と住所を書かせタバコを没収すると、こう言った。

「また都通りでイザコザ有ったら、『ススキノ交番のイマイ』って名前、いつでも使え。」

アゴ男はそう言うと、別の部屋へ向かった。

『…助かった…補導されずに終わった…。』

そうなのである。

実は竜二の年齢では『補導』の分類になるのである。ガキの世界では一丁前でも、世間ではまだまだコドモ扱いなのだ。

その後、噂を聞いて、例の蛇皮ジャケット「オノダ」の「女」がススキノ交番にやってきた。

オノダ達はまだ取り調べ室から出てきてはいなかったが、竜二はその女を見るや、派手な色使いのジャケットと黒いタイトスカートに脱色されチリチリに傷んだ髪を見て、オノダの女ではないかとピンときた。

竜二は彼女に歩み寄り、

「ねえオネーサンさあ、オノダって男、知ってるよねえ？…んー、

やっぱアンタ見たこと無いわ…。俺のこと知ってた？」

自分の顔に指を刺しながら、派手ジャケットチリチリ女にそう聞いてみると、

「えーっ、ちよつとお、なあによお〜？ダレ？アンタ？」

と返ってきた。

「俺さあ、ヤノっていうんだけど。」

「えっ！ヤノって、あのヤノ？」

「あのヤノって、どういうことよ！しかもお前、初めて会った人をつかまえて呼び捨てかあ？おい！」

結局、竜二の名前を語った男の仕業だった。

聞くと、やはり竜二と同じような髪型をしてスタジアムジャケットを羽織り、見かけはもつと細くて子供っぽい顔つきだったが、口がうまく『T i c k・s』のメンバーの名前まで出していたらしい。別にそれがきっかけで金を騙し取られたとか、薬を打たれて売春させられたとかの訳ではない。結局は「あんた、俺の名を語った男と、ただヤツちやっただけなの？」なのだ。

それを聞いたオノダが逆上して竜二を探し廻っていたという、誠に平和な出来事だったのである。

何はともあれ、問題は半分解決した。

速攻で『ボタндаウン』に戻った竜二は、シヨージとマサトに全て

を話した。

事件の内容よりも、イマイの登場を聞いたシヨージは『ススキノ交番のイマイ』が、いかに都通りでは権力をもった警察かを説明し、イマイとコネを持った竜二がいかにラツキーかを切々と語った。

「だけどさあ、俺いつも思うんだけど、なんでマツポは逃げる奴に、『まてーっ！』じゃなくて『そうだあ！そのままそっちへ走れえー！』って言わないのかねえ、俺だったら、そっちの方が『…何か罠があるんじゃないか？』て速度落とすんだけどなあ…。」

全く違う話をしている竜二を見ながら、シヨージは思った。

『…こいつ、人の話し、聞いてんのかよ…。』

そうして、竜二の名を語った男がイッタイ誰なのか？その話題を着に夜明けまで飲んだ拳句、ひとつの結果に至ったのであった。

犯人は絶対、オサナイ。

しかしそんなことより、竜二は重大なことを思いだした。

「…しまった、ユリエに『今から行く』って電話したままだ…ユリエのこと疑った上に…バツクレた…こっちの方が本当に殺される…！」

そのオサナイ容疑疑惑事件発覚寸前。

マサトは、本来であれば、彼が以前所属していたグループ『パラダイス』のメンバーにナガノの『グロリア』を見せてやる約束でサカガミの店に待ち合わせていた。

しかし、その『パラダイス』仲間からの思いもよらぬ情報で、急遽『ボタンドウン』へ飛んでいったために今回の予定は一方的なキャンセルとなって『パラダイス』仲間も帰ってしまった。

予定が変更したことを知らないまま、サカガミの店裏に駐車して『ビックリカレー』を食べながら予定がキャンセルになったことを聞いたナガノは、いい機会だからとサカガミにヒーターの調子を見てもらうよう頼んだ。

購入してから一度も故障がないグロリアだったが、『シルエッツ』とのドライブ以来、ヒーターの効きが良くないのである。

店裏で先にナガノが一服していると、バイトを終えて出てきたサカガミが、いつものアイボリーカラードリズラーを羽織り、サンダーバード風紙帽子の跡がついたヘアースタイルを隠すためトレードマークのハンチングを頭に引っ掛け、タバコに火をつけながら左眉毛をキュツと上げて、グロリアのボンネットを開けた。

「ウーンっと、ナガノオ、エンジンかけてヒーター入れてみてくれねえかい…あつ、これかあ？ヒーターコックのワイヤーが伸びてるなあ。こうしたらどうだ？」

エンジンルームに頭を突っ込んだサカガミがそう言いながらヒーターコックを引いてやると、途端にグロリア室内が暖くなり始めた。

「やっぱこれだ。ワイヤー交換だな、こりゃ。」

サカガミのおかげで、原因が一瞬にして判明すると、その場でお互い再びタバコに火をつけ、フーっと一呼吸おいて、

「ナガノオ、前から言おうと思ってたんだけど、今がチャンスだから言っとくわ…あいつら紹介してくれてアリガトな。」

サカガミが煙を吐きながら星空を見つめ、照れているのか、今度はハンチングをしきりに被り直しながら改めて話し始めた。

「俺よお、親父が元ヤツコ（やくざ）だろ？おまけに毎日ボクシングばっかやってたからチュウボウのころまでダチって居なくてよお、ボクシングよりもダチが欲しくて、『ドントコのトンシャ科』入れば、俺みたいな奴ばっかだろうって思ったんだけど、いざとなったら親父が猛反対してよお、『友達なんて、自分に何の役もたたねえ！ボクシングで強くなれば、黙ってても後から金も人間も寄ってくる！』ってよお…。だけど俺がどんだけ寂しかったかなんて、ゼンゼン分かってねえんだよな。だからお袋に相談して、こっそり試験受けてよお…。けど、いざ『ドントコのトンシャ科』に入っても、所詮、俺みたいな口下手で暗い性格だと、結局はダチなんかできねえんじゃないか？って悩んでたらよお、お前だけが声かけてくれてなあ…嬉しかったなあ…つでよお、ヤノ達を紹介してくれて…、したらアツサリ『T i c k ' s』の仲間に入れてくれて血なんか交わしてよお…なんかよお、俺みたいなのにも『仲間』ってできるもんなんだなあ…って自信が持てたんだわあ。俺よお、ナガノに感謝してるんだわあ。アリガトな。だけどよお、このこと絶対みんなには言わないでくれな。気持ち悪がれたら嫌だからなあ…。」

ナガノは驚いた。

ナガノは、サカガミ自身から友人を作ることを拒絶していたとばかり思っていた。

父親は元ヤクザ、自分は幼いころからボクシングに通いプロボクサーを目指しているという、まるで『サラブレッド』のような、恵まれた環境に育ったからこそ、『周りの凡人たちが相手にならず、独りで行動していた。』と勘違いをしていた。

しかし、当の本人は寂しく孤独、そのうえ劣等感までもっている人間だったということを、この時はじめてサカガミから打ち明けられたのである。

「俺もサカガミと似たようなもんだから、同じ匂いがしたんだわなあ、きつとお…。」

自分の喋り方にコンプレックスを持ち、兄にまでも煙たがられていたナガノが、竜二との出会いがきっかけで、自分の存在感を思い切りアピールできるようになったのと同じく、特殊な環境育ちだったゆえ人間付き合いが極端に苦手な性格で孤独な世界にひたすら突き進んでいくところだったサカガミが、ナガノとの出会いによって、今まで閉鎖的だった心の扉を開き、そして仲間までもつくることのできたのである。

タバコの煙を鼻から出しながら、サカガミが自分に打ち明けてくれたお返しとばかりに、ナガノが答えた。

「俺ねえ、『T i c k ' s』に入る前は『生きていく楽しみ』っていうのか、毎日の希望みたいなもん何にも無かったんだわ。だけど今は、どうすればみんな驚くかな?とかさあ、どうすればみんな笑うかな?ってよあ、今は毎日が楽しいんだわ。頑張って今度はあの車買おうとかさあ、このシャツみんなに早く見せたいとかよあ…生きがいていうのかなあ…多分、生まれて初めてさあ、自分を普通に仲間として受け入れてもらったからなんじゃあないのかなあ…。」

2人がこんな心温まる会話をしている丁度そのころ、一方で竜二は、『都通』でヤクザに誘拐されそうになり、背負い投げをされて呼吸困難になった拳句、警察に捕まって『すすきの交番』で取り調べを受けていた。

同じ時間、同じススキノ、同じ『Tick's』でも、日頃の行いで、時の過ごし方がこんなにも違うものである。

その翌日の日曜日、前夜の『オサナイ容疑疑惑事件』のおかげで夜ふかしをしてしまい昼過ぎに目を覚ました竜二が、「今から行く。」という電話を入れたままだった昨夜の一件を謝るためにユリエの自宅へ行き、インターホンに出た母親に挨拶すると、玄関先で彼女が出てくるのを待っていた。

しかし、3分ほど経って開いた玄関ドアから登場してきたのはユリエではなく、大柄の中年男性であった。

その中年男性とは、なんと東京に居るはずのユリエの父親だったのである…。

- 第18章 -

突然思っても見ない人物の登場で一瞬とまどった竜二だったが、すぐにユリエの父親と察し、落ち着いて挨拶をしようとした。

ところがその前に、

「もう会わせられないよ。」

中年男性は竜二に向かってこう一方的に告げると、途端にドアを閉めてしまった。

以前からユリエのアルバイトには反対だった父親は、街の不良と遊び始めたことに気がついてユリエを通学以外は閉じこめてしまったのだ。

ユリエの父親は現在こそ某中堅商社の経営者だが、その昔は中学卒業後に丁稚奉公同然で上京し、その後たった一人で会社を築いた男である。

札幌で会社を興したが、事業のウエイトは東京の方が重く、札幌に自宅と家庭を残して、一年の半分は単身で東京に暮らしていた。

今回久しぶりに帰ってみると、愛する一人娘が、紹介も挨拶もされていない、しかもせめて普通な学生であればともかく、落ちこぼれ不良少年と付き合っていると知り、『自分一代で築き上げた会社の跡取りとして、その男を身内に迎え入れなければならない可能性を持つ立場の私としては、今のうちに断固阻止しなければならない。』
』となったのだ。

竜二は、挨拶もままならずに一方向的に意見されドアを閉めてしまっ

た彼女の父親に対して『大の大人がすることではない。』少々腹が立ちはじめ、再びインターホンを鳴らすと、今度はスピーカーの向こうから、

「もう、話しは終わっただよ。」

そう父親の声が飛んできた。

「ちょっと待ってくださいよ。ユリエ居るんですよ、彼女と話しをさせてくれませんか。」

少しだけ荒げた声でインターホンに話したが、何の反応も無い。

竜二は一度地下鉄駅まで行き、公衆電話からユリエの自宅へ電話すると、今回は母親が電話に出た。

以前から母親とは電話口で挨拶し、自分を名乗っただけで毎回ユリエを出してくれていたので、安心しながら、

「あつ、ヤノです。こんにちは。」

いつも「ハイハイちょっと待ってね。」とユリエと換わってくれている母親の口から、

「ご用件はなんですか?」

素っ気ない言葉が返ってきた。

「えっ?」

咄嗟に口から出た。

キツネに摘まれたようだった。

「あのお、ユリエに換わってもらえませんか？」

「今、居ませんよ。」

居るのはわかっている。

こういう状態はどうしようもない。慌ててもドンドン事が深みにはまっていく。

この場合はひとまず諦めて帰宅し、これからどうするか、どうやって父親を説得しユリエとの交際の承諾を得るかを考えることにしたのだが、名案はサッパリ浮かばないまま時間が経ち、結局、この日はメンバー達の待つ『セブンセブン』へと向かった。

翌朝、あまり寝れずに朝を迎えた竜二は、ユリエの高校前で待ってはみたが、校門に立つ数人の教師の目に入り、追い返された。

なにせ有名お嬢さん高校、セキユリティーは北海道一なのである。当然、下校時間も同様だ。

ひとまず諦めて自分の高校へ行き、明日は通学する前にユリエの自宅付近で待とうと決めた竜二が夕方帰宅すると、玄関のドアに手紙が挟んであるのが目に飛び込んできた。

「あれ？…あーっクソオ！ユリからだっ！」

せつかく彼女が家まで来ていたのに、すれ違いだったことを悔やんだ。

悔やみながら読んでみると、『朝から晩まで拘束されて身動きが取れない状態で、通学までも父親の車で送迎されている。』とのこと、実はこの手紙もユリエの友人がわざわざ届けてくれたものだった。

た。

当然『スピナッチ』のアルバイトにも来ていない。

『…このままいったら二度と逢えなくなる可能性が高い…。』

もう一度、父親に自分の気持ちを聞いてもらおうと、意を決して竜二が又ユリエの自宅へ向かいチャイムを鳴らすと、父親は未だ帰宅していないのか今回は母親が出てきた。

一瞬、怪訝そうな顔こそされたが、かろうじて父親よりも好意的には見える。

父親からの定期連絡で、もう30分もしないで帰ってくるだろうとの事を教えられると、竜二はすぐ近くに設置してある自動販売機でコーヒーを買い、『…この姿は絶対父親に見られてはいけない…。』とキョロキョロしながらタバコに火をつけ、家の隅で待っていた。

本来、彼女の父親に会うのであればスーツにネクタイなのかもしれないが、そこは世間知らずの高校生である、しかしそれでも印象が良いようにと、この日は紺地に赤いタータンチェック柄のペンデルトンボタンダウンウールシャツに、オフホワイトのヘチマ襟ドンキーコート、紺のコーデイロイパンツに靴はローファーという、育ちの良さそうに見えるスタイルでキメたつもりなのだったが、頭は相変わらずの『リーゼント』。

『ああ、音楽聴きてえ、こういう時はウォークマンがあるといいなあ…カセットステレオだと近所迷惑だもんな…だけど、あんな新製品は高けえし…あんなスゲー便利なカセット、俺には一生買えなかつたりして…。』

3本目のタバコを踏みつけて消しながら竜二がそう思っていると、静まりきった住宅街の遠くから車の音がかすかに聞こえはじめ、それから数十秒ほどでベンツが近づいて、家の前で静かに止まった。

「来たっ！ユリのオヤジだっ！」

車のドアが開くと、竜二は走り寄った。

「こんにちは、突然ですいません。今日はユリエではなく、お父さんとお話しさせていただきたくて来ました。どうか僕の話をお願いしてください。」

生まれてすぐに父親を亡くした彼が、この時生まれて初めて、人に向かって「お父さん」という言葉を使った。

自分の解っている範囲では目一杯、大人の言葉で話した竜二に、ユリエの父親は冷たく答えた。

「なにを言っても無理だ、それに、私は君の父親ではないよ。」

竜二を見ずに助手席に体を向け運転席に座ったままそう答えた父親が、助手席に置かれた鞆を取り出して振り向くと、竜二の姿が視界から消えていた。

土下座をしていたのである。

あんなに負けず嫌いで、例え相手が年上だろうと、とにかくイキがり絶えず絡んでいった竜二の、18年を生きてきて生まれて初めての土下座だった。

「どうか会わせてください！」

凍って冷たくなった地べたに額を擦りつけたまま竜二は嘆願した。

通常であれば、ここで心揺れるのだが、相手は百戦錬磨の父親である。一向に動じない。

しかし、竜二の声がよほど大きかったらしく、部屋の窓から一部始終を見ていた母親が、玄関のドアを開けて出てきてしまった。

「ささ、立って立って。」

と竜二を起こしているとき、もう一度玄関のドアが開く音がした。

「あつ、ユリ！」

久しぶりに見たユリエの顔は、半ベソをかいていた。

「なに出てきてるんだ！さつさと家に入りなさい！」

土下座をしたままの竜二に全く目をやらない父親が怒鳴ると、

「どうしてお父さんは彼を見ようとしなの？どうして彼のお話を聞いてあげないの？無視されてもこうして諦めないで一所懸命な彼の方が数倍立派で尊敬できるわ。彼だってプライドあるのに、こうして嫌な大人に土下座までして、お父さんにお話を聞いて欲しいって言うてるだけなのに、なによ！お金が儲からない話しは聞けないの？お父さんの方が、よっぽど卑怯で嫌な男だわ、お母さんもよく黙ってついてきたわね！こんな親に私たちを拘束する権利なんか、ありません！」

普段は温厚な彼女が、おそらく始めてではないかという怒りを一気に爆発させた。

竜二も土下座姿勢のままで驚いている。

そしてユリエは、啞然として黙っている父親の横を通り過ぎると、動こうとしない竜二の身体をヨロつきながらも何とか抱き起こし、彼の手を引いて出て行ってしまった。

父親は、その彼女の背中を眺めながら呟いた。

「ユリエは大人になったなあ、もうこれからは、俺の指図は一切受けないだろう…いつまでも子供ではいてくれないものなんだな、なあママ…。」

「いいのかよ、これって、親父に対する挑戦だべよ。ユリは俺と付き合ったばかりにこんなになっちって…やっぱ世界が違っんだよ俺ら、ユリだってもっと似合う男いるのに…」

ユリエの肩に手を廻し、「フーツ」とタバコをふかすと、ユツクリ、というよりトボトボと夜道を歩きながら竜二が言った。

「親が好むような男性は私、好きじゃないもん。それに、いつも家には居ないくせに、たまに帰るとああやって自分の意志を押し通す父親のことが納得できなくて、次第にちよつとづつ不満が積もってきたの。もう子供じゃないんだからって。だからいいの。それにねえ、リュウちゃんと私は世界一お似合いのカップルなんですよーだ。」

ユリエが始めて『リュウちゃん』と呼んだ。

身内以外の人間から『リュウちゃん』と呼ばれたのは生まれて初めてだった竜二はその途端、嬉しさのあまり鳥肌が立った。もう二人には一切の壁が無くなったような気がした。一生彼女と過ごしていこうとまで考えた。

「だけどよお、俺、親父が早くに死んじゃって良く知らないから、

羨ましいんだよな、こういうの。」

遠くを見上げ、また煙をフーッと吹きながら竜二は言った。

「こんなテレビドラマみたいなバカバカしい事、まさか俺がするとは思わなかったなあ……。だけどそれにしても凄かったなあオマエ。怒ったら恐いつてーのは知ってたけど……。おゝコワイ。」

竜二特有の照れ隠しだった。

本当は、ユリエの父親と話しをしたかった。

怒られてもよかった。

殴られてもよかった。

父親の手応えを感じてみたかったのだ。

だから、こういったドラマチックな事が人一倍嫌いなへそ曲がり屋の竜二が、体ひとつでぶつかってみようと、意を決して土下座したのだ。

だがしかし、息子をもったことのない父親は、こういった行動に何の感情も起こさなかった。

たとえ不良とはいえ年頃の少年が抱いた小さなあこがれよりも、実際の大人の反応は、やはりテレビドラマの様には行かず、現実的で冷静なものであった。

「俺がオヤジになったら、子供には絶対あんな態度とんねえぞ……。」

子供達は、知らず知らずに親のそういった小さな行動から納得できない不満が生まれ、やがてオトナの全てを否定するようになっていくものではないのだろうか。

自分達は子供に対してたとえ完璧な教育をしたつもりでいても、当の本人達はそんなことより、親に体当たりしてみたい、そして裸でぶつかってきてほしいのではないか、しかし親は理屈でツブしてくる。逃げ場を無くす理論でくる。やがて矛盾した理論に子供達は次第に腑に落ちなくなっていく、ついには親を舐めて掛かるのだ。親の気がつかないうちに子供は外見よりも、考え方や捉え方が物凄いスピードで成長していく。しかし、そこに気がつかずに、いつまでも子供扱いで対応しているから、こういう結果を生むのだ。

親の、子に対する責任感とは、立派に育てるのも確かに大切だが、自分の子供に対する言動は必ず筋を通し、子供の話し、意見、主張をまず聞き入れ、子供から尊敬されるよう、子供に教育する倍以上の厳しさで自己を管理する必要があるのではないのだろうか。

何も知らないピュアな子供達が、次第に良くも悪くも変わっていくのは、結局は親の無意識のうちに行なう不条理な行動、言語すべてを観察しての結果なのかもしれない…。

- 第19章 -

『Tick's』の主催する2回目のパーティが、1982年も残すところあと2日の『12月30日』に決定した。

クリスマスが終わり、大晦日の前日で既に忘年会もひと通り済ませている『30日』が、招待客たちには都合がいいらしい。

「アニマルハウスのトীগーパーテイみたいになさ、オーティスデイ&ザ・ナイツ」みたいなバンド呼ぶんだよ、どう？これ。」

12月もいよいよ後半に差し掛かかり、具体的な企画として、竜二は今回『Tick's』のパーティの目玉にミニライブを考えてみた。

しかし、もし本当にバンドを呼べば『ギャラ』が発生する。

そんな予算はもちろん無い。

それよりも、メンバー達にしてみれば『Tick's』のパーティに呼べるようなカッコイイバンドなんか無いと思っている。

とは言っても、『Tick's』のメンバー全員楽器は出来ないし、歌えない。

そこで、レコードに併せた振り付けだけの『クチパク』ではどうかとなり、それじゃあ現在流行しているグループ『シャネルズ』の様に、顔を黒くして『ドウアップ』を振り真似するのはどうか、となったのだが、そのパフォーマンスはさすがに多くの学園祭などで既にポツリポツリとやられていた芸だったので、ヒネリに欠ける。そうしているうち、ちょっとしたアイデアが竜二に浮かんだ…。

「あー、探したべさあ！」

竜二が、ナガノ、トールと『セブンセブン』でパーティの段取りを考えていると、マサトがそこに飛んできた。

「別にコソコソしてたわけじゃねえよお。それより肋骨はいい加減クツ付いたのかい？」

慌てているマサトに、めずらしく冷静な竜二が笑いながら答えると、普段はオチャラけるマサトがこの時は珍しく、出されたグラスの水を一気にグーっと飲み干し、眉間にしわを寄せて、真面目に話し始めた。

「実はよお、小樽の『タツカーズ』が俺達をつぶしに札幌までやって来るらしいわ。」

小樽の『タツカーズ』とは、元々暴走族だったのだがソックリそのまま様変わりしたという経歴を持ち、かつて矢沢永吉が所属していた『キャロル』を崇拜している15〜16人で編成された、メンバー全員が革ジャン革パンツスタイルの硬派で実力主義の危険なグループである。

ファッションや音楽など『T i c k s』とは全く接点は無かったが『タツカーズ』リーダー『イヌイ サトシ』は竜二を好意的に思っており、札幌へ訪れる機会があるたび欠かさず会っていた。

イヌイは竜二を尊敬していたのである。

竜二もイヌイには好意的だった。

しかし、同じく革ジャンがシンボルマークではあったが、『タツカーズ』のような革パンツまではいかず、ブルージーンズスタイルのどちらかといえば『岩城晃一、舘ひろし』らが所属していた『クルス』風で揃えた『ダーティエンジェルス』のリーダー『ブルート』

に、

「『タツカーズ』は全身レザーだから、アメリカではゲイと勘違いされるかも。」

と竜二がなんのてらいも無く話したところ、いつの間にか、

「タツカーズはホモ集団。」

と湾曲してイヌイの耳に入ったというのだ。

実は『ダーティエンジェルス』と『タツカーズ』は一触即発状態になっていることを竜二は知らなかったのである。

こういった情報収集は、顔が広く、いろいろなグループと交流を持っているマサトが得意だった。

「昨日、タツカーズと仲がいい『クリークス』のカズやって奴から聞いたんだけどよお、イヌイ、なまらケツきてる（とても頭にきている）らしいって。半殺しにしてやるって火を吹いてるらしいんだわ。」

『T i c k ' s』を好意的に思い、竜二を尊敬してただけに、影でバカにされていたと思うとイヌイの憎しみは激しく、『タツカーズ』のメンバー全員を引き連れてわざわざ札幌まで『T i c k ' s』と喧嘩をしにやって来るというのだ。

マサトからそう聞くと、竜二は宙を見つめたきり何も反応はしなかった。

「どうやらその決行日が、俺らのパーティの前日、29日あたりになるらしいわ。」

妄想でもしているかのような竜二に、マサトが囁いた。

今回パーティー会場となる予定のカラオケパブ、『ニックス』はスキノの雑居ビル7階にある。

アメリカンポップスタイルの店内と、広めのフロアー、一段高いステージが今回のパーティー内容にぴったりとマッチし、そのうえ『ニックス』のオーナー、通称『ニック』こと『ニシヤマ クニオ』は『Tick's』のファンでもあり「いやあ、願ったり叶ったりだね。」と金額面で非常に協力し、無理も聞いてくれた。

なにより竜二は、

「『Tick's』のパーティーを『Nick's』で。」

この語呂合わせが気に入り、この店に決定したのだった。

パーティー前日、『ニックス』のスタッフとの打ち合わせや、店内のレイアウトの調べを終えた午後4時、トール、ナガノ、マサト、シヨーン、そして竜二の5人がパーティーの段取りのミーティングで『Hub』へ向かったところ、店の入り口階段前に、全身レザー姿の男が3人タバコをふかして立っているのが、車道脇に積み上げられた雪山の間から次第に見えてきた。

『タツカーズ』のイヌイ達だった。

この日の午後2時に札幌に到着したイヌイら『タツカーズ』のメンバーは、心当たりの人間達に『Tick's』の行動予定を聞きまわり、『TipTap』が既に年末休業しているとわかると『Hub』だけに的を絞り、約30分ほど前から待ち伏せていたのである。

彼らの憶測は宝くじを当てる確立より低かったが、そこへまんまと『Tick's』の5人が登場してしまった。

イヌイの只者ではない強い怨念が、彼らを引き寄せたのかも知れない。

ついに来たな、という顔をして竜二が3人に歩み寄った。

口から息を白く吹きながら、

「イヌイじゃねえか、どうしてこの時間にここに来ることがわかったんだい。噂は聞いてたべや。いったいどうしてこんな話しになったんだろうなあ。多分、俺らを良く思っていない奴らが仕掛けたんじゃないのかい。」

竜二はイヌイにユツクリとした穏やかな口調で話し掛けたが、完全に穏やかでないイヌイは、それを全く聞き入れず、「チョットこっちに来い」と言わんばかりに顎を振った。

10mも歩かない空き地に、全身レザー3人と、全身アイビー5人は向かった。

『Hub』が面している『二条通り』はビル建築計画が盛んで、建設予定の空き地が点在している。

「『グリーンオニオン（ブッカーTのインストメタル曲）』は、こういう時にマッチするなあ……。」

クシでリーゼントを整えながら歩いているイヌイの後姿を眺めながら、竜二は危機的な事態にもかかわらず、なぜか冷静にそう考えていた。

やがて空き地が全貌できてくると、そこで待たされていた『タツカ
ーズ』のメンバー残り7人が、やっと来たかという顔をしながら、
しゃがんでタバコをふかしていた。

「マサト君は『Hub』に戻っててくんないかい？この間ヤキ食ら
った時の肋骨、完全にくつついてないでしょ。やめといた方がいい
よ。」

竜二がマサトに気を使ってそう言った後、睨みを利かせた目だけを
左右に動かし、辺りを見渡して、

「フーン、あっち10人、こっちは4人か……。多勢に無勢だな。」
独り言のように呟いた。

しかし「拳句の果てにはやるしかない。」と考えていた竜二は腹が
据わっている。

「黙って見てろってかい？俺もやるよ。」

マサトは当然のことのように答えたが、

「明日のパーティ出られなくなっちゃうべさ、ほら、こんなんだし。」

と、マサトの左わき腹をキュツと握ると、まだ肋骨が完治していな
いマサトの体が、そのあまりの痛さで「イテテッ」とよじれた。

マサトを追いやり振り返ると、待っていた『タツカーズ』のメンバ
ーの手に鉄パイプや特殊警防が握られ、皮手袋にチェーンを巻きつ
けた者までが目に入った。

「…なあイヌイよお…道具…アリかよ。」

竜二が冷静に問うと、

「おい、そんなモン投げろ（捨てろ）よ、みつともねえから。」

なにか竜二に対して失礼なことでもしてしまった様な態度をとったイヌイが、背を向けたままヘアースタイルを整えたクシを尻のポケットに差し込むと、急に振り返り、

「てめえら全員、ここで土下座しろや。」

と凄んできた。

「はあ？ナニ言っちゃってんの？イヌイちゃん。」

オチヨクツたような口調で、余裕の態度を見せながら話す竜二の胸中は、実のところ余裕は無かった。

『…ああ…こんな時に限って、サカガミが居ねえ…あいつ、使えねえ…』

かつてはプロボクサーを目指していたサカガミは、タイミング悪くアルバイト中なのである。

「オツケーオツケー、わかったわかった。」

竜二は両手を胸の前で振りながら答えた。

降参したかの仕草だった。

しかし彼が返事を2回くり返す時は、大抵本心ではない。

トールとナガノの助さん格さんコンビは、そのことは本人以上によ

く知っている。

『大切なパーティを明日に控え、メンバーが半殺しにあってはならない。』と、なんとか温暖にコトを済まそうと考えていた竜二が、イヌイとは話し合いの方向に転換しようという作戦だった。

しかしどうやって和解しようかと考えているうち、『土下座』という言葉は、以前ユリエの父親の前で恥を承知で生まれて初めて経験したにもかかわらず無視をされ、プライドが非常に傷ついた、あのシーンを思い出さしてしまった。

あの時、思いもよらぬユリエの登場で、キレるにキレず溜っていたフラストレーションが、再び蘇ってきたのだ。

すると途端にアドレナリンが向上し、鬼のように顔が真っ赤になってきた竜二が、

「俺達をツブすってほざいてんだってなあコラッ！ツブせるもんなら、ツブしてみるコラッ！」

口からツバを飛ばしながらイヌイに凄んでみせた。

赤鬼を眺めながら『あーあ、やっぱりな。』という顔つきの『助さん格さん』がお互いを見合わせ、『格さん』ナガノがいつものタイミングで『まあ落ち着きなつて。』と赤鬼の肩をポンポン叩こうとした瞬間、背後から何者かの姿がイヌイに向かって吹っ飛んでいったのが目に入った。

シヨーンだ！

シヨーンがこれほど気の短い男だとは、メンバー全員が知らなかった。

サウスポーであるシヨーンンの左ストレートが、向かって右にかわ

したイヌイの右頬をかすめた直後、今度は竜二が瞬時に、体勢を崩したイヌイに寄り、彼の頭を両手でしっかりと固定すると、すかさず顔面にチョーパンを炸裂させた。

ショーネンの特攻がキツカケとなつて、竜二に止められていたマサトまでも我慢できずに相手に突っ込み、ついに5人対10人の乱闘が始まつてしまったのである。

しかし『Tick's』一人に対して『タッカーズ』2人が相手、勝てるはずが無い。

喧嘩の経験がある方にはお分かりだろうが、テレビ番組や映画のように、一人で何人もの相手をバツタバツとなぎ倒す、という可能性は素手での喧嘩の場合、まず不可能に近い。

相手の一人がひるんでも、もう一人がただちに攻撃してくる。

それだけが続けばまだ良いが、一人が『押さえつけ担当』、もう一人が『攻撃担当』となれば、一方的戦いとなるのは必然である。

案の定、『Tick's』側に形勢不利の状態が続いたが、なんとか5人は持ちこたえた。

が、そのうち次第にスタミナが切れてきた。

全員、こういう時に『タバコは体に良くない』と遅まきながら思い知らされる。

発狂タイプのナガノだけが相変わらず凶暴性を発揮していたが、弱り始めてきたマサトに付いていた2人のうちの1人がナガノに回り、3人を相手にしなければならなくなったナガノもサスガにバテはじめてきた。

イヌイにチョーパンをキメた竜二も、その後は背後からもう一人に押さえつけられ手も足も出せないまま、イヌイから復習をうけて顔面が血で真っ赤に染まり始めている。

マブタというものは、切れると大げさに血が吹き出る箇所である。その血が目に入り、前がハッキリ見えていない状態のまま、後ろから羽交い締めになれ身動きのとれない竜二のミゾオチに、イヌイが渾身の力で膝蹴りを入れた。

その途端、羽交い締めにあっけいながらも、あまりの苦しさで『く』の字に前のめりになった竜二の頭をイヌイが押さえると、今度はその顔面に膝蹴りをまた入れた。駄目押しの一撃である。

「グアッシュワァー！」

言葉になっていない、呻きなのか気合いなのか判断できない唸りを竜二があげた。

その姿が目に入った特攻隊長シヨーン、そしてトールもナガノも、以前に袋叩きを食らった傷が完治しないまま、また袋叩きにあっているマサトも「もう駄目か…」という時、

「こるあゝ、なにやってんだゝ！」

雄叫びを上げながら、薄暗い向こうから『タツカース』のメンバーを次々にフツ飛ばしている男の姿が見えてきた。

「あゝ、ノグちゃあん！」

皆が目を凝らすと、実はノグチだけではなく、もうひとり、『ジャンヌダルク』タイシヨーンも『タツカース』をフツ飛ばしていたのである。

タイシヨーンは相変わらずの革ジャンライダースタイルなので、一瞬『タツカース』と区別がつかなかったのだ。

「大丈夫かぁー？ヤノォー！」

この2人は、パーティのミーティング時間に遅刻して『Hub』に到着したところ、5人が空き地方面に連れて行かれた情報を従業員から聞いて飛んできたのである。

本来であれば元々『Tick's』ではないノグチは、今回パーティの主催者側ではなかったのだが、マサトから今日のこの情報を事前に聞いていて、この時のために顔を出してみたのだ。

ちなみにノグチと一緒に情報を聞いていたヤマは、…来ていない。

ヘビー級ボクサーとか重量戦車とかというレベルではなく、まさに『水爆のまわりに原爆を幾つか巻き付けてみました。』くらいの表現を持つても足りないほどの威力を持つこの2人がいれば、相手が何十人、いや何百人、いや、例え軍隊でも怖くはない。

「遅いから来ねえかと思ったべやあ。映画みたいなタイミングでしょー。」

半死半生だった竜二の顔が急に明るくなった。

「…大丈夫か？…」

その後、ノグチ&タイショウの宇宙生物上最強コンビの加入で『Tick's』対『タツカーズ』戦はアツサリ決着がつき、先程とは逆に顔を血まみれにして伸びているイヌイに、逆転勝利した竜二が手を差し出していた。

こここのところ喧嘩の機会が無くなったとはいえ、百戦錬磨のキャリアを持つ竜二は、タイマンになればイヌイよりは遥かに強かった。

不良少年たちの喧嘩は、まるで格闘スポーツのように、相手から「マイッタ」の一言があればただちに終了するという、暗黙の掟みたいなものがある。

そして勝った方が、負けた方に手を差し伸べて起こすのが当たり前、決着がつけば、これまでのイザコザは綺麗サツパリなのだ。

「しかし小樽からよく来たな、根性あるよ。だけどなあ、俺、お前らの事、一度も悪く言ったことはねえよ。」

勝った方が負けた相手を称えるのも、ひとつの仁義である。

イヌイを起こしてやりながら竜二はスツキリとした顔で言ったが、イヌイの方は口に溜まった血をぺっぺと吐くだけで何も言わなかった。

「俺ら、明日パーティー開くんで、これからその打ち合わせをするんだわ。だからここでシケルわ。お前らもはやく散らないとオマワリ来んぞ、したつけ（じゃあ）な。」

惨敗し気落ちしている『タッカーズ』を背にして、7人がタバコをくわえながらゆっくりと歩き出した。タイショーがマサトの肩を抱えている。

「マサト君からサ、あいつらが俺達をツブしにくるって聞いたとき、そのことよりも、ヤツパ他人を信用してベラベラ余計なことしゃべんない方がいいな、って思ったんだわ。ブルートに言わなかったら、イヌイ達もあんな事にならなくて済んだ筈だもん。イヌイだって俺らと一悶着やらかす噂が広まった以上は引くに引けなくなっちゃったんじゃないかなあ、本気で俺を憎んでモメたわけじゃねえんだよ、ゼツタイ。だつてよあ、さっきイヌイの膝が俺の顔面に入った時、『あれ？』って思ったんだわ、奴、膝入れるとき俺の鼻を外したん

だよ、わざと。俺、後ろから両手押さえつけられてたから、余裕で狙えたのによあ…。もし鼻直撃されてたら終わってたわ俺。おもしろ半分で広まった噂で一番踊らされちゃったのはさあ、俺じゃなくてイヌイの方だべやなあ…。」

既に陽が落ち、薄暗くなつた『二条通り』を引き返すと、竜二は固まりかけた鼻血を手の甲で拭きながら、自分の話をウンウンと聞いている6人と一緒に『Hub』へ消えていった。

「なあみんな、『トモダチ』って、いったいどこからどこまでのことを言っただろうなあ…。」

- 第20章 -

世間が、百年に一度の自然現象である《皆既月食》で盛り上がっている午後7時すぎ、日中から降り続いている雪を払い落としながら、コート姿の数人の男女が小走りにススキノの雑居ビルのエレベーターに乗り、寒さで冷たくなった両手にハアハアと白い息を吹きかけてやりながら、7階フロアーに向かった。

コートの肩に残った雪をはらい、床をドンドンと足踏みして、これまた靴の雪を落としているうちに7階に到着してドアが開くと、いきなり、サングラスをしたアロハ姿の男達が、常夏のハワイでの出迎えさながら、『アロハ』とレイをかけてきた。

12月30日、『T i c k ' s』が主催するパーティ『ゴイング
マッド・82』の始まりである。

前日の喧嘩騒動で目や口の周りに青瘀をこしらえた『T i c k ' s』のメンバーが、海水パンツにビーチサンダル、そしてアロハで、寒そうにしながらエレベーターから降りてくるゲスト全員に、いかにもお手製とわかるセコいレイをかけて迎えていたのだ。

『ルーキーズ』や『ボストンクラブ』、『コンテンポラリーキッズ』などの他にいくつかのグループ、『C S』のスタッフ、アパレル関係、化粧品や美容関係、看護師や銀行員、ホステスや放送業界関係などなど、多種多様のゲストが招かれていた。

『疑惑の男』オサナイのグループも来ている。

実はメンバーは皆、会う相手会う相手に、見境なく片っ端からパーティに誘っていたのである。

受け付けでは、同じくムームーで揃えた『T i c k ' s』のグルーピー達が4人並んで、手際よく会費とコートを受け取っている。昼間の顔は立派なOLである彼女たちにとって、こういった作業は手慣れたものだった。

その中には、あのミサもいる。

店内は、ショーンが編集したハワイアンが流れている。

やがてBGMはR&Bやオールディーズに変わり、竜二が夢醒れていることがキツカケで、今回のコンセプトは『ハワイ』という『T i c k ' s』のメンバー達が、気が付くといつの間にかフラガール姿になって会場に散っていた。

リーゼントにサングラス、しかし手作りのお椀ココナッツブラとナイロンテープのラファイアスカートは実に不気味であり、当初の思惑よりもゲテモノ的であった。

マサトに至ればブラのヒモに、もはや千円札が折って挟まれる始末である。

本来フールドリンクスタイルのパーティは、カウンターへ行つてリクエストすればどんな種類でも飲むことができたのだが、特別パンチが入ったグラスを、耳にハイビスカスを挟めたヨーコがトレイにのせて廻って歩き、それに興味をもったゲスト達はそのグラスを手に手に乾杯しあい、飲み干している。

実はこのパンチ、店のオーナー『ニック』氏開発『羊の皮をかぶった赤塚不二夫』とよばれる、それはそれは恐ろしいアルコール飲料だということを、メンバーだけが事前に知らされていたのである。

そうしているうち、『テキーラ!』で盛り上がりを見せ始めたフロアーに、続いて大音量で『アイズレーブラザース』の初ヒット曲『

シャウト!』がかかった。

『シャウト!』は、曲の途中で音量が小さくなり、やがてまた大きくなって盛り上がる、パーティには欠かせない大人気の曲で、『Tick's』のメンバーが愛した映画「アニマルハウス」のトীগパーティシーンでも登場している。

パーティのゲスト達も、さすがにこの曲の流れを知っていて、曲の途中から音量が小さくなるに連れ、皆腰をかがめて小さく低い姿勢で踊り、大きくなるに連れ次第に体を起こしながら、最後は題名通り、みんなでシャウトしながら飛び跳ね、躍っている。

これだけ皆一体となる曲は、3年前に流行した『西城秀樹』が歌ったディスコソング『YMCA』くらいだろう、とシヨーンネンはレコードをかけながら感激し見入った。

ゲスト達と一緒に躍っていた竜二が、急に「ティックスだぁー」と叫ぶと、やはりゲストに混ざって躍っていた『Tick's』のメンバーが、全員その場で倒れ、感電しているかのように身体を小刻みに震わせていたかと思うと、2秒ほどでまた立ち上がって何事も無く躍り始めた。

映画『アニマルハウス』トীগパーティ中のワンシーンを見たメンバー達が憧れて真似たものだったが、これがなぜかゲスト達に異常にウケている中、ヤマがトイレにいくと、もはや誰かが便器に吐いている。

「ああ、例の『羊の皮をかぶった手塚治虫』とかいう、あの恐ろしいパンチのせいだ…。」

その姿を見てしまったヤマはファスナーを下ろすと、用を足す前から身震いした。

一時間半ほど後、会が盛り上がってきたところで電気が消され、会

場がどよめいたかと思うと、正面にあたるステージにスポットライトが照らされた。

レイをかけた真っ白いスーツにアロハの襟を出し、サングラス姿に着替えて司会を務めたマサトが、

「今日、この日のために、デトロイトから最高のゲストを呼びましたあ！皆さん一生に一度の体験になるかもしれません！ご紹介しましょうー！レディース アンド ジェントルマン！ザ・スリーゲイズウー！」

途中でひっくり返った声をあげた直後、『マーサ アンド バンデラス』の『ヒートウェーブ』の前奏が、スピーカーが割れんばかりの物凄い音量で流れだした。

ショーネンの編集で、前奏の最初フレーズが長く繰り返され、次第にゲストたちのノリが良くなり始めたそのタイミングを見計らって、舞台に設置されたカーテンの裏から、顔の黒い、1960年代に流行した『ビーハイブ』（ヘアースプレーで大きくアップにした髪形）ヘアーに、光沢のあるグリーンのノースリーブワンピースと網タイツ、肘までくる白い手袋に白いハイヒール、顔にはツリ目のサングラスをかけた女性3人が、同じステップで登場し、客に背を向けながら一列に並ぶと、揃って両手を大きく振り上げ、バンザイしたまま振り返り、すかさずサングラスを外してパツと捨てた。

その姿をよく観ると、その一見黒人女性に見えた3人は、ナガノ、トール、そして竜二であった。

しかし、真っ黒の顔に真っ赤な口紅、そして恐ろしく長い付けまづげに目の1.5倍はあろうかという位に塗られたアイシャドーは、

3人ともに同じ顔の黒人女性に見える。

受付係りが不得意だったグループビーのチェコとカオルがメイクと衣装担当を買って出ていた。

実はこの2人、美容専門学校卒業後、普段はデパートの化粧品販売員と、メイクアップアーティストなのである。

竜二の腫れ上がったまぶたと、トールのこれまた腫れてパンパンになった左上唇も、この凄まじい化粧によって、ほとんど気がつかない。

今年は札幌にR&Bシンガー『オーティス クレイ』がやってきたこともあって、一体どこの誰が登場するのか息を呑んでいた会場は、爆笑と喝采に変わった。

レコードにあわせて口を開き、オリジナルビデオを参考に何度も練習を重ねた3人の大袈裟な振り付けが、最初こそ『キモチワリイ！オカマー！』と罵倒していた観客を、次第に感心の眼差しに変えさせていくと、やがて『ヒートウェーブ』が終わり、2曲目にして最後の曲『シュープリームス』の『ストップ イン ザ ネイム オブ ラブ』を披露して、3人は一度、舞台裏へ引き揚げた。

しかし、鳴り止まぬアンコールを受けて『マーサ アンド バンデラス』の『ダンシング イン ザ ストリート』の前奏と共に3人が再び現れると、会場は、酒が適度にまわってきたせいもあって、周りから苦情が来るのではないかというくらいの異常な盛り上がりを見せた。

そしてアンコールは、そのまま『ダンシング イン ザ ストリート』。

割れんばかりの喝采を浴びながら、3人は大袈裟な表情と振り付けを汗だくになって演じた。

そしてついに曲が終わり3人がまた舞台から引っ込むと、再びアンコールが沸き立ったままにいる。

カーテン裏で、ナガノが「もう一曲出た方がいいんでないのかい？」と提案すると、竜二は答えた。

「『恋はあせらず』も練習したからやってもいいけどよお、いまいち盛り上がり欠けるしよお、第一スシだって腹いっぱいになつたら嫌になっちゃうしよや。」

しかし酒の入ったゲスト達がしつこく、結局3人は着替え途中のブラジャーと編みタイツにハイヒール姿でステージに再登場し、お辞儀をすると、調子にのつた『ルーキーズ』のメンバーからビールを浴びた。

それを見た『ニックス』のスタッフがすかさずモップで床を拭きだしたところで場内の盛り上がりがやっと収まってきた。

「なんまらウケたあー！」

昨日の一件で体が弱っているはずのマサトが、叫びながら厨房に小走りして駆け込んできた。

店内フロアーは、余韻が冷めないゲスト達が酒酔いも手伝って『テンプテーションズ』の『マイガール』で躍りつづけている。

パーティの雰囲気は落ち着かせるため少々スローテンポの曲に変えた、DJ役のショーンンだけがフル稼働していた。

楽屋代わりの厨房で、カツラをとって顔を洗いクシでヘアースタイルを整えている竜二に、

「ヤノ君を呼んで欲しいって入り口で待っている人がいる。」

受け付けにいたミサが呼びに来た。

「誰だろ？ひょっとしてマツポかなあ… ススキノ交番のイマイさんかも…。」

「うっん、多分『ダーティエンジェルズ』の人だと思うけど？」

『余りにもにもウルサくてガサ入れか？…』と少々恐れていた竜二にミサがそう答えると、

「ああ、ブルートか。昨日の件があったから、今回パーティには呼んでなかったんだわ。スネてるのかなあ？あの男。」

相手が警察ではないという安心感からか表情が明るく戻り、受け付けのエントランスに着いてみると、そこに立っていたのはブルートではなかった。

「イヌイイ！まだ小樽に帰ってなかったのかよ。」

まったく意外な男の存在に、竜二は驚いた。

「よお、昨日は悪かった。スマン、実はあの後もヤノが俺に言った言葉を信用しきれてなくてよお、俺だけここに残って、今日、ブルートに本当の事はどうなっていたのか直接聞いたんだわ。」

「ブルートにい？お前ら、敵対してんじやなかったんかい？」

「俺達の問題よりよお、ヤノを信頼してきた俺の今までは、はたして全て間違えだったのか？の方が大切だったんだわ。だから一応、ブルートだけとサシで話してきたわけなんだわ。」

「おお、そっかそっか。」

竜二がそう答えた、その瞬間、

「ヤノオーツ、スマン！この通りだから、許してくれ！」

昨日は『T i c k・s』に土下座を強要していたイヌイが、ボコボコに腫らした顔をしながら、人目もはばからず自ら土下座をしてきたのである。

その姿を見た竜二がすかさず、受け付けをしているミサ達に目で合図を送ると、彼女たちはパーティフロアーへと席を外した。

「もういいよ、わかったよ、イヌイ、立て、ほらっ。」

やさしい口調でイヌイを起こし立たせると、手を差し出し、

「昨日、これしてなかったからな、ホレ、握手握手、仲直りだ。勘違いさせた俺もスマン。」

「んっ」と一呼吸おいたイヌイが、竜二に差し出された手を両手で握った。

「なんであのときに限ってヤノを信用しなかったのか……いや、多分、どんな存在がデカくなつてく『T i c k・s』に嫉妬していたんだと思う。カッコ悪いいなあ俺はよお……。」

「俺達はちつとも変わってねえよ。ただの野球チーム。所詮は札幌の『ダニ』だ。時代が変われば『T i c k・s』なんてすぐに忘れ去られるわ。」

竜二がそう言いながら握手を解くと「寄ってくか？」と聞いた。

「いや、今夜の最終（電車）で小樽に帰るから、もう行くわ。突然悪かったな、忙しいのに。」

エレベーターのボタンを押しながらそう答えるイヌイに、

「おお、したっけな。よい年を。」

すぐにエレベーターのドアが開き、もう一度竜二と握手をしたところで、イヌイが乗り込みドアが閉まった。

竜二がパーティーフロアに戻るとすぐのところにミサ達がジュースを飲みながら立っていた。

「悪いけど、さっきの土下座、見なかったことにしてくれな。あいづが来たことだけは、俺からみんなに報告しておくから。」

「うん、だけどあの人、結局誰だったの？」

ミサが聞いた。

「……ああ、俺の『トモダチ』だ。」

それ以降、竜二の口から二度とこの言葉を聞くことは無くなった。

時計を眺め、竜二がフロアに戻ると、鶴の一声で『T i c k・s』が一度厨房に集まり、全員スーツに着替えて店じゅうにこっそりと散った。

熱気おさまらぬ会場の舞台に、竜二が紺色のコンポラスーツにワンピースの刺繍が入ったワイン色の細いネクタイをして現れ、マイクをとって話しはじめようとした瞬間、今度は会場から「ヤアノケツツウー、ヤアノケツツウー」と、割れんばかり掛け声が大きく響いた。

実は以前、竜二が他グループ主催のパーティで挨拶をした際、突然、何を思ったか舞台上でズボンを下ろし尻を披露して以来、恒例となつてしまったのだ。

『ヤノのけつつ』は『スッポン』『スリーステップ』以上に有名になつていたのである。

いきなりのリクエストに戸惑いながらも、ベルトをゆるめ、背を向けたかと思うとペロっとパンツを下げて披露してみせた。

「ウアー、相変わらずキツタネエー！」

罵声と喝采、おまけに火のついたままのタバコまでを浴びながら、ズボンを履き直しベルトをキチツと留めると、何事も無かつたかのごとく話し始めた。

「みなさん！今夜は『Tick's』のパーティにお越しくださいます、ありがとうございます！改めまして、ここでウチのブラザー達を紹介しまーす！まずは『Tick's』の用心棒、タイショーククラアー！」

青みがかった玉虫のコンポラスーツに、ハワイアンリーゼントのタイショーが店内の隅から登場し、竜二と軽くパンパンと背中を叩きあいながら抱擁した。

その貫禄から、とても現役高校生とは思えない。どう見ても『町の不動産屋』もしくは百歩譲って『力道山』だ。

「つづいて、今回の司会を担当しましたあ『Tick's』の女がかりい、タケモトオ マサトオー！」

竜二の隣まで爽やかに小走りで登場すると、ゲストに向かってキザっぽく投げキッスをしてみせ『キャア』と会場から黄色い歓声を浴びた。外したサングラスの下は青タンだ。

この男もまた『借金取りにボコボコにされた場末のホスト』にしか見えない。

「そして、ニッポン代表！ サカガミ ヒデオオー！」

唯一前日の喧嘩騒動に参加しておらず、青アザの無いツルンとした顔をしているシャイなサカガミは、光沢のある濃い茶色のコンポラスーツでもいつものように耳にタバコを挟んだ姿で、大胆なパフォーマンスもなく登場し、固い表情を全く変えることなく淡々と皆に並んだ。

それを横で見ていた竜二は、

「楽しい？」

と茶化してマイクを向けたが、ひきつった表情のサカガミはノーコメントである。

そんなサカガミを横目で見ながら、「大丈夫なんだろうか？」という表情で竜二は続けた。

「今日のパーティにはかかせなかった音楽担当！ ショーネン、ショーネン！」

ブルーグリーンのジャケットを羽織ってDJブースから飛んできた

シヨーンは、結局最後まで『シヨーン』としか呼ばれなかった。続いてナガノを紹介するが、なかなか登場しない、二回目の「切れたら恐い、二重人格障害者あーナガノオーアツオオー！」のMCで、ナガノがなぜかトイレから焦って飛んできた。

「お金で困ってる人は今のうちから仲良くしておいたほうがいい、入来質店の御曹司！イリキートルウ！」

玉虫のコンポラスーツのツールはネクタイではなく、シルクスカーフを首元にのぞかせ、葉巻をくわえて登場してきた。

ツールが竜二とマフィアの挨拶ばりの抱擁をして、メンバー全員が一列に並んだ。

よく見ると、ナガノの白いシャツの襟部分に口紅が付いている。

どうやらトイレで何かあったらしい。

ワインレッドのコンポラスーツの光沢が、白いシャツに赤く映える口紅とマッチしているなあ、と感心しながら竜二は続けた。

「今日、ここにおいでくださった皆さんのお陰で、『Tick's』はここまでやってこれました。そして我々は今夜、最高の時間を過ごすことが出来ました。この場をお借りしてみなさんにお礼を申し上げます！みなさん、ありがとうございますー！『Tick's』は、永遠に不滅ですー！」

最初は良かったが、次第に興奮した竜二のスピーチが、まるで野球選手の引退セレモニーか、地方議員がする選挙演説のような雲行きになりはじめたところで、ナガノが耳もとで囁いた。

「まあ落ち着きなつて。」

そこで我に帰り、今までにない落ち着いた口調で、

「本当に残念でありませんが、これを持ちまして、今回のパーティはお開きにさせていただきます！ と思います！ 皆さん、最後まで有難うございましたあー！」

そう言うと、まるで演劇が終わった役者のカーテンコールのように、一列に並んだメンバーが手を繋いでバンザイのように上に振り上げ、深々と頭を下げた。

名前の意味を知ってか知らずか、バックでは『ダイアナロスとシュープリームス』の『サムデイ ウィ ウイル ビ トウゲザー』が流れている。ニック氏の計らいであった。

竜二は、一列に並んでお辞儀をしているメンバー達の横顔を見つめながら、個々に様々な過去を背負いながら今まで別々に生きてきた『ダニ』7人が、ひよんなキツカケで時間を共に過ごし、その間に起きた色々なエピソードを共に経験して、今、ここで初めて何かが一つになった気がした。

会場に詰めかけてくれたゲストの最後のひとりまで、店のエレベーター前でメンバーが一列に並んで『ありがとうございましたあー』と見送った後、皆で円陣を組み、『お疲れでしたあー！』と最後を締めた。

なぜか、ミサやチエコ達が泣いている。

彼女達も『Tick's』との想い出は、今回で最後なのかもしれないと察していたかのように。

『この瞬間が来なければよかったのにと思っているのかもしれない

…。」

メンバーが皆、彼女達を見つめながら、そう思っていた。

こうして大盛況となった『ゴーイング マッド・82』の打ち上げが、今度は兄貴分『ボストンクラブ』が幹事となつて、1960〜70年代のR&Bが流れるバー『プロスペリテイ2』で開かれた。

店のスタッフらと一緒に散らかった店内の掃除をし、着替えを終えた『Tick's』のメンバーと、それを手伝ったグループピーやミサ、ヨーコ達が遅れて『プロスペリテイ2』の店内に入ってみると、すでに満員で立席状態の客達から歓声と拍手が沸き起こった。

決して広くない店内は、パーティの興奮冷めやらず、熱気でムンムンである。

よく見ると、『CS』のスタッフや『ルーキーズ』のメンバー達の姿もあった。

こういった扱われ方には慣れていない『Tick's』のメンバーたちが少々動揺して立ちすくんでいると、『ボストンクラブ』のボス『ヒゲ』が、例のごとく椅子の上に立ち、店内を静めさせて、

「えー、今日は『Tick's』のみんな、楽しい時間を作ってくれて、アリガトー！おつかれさんでしたー！」

そう挨拶したところでメンバーは皆、我に帰って乾杯した。

その後、各自ビールを持ったメンバーが、バラバラに店内の客達と入れ替わり乾杯した後、『Tick's』のメンバーだけで円くなり、勝利したアメフト選手のさながら、人差し指を立てた腕を天に向け『ウイアーナバーワン！』と2回連続して合唱すると2人づつ向き合い、互いに腕を絡めて再び乾杯しあった。

まだ社会を知らない『Tick's』のメンバーひとりひとりが『腹の底から手放して笑い楽しんだ思い出は、これが最後。』とわかっていた。

このパーティを最後に、高校卒業をまじかにした『Tick's』のメンバーは、個々に今後の進路を見つめていかなければならない。既にマサトは高校を卒業して公務員となっていたし、シヨーンも元々レストランで働いていたが、残りのメンバーは、これからの人生を考える時期に来ていたのである。

まして竜二は札幌を離れるのだ。

「プロスペリティ2」の店内は、大音響で往年のソウルミュージックがかかり、店内は一種のディスコと化している。

『Tick's』が到着して、さほど時間が経過していない頃、悪乗りした客達にビールをかけられていた竜二の背後から男が声を掛けてきた。

「ヤノオ、悪いけど、俺、先にシケルわあ。」

振り返ると、そこにいたのは女性を肩に担いだマサトだった。

肩に担がれた女性は足をバタつかせ、マサトの背中をトントンと叩きながら「降ろしてよー」と嫌がっている。

しかし、嫌がる素振りは見せているが、まんざらでもないことは、猿でも一目で判断できる程、明確だった。

「したっけ。」

マサトは竜二と握手をかわすと、女性を担いだまま振り返り、店を出て行った。

振り返ったマサトの背後に女性の横顔が竜二の目に入り、ナガノに

聞いた。

「あんな女、来てたっけ？」

「いいや、さつき、この隣のスナックから出てきた女なんだわ。速攻でマサト君、声掛けたかと思ったら、速攻で担いで来たんだわ。」

「かぁー、おぞましい。」

竜二は羨ましかった。

一時間ほどの間、客が入れ替わり立ち替わりしながら盛り上がってきたところで、竜二が店のマスターに、

「サム アンド デイブの『ソウルマン』をお願いします！」

それまで流れていた『オーティスレディング』の『スイートソウルミュージック』が次第に終わり、『ソウルマン』の独特な前奏が静かに始まると同時に店内は怒号の歓声で包まれ、皆、踊りながら曲に併せてコブシを高く突き上げながら歌い始めた。

『アィム ソウル マァン！』

竜二はこの時、ここにいる皆は永遠の同志であり、全員の顔は一生忘れない、しかし、もう死ぬまで二度と今ここにいる全員が再び集まることはないだろうと、この瞬間瞬間を出来る限りスローモーションで脳裏に焼き付けていた。

前代未聞「ソウルマン」の大合唱となっている頃、日は明けて12月31日、1982年の大晦日になっていた…。

「ルイルイイゝオオゝノオゝウイガラアゝウエラリゴオゝイエイエ
イエイエイエゝエエ…」

『Tick's』は、こういった場でのクライマックスには、最終的に『ルイルイ』を大合唱する。
ちなみに英語の歌詞は適当である。

やがて盛り上がりが冷めぬまま朝4時、ついに解散となり空腹状態の『Tick's』メンバーはそのままコンビニエンスストアで、彼らの内輪でブームとなっている新発売の『ブリト』を買って車内で摂ることにした。
グループ達も、ミサを見送った後にコンビニエンスストアへ向かうことになっている。

メンバーは散々酒を飲んだ筈なのだが、なぜか皆、シラフだった。それだけまだ、緊張感が抜けていなかったのだ。
メンバー達が『ブリト』を買っている間、店の外にある公衆電話で、竜二がタバコをふかしながらユリエに電話をかけていた。
朝の寒さから、真っ白な息とタバコの煙りとが混ざり合い、竜二とは判断できないほど彼の顔を覆っている。

「こんな時間に、ヤノはどこに電話しているんだろ？」

レジの前で『ブリト』の暖めなおしを待っているヤマが、外にいる竜二の姿を眺めながらそう呟くと、

「ユリだべさ、パーティにも顔を出さなかったユリが気になってるんだわ、あいつ。」

ノグチが、まるで弟を見ているような眼差しで竜二を見つめながら応えた。

その一方では、竜二が察していた通り、誰も出ない電話に、

「こんなに朝早いんだから、誰かが出るほうがおかしいわな…。」

自分に言い訳をしながら受話器を置いて車に戻った。

メンバー全員、一睡もせずに迎えた朝、しらじらと青白い空気の中でサカガミのマツダキャロルから静かに流れていた『ザ・ドリフターズ』の『オン・ブロードウェイ』が、背景にピッタリとマッチして、竜二には何か幻想的に見えた。

コーヒーをすすっているグループピー達と一緒に、ヨーコモココアを飲んでいる。

「フー」

とタバコの煙を吹きながら、竜二は『プロスペリティ2』を出る寸前に言われた、ヒグの言葉を何度も思い出していた。

『いいかあ、ヤノオ、お前らなあ、絶対なあ、解散なんかすんなよ。兄弟同士に解散なんか無いんだからなあ、なあ？ヤノオ。』

「なぜヒグさんは、あんなこと俺に言っただろう…。」

竜二は不思議だった。

「もしかすると、今回のこのパーティーで『Ticks』がバラバラになるとも思っているんだろうか…。」と。

そんな頃、朝モヤで白く曇ったナガノのグロリアのドアガラスに、

ノグチが意味不明の英語で文字を書いていた。

『B o o k P e n D o g K a t M o o n S u n』

「どついう意味なのさ？それ？」

トールが聞くと、

「なんか、こついう車に英語がかいてあるとカッコイイつしよ…。」

ノグチが真顔で答えた。

「英語つて、そんなもんかよお、しかも『K a t』つて『C a t』じゃねえのかい？」

みんな爆笑した。

それ以上の余計な会話は一切なかった。

札幌の12月31日、空がうつすらと青くなり始め、朝の冷たい空気がメンバーたちの体と頭を凜とさせて、気持ちよかった。

「さあ、シケルかあ！みんなあ、今日はお疲れさんでしたあ。後はゆつくり寝てくれなあ。じゃあ、良いお年をー！」

竜二は、この2年間で大切に暖めてきた、大きな企画を成功させた後のような爽快感を感じると、非常に爽やかな表情で号令を掛けた。

「そーかあ、もう、良い年を！かあ…。」

トールがつぶやいた。

メンバー達が帰宅する頃には、皆すでにもう今朝の相手が決まっているらしく、ヨーコ以外はカップルがきている。

「ヨーコ、一緒にトンシャ（タクシー）で帰ろうか…。」

竜二が誘った。

音楽、ファッション、ガールフレンド、そして『Tick's』の事だけ考えて過ごせた1982年、彼ら18歳の一瞬が終わった。

- 最終章 -

年が明け、メンバーたちも無事高校を卒業した3月の終わり、いよいよ竜二が東京へ出発する日がやってきた。

午前10時5分のフライトである。

この場合、搭乗がはじまる午前9時30分までに千歳空港に着いていればよい。

札幌から千歳までの移動時間が約一時間半、逆算して遅くとも朝8時に出発すれば良いことになる。

しかし『Tick's』のメンバーはコンポラスーツにネクタイ姿で朝5時に集合し、竜二を見送ることにした。

メンバーと『コンテンポラリーキッズ』、『ボストンクラブ』などの親密な友人以外には、竜二が東京へ経つ情報は内密にした上での見送りである。

ナガノのグロリア、マサトのスカイライン、サカガミのキャロル、ヤマのクラウン、合計4台に9人が乗り込み千歳空港へ向かうという計画で、先にトールを乗せたナガノのグロリアが竜二の自宅まで迎えにいき、国道36号線に差し掛かる手前、ススキノの外れにある家具店先で、ショーンが同乗しているサカガミのキャロルと合流した。

曇り空でまだ青い空気の中、先に着いていたサカガミが、スーツながらも相変わらすのハンチング帽で耳にタバコを挟み、愛車キャロルのリアフードを開けて屈みながらキャブレターを調整していると近づいてきたナガノのグロリアに気がついて振り向き、くわえタバ

コで左の眉毛だけキュツと上げ、クールに微笑んだと同時のタイミングで、『スモーキーロビンソン』のスローテンポな曲『クルージン』が竜二の耳に入ってきた。
タバコの煙か、寒さで息が白いのか、サカガミの微笑んだ顔がくすんでいる。

福住の地下鉄駅前で、ノグチが同乗したヤマのクラウン、タイショーが一緒のマサトのスカイラインとが揃い、札幌から千歳空港へ繋がる有料道路『道央自動車道』へと向った。

道央自動車道に乗ってからは一時間強ほどで到着してしまうのだが、実はメンバー全員揃ってのツーリングは初めてということと、それより以上に、竜二との別れの時間を惜しむかのように制限速度をはるかに下回った速度で、お互いに抜いたり抜かれたり、ふざけ合いながらのスロードライブとなった。

若き『マービンゲイ』のような光沢のあるカラシ色のスタンドネットクシャツに光沢のある茶色のコンポラジャケットを併せ、黒い細身トップパンツを履いてナガノのグロリア後部座席に深々と座っていた竜二は、交互に映る他3台に乗ったメンバー達の無邪気に笑った顔を見つめながら、何か考え事をしているかのようにユックリとタバコの煙を漂わせていると、運転しているナガノが、実にオットリと話しはじめた。

「前にさあ、マサト君がヤキくらってタイショーが運転して送った日あったっしょ？覚えてるか？あの夜さあ『スピナツチ』でヤノが東京行きを発表した後にさあ、みんな普通にしてたっしょ？あれねえ、実はユリちゃんから、前もって聞かされてたんだわ。『本人、とてもみんなに言いづらくて苦しんでるから、もし言われる時がきたら、なるべく普段のまままで普通にしていってほしい。』って。ユリ

ちゃんから聞いた後すぐはみんな結構ショックだったんだわ。けど『ヤノのことだから、デツカクなって帰ってくるのを楽しみにしてよう。』ってなったんだわ。」

竜二は驚いた。

実は、竜二自身の口から打ち明けるときが来るのを、皆は黙って待っていたのだ。

『…本当に俺がいなくなっても、こいつら大丈夫だ…。』

これから自分の居ない札幌で、自分の居ない『Tick's』が、自分の知らない『Tick's』のエピソードを生んでいくのだと竜二は確信した。

やがて千歳料金所に着くと、朝モヤの向こうで、ショーネンがサカガミのキャロルに『箱乗り』をしてふざけている。

結局、フライト時間からかなり早く千歳空港に到着した9人は売店で缶コーヒーを買い、空港の屋上で飛行機を観ながら一服する事にした。

「ちょっと、俺、電話してくる。」

竜二は公衆電話を探した。

去年12月の父親との一件で『スピナッチ』を既に辞めているユリエは、年末のパーティに顔を出さなかったあたりから竜二とギクシヤクし始め、年を越した後も、会う度に最後は喧嘩ばかりしていた。ユリエはヤノの出発が近くなるにつれ、少々ナーバスになっていた

のだ。

今回も『当日は空港にお見送りに行くから。』とユリエが答えたきり、一週間前から連絡が取れておらず、ヤノが自宅へ行ってもユリエの部屋は毎晩電気すら点いていなかった。

空港から電話をすると、早朝にもかかわらずユリエの母親が電話には出たが「出かけている」の一点張り、ユリエが旅立つ最後の最後まで変わらない。

『…それにねえ、リユウちゃんと私は世界一お似合いのカップルなんですよーだ…。』

いつかユリエに言われた言葉が、ユリエの背後から被ってくる。

モヤモヤとした曇り空のような表情をしながら一人出発カウンターで手続きを済ませ、何ともなかったようなスッキリとした顔に戻したユリエが屋上のドアを開け外へ出ると、皆が全員一列でベンチに座って一服していた。

トールが離発着する飛行機を見ながらつぶやいた。

「なんかよお、今年、東京にディズニーランドが出来らしいんだわ、東京にだよ！時代は変わるもんだよなあ」

みんな驚いた。

ここ最近メンバー全員、ニュースを見ていない、ラジオも聞いていなかった。

「東京の何処にできるんですう？」

シヨーンが言ってみたものの、誰も知るわけも無いし、例え東京の何処と言われても東京自体良く分からないので聞いてもムダだと気付いていると、トールがすぐさま、

「これからさあ、こうやって時代もドンドン変わって、俺達もいつかネクタイ野郎になって結婚してガキができて家庭を守るようになって、っで、そのうち今のこの脳ミソの中も変わっていくのかなあ……。」

「時代は変わって見た目こそネクタイ野郎になって家庭を持っても脳ミソの中は変わってねえんじゃないかい？結局よあ、もともと頭カラッポだもん。変わるほど起用じゃねえもんな。」

立ったままのマサトが明るく答えると、トールが、

「21世紀は来るのかなあ、ノストラダムスは1999年に人類は滅亡するって言ってたもんなあ。」

「案外生きてるかもよ、みんな。」

ヤマがそう答えると、トールがまた、

「もし生きてたら、どうするよ、つまない大人になってるんじゃないの？俺達も……」

そう呟くと、マサトが少々声を大きくして、

「つまないって、字にすると『詰まってない』って事だろ？大人になったってサラリーマンになったって何になったって、『詰まっ

た」生きかたしてりや、つまんない筈だべさ。」

わざとらしい北海道弁で答えた。

竜二との別れでツールが少々おセンチになっているようだと察して、
「まあ落ち着きなつて。だけど、オヤジになつて、そのうち自分の時間がなくなつて、会社の仕事に追われて、結局はそのうち、自分が気が付かないまんま、つまない人生を送ることになるんじゃないのかい？」

今度はナガノが相変わらずオツトリとした口調でそう問うと、

「自分の時間つて、どういう時間だよ？仕事してる最中だつて自分の時間じゃあないのかい？要はな？捕らえ方なんじゃねえか？ああ、俺は可愛そうだとか、こんな筈じゃないとか、昔は良かったとか、課長がどうの、部長がどうの…卑屈なんだよ、そういう奴に限って自分は何も出来ねえ癖によお…」

と、すでに社会人としてデビュー済みのマサトは、自分の喋る内容に自分で興奮し、少々声を荒げている最中にフツと我に返ると、それを抑えるかのような落ち着いた声に直して、

「カツコイイ奴つてさあ、たとえネクタイ野郎になつたとしても、世間に振り回されないで、それなりに自分の時間つてえのを自由に使える奴なんじゃないかなあ、情報に惑わされないし、自分のスタイルを持つてる、そんだけ自信があるから出来る事だよな。」

と被せた。

彼らの目一杯の、最大級の表現は「カツコイイ」の一言でしかなかった。

結局は『T i c k ' s』も皆、将来どういう大人になっていくのか不安なのだ。

「俺たち世代が親になったら、そのガキたちはよお、俺たちがガキだった頃よりお洒落になって、欲しい物が簡単に手に入って、近所でフラフラしてる『戦後の兵隊あがり』の恐ええオヤジに意味無く殴られなくなって、幸せな時代を送れるんだろっなあ。」

ヤマが羨ましそうに言うと、ノグチが丸い目をもっと丸くして言った。

「んー… けどよお、もしそのガキたちが、俺達の言う『贅沢』が元々生れつきだったら『普通』になっちゃうわけだべや？ したらそれはそれで、もっと違う方向に進んでいくんでないかい？ ほれ、どんなに最初はカッコイイと思った車だって、結局ノーマルで乗ってられなくなって、どっかイジるっしょや？」

「ノーマルでない、つつーことは『変態』になっちまうとかかあ？」

マサトが笑いながら言うと、ノグチが真顔で答えた。

「それも、有り得るんで無いかい？」

「結局、俺たち世代が『オシャレな家族』みたいなのに憧れてよお、うわべだけの真似ごとをしていても、ただの『親の自己満足』になっちゃってよお、ガキたちからしてみればそんなの『本音の家族』じゃないのを見透かしちゃって、結局は親たちに反抗しちゃうんだわな。」

ヤマがそう言うと続けてノグチが、

「格好ばっかつけて、親が子にしなければならぬ本当のことをしていないと、そのガキたちは絶対にバカ息子やバカ娘になっちゃうんでない？そしたら俺達レベルの人間達が『まとも』グループに入る時代がくるかもよ。」

「大体がよお、テレビに登場しては『不良になるキツカケは、家庭の温かさが無いから。』とか『親が子供とのコミュニケーションが足りないから。』とか偉そうに説教じみた事言って天狗になってる奴に限って、自分は不良だった経験がないんだよな、一流大学なんか出てる育ちの良い奴が、分かったようなクチを利くなっつーのな。俺なんかお袋だけの片親だったけど、そんなの関係ねえもん。大体自分がグレた原因を人のせいにするっつー腐った言い訳して不良やってるハンパな奴はよお、いざ喧嘩になったら尻尾を丸めて逃げたり果ては武器を持ち出すシャミか不良に憧れるただのハッタリ野郎ぐらいだよ。意外によお、ガキの時は、おとなしかった地味な少年少女のほうが、かえって社会人になってから俺達以上にエグイことすっかもよ。」

いままで黙って皆の話を聞いていた竜二が少々興奮してそう力説した後、自分を見送ってくれる為に朝早くからせつかく集ってくれた仲間と交わす内容ではないような気がし始め、タバコに火をつけながら突然話題を変えた。

「21世紀かあ、生きてるうちに宇宙に行けっかなあ…俺らあ…。」

「相手は21世紀だぞお？せめて月ぐらい行けるしよや。」

同じく察したヤマがすぐさま答えると、自分の気遣いを察してくれ

た事が嬉しかった竜二がすかさず言った。

「そしたらさあ、みんなで行こうな、月。」

そう反応するとマサトが、

「ああ、金貯めて全員で行くつしよあ、しかしその頃はみんなオヤジだな。だけどよあ、その頃もカッコイイオヤジで居てよあ、若い奴らが憧れる存在でいるべな。」

ナガノが直ぐさま、

「やっぱ一番カッコイイのは、いつの時代でも流されないで、自分達のスタイルとかポリシーみたいのを貫き通してる奴なんでないかなあ、俺達もそうでない?」

と答えると、トールが

「ああ、いつまでも『Tick's』は『Tick's』だわ、口笛吹けばいつでも集まる。」

「それって、『ワンダラーズ』のセリフじゃねーの。」

竜二が茶々を入れた後、フーツとタバコの煙を吐きながら言った。

「みんな、『ティーンエイジャー』ってどういう意味か知ってるかい? あれってよあ、11歳はイレブンだけど、12歳はトゥエンティーン、20歳はトゥエンティーだけど、19歳はナインティーン、最後にティーンって付くだろ? だから、12歳から19歳までが、ティーンエイジャーなんだわ。この8年間だけ、なんだわ。」

ヤマが感心して、

「へえー、じゃあ、俺たちのティーンネイジャー時代は今年までかい……。だけでもんな年とってジジイになっても、有るか無いかわからない髪にポマード塗ってクシ通してんのって、カッコイイじゃないやねえ。」

と返した。

すると、しばらく黙って聞いていたサカガミが、細い目を、なおも細めて、

「やっぱ、その頃は全員アロハ着てよお、まっ昼間から酒飲みながら、『最近の若けえ奴はどこのこの』ってほざいてんの。またピンフ（平和ビリヤード）に集まって、4つ球なんか打ちながら。っで、若い奴から、変なオヤジグループって呼ばれて気持ち悪がれてよお。」

と、耳に挟んでいたタバコを咥えながら笑顔で答えた。

「おっ、いゝね、いい、それ。変なオヤジになってやるべさや、なあ。」

と竜二が盛り上げ、続けて言った。

「やっぱジジイになっても、いつも不良は不良だわな。不良ジジイ……そーだ！カレッツジリング作ろう！『1981』って入れてよお、石はグリーンで。年寄りになってもカレッツジリングだけは相変わらずはめていられるしょ？、死ぬまで『T i c k ' s』だっつープライドは忘れないべや！」

マサトが、

「なあ…その頃になつたらピンフのオヤジ、もうとつくに死んでるんでない？…そのまえに俺達、死ぬまでツルんでるの？」

すると、シヨーネンが答えた。

「例え全世界にみんなが散つても、みんなの心は永遠に『Tick
』だつっーことつすよ。」

なるほど、納得したマサトがすかさず、

「だけど死ぬまでズーッと、シヨーネンは『シヨーネン』って呼ばれてんのかね。」

「変なジジイになつても、シヨーネンは、永遠に『シヨーネン』だ。」

トールがそう答えた後、またボソつとつぶやいた。

「今だから言うけど、俺さあ、一回、パンツ破れんじやないかつつーくらいデカイ屁をしたことあるんだわ。そんな時、その勢いで月まで行けるんじゃないかって本気で思ったしやあ。」

「なんだ、そりゃあ！訳わかんねえべやあー。」

未だに、もうとつくに済んだ『月』の話題を引っ張っていたトールのいきなりの言葉に皆笑ったところでいよいよ出発時間となり、搭乗口へ向かうためにエスカレーターで階を下りていくと、遠くに女

性がひとりで立っているのが見えてきた。

「あつ、ユリ！」

遠くからそれがユリエだと瞬時に判断した目の悪いはずの竜二が、思わず全速力で走り寄っていき、そしてユリエの5メートル程手前でスピードを緩め、ゆっくりと歩み寄った。

「どうしたんだよ、何回も電話したっしょや。」

ユリエの両肩を掴んだ竜二が、心配そうに言った。続けて何かカッコイイ感動的なことを言おうとしたが、全く出てこない。

なにか『心のひも』みたいなものが緩んだ気がした。

「友達みんなと卒業旅行に行ってたの。これから別れて暮らす毎日が、チョットだけ苦しくなりそうだったからね。」

ユリエはなぜかサッパリと爽やかに明るく答えた。しかし、竜二にはユリエのその明るい表情が作り笑いにしか見えていない。

自然には反応してこない顔の筋肉を、無理に動かしていることはわかっていた。

「ちよつとの間でしょお。」

竜二が眉間にシワを寄せ、苦笑いをしながら言うと、

「5月の連休に東京行くね、ゼツタイ。」

と爽やかにユリエが応えた。

「おー、来い来い、来たら一緒にデズニ ランド行こう!」

「デズニ じゃなくて、デイズニーでしょ、それに5月じゃ、まだオープンしてないんじゃない?」

「えっ? オープンしてないの? すでにーらんどお...。」

竜二がオドケると、不自然だった雰囲気が一瞬だけ、明るくなった。

ユリエはメンバーが待っていることに気を使って、そこで「じゃあ身体だけは気をつけてね、はいコレ。バイバイ。」と、小さな紙包みを竜二に渡し、わざとアツサリと別れようとした。

「おう、じゃあ。」と竜二が答えた直後、ハツと思い出して、着ていたジャケットの内ポケットから手紙の入った封筒を取り出した。

「これさ、帰りのバスン中でも、暇つぶしに読んでくんねえかい?」

照れ隠しにわざと男っぽく言いながらユリエに手渡すと、竜二が手紙を書いただなんて「えっ?」と少々驚いた顔をしたが、手紙を受け取ると、ユリエは竜二に背を向けてそのままスタスタ歩きはじめた。

ユリエと別れた後、何事も無かったかのように表情を整えて皆のところに戻った竜二は、無言のまま搭乗口まで歩き、そこでメンバーの一人一人と軽い抱擁をしていた。

その一方で、竜二と別れ、空港の一階ロビーのベンチに腰掛けたユリエは、フーッとため息をついたあと、一呼吸おいてヤノから渡さ

れた封筒を開け、早速手紙を読んでみることにした。

竜二の子供のような文字にはチョット吹いたが、次第に真剣な表情に変わっていった。

由梨絵へ

この手紙は、由梨絵に会って話そうとしても、どうもキツチリ話せなかった俺の今の思いを、これからもずっと忘れないために文章として残すのが一番いいと思って書くので、なるべく笑わないで読んでください。

これからチョットの間だけ東京へ行ってくるけど、由梨絵も俺も、お互いその間一緒に歳をとっていくよな、そしてその分、お互いに色んな経験をすると思う。

眠れないほど悔しいこと、泣きたくほど嫌な思いをすることだって絶対ある。

腹を抱えて笑っちゃうこと、飛び上がるほど嬉しいことだって、たくさん経験する。

そして二年が経って、東京で揉まれて削られた俺が、今とはチョット変わって札幌に帰ってくる。

お互いにチョット変わったけど、二人は相変わらずスクーターでデートをするんだ。

そしてもっと時が経って、もっと削られて丸くなった由梨絵と俺が、

世間では「中年」と呼ばれる時代が確実にやってくる。

この手紙を由梨絵が読んでいる今現在でも、未だ生まれてきてもない世代の連中が、社会の中心となって時代を引っ張っていくときが必ずくる。

その頃は俺達、オジンとかオバンとか言われて、やれ考えが古いだの、ダサイだの、俺達が今、大人たちに思っているような事を、今度はそいつらに言われる番になる。

もしかすると、その時代には、オジンとかオバンという言葉すらダサイのかもな。

そんな頃、由梨絵も俺も、いや、俺たちの世代の奴らみんな、家庭や仕事の問題で行き詰まっているかもしれない。

その姿を見て、やれ元気がないだの、覇気が無いだのって、若い奴から舐められる時がやって来る。

今の格好が似合わなくなっちゃって、流行を追っている若者達からは相手にされないし、自分の子供からも「恥ずかしいから一緒に歩かないで」って文句を言われる時も絶対来る。

けどさ由梨絵、そんな時になったら、ゼツタイ言ってやろうな、

「いいかお前ら、ふざけんな！」って。

俺達にだって、おまえらに負けなくらい、いや、おまえら以上にキラキラした、はじけそうな時代があったんだぜ！って。

今じゃ、こんなに身体がたるんで、チョット走ればハアハア息が切れるけど、全速力で街中駆け回っていた時が有ったって事を。

今じゃ、こんなに薄くなった、こんなにシワも多くなっただけ、ヘアースタイルに毎朝奮闘した、慣れない化粧に苦闘した時代があったって事を。

一所懸命アルバイトをして得た、せつかくの金が全部、洋服やレコードに化けてしまった時が有ったって事を。

大事な仲間を亡くして、カッコ悪いってちっとも思わないで人前でワアワア泣いた、そんな心だっけ持っていたって事を。

何かにひとつ夢中になったら、そのことだけで頭ん中がイッパイになって毎日を過ごしてた。

毎日がガラガラして、朝起きた時の自分より、夜寝る前の自分の方が成長している。

そのぐらい、一日一日が充実して、あつという間に駆け抜けた時代が俺達にもあつたんだって事を。

紙マッチの裏に書いてあった電話番号が宝物だった。

好きな相手を想うたび、ドキドキして息が出来なくて、胸が苦しくて夜も眠れなかった時が有ったって事を。

その反面、やるせなくて、切なくて、どうしようもない不安な頃が、俺たちだって有ったって事を。

身体ごとぶつかっていてもなんにも相手にされなくて、ミジメで

ミジメで、だけど歯を食いしばって前を見て歩いてた、「今に見てろ！」って。

だけど目に見えない、大きな大きな何かが押し掛かってきて、絶えられなくなりそうなの、吐きそうなの気持ちで過ごした時を送ったのは、お前らだけじゃないんだぞ！って。

どうしようもない葛藤の中で、少しでも光を見つけようと、毎日毎日、もがいてた。

その光が、遠くて遠くて、どんなに手を伸ばしても届かなくて不安になって…、だけど決して人のせい、大人のせいにはしないで、ひたすらツツパツてクールを装ってたって事を。

俺達だって、オトナの社会にツバ吐いて生きてたんだぜって！俺達だって、チョットはクセある生活送ってたんだぜって！

…そうしているうち時間が経って、俺達、もっと歳をとって、汚ねえジジイ、ババアになるときが絶対くる。

もうヨボヨボ、入れ歯なんかカクカクいっちゃってよお。

そしたらさ、由梨絵、そんな時も、まだ一緒に居てくれたらさ、行つた事も無いけど、ハワイにでも住んで、毎日手を繋いで散歩しながら暮らさないかい？

ユツクリ、ユツクリ。

そして俺がさ、ウクレレなんか弾いちゃって、並んで風に吹かれながら、沈んでく夕陽なんが見て胸を熱くしちゃってんの。

でさ、いつかある日、照れくさいけど、この手紙引つ張り出して読んでみないか？

ベンチに座って、ふたりでアイスクリームが何か食いながらさ。

それまでは、この手紙、ゼツタイ開けないでくれな。

たのむぞ、約束な。

じゃあ、おまえ細いから、身体だけは気をつけてな。
チョット行つてきます。

1983年3月18日 竜二

ユリエは読んでいくたび、思い出を回想してポロポロと涙を落とし、鼻をすすりながら、インクが涙で滲まないよう、顔の前まで手紙を両手で持ち上げて読んだ後、目を真っ赤にして手紙を丁寧にしまい、席を立った。

一方その頃、竜二と『Tick's』のメンバー達は、言葉に詰まったからなのか、または何も言葉は必要ないと感じたのか、無言の時間を送っていた。

ついこの間は、パーティであんなに盛り上がり大騒ぎした同じ仲間とは一片のかけらも思えないほど、静かに時が流れていく。

やがて搭乗口に竜二が向かうとき、やっと皆から「じゃあな。」と声がかかった。

すると声が掛かるのを待っていたかのように、

「夏には一度帰ってくるからよ、迎えに来てくれな。連絡すつから。」

そう言つと、振り向いて歩き出した竜二の姿は、一度も振り返る事無く機内に消えていった。

18歳の少年達は最後までクールだった。

「俺ら、本当はみんな、お互いの顔も知らないでバラバラに生きた筈だったのによお、あいつがこうしてくっ付けてくれたんだよなあ……『カッコイイ野球チームをつくる!』って。だけどそう言いながら結局は野球なんかよりも、なんか、もつと深くてもつと濃い経験させてくれたつーか。あいつがあんなに動いてくれてなかったら、俺ら今こうしてなかったよなあ。」

マサトが珍しくおセンチになって、小さくなっていく竜二の後ろ姿を見つめながら呟くと、

「ヤノ君じゃなかったら、こうはなってなかったつすよね。『カッコイイ野球チーム』なんて、本当は俺たち、誰も興味もってなかったつすもんね。」

最初はメンバーになることを一番拒んでいたショーンが、やはり竜二に目をやりながら応えた。

「ヤノの『変なパワー』だな、『ユリゲラー』みてえな『変なパワー』。さつきヤノが屋上で言ってたけど、俺、最後まで『Tick's』だつー『プライド』はよ、一生死ぬまで忘れねえわ。俺、結局一回も野球しなかったけど、みんなと過ごした時間はよ……い

「つまでも俺の自慢だわ。」

竜二の姿が機内に消えると、最後まで見送っていたタイショウが振り向きざま、ため息のような独り言をこぼして歩き出した。

その背中からは、まるで自分自身の中で何かが終わったかのように皆の目に映った。

空港の屋上で交わしたメンバー達の間愛無い会話の一部始終を、ただ一人黙って聞いていたタイショウは、その一言ひとこと脳みそに刻んでいたのだった。

搭乗した竜二が座席に着くと、

『確かアメリカングラフティの最後もこんな感じだったよなあ…』

静かに宙を見つめた。

離陸を待つ間、先ほどユリエから小さな紙包みを貰ったことを思い出し、ポケットから抜き出して中身を見てみた。

- 『御守』だった。 -

どんなファッション、どんなライフスタイルをしようかと、日本人には日本人でなければわからない、ひたむきな、しかしこんなに素晴らしい愛情表現があったことを、アメリカにかぶれて過ごしてきた竜二は忘れていた。

抱きしめられ、記念に花を受け取るでもなく、派手なパフォーマンスを受けるでもない。

しかし、これが『日本人たる最大級の愛情表現』なんだと気付いた

竜二は、これからが発達だというのに、途端にユリエのことが恋しくなってしまうた。

離陸の際、窓越しに小さくなっていく千歳空港を見ると、屋上でメンバー達がフザけながら手を振っているのが見えた。

『俺の顔、見えるのかな？』と頬杖をつきながら窓の外を眺めていると、外れに独りぼっちでこちらを見ている女性を見つけた。

「ふう〜、ユリはいつも絶妙なタイミングで登場するなあ…。」

世間では“不良”と呼ばれ、自分にオブラートをかけてクールを装い、ひたすらツツパツてきた18歳の少年の目に、一気に涙があふれてきた…。

- 最終章 - (後書き)

- おわりに -

- 不良は大抵相手を信用していない。 -

なぜなら、自分も相手を騙し、利用し、裏切り、いざとなったらいつでも尻を捲って逃げてやるズルさを、心のどこかに必ず持っているからである。

しかしながら、この『寄せ集めグループ』は互いを一生の『家族』だと思っている。

互いの為なら自分を犠牲にできる『兄弟』だと思っている。

こんな関係を、『なかま』というのではないのだろうか…。

『Tick's』が愛した店^{スピンATCH}は、その後、全国女性誌に記載され『Tick's』以上に有名となったが、入居していた雑居ビルが火災にあい、地下だった為に大量の消火水が店内に溜まり、本当に『プール』となって閉店に追いやられたまま、再開することは無かった。

竜二は最初、上京して2年で札幌へもどる筈だったのが、結局20年以上経っても実現していない。

当初、野球チームとして寄せ集められた『Tick's』が実際に野球をしたのは、たった一度だけ、しかもタイショはそれす

ら参加していない。

『T i c k ' s』のメンバーが全員揃ったのは、マサト負傷事件、最後のパーティ、竜二を見送った時の、計3回だけだった。

『T i c k ' s』の一番の自慢は、内輪モメが一度も無かった事。皆、個々に相手を尊敬していた。

『T i c k s』は、20年以上経過した現在も未だ解散はしていない。

そして、やがてバブル時代の訪れ崩壊を20代半ばで経験するも、誰一人として時代には流されなかった。

しかし、カレッジリングも未だにできていない。

当時『シラケ世代』『新人類』『三無主義』などと世間から批判され、理解できない人種といわれた世代の『T i c k ' s』、現在彼らの平均年齢は40歳をとくに超えている。

しかし今でも脳ミソの中は、みんなでアロハを着て『月旅行』に行ける時を夢みている『不良少年』のままである。

…そして結局『チキンストラックス』とは何かを知らないままの…。

ノグチ
野口 竜也 タツヤ

1964年8月生まれ

竜二が旅立った直後、愛車だったフォルクスワーゲンを運転中に力ীবを曲がりきれず電柱に激突、アゴでハンドルを曲げたあげく、

勢いが止まらずにフロントガラスに頭を突っ込み、血まみれになりながらも激怒してドアに蹴りを入れた直後に失神し、病院へ運ばれた二日後元気に退院したという伝説をつくった。

普通の人間なら、もうすでに最低3回は本当に死んでいる。

もともと、とび職だった彼は、その後仕事の関係で上京、一年ほどで帰郷した後、幼馴染と結婚、現在2人の子供をもうけ、未だとび職人として活躍している。

新千歳空港は彼が創設に参加した。札幌在住。

ヤマグチ ヒロアキ
山口 弘章

1964年9月生まれ

高校を卒業した後、建築塗装職人となった一方、スノーボードの第一人者として活躍するも椎間板ヘルニアの手術後はプロモーションビデオのプロデューサー、スノーボードにかかわったポスター、パンフレットなどのデザイン方面を手がける。

スノーボード仲間の女性と結婚し、子供2人をもうけ、一軒家も新築、今も塗装職人として活躍。札幌在住。

シヨーン
三浦 敏正

1966年2月生まれ

アメリカンバーを退職後、上京し、フレンチレストランに就職、一度札幌に戻るが、フレンチシェフの夢を捨てきれず、本場フランスへ修行のため移住。

その後、フランス誌『ミシュラン』にて日本人シェフとして4人目、現地での雇用シェフとしては日本人史上初の『ひとつ星』を獲得した。

しかし相変わらずメンバーからは『シヨーン』と呼ばれている。パリ在住。

小倉 英明 タイシヨウ

1964年6月生まれ

身元不明。竜二を空港で見送った後、一切『Tick's』には顔を見せていない。同棲していた彼女とやがて結婚し、子供が居るとの情報。現在も札幌在住？

サカガミ
坂上 秀夫 ヒデオ

1964年6月生まれ

高校卒業後、親の仕事を継ぎ、石屋となったが、墓石だけではなく、様々な建設物に大理石を設置する分野を開拓、札幌市街のビルエントランスは、ほとんど彼がプロデュースしている。『Tick's』ファンの女性と結婚し子供を2人もうけた。長男はボクシングをさせている。札幌在住。

タケモト
武本 政斗 マサト

1963年11月生まれ

高校卒業後、札幌市にて消防士となる。現在も消防士の課長を勤める。

しかし、交際相手の自殺未遂や、三角関係が原因でストーカー行為を受けるなど、相変わらず女性関係の噂が絶えない。札幌在住。

ナガノ
長野 敦雄 アツオ

1964年4月生まれ

高校卒業後、ヤマグチと始めた、まだ発展途中だったスノーボードで才能が開花、ついには当時日本で数人しか存在しなかったプロ

スノーボーダーとなる。

各スノーボード誌には必ず登場し、全国的にその名が知れ渡った。プロスノーボーダーの殆どは、アマチュア時代、当時のナガノを目指して育った。

やがてサカガミ同様『Tick's』ファンだった女性と結婚し、スポーツ用品メーカーで働く傍ら、スノーボーダーを育てつづけている。札幌在住。

イリキ トール
入来 亨

1964年10月生まれ

高校卒業後、希望していた服飾メーカーに就職し、販売の経験した後、バイヤーとして東京と札幌を往来する生活を送っていたが、やがて持病のヘルニアが悪化、療養生活をしばらく送り、一時実家の質屋を手伝っていたが、後にバイヤーとして復帰、『Tick's』時代から發揮している持ち前の目利きで、彼がセレクトし、仕掛ける商品は必ず当たるといわれ、現在もアパレル界では重要人物として活躍中である。札幌在住。

ヤノ リュウジ
矢野 竜二

1964年7月生まれ

東京で2年の専門学校生活を終えた後、大手輸入自動車ディーラーに就職、営業マンとして君臨し、入社4年後に店舗責任者となったが、それから6年後の入社10年目に退職、32歳で生涯の夢だったアメリカへ単身移住。ヨゴレ日本人としてダメ人生を送っている。ロスアンゼルス在住。

…ところで、1982年、あなたはどこにいましたか？

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3799c/>

Tick's（ティックス） - 1982年、あなたはどこにいましたか？ -

2010年10月8日22時12分発行